もいひはてぬなりさゞれ石は砂を略きてさといひ其を重ねてさゞれと云れは助言なり【萬葉にさゞれふむと云を小石踐と書るは石をはぶきていひしなり】

小浪をさゞれ浪といひ小をばさと云事さゞやかさゞめくの類多し砂をさと云との說はいかゞあらん次にも眞砂は小きをはめて眞といふにたがへり

いはほは石の大なるにてすべてあらはれたるを秀と云苔の蒸はむすびあふことなり葉の茂りあへるをむすぶと云に同じ仍て草むすともいへり

高皇產靈の神名にてみれば苔むす草むすは生の字の意なりむすびあふを玄げりあふに云はうつしての言なりと云べし

わたづみの濱のまさごをかぞへつゝ君がいのちのありかずにせむ

數限りなき砂もて君が命に譬ふなり眞砂は小きをはめて眞と云【萬葉に「八百日行濱のまさごも吾戀にあにまさらめやおきつ島守」】四の句今の本には千とせのと有顯昭本には命のと有いのちとは詞の麗はしからぬとて後に千歲となほせしなるべし千とせもかぎりなき事なればことわりは聞ゆれどこゝにはすこしおち居ぬやうにやと思はるゝなり

志なのやまさしての磯に鳴千鳥君が御代をばやちよとぞなく

是は千鳥のちよ〳〵と鳴をもて君が代をいはふ事にとれり顯昭本にはなく千鳥と有下にも鳴と有は其ことわりを云にて古歌のいひなしなり後世おなじ言を嫌とて古歌の意をも味はゝで住千鳥となほせしなり千鳥の住てふ詞なし玄ほの山甲斐に在と能因の歌枕にみゆと顯昭の注にあれどより所なし契沖は平家物語に玄ほの山打こえて能登の國小田中親王の塚の前にて陣をとると有又其上にも能登越中の境なる玄ほの山と見えたれば若そこにさし出の磯も在にや【平家物語に玄ほと書しは其比のかなは誤あれば云にたらず萬葉延喜式に之乎とあるを用ふべし】是は賀の屏風にかける畫につけてよめるが汐の山さし出ると云やうに續たるは自然の事なるべしといへり是は玄かるべき考なり延喜式に能登國羽咋郡に之乎の神社有萬葉に赴二參氣比大神宮行海邊之時とて之乎路からたゞこえくれば波久比の海とよめるに同所なるべし然は右の歌汐と意得て玄ほと書又それよりさし出の磯とは設てよめるか【玄ほは玄ををあやまりてさてさし出たる磯をいふ歟】右の式萬葉平家物語等にも同邊にさる名所在からは據なき甲斐の

國を思はんより是によりて能登の國とすべし今の京となりては古言を誤れる事多ければなり

わがよはひ君が八千代にとりそへてとゞめおきてはおもひでにせむ

是は上を祝ふにも上よりいたはるゝにもあらず同じほどにて老たる人の又の人の老ていはふ時によみたるにて我年を讓らんからに千とせの後の思ひ出にせよとなり思ひ出は故有し事を思出し種にする事なり

仁和の御時。僧正遍昭に。七十の賀たまひける時のうた

是は仁和元年【仁和の帝は光孝天皇なり】十二月十八日延二僧正法印大和尙遍昭一於二仁壽殿一申二曲宴一遍昭今年滿二七十一天皇慶賀と三代實錄に見えたり今の本に御歌と有古本御の字なし延五の紀と云物にもなし歌の體必御製にあらず遍昭のよめるならん歟

かくしつゝとにもかくにもながらへて君が八千代にあふよしもがな

如斯しつゝいかさまにもながらへをりて天皇の經たまはん八千代にあふよしもあれと我をいはゝせ給ふを兼て君をもいはひ奉るなるべし是を御製歌として玄ひたる說あれど其本たがひたれば皆ことわりなし古書には後に書たがへなど多きをことわりはより所をもて正さずばあらぬ事となるなりとにもかくも萬葉には左手をとてとよみ右手をかくてとよむ又左右ともよみて其意を玄らせたり【後世兎角と書てそれに付てもさま〳〵の說をいへど古言玄らぬ人の作り言なり】こゝの用ひざまはいつかたにもいかさまにもと云意になるなり

仁和のみかどの。みこにおはしましける時に。御なばのやそぢの賀に。しろかねを杖につくれりけるを。見て。かの御をばにかはりてよめる

僧正遍昭

是は右の同帝にて上に出たり其御母は贈皇太后藤原澤子と申て贈太政大臣緒繼公の御女也其御姉妹など有をいはひ給ふか然ばをばと書べし祖母をおばと云はおほはゝを略きて云なり後世の本は僞名みだりなればうたがはしきなり【祖母をおばと云は大母の略なり父母の兄弟をゝばと云は小母の山なり仍てかなにてわかつを後世は假名の法を失ひてよろづわかちなくなれり】

ちはやぶる神のきりけむつくからに千とせの坂もこえぬべらなり

【六帖顯昭本又一本にも神やきりけんと有多きに從ひて神やとあるを用ふべきか神のとあるは詞よろしきなり】是は其御小母にかはりてよみたれば卽其御かたの心なりさて此皇子の參らせ給へばいと〳〵よろこび給

て此杖は直ならぬにこそ神の作り給ひけんつくからに卽千歲をも經ぬべくおぼゆると深く愛給へる心也拾遺に「あふ坂をけさこえくれば山人の千とせつけとてきれる杖なり」又「皇神のみ山の杖に山人の千とせをいのりきれる御杖ぞ」これら古歌なれば相むかへて此意詞をも知べし【花の歌にも花といはでよむもとひろくておもしろきなり詩にも體をいはで用のみをいへるが多し後世はかたくなにてことせばきなり】杖はもはら山坂をこゆる料なれば千歲をこゆると云を坂によせたるなり拾遺にはよろづ世の坂ともよめり且杖といはで杖の事を云なり舟といはで漕とも渡とも云類にていにしへの常なり切けんは山の楮木を杖にきりけんなり

ほり河のおほいまうち君の、四十の賀。九條の家にてしける時に。よめる

太政大臣基經公也貞觀十四年八月右大臣左大將となり給ふ此賀は同十七年四十歲の時なり此公堀河の殿におはしましける故に堀河の大臣と申せりされど此賀は九條なる家にて行はれしとなり是も公の御家なり四十より祝ふ事は藤原ノ宮の比よりはじまれるが懷風藻に五八年を賀すると云事見えたり其後仁明天皇四十をいはひ給ふ事續日本後紀にみゆ

在原業平朝臣

さくらばなちりかひくもれ老らくのこむといふなる道まがふかに

花の多く散かはして雲れ老と云もの、來たらん道まがひて來ずもあらんかとなり散かひは彼是散合すなり枕を交すなど云に同じ【散ちがふと云說は意は似たるやうにて少たがへり】老らくは老るのるを延ていふなり

さだときのみこのをばの。よそぢの賀なり。大井にてしける日。よめる

貞辰ノ皇子は清和天皇第七の皇子也此御をば御母方なるべし大井は嵯峨の大井河のほとりに御伯母の家在し歟

紀のこれをか

維熙と書るといへり正しき證あるを見ず

かめのをの山のいはねをとめておつる瀧のしらたま千代の數かもいづれはあれど萬代經べき龜の尾の山の瀧のたまちる水は今日祝ふ御をばの千代のよはひの數にたぐへて落るかとなり岩ねを尋てといふも常磐をよそへたるかさなくとも聞ゆべし龜の尾山龜山とも云【此山のかたちは實に龜の尾を長く引たるが如みゆるなり龜山の名の

由緣は本朝文粹前中書王の兎裘の賦又龜山神文等に見えたり後世龜のお山と云はわろし】大井河は此麓を落るなりとめては尋求てなりこゝは岩根を傳ひもとめて落るなり

きだやすのみこの。きさいの宮の。いそぢの賀奉りける御屏風に。櫻の花のちるしたに。人の花見たるかたかけるを。よめる

貞保は清和天皇第五の皇子也きさいの宮は二條后也寛平三年に此御賀有伊勢集にきさいの宮の五十の賀せさせ給ふ御屏風にとて歌有も同じ御賀と見えたりかたは卽繪なり賀に屏風をたつるは老人なれば風にあてじとする用意なるべし

下にうしろの屏風とあるにてもさる用意とは云らるるなり

藤原のおき風

いたづらに過る月日とおりほたで花みてくらす春ですくなき　（朗詠集には月日はおほけれど）

たゞ何となく過る月日は、やく立行ともおもほえず花見る春の月日は時のまに過ぬる如く思ゆるとなりおもほえでは濁るなり【元眞集に屏風に十二月晦日を「いたづらに過る月日はおほけれどけふしもつもる年をこそ思へ。」小町の色見えでとよめる類なり此歌賀に似ずと云人有すべて屏風の歌は繪のさまのみをよみていはふ心はよまずたゞ繪を本としてよむがいにしへなりあまりに賀にかゝはりてよむはあきたくみゆるものなり新勅撰集に幾時春尙少と云題を大江ノ千里「とし月にまさ時なしと思へばや春しも常に少なかるらん」是らをも思ふべし

もとやすのみこの。なゝそぢの賀の。うしろの屏風に。よみて書ける

本康親王の御母は從四位下滋野ノ溫子參議滋野ノ貞主の女なり

系圖云第七皇子一品式部卿號八條宮母從四位下紀ノ種子名虎ノ女延喜元年薨ずと見えたり

紀のつらゆき

春くれば宿にまづさく梅のはな君がちとせのかざしとぞみる

限なき春ごとに先咲梅なればいづれはあれど千とせ經ん君がゝざしの花とみゆるとなりかざしは枝を折て冠の巾子の右か左にさすものなり萬葉に「としのはに春の來らばかくしこそ梅をかざしてたのしくのまめ。

素性法師

いにしへにありきあらずはしらねども千とせのためし君にはじめむ

いにしへに千歳經し人の有しあらぬは玄らねども其はよしともあれ千歳經る事は君を始にせんとなりためしは樣の字に意得べし例の字には少たがへり【本の字にもためしと云意こゝにてはあるべし】

ふしておもひおきてかぞふるよろづよは神ぞしるらん我君のため

【此二首本康親王の賀の時にいはひてよめれば上にならべて上たるかされど屏風の歌ならねば別に端書の有しを今は落たる成べし】

夜豈となく君を千よませと思ひ其千世萬代をかぞふるとなりさてかく千世經たまへと神に願ひてかぞふるなれば其神ぞ玄ろしめして我君の爲に幸ひ給はんといふ心をこめて云なり下にもいはふ心は神ぞ玄るらんとよめるも一わたりにて爲なき事を神は明らかに玄ろしめすらんと云事なるをこゝに吾君のためと云をおもへば神も卽同じ心におぼすらんてふ意と聞ゆいにしへ神をかけて云に神ぞ玄るらんといふは常の事なれど此歌どもはすこしそれに味をそへてよめり

藤原の三善（レンコレ）がむそぢの賀によめる　在原滋春

三善が事考べし滋春は大和物語にも出て業平の子なりといへり考べし

大和物がたりには在次君とかけるが此人の事なりと或抄にいへり

つる亀もちとせのゝちはしらなくにあかぬこゝろにまかせはてゝむ

鶴亀も千とせ經るといへばそれより後の事はたとへんものを玄らず只幾千歳をも猶他たらぬこゝちする其心にまかせて限なきよはひになしたらんとなり拾遺に「萬代も猶こそあかぬ君がため思ふ心のかぎりなければ」貫之集に「百とせといはふを我は聞ながら思ふがためはあかすぞ有ける」【あかぬは足ぬと云に同じ】かくざまに云を虛言なりとおもへる人はいにしへの一向（ヒタスラ）に思ひ入たるを玄らぬなり我親などひたすら限なくながらへおはせと思ふ心より物のことわりなくもいひ出べきなり歌はをさなかれと云は是なりよそめにみれば愚なる虛ごとのやうにも聞ゆべき物ぞさて此心を本にて此集の比は虛ごとをも巧みてよめりこゝに注有て此歌は或人の在原のときはるがとも云とみゆ例のとらず

よしみれのつねよが。よそぢの賀に。むすめにかはりてよみ侍ける

今の本にはつねなりと有世を也に見あやまちて寫せしなるべし是は文德實錄三代實錄等に所々見えたる人にて末に貞觀十七年五月十九日從四位下行丹波守良峯朝臣經世卒と玄るせる此人なり此人の女にかはりて素性がよめるなり

素せい法師

よろ津代をまつにぞ君をいはひつる千とせのかげにすまむと思へば

君が萬代を待と云かけてさて君を松によそへていはひたり【或人いはひつると云に鶴をもそへたりと云は過たり玄か見ては俳かいうたとなれり】君が千歳經ん陰に我もすまんと其におもへるなり六帖に萬代の松にぞ年をいのりつると有て貫之の歌とせり萬代の松といへるつゞけからよろしく聞ゆ今の本は後になほせしなるべしされど貫之の歌ざまにあらず

ないしのかみの。右大將藤原の朝臣の。よそぢの賀しけるときに。四季の繪かけるうしろの屏風に。書つけたりける歌

此尙侍（ナイシノカミ）は內大臣高藤公の第二女にて拾遺に三條の內侍と有は是なり延喜の御をばにて卽養ひ奉れる人なり右大將藤原ノ朝臣の和泉の大將定國公にて此尙侍の兄君にておはせり四十の賀は延喜十四年の春なり躬恒集に延喜十四年二月十八日おほせごとによりて春る和泉の大將の四十の賀の屏風內よりてうじでつかはすに書料の歌と有此賀は宮中より尙侍の爲に調じてたまひしなり此度の歌其外は夏秋冬と端に書しを是にのみ書ぬは春の字を寫もらせしものなり此度の歌七首に今は作者を玄るさぬにつきて此上の歌素性なれば幷に次々も素性の歌なりとおもへるは誤なり六帖家ノ集等に各作者見えたり其うへ家隆卿の自筆の此部を見しに各名有しなりさて此うたは素性なり

春日野にわかなつみつゝよろづよをいはふ心は神ぞしるらむ

【六帖にはいのる心はと有】いにしへより春菜（ワカナ）は年を祝ふ時にてうじてすゝむる物とせり漢籍（カラブミ）に人日七種の菜を羹（アツモノ）にして喰へば萬病を除くといひ又こゝにては若きと云名をもて老を若がへらす意にとれりさて春日野の若菜を摘つゝ萬代にわかゞへらせたまへといのる我心をば神ぞ玄ろしめして幸（サキ）はひ玄たまはん事上にも此法師のよめり

みつね

家隆卿の筆なりと云本によりて名を擧ぐ六帖家の集等にも見えて躬恒の歌なり次々是にならふ

山高み雲井に見ゆるさくら花こゝろのゆきてならぬ日ぞなき

いと遠く高き山なるはゆきてみぬ事のまかせぬ故郷のみゆきて折らぬ日無しといへり常にみる繪のさまなればかくたくめり雲井はたゞ雲の事を云ひ又遠き事をもいへりこゝは其遠き事なり

夏　友則

めづらしき聲ならなくにほとゝぎすこゝらのとしをあかすも有かなおほくの夏ごとに聞てめづらしくはあらぬを猶あく時のなきとよめり珍らしからであかぬ物こそ實によき物には侍れ時鳥はおほく憂はしき事に云をかくとりなすはいはひ歌なればなりさりとて去ひていはひめきてよむも中々につたなしかすかにとりなすこそよけれならなくにはならぬを延て云なりこゝらは萬葉にこゝらそこらこゝばくそこばくなど云てこゝそこと二つに云は物多き事なるを片々のこゝらそこらとのみ云て共に數の多き事となれり巨々等の字音と思ふは誤なり萬葉に此所等其等と書しもて知べしさて此歌六帖家集家隆卿本ともに友則の歌なるを或説に貫之なりといへるは據なし

秋　躬恒

住の江の松を秋風ふくからにこゑ打そふる沖津しら波

松風の音に澳津浪の音も打聞ゆると云のみなれど所のさまにつきて面しろきなりかく其所のさまを思ひ得てこゝろはあるがまゝによむぞ古歌なる此うた六帖には素性とあれど歌ざま必躬恒にて去かも家集家隆卿の本にもいち去るき也【此歌によりてよめるが後々に多き中に經信卿の「おきつ風吹にけらしな墨の江の松の去づえをあらふ白波」とよまれしはいとおとらぬ物也】

千鳥なくさほの河霧立ぬらし山の木の葉も色まさりゆく

秋の末霧の去めりに木葉の色づくよしなり佐保川に千鳥鳴とよむは其所のさまもて冠辭とせるかはづ鳴神なび河とよめると同類なり千鳥の聲は冬を專として秋又春にもよめり此歌拾遺にも家集にも色かはり行と見え六帖には眞木の題にてま木の梢も色づきにけりと有かれは少づゝ變りて彼是にみゆ【萬葉には五月の歌に「よしのゝ川の河のせの清きをみれば上つせに千鳥去ば鳴下つせにかはづ妻よぶ」とも讀り】是は賀の歌なれば色かはると云詞を忌て後にさがしらして色まさるとかへたるにも有べし昔は賀の歌なりとてさのみ忌事をもせず花みてくらす春ぞすくなきなどもよみたり此歌拾遺に入て右大將定國の家の屏風にと書て忠みぬとし六帖家集家隆卿の本にも同人の歌と見えたり

秋くれど色しかはらぬときはやまよそのもみぢを風ぞかしける

秋の部に「もみぢせぬ常磐の山は吹風のおとにや秋を聞わたるらん」てふに似たりさて此歌は或人の忠岑かといへりかの家隆卿の本に名なきは上に次て、同人なれば去るされぬにや【拾遺に小野の好古の朝臣「吹風によそのもみぢは散くれど君がときはの陰ぞのどけき」てふは今を本にてよめり】

忠岑の集には見えずされどかの集と云は忠岑のみづから書あつめられたりし物とは見えず後より作りなせしものと見ゆかし

冬　つらゆき

白雪のふりしく時にみよしのゝ山した風に花ぞちりける

上に花なき里も花ぞ散けるてふに同じ此歌は家集拾遺家隆卿本にも貫之也末の句いかにもかの人の口つきなり

宇萬伎云家隆卿の書せ給へるといふ此卷を見侍りしに假名の法すべていにしへにかなへりとかたられきさて此和泉の大將の四十の賀はみつね集によるに延喜十四年の春の事なりとみゆれば此延喜五年の撰にはいかでえらぶべくもあらず是も契冲がいへる亭子院の歌合の歌共の如く後に書くはへしものにや

とう宮のうまれ給へりける時に。まゐりてよめる

延喜第二の皇子保明太子也御母は中宮穩子攝政基經公の御女なり此皇太子延喜三年に誕生まし〳〵て四年二月に皇太子に立せたまひ廿三年三月に薨給ひぬ　典侍因香朝臣

峯高み春日のやまにいづる日はくもるときなくてらすべらなり

天皇を日に比へ申奉るより皇子をも同じくたとへ申て山より出る日とよめりさて末は御位にて天の下をとこしへに照し給はんをかねて末の句はよめり且御母中宮藤氏にてましませば其氏の神の鎮もりませる春日山をもていへる也【此頃までは女の歌もかく去たとかなるさまにもよめり後の源氏物語などをみてはかゝるつよき歌は女に似つかずと思へるは昔を去らぬ故なり萬葉集の坂上の郎女などの歌をみていにしへを去るべし】

古今和歌集卷第七打聽終

古今和歌集卷第八打聽

離別ノ歌

如此二字に書は漠ざまなりこゝにはわかれと云のみにて事ゆきぬ

題しらず　　在原行平朝臣

立わかれいなばの山の嶺におふるまつとしきかば今かえりこむ

文德實錄齊衡二年正月從四位下在原朝臣行平爲二因幡守一云々此度の歌なり今こゝを立わかれてゆくとも待ときくには今の間にも立歸來てあひみんと都に思ふ人を和さめてよめり因幡の山とは右の任にて彼國へ行なればたゞ因幡ノ國の山とよめるなるべし又かの國法美郡に稻波と云鄕の名和名鈔に見えたればそこの山を云ともすべけれど是はまだ京を出る時の歌なれば其までは有べからず【萬葉に陸奥の小田の山に黃金の出たるをみちのく山にこがね花さくとよめるに同じ或說に美濃國のいなば山かと云はより所なし】さて別ていなばといひ待といはんとて嶺に生る松ともかけたり是を因幡の任果て上る時其國の人にむかひてよめると云はわろし此離別の部はもはら京より立行別れの歌多し若他國にての別ならば其緣を端に書りこゝは題云らずとあれど專ラの例によりて京より別るゝ歌とこそせめ躬恒集にも因幡ノ守の下るに「一日だに見ねば戀しき君がいなば年の四とせをいかで過さん」とよめるも今に似たり今歸來んは只今の間にかへりこんといへるなり萬葉に「門にたつをとめは家にいたるともいたくしこひば今かへりこん」と云に同じ【後撰に家に侍りし女子いかなる事か侍りけん心うしとてとゞめおきてまかりければむすめ「打すてゝ君しいなばの露の身はきえぬばかりぞありとたのむな。】

よみ人しらず

すがるなす秋の萩原朝たちて旅ゆく人をいつとかまたむ

すがるは日本紀に蜾蠃と書てすがるとよめり一には似我蜂とも云【此の虫の事は漢籍にも見えて今もまのあたりにみる虫なり】此蜂は桑の木の虫をおび來て己が巢にて七日咒ひぬれば己が如き蜂となれりといへりさて其子は一度巢を立て又歸來らぬ由其如に今別しゆきて又いつとも云られぬ人なれば歸るをいつとかまたむと打なげきたるなり是を萬葉に春さればすがるなす野の時鳥とよみたるも鶯のかひこの中におひ立て飛行ては再びかへらぬをすがる如時鳥と云意にてよみつるなりなすとは如くと云に同じ【如くをなすとも云は日本紀に如五月蠅と書てさばへなすとよめる類なり】萬葉には如と云に成とも鳴とも借て書るをもて此歌も古歌なればすがる鳴と書けんを此如てふ古言をも云らぬ人の字に就てすがる鳴とよみつらん【古言を云らでは古歌も說得がたきを後の人は古書によらずしてひたすらさがしらする故に誤多し】さては此歌何とも云られねば萩原といふにつきてはすがるは鹿の事なりなどあたらぬ說をもいへり萩原は此別れ秋なれば時からのけしきをもて歌のあやとなすなり

鳴の字をなすとよむ證は古事記の神代に而指二下其沼矛一以畫者鹽許袁呂々々迺畫鳴而引上ル時と云注に訓レ鳴云二那志一と云にて云るべし那志那須はもとより同言なり

がぎりなき雲井のよそにわかるとも人を心にをぐらさんやは

限なく遠く別るとも心にはくまなく守りて常に思居らんとなり雲井の外所と云より小暗さんやはといへり此詞を送らさんやはと云意なりとするもあれど送るにては聞えがたし【一本にをぐらせんやはと有はわろし又大和物語にはをくらざらめやと有は一わたりにては聞えたれどいさゝかいひえざるなり】源氏かげろふの卷に今はかぎりの道にしも我をゝぐらかしけしきをだに見せたまはざりけるがつらき事と思ふにと有も今とおなじく小暗かすなり

契沖云顯昭は大和物語を引て人をこゝろにおくらざらめやと有といはれしかど今の大和物語にはこゝと同じ又密勘に顯昭本のおくらせんやを用ふとあれど是も今の本にはしかあらずさておくらすは後らすにて心ばかりは後らさんやは保は身にそへてつれ立ゆかんとよめるにこそといはれたれ今の本にをと書たれど顯注密勘等おの字を用ひたるもて後らすの方を用ふべくおもはるゝなり源氏のも後らすにてよく聞ゆ又云此歌大和物語には遍昭の歌とせり作物語の事はたしかならず

をの〻千ふるが。みちのくのすけにまかりける時に。母のよめる

守介掾日とて一國四人の官有其佐にまかれるなり

たらちねのおやのまもりとあひそふる心ばかりはせきなとゞめそ

悲なからん爲に守を身にそふる如く母のいとほしむ心

をそへやるを親の守りとはいひなしたりさて關有所は過書文などなき人はとゞめて通さぬ事もあれど我添てやる心ばかりは關なとゞめそと云なり實に母の親心あはれによめりたらちねは母といふべき冠辭の事序の注にもいへりこゝにおやといへるは本は母の字也けんをいかに心たがへてか後世ははゝと云べきをおやといへるより後にこゝもおやと書改しならん古書に親とは父母にわたる時にいひかたぐ〳〵に父はゝとわかちて云なり

ことわりは云かれども既に新撰萬葉にも「たらちねの親もつらしなかくばかりおもひにまよふ世にとゞめたる」とも見えたれば此ころは母の事とは意得ながら親ともよめるやうにうつり來たるなるべしことに此うたなどは我親ごゝろをまもりにそふると云なれば後に改しにはあらざるべし

さだときのみこの家にて。藤はらのきよふが。あふみのすけにまかりける時に。うまのはなむけしけるによめる

いにしへ旅に行には其人の乘れる馬の鼻づらをとりて其行方へ向ていはひごとして立せやるが本にて此比は旅ゆきする人をよびて饌し杯とりかはし別をゝしむ事なり今別るゝ日の事にはあらず

紀のとしさだ

けふわかれあすはあふみとおもへども夜やふけぬらん袖の露けき

京より近江は隣國にてちかければ今日別れて明はあふと云かけてさるちかきほどの別なれど別るといへば涙の落るを我ながら云らぬさまにて夜や更ぬらん袖の露けきよといへり貫之集に源の公忠朝臣の近江守にてくだるにとてねになきてわびしとおもはぬほどなれど常のこゝろにかはりけるかなとよめるもちかき國なればなり

こしへまかりける人に。よみてつかはしける

同人なるべし此集の例同人には名を書ぬなり

かへるやまありとはきけど春霞たちわかれなば戀しかるべき

神名式に越前國敦賀郡に加比留神社又鹿蒜田口神社在和名鈔にも鹿蒜の郷在り本は加比留山なるを歌のよせにてかへる山といへるなりさてさる山の名も有ときけばほどなく立かへるべしとはおもひたのめど今立別れなば戀しかるべしとなり春霞は此時春にて時のものをもて立といはん冠辭にあやなせしなるべし

人のうまのはなむけにて。よめる　紀のつらゆき

なしむから戀しきものなまら雲の立なむのちはなにごゝちせむ

別るゝと聞てをしとおもふ故にかねてだに戀しきものを今はとて立ゆきなん後はいかばかり戀しさのまさらんとなり

是も白雲は立といはん冠のみさて四の句六帖には立わかれなばと見えたり

ともだちの。人の國へまかりけるに。よめる

ひとのくにとは他國と書て古へはから國の事にいへり御國の内ならば上下にかける如くこしの國あづまの國など書る例なり是は遣唐使に友だちの撰ばれしを其別とよみてやりけるにや寛平の御時に遣唐使の勅有し其時なるべしされど彼國は唐の末五代の亂とおこりし由を聞しめして停められしなり【此寛平の御時に停められて後は遣唐使の事ふつに絶しなり】

在原ノ滋春

わかれてはほどなへだつとおもへばやかつみながらにかれてこひしき

大かたの別にあらずいと遠き國へ行別れとおもへば今相むかひ居ながらもかねてより戀しきこゝちするとなりばやとは上にも云如く思へばかねて戀しきやと意得べし

かねてより戀しきこゝちすとは今少心ゆかぬにや今相むかへて逢見ながらもあすよりは遠き國にゆきわかれなん事をと後をかぬて戀しきと云なるべしこは打聞のあやまりつるもの歟

萬葉に「月かへて君をば見んとおもへども日もかへずして戀の云げゝき。

あづまのかたへまかりける人に。よみてつかはしける

あづまは日本武尊東の國を平けたまふ時御妻橘姫の上總の海に沈み給ふをなげきて碓氷の坂にて東をかへりみて吾妻者也とのたまひしを本にて後々は相坂の關より東の國をあづまの國といひその行々の道をあづま路といへりこゝは其方のいづれの國にても云べし【東國を坂東といふも相坂の東といふことなり】

いかごのあつゆき

おもへども身なしわけねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞやる

心ことば明らかなり何のかざりもなくいへるをたゞこと歌と云是らなりと思へども初に云は心ふかき詞なり思へども〳〵と云意なりと云說はさも有ぬべし【いせ物がたりに思へども身をしわけねばめがれせぬ又あかねども岩にぞかふる目に見えぬこれらなり】

あふ坂にて人を別れける時に。よめる

此集に人を別るゝと人に別るゝと云は別なり人の旅行に別るゝには人をといひ人に別るゝとは我行時に云なり人の物へ行をわかるゝといふを略きて人をわかるゝと書なり人にとかくもはぶく事是に同じ相坂山は東へ下る人をば京よりこゝまで送りてこゝにて別るゝ所なり【山は近江國に屬す】いにしへ關有し山なり旅人はここにて道の神にたむけすればたむけ山ともいへり

なにはのよろづを

あふさかの關しまさしきものならばあかずわかるゝきみをとゞめよ

逢と云名と又關は人をとゞむると此二つの正しきものならば我飽ず別るゝ人をとゞめよといへりあふ坂の名によすべからずと云も一わたり聞えたりされどあふを兼たるべくもおぼゆ

題しらず　よみ人しらず

から衣たつ日はきかじ朝露のおきてしゆけばけぬべさものを

今旅立とてとくおき出て行としきかば我命も消ぬべしよて立日はきかじと云へり別の悲しさがあまりにいへりから衣は冠り言のみ朝露も冠ながらやがてそのよせ有詞にて命も消ぬべしと云此比のさま也左の注に「此歌は或人つかさを給りてあたらしき女につきて年經てすみける人をすてゝたゞあすなんたつとばかりいへりける時にともかうもいはでよみてつかはしける云々是は注ならば誰と云男誰と云女何の司何の書に有と云べき事なるをさはなくてかくうきたる事のみを書は用なき事なり後にかきそへたる事明らかなり

ひたちへまかりけるときに。原のきみとしに。よみてつかはしける（或抄に公後とも見えたり）

藤原公利は本朝文粹に三善ノ清行が異見封事に備中守にもなられけるよし見えたる人なり

籠

籠はあなと云字なり龍の字にて卽てうと音にて讀べく云人あれどわろし古本を得てたゞさまほしき事なり今はいかゞよむとも知がたし

或抄には大和守源精の女なり一云大納言源ノ定の女なりともいへり其出る所たしかなる書を引ねばよりがたし或本にはこゝに此名なし

あさにけに見べきゝみとしたのまれば却もひたちぬる草まくらなり

同じ都に有てもつらくて朝な〳〵にも目に常にも見るべき君ぞと今は頼まれぬものからすべなくて旅には思ひ立よと恨てよめるなり【後撰に在原のとしはるがみまかりけるを聞て伊勢「かけてだに我身のうへとおもひきやこんとし春の花をみじとは」是もとしはるをかくしてよめり此ごろのはやりことなりとみゆ】是にきみとしの名と常陸國の名をもよみ入たると誰もいへり然ば物名俳諧等の部に入べきを彼から衣きつゝ馴にしの歌を旅の部に入しかば是もさる意して別を宗としてこゝには入しなり朝にけには朝々日々と云ばかりの詞なりけは常と云古言にてつねの衣を褻衣と云にても云るべし

けを常と云は或人月日の來經ゆくと云其きへをつゞめてけとは云なりといへり又此外にも食をけといひ又勝殊異等の字をあてゝけとよめるも有となへ同じくて各義ことなるもいぶかしさるは此詞猶考べきなり又この歌公利常陸をもよみ入て猶思ひ立ぬるをおもひ斷ぬるにかけたりともいふべし

草枕はいにしへ旅人は行先に借菴を作りて臥草をむすびて枕とせし故に旅にはさゝの云のや草のまくらなど云いにしへ多くよめり【いにしへも驛亭は有しかど公用の人のみやどりてたゞの旅人は野山にやどりし事なり】

紀のむねさだが。あづまへまかりける時に。人の家にやどりて。あかつき出たりとて。まかりまをしにければ。女のよみていだせりける　よみ人しらず

人の家に宿るは方違の爲にやどれるなるべし【方違への事陰陽師のいひごとにて中比の人かゝる事のたぐひにまよはされしが多し】中比の世に方たがへとて外にやどりて旅にも立家へも歸る事をするそれは天一神と云神の天をめぐりあるくがその方にむかひてゆきかひすれば必あしき事有とて他にやどりて方をたがへて行なりまかりまをしは今退立と申なりまをすとは上へ奏するなりさるをうつして私にても物いふをまをすとはいふなり

えぞ思らぬいまこゝろみよ命あらば我やわすると人やとはぬと

是は彼東に下る人と忍びにあへるが彼男遠き國にすまばわすれ給はんといひつらんによりて其にこたへて此末は我わするゝかそこよりおとづれきたまはぬか今はえいひも云らず命ながらへてあらば今をいづれかわするゝこゝろ見たまへとて我はわするまじと云下情なり

春の部にあだなりと名にこそたてれさくら花の歌も

かゝるたぐひにて戀に入べき事すでに其下にいへり】是は戀の部に入べきにかゝる端書に任せてこゝには入たるにや後撰に一絶やせん命ぞ知ぬみなせ河よしながれてもこゝろみよ君に是によれば命の程もえぞ知ぬとも云べけれど今は少異なり續古今集清少納言すみよしの社にまうでける人歸來んまでわすれなと申けるかへりとに「いづかたか去げりまさるとわすれぐさよしすみの江のながらへてみよに」と云は今をとりてめよる也

あひしりて侍ける人の。あづまのかたへまかりけるを。おくるとてよめる　ふかやぶ

相去りて專男女の中に云事ながら下のかへる山は何ぞ有てといへるは男どちとおぼしければこゝも去か見て過すべけれど上の二首も男女の別れなればこれも男どちにはあらぬ歟

雲井にしかよふこゝろのおくれねばわかるゝと人に見ゆばかりなり

上の雲井のよそに別るとも又おもへども身をしわけねばとよめる類にて是は身こそ君にわるゝと見ゆれ心はたぐへやるなり

六帖には二の句ふかき心のと有あしき歟

去の。あづまへまかりける時に。よめる　よしみねのひでなか

白雲はこなたかなたにたゝるものなれば遠き旅路のさまをいへりぬさはこまかに切碎きて旅路の神にたむくるをもて遠き別を思ふ心のさまぐとくだくるをそへていへり

みちのくにへまかりける人に。よみてつかはしける　つらゆき

こゝにもいせ物語にもみちの國とかけるはその比のならはし言にてよろしからず是は陸の奥の國と云其おくのおを省きてみちのくの國といへるなりみちの國とてはあまりに省き過てあやまれるなり

白雲の八重にかさなるみちにても思はむ人にこゝろへだつな

意明らかなりをちは彼とも遠とも云字にあつる中に古意は彼の字もて說なり【彼是をゝちこちといふ事上にいへり】

人なわかれける時に。よめる　わかれてふことは色にもあらなくに心にしみてわびしかるらむ

心にしむといはんとて色とはいへり去むは染の字にて去むともそむともよみて意は同じ

あひしれりける人の。こしの國にまかりて。としへて。みやこにまうできて。又かへりける時に。よめる

女の國へまかるは父兄夫などの任に去たがひて行なればこゝに行て又かへらん事有べからず仍て是は男どちなるべし越の國は越前を云とみゆるは彼加比留山あればなり【こしとは越前越中ゑちごのみを云にあらずいにしへ加賀能登も共にこしの國なり】

凡河内躬恒

かへる山なにぞは有てあるかひは來てもとまらぬ名にこそありけれ

かへる山と云名の山在て其かひ有よと思へば都に來てもとまらずかなたへかへる名にてこそありけれと恨たるなりなにぞは何ぞ其はと云なり下にもまめなれどなにぞはよけくとよめり

こしのくにへまかりける人に。よみてつかはしける　よそにのみこひやわたらむ白山の雪みるべくもあらぬ我身は

行てみるべき我身ならねばよそにのみ戀やわたらんと云を白山の雪といひよせたり白山は越前にあり

おとは山のぼりにて。人なわかるとて。よめる　つらゆき

音羽やまこだかく鳴て郭公君がわかれをゝしむべらなり

此別を鳥のをしむがごとく聞えて高く鳴と云てさて我をしむ心より鳥の聲もひとゝごゝろに鳴如聞ゆるとはいはで時鳥にのみおほせたるがいにしへのさまなり此意をおもひ得ぬ人は此歌の類をば云たらぬやうにおもへり木高くと云は山のはの木末のあたりに鳴けしきをかねて木高くといへり【小高くとこゝろ得たるはいやし】

藤ばらのゝちかげが。からものゝつかひに。ながつきのつごもりがたにまかりけるに。うへのをのこども。さけたうびけるついでに。よめる

から物の使とは唐國渤海國等の商人共めづらしきものを持わたりて筑紫に舟の著たる事を都へ申せば即御使を遣はされて其種々の物を改させたまひさて都へわたし奉る事を承るなり【或人は唐國勾麗百濟などよりのみつぎものを奉る時の勅使なりといへり誤なり】文德實錄に藤原岳守の傳の中に承和五年出爲二太宰少貳一因檢二校大唐商人貨物一適得二元白詩筆一奏レ上帝甚耽悅授二從五位上一云々此類也

岳守は唐物の使にあらで太宰の少貳なるが此事をも承りて檢校せしなるべし然は事はおなじかれど使

とはかはれり敦忠集にもちかもりから物のつかひにて

一本にはをのこども酒たうびけると有によりて使にそへて遣はさるゝ男共にも酒たうびけるかともおもへりされど其も穩ならず玄ひていはゝ後陰【後陰が事三代實錄に見えたり】に酒たまはる時殿上の男共にも酒をたまふと見るべし是も詞はたらはぬなり古本を得て考べきにこそ

藤原のかねもち

兼茂は右近中將利基の子延喜元年に參議といへり

もろともになきてとゞめよきりぐす秋の別れはをしくやはあらぬ

九月晦方にといへば鳴虫も秋の別を惜む比なりさらば今日の別をも我と共に鳴てとゞめよと我心をきりぐすにあつらへつぐるなり虫は秋のわかれをゝしむ人は人の別をしむを兼ていへり千載集紫式部とほき所にまうできて曉かへりけるにながめつくる日虫の音あはれなりければ鳴よはるまがきの虫もとめがたき秋のわかれやかなしかるらむ此歌は今をとれり

不のもとのり

奥儀鈔に藏人右衛門尉基範と見え作者部類には左衛門尉元矩と有いづれが正しからむ

秋霧のとゝに立出てわかれなばはれぬ思ひに戀やわたらむ

今日別れなば心あく事もなく戀わたらんと云をば時節なれば秋霧の共に立出てといひてはれぬおもひにとも霧によせていふなり

みなもとのさねが。つくしへゆあみんとて。まかりける時に。

山ざきにて。わかれなゝしみけるところにて。よめる

實は舒之子善朝臣が弟にて右近衛中將といへり筑紫へはかしこによき溫泉の有しなるべし山崎は京の南なり浴はあびるに同じ

しろめ

大和物語に源の告がむすめ又は津國江口の遊女也といへり大鏡にていじゐんの河じりにおはしましゝに玄ろといふあそびものめして御覽じなどせさせ給ひてはるかに遠く侍らふよし歌につかふまつれとおほせごと有ければよみて奉りける「濱千鳥とびゆくかぎりありければ雲たつ山をあはとこそみれ」といみ玄うめでさせたまひて物かづけさせたまひき命だに心にかなふ云々此玄ろが歌なりと書たり萬葉にも遊女のよき人の前に出てよめる歌多し後にも一條院の比までもさる事みゆ

後世のあそびとはいと異なり

命だに心にかなふものならば何かわかれのかなしからましとは遠くては我思ふ人の有やなしとおもふも命の事也其命だに心にかなひて又逢まで必もあらんものならば何かかくまで悲しかるらん其は定がたきをと思ひ入たる心あはれふかし女のよめる心なり

山崎より。神なびの森まで。おくりに。人々まかりて。かへりがてにして。別れをゝしみけるに。よめる

源のさね

此神なびの森は上に出たるとは異所にて山崎の山邊にかゝりて向日明神と云在其うしろの方に今かうないの社と云是なりといへり新勅撰に宇治の關白ありまのゆあみにまかりける道にて秋の暮をしむ歌よみ侍りける權大納言長家「神なびの森のあたりに宿はかれくれ行秋もさぞとまるらん」是も其森なるべし

人やりの道ならなくにおほかたはいきうしといひていざかへりなむ

人やりは人に遣るゝを云それは心にまかせてかへりなどすることもならぬ是はことに人やりの道にあらねば大かたならば別れがたきにいざやこゝよりかへりなんと云也【六帖に「人やりにあらぬものから玉しひと一つ心に身をぞうらむる」兼輔集「わたくしの別なりせば秋のよを心づくしにゆくなといはまし」是は人やりのうらなる詞なり】かくては虛ごとのやうなれど別れて往憂しと思ふ時は立歸るべくもおもふ事有ものなり大かたはおほよそと云に同じいざはすゝめる詞なりそれから人をいざなふともいひてこゝは遙の人々と共にと云意となれり

いまは是よりかへりねと。さねがいひけるなりに。よみける

藤原のかねもち

またはれてきにしこゝろの身にしあればかへるさまにはみちもまられず

行人に心をたとへてやりたれば歸る道は玄られぬといへり

ふぢはらのこれなが。武藏のすけにまかりける時に。おくりに。あふ坂をこゆとて。よみける

つらゆき

かつこえて別れもゆくかあふさかは人だのめなる名にこそ有けれ

【かつは物二つの間におく詞なる事上にもいへりこゝはあふと別の間に用ひたり或人はかくこえてかといへどわろし】逢坂といへば人にあひこそせめ越くればやがてわかれ行からはあふ坂とはあやにくにも人におも

ひたのまする名にこそ有けれとなり拾遺集に物へまかりけるおくり關山までし侍るとて貫之「別ゆくけふはまどひぬあふさかはかへりこん日の名にこそ有けれ」人だのめは人にたのましむるてふ意なりたのむとは其方に心をよするなり

大江の千古(チヲル)が。こしへまかりける。うまのはなむけによめる

藤原のかねすけの朝臣

千古は音人の子なり兼輔は右近衛中將利基之六男從三位中納言承平三年二月薨世に堤中納言といへる人なり加茂川の堤に家居し給へばかくよべり堤の內侍と云も同じよびさまなり

君がゆくこしのまら山しられどもゆきのまに〳〵あとはたづれむ

白山は其行國に在を上て且其道はさらねども雪に跡つけて君が行かんからに其跡をとめて問んとなり仕官の人は私に行がたき故に其時にのぞみてひとへにかくはおもふなり

人の。花山にまうで來て。ゆふさりつかた。かへりなんとしける時に。よめる

花山【寺の名は元慶寺といへり】は都の東の山科にて遍昭のそこに住れし事上にいへり

僧正遍昭

ゆふぐれのまがきは山と見えぬ〻むよるはこえじとやどりとるべく

我住む離の山と見えば夜は越がたしとてこゝにやどるべしとなりなゝん上のなはねを通はし下のなはいひおさふる詞にて【祝詞宣命等には皆なもといへり】見えねなど云意なりなんいにしへはなもといへりむもも〻たゞ添たるのみにてなといひおさふるなり

山にのぼりて。かへりまうて來て。人々わかれけるついでによめる

齋仙法師

山といへるは比叡の山なり此比は日枝の延曆寺を山といひ三井の園城寺を寺とのみ云ならへりさてかへりまうで來てといひながら歌に猶山の櫻とよめるは幽仙のすめる坊は西坂本などに有けるがそこに歸まうで來てそこにて人々とわかるゝなるべし法師は扶桑略記に見ゆ兼輔集に幽仙法師としひさしく御導師つかふまつりて律師に成たるあしたに「足引の山のかけはしふみのぼりけふこそ峰の花は折らめ。

わかれなば山のさくらにまかせてむとめんとめじは花のまに〳〵まかせてんはまかせたらんなり猶委しくはまかせあらんを二度つゞめて〻むといふ也花し心あらばとめよと

いふなり

うりんゐんのみこの。舍利會に。山にのぼりて。かへりけるに。櫻の花のもとにて。よめる

僧正へんぜう

比枝の山の舍利會に雲林院の皇子のぼりたまひてかへりけると心うべしさて遍昭の此別るゝ所も上の幽仙の西坂本の坊にやかく云は次に幽仙も皇子の別れをとゞめまほしくよめるによりてなり遍昭も其に山に登りて我は幽仙の許にとゞまれるにや舍利會の事三代實錄の貞觀八年六月に委し

やまかぜにさくらふきまきみだれなむ花のまぎれに立とまるべく

上に櫻花ちりかひくもれ老らくのとよめるに同意なり

ゆうせん法師

ことならば君とまるべくにほはなむかへすは花のうきにやはあらぬ

世に異(コト)にすぐれたる花ならば君もとまるべきからさばかりにほへかし今君をかへすは心うき花にはあらずやと花におもひおこさすべくよめりことならば上に云如く殊にあらばの意なり

仁和のみかど。みこにおはしましける時。ふるの瀧御覽じにおはしまして。かへり給ひけるに、よめる

僧正へんぜう

秋に遍昭の里はあれてとよみし同ゝ度なるべし

或抄に伊勢少掾古次の子或は大和の城上郡の人といへり

あかずしてわかるゝなみだ瀧にそふ水まさるとやおもはは見ゆらん

是は別るゝをなげきて涙の落る時はふる雨も我涙かとおもはるゝたぐひにて此時の心ざか有しなるべし下(シモ)とは瀧の流の末をいふなり

かむなりのつぼにめしたりける日。むほみきなどたうべて。雨のいたうふりければ。ゆふさりまで侍りて。まかり出侍けるなりに。さかづきをとりて

つらゆき

大御酒の杯をとりて此歌有はかねみの王(オホキミ)へ杯をさすとてうたへる歌なり伊せ物語にも轉じて天の河にいたると云意をよみて杯はさせと有源氏物語にも源氏の御許へ今上も院も出ましておの〳〵御歌をとなへて御杯をさゝせ給ふ事有然ば杯をさすは歌をとなへてさすがいにしへのみやびなり奥儀抄にも其よしみゆ

秋はぎの花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそおもへ

萩が花の雨にぬれてうつろふはをしきがそれを物とも

おもはぬばかり君の別れを惜きとなり萩の花のうつろふをいと〳〵をしき物にして君にわかるゝにむかへたるがやさしきなり【萬葉「玄ら露にあらそひかねてさける萩ちらばをしけん雨なふりこそ」】

とよめりける。かへし　　銀　覽　王

なしむらむ人のこゝろをたらぬまに秋のしぐれと身ぞふりにける

我をばさばかりそこの惜むらん心を玄らざりし間に身の老ぬることをさらに悔しくおぼゆ若からましかばとくゆるよしなりむつぶべき人にあひては命の惜まるゝ事有物ぞかし時雨は秋の末より降なればかくよみて雨の詞にこたへたり【秋のしぐれは萬葉におほくよみ後撰などにも見えたり】

かれみのおほきみに。はじめて物がたりして。わかれける時によめる

是も右と同じ時の歌なるべし上にも云此かんなりの壺にて歌をえらばせらるゝ時始て其人々をこゝにめしたるにや躬恒が此歌有によてかく思ふなり此事上にいへり

みつれ

わかるれどうれしくもあるかこよひよりあひ見ぬさきに何を思まし

此王をけふあひみたれば今別るれど今よりは逢みぬ戀をするならねば嬉しとなり端に初めてと有をよくむかへて見るべし

匿志らず　　よみ人しらず

あかずしてわかるゝ袖の白玉は君がゝたみとつゝみてぞ行

涙をたゞ玄ら玉といひてさてかたみといへりつゝみてといふに泣つゝ別れゆくさま有下におのが物からかたみとや見むと取なせるが如し

かざりなくおもふなみだにそぼちぬる袖はかはかじあはむ日までに

意あきらかなりそぼちはそぼぬれそぼふるなどゝ云に同じく玄をれひづをつゞめて云詞なり

かきくらしことはふらなむ春さめにぬれぎぬきせて君をとゞめむ

是は君をとゞめん山なきに雨の殊にもふれかし雨にことよせてもとゞめんと也されど此歌は旅の別れにはあらじとみゆぬれ衣はいつはりてふ事に讀りこゝも雨にことよせてとゞむるは僞なるにちかし後撰に「名にしおはゞあだにぞ有べきたはれ島波のぬれ衣いく世きぬらん」又「春くればさくてふ事をぬれぎぬにきするばかりの花にぞ有ける」此外にもいつはりの事に讀りいかで僞をぬれぎぬとはいひそめけんはじめは玄らず

顯昭本には初の何かきくづしとありてかきくづしとはいたくふると云詞なり人のいたくもの云をもかきくづして云とこそ申せと注せらる密勘にはともかくも沙汰なし契冲は同心歟といへり

志ひてゆく人なとゞめむさくら花いづれを道とまどふまでちれ

此歌の意上にも見えたり櫻花ちりかひくもれ老らくの山風にさくら吹まきみたれなん等なり玄ひては强の字の意にてあながちにわかれ行人のやうにうらみていふなり

志賀の山ごえにて。いは井のもとにて。ものいひける人の。

わかれけるなりに。よめる　　つらゆき

志賀の山越上にいへり石井は山路の岩ある所に清水の湛へて有を云是をいし井とよむはいにしへを玄らぬ人の寫あやまれるなり石をも古語は多くいはとよむ事多し物いひける人とは男どちに云詞にあらぬは例なり此わかれも玄たしかりし女なるべし

むすぶ手のしづくにゝごる山の井のあかでも人にわかれけるかな

山の井は淺くて泥のちかきに手にむすべば其しづくにさへ卽濁りてあくまでものみがたきを序として飽でもわかれぬるといへり拾遺集に二たび此歌を載て曰女の山の井に手洗むすびてのむを見てとて其次に三條尙侍かたゝがひにわたりて歸るあしたに雫に濁るばかりの歌は今はえよまじと侍りければ「我ながら別るゝ時は山の井のにごりしよりもわびしかりけり」【俊成卿の古來風體抄に此歌むすぶ手のとおけるより雫にゝごる山の井のと云てあかでもといへる大かたすべて詞毎のつづきすがた心かぎりなく侍る也歌の本體は只此歌なるべしといへり猶論有水をあかと云梵語をもよみ入たりと云はわろし】此詞をみれば此歌はやくよりすぐれし名有しなり實も序のよみざまおもしろしあかでもは野山などにて清き水をみてのめばいとこのましきものなれば伊勢物語にも「大原やせきの清水をむすびあげてあくやとゝひし人はいづらは」などもよめり

道にあへりける人の。車に物をいひつぎて。別ける所にて。

よめる　　とものり

物いひつぎては人して其事に言をいへるなり

たの帶の道はかた〳〵わかるとも ゆきめぐりてもあはんとぞ思ふ

今の道はかた〳〵に行別るゝとも又めぐりあはんと思ふとなり其を帶の詞もてわかるとも行めぐるとも云なり下の帶は裝束の下に著たるもの、紐を云いにしへ帶

と紐とかよはしていへりさて是は道を隔て下の帶のわかるとつゞく隔句體なり又下の帶の道とつゞけて心うべき說も有古事記に伊邪奈岐命のあはきが原にて祓したまふ時御帶を投すて給ひしかば長道磐の神となると有て此道の神のはじめは帶なれば帶の道とつゞく成べし然は下の帶は冠ことばなりされどよしある詞もていひなすは此ごろのさまなり右二の說の中に猶前なるを用ふべきはたゞ帶といはで下の帶といへばなり

古今和歌集卷第八打聽終

古今和歌集卷第九打聽

羇旅歌

二字にてたびとよむべし旅は年月をわたるにもたゞ二三日にても他に在を云なり【羇は奇なり旅は客也と云はから文の注にてこゝにはたびと云に借て書るのみなり】

もろこしにて。月みみて。よみける

土佐日記に明州の津にてよめる山をくはしく書て歌も青海原と有は一の說なりけんを海路にて時にかなへれば其を用ひたる成べしこゝはもろこしの京にてもいづこにてもよめるてふ意にてかく書しものなり

安倍仲麿

安部氏姓氏錄に出仲麻呂の父祖は物に見えず續日本紀元正天皇靈龜二年に遣唐使の事有其度に仲萬呂は留學生とて御使に附て物習はせに遣されしなり【二年に勅有て三年の春出立しなり其使多治比眞人縣守を始て四の船共養老二年十月にこゝに歸たり此度の事或抄共に誤多し仍てこゝには續日本紀續日本後紀文德實錄等をもて略きて書出せり悉しくは其紀を披見て知べし舊唐書にも出たるを合せて見よ唐書には誤多し】さて唐土に久しく留りて其後の遣唐使の歸るに從ひてかへらんとせしに風波にあひて又彼地へ吹つけられて在し間かの安祿山が亂にあひてひさしく隱れをり其後唐帝に仕て官階漸々にすゝみ終に彼土にて身まかりし人なり

あまのはらふりさけみればかすがなる三かさのやまに出し月かも

唐土に在て我本國を常に云たはぬ時なきまゝに月の出くるをふりさけ見て是は故郷の三笠山に出しと同じ月にて有かとよめり月は幾千里隔てもおなじ月なるを誰も云れゝどやまともろこしと隔居り昔見馴し三笠山の月を思ふによりて其月かあらぬかと疑てよめる心いとあはれなり此かもは卽疑たる詞なり天の原は天は平らかに廣くみゆるを云り海原國原野原など皆廣きを原と云振さけみればふりは云おこす詞にて打みればなど云類にて他念なく云詞なりさけは遠放見放或は天離など往しへ多くよめり【ふりさけてふ詞を後にはあやまりたる說あり】春日の御笠山は奈良の內に在り仲麻呂は奈良の都人なれば其所の山もていへりこゝに古注有て「此歌は昔仲まろをもろこしへ物ならはしにつかはしたりけるにあまたの年を經てえかへりまうでこざりけるをこの國よりまた使まかりいたりけるにたぐひてまうできなんとて出たりけるにめいしうといふ所の海べにてかのくにの人うまのはなむけしけりよるになりて月のいとおもしろうさし出たりけるをみてよめるとなんかたりつたふる云々此書る事はたがはざれど右の端詞とはたがへり是は土佐日記などをもて後に注せし物か【土佐日記にはつかの夜の月出にけり山のはもなくて海の中よりぞ出くるかやうなるをみてや昔あべの仲まろといひける人はもろこしに渡てかへりきたる時に舟にのるべき所にてかの國人うまのはなむけし別をゝしみてかしこのからうたつくりなどしけるあかずや有けん廿日の夜の月出るまでぞ有ける其月は海よりぞ出ける是をみてぞ仲まろのぬし我國はかゝる歌をなん神代より神もよみたまひ今はかみ中しもの人もかやうの別をゝしみよろこびかなしびも有時にはよむとてよめりけるうたあをうなばらふりさけみれば云々】或說に海より出る月ならでかくはよむまじといへるはかたくなし萬葉に「月みればおなじ國なり山こそは君があたりをへだてたりけれ」文選月賦に隔三千里兮共明月とも云ていづこにみても故郷したふこゝろよりは右の如

くよむべきなり

續日本紀に云我朝臣學生播名唐國者唯大臣朝衡二人而已といへり大臣とは吉備公也朝衡とは仲麻呂かしこにての名なり仲麻呂かしこにては光錄大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公の官階をすゝみ卒後潞州大都督を贈らる皇朝にも仁明天皇承和三年にかさねて贈從二位を贈正二位に昇したまへり其時の詔に唯有掞天之章長傳鄰地之響と見えたる掞天之章とは今の歌をさせる詞なりと或人はいへれど掞天庭など云もてみればたゞ文學をもて聞え上たるをいふなるべし

おきの國にながされけるときに。船にのりて。出たつとて。

みやこの人のもとにつかはしける

隱岐は北海の中にあれば道の次序難波より船出して播摩路を經長門豐前の間をめぐりて隱岐に到るべし然ば難波まで送來たる人に此歌はいひあつらへて京なる人の許へやりたるなり【今昔物語に此事を書しに明石に泊りし由見えたり今とても京より難波にわたして舟にうつしのせ長門豐前をめぐりてかの國へゆくよしなり】筥の流されし事は仁明天皇承和五年に遣唐使にて太宰府を船出せしに風波にあひて大使藤原常嗣が乘し一の船損はれければ大使京へ奏して筥等が乘れる第二の船を一の船とし其損せしを二の船としける筥是を憤りて乘らず且西道謠といふから歌を作りて時の朝廷をもそしりしかば嵯峨上皇聞しめして筥を遠流におほせたまひし其舟出によめる歌なり

小野篁朝臣

小野氏は近江の小野村より出たる事姓氏錄にみゆ筥は參議小野岑守の子也わかき時父の任に從ひて陸奥に在て始は弓馬を事とす京にかへりて後學問に入途に名を得たりさて始は文章生より出て數の官を經て從五位下太宰少貳となりしが遣唐使の時流人となりしを其三年めに召かへされて本位に復り又年々に官位すゝみて參議從三位左大辨にて仁壽二年十月にみまかりぬ

わだの原やそしまかけてこぎ出ぬと人にはつげよあまのつり船

隱岐は多くの島々を經て行なれば八十島かけてといひさて難波津より今其遠津島をかけて漕出るてふ事を京におもふ人の許にいひやるを海べにての事なれば其使を蜑の釣舟にいひなしたり然を或人流人なればいひつぐる人はなくてそこに蜑のつりする舟の有をもて云かよめるなりといへるは心得たがへり伊勢物語に昔男齋の宮の女のわらはにむかひて一みるめかるかたやいづこぞ棹さして我にをしへよ蜑の釣舟一と云もめのわらはを蜑の釣舟にいひよせたるなりわたの原わたとは海の事なり原は廣く平らかなるを云即海原と云に同じ【わたのたをにごるべからず萬葉に一海原をやそ島かくり來ぬれども奈良の都はわすれかねつも】八十島海には多くの島々あれば云を是にもあやまれる說々多し

艇しらず　よみ人しらず

みやこでゝけふみかの原いづみ川かは風さむし衣かせやま

都出て今日見ると云かけてさて都出てはまだほどもなき旅ながら風の寒きにぞ衣をかせ山といひかけたるなり此所は山城の相樂郡にいづれもある名所なりかく云かけたる詞多かれども後々の世のにはかはりてことがら面しろし今日三日と見るべからず此所は奈良より半日ばかりの程なれば今日見ると心得べき事誰々もいへり

たとひ奈良人の歌ならず今の京より出てかしこにゆく人なりとも三日迄は經べからず一日二日には行べき所なり

顯昭本には家を出てと有さあらば三日ばかりある家路なるべし然ども諸本都出てと有に今はよるなり

ほのぐとあかしの浦の朝霧に島がくれゆく船をしぞ思ふ

今昔物語に上の筥の歌を上て次に明石に泊りて夜も寢られねば曉に起て海の面をながめ居てと云ことばを書て此歌を出せり是によれば朝ぼらけに此浦の霧立たる中を行舟の島にかくれゆくをあはれと見たるさまなり然ども玄かみる時は其船の如く島がくれゆかん事を思ふ故によそなる舟をもあはれと思ふ事と成ぬをしぞ思ふはをしむ事にあらず下に業平のはるゞ來ぬる旅をしぞ思ふとよめるに同じくしは助語にて旅をぞ思ふなり【萬葉に人まろの西の國へ行時と見えたる歌に一ともし火の明石の大門に入日にやこぎわかれなん家のあたり見て一てふ家のあたりは都の方の山を家のあたりと云て其海門に入ば見えぬよしなり又都へのぼる時一あまさかるひなの長路ゆ戀くればあかしの門よりやまと島見ゆ一此大和島は大和の國の山を明石方より見て是はかへる旅なればよろこぶこゝろなり】それは京に在わびてあづまへくだるものうさを思ふなり是は其島が

れぐ行舟を我身をつみてあはれとおもふなり又みづからの乘れる舟の事とせば明石の浦の朝霧の中に島陰を漕ゆくをあはれとぞ思ふとなりさてたゞ朝霧の中を行を悲むにあらず難波より明石の門までは京の方の山々のかへりみらるゝにこの島陰になりて殊に朝霧さへ立そひ故郷の方の山も見えねばいよ〳〵悲しくおもはるると云意なるべし島がくれと云に萬葉に島にかくれ行と島陰をゆくと二用有今の歌はいづれに見ても聞ゆべしこゝに古注有て「人まろの歌と有につきて後の人さる事とおもへどおもてによみ人云らずと有に依て古注は例の捨べしともし火の明石といへるこそ其比の詞なれ【人丸の歌の風體は右に引たる二首にて見よほのほのゝ歌の如くやはらびてはあらず】ほの〴〵とあかしとつゞくるは今の京此かたのことばなり萬葉にはほのかなる事はほのにともおほにともいひてほの〴〵と云詞其世になし其上貫之も人丸とせざるは此集撰みて後又仰ごとにて此集中の殊にすぐれたるを三百六十首撰び出て新撰和歌集と名づけたる其序に弘仁より延長までの歌の玄の玄なるを撰出たりといへる中にほのぼのゝ歌も入られたり然ば此歌嵯峨天皇の弘仁年中より後此延喜の次の延長の比までの歌なる中にて彼弘仁天長承和などの比の人の歌とせし事明らけし思ふに今書物語に筐の歌とせしは實に其比の風體言葉にて大かたあたれり是はいと異ざまなる說なりと打驚く人も多かるべけれど萬葉集をよく見て古歌をも知りさて人麻呂の歌のさまをも玄らば何の證なくとも人まろならじとは知べきなり【上にも云人まろの歌は萬葉集に出たるのみ他の集共にさなりといふは皆正しからずよく〳〵いにしへを學びてこゝろを得べきなり

今ある今書物語には筐の歌なる事見えずされどかくたしかに引れたれば異本に玄か有なるべし此歌新撰和歌集には雜の歌として入作者人丸と見えたりされど此集の一本すべて歌のみを上て作者は玄るされざるもあれば古本にはいかゞ有けんを玄らず又契沖は彼集には入られざるよしをいはれたれどまさしく今の本には見えたりもし一本にはなかりしにや又雜の歌に入て羈旅には見えざりしもてふといはれしにもあるべし

あづまのかたへ。友とする人ひとりふたりいざなひていきけり。三河の國。やつはしといふ所にいたりけるに。その

川のほとりに。かきつばたいとおもしろくさけりけるを。見て。木の陰におりゐて。かきつばたといふいつもじを。くのかみにすゑて。旅のこゝろをよまむとて。よめる

此詞はいせ物語の古意に委しくいひしを見よ此集の端書どもは短く書るをむねとせしに業平の歌といへば詞長しよりて思ふに伊勢物語は此集の歌を專らとりてそれに詞を多く加へ或は書かへなどせし物なるを顯昭などは彼物語は此集より前のものと思ひたる心得たがひを質として後にいせ物語をとりて此集の詞にくはへしにはあらずや左に長く注せしも有は大和物語をもて後に書加へしと見ゆるも多し又伊勢物語を本說として後に端詞をなほせしも有べくおもはるゝなり

在原業平朝臣

から衣きつゝなれにしつましあればはるゝくきぬる旅をしぞ思ふ

都にとし經てなれし妻をおきてとほく旅に出きつるを思ふと云を衣の詞もてつゞけたりたゞにさへ有を折句にてかくなだらかにあはれによめる事是より後又と聞ず

むさしの國と。まちつぶさの國との中にある。すみ田川のほとりにいたりて。都のいとこひしうおぼえければ。あばし川のほとりにおりゐて。思ひやれば。かぎりもなく。とほくきにげるかなと。おもひわびて。ながめゐるに。わたしもり。はや船にのれ。日もくれぬといひければ。船に乘て。わたらむとするに。みな人ものわびしくて。みやこに思ふ人なくしもあらず。さるなりにおもろき鳥の。はしとあしとあかさ。河のほとりにあそびけり。みやこには見えぬ鳥なりければみな人見しらずわたしもりに。これは何鳥ぞといひければ。是なむみやこ鳥といひけるを。聞て。よめる

角田川是によれば武藏と下總の間にて今はこすげと云所に本すみた川と云在そこ成べし今すみ田川と云は後にもてつけたるなり然に更級の記には武藏と相模の間とあり伊勢物語のこゝの條々のついでをおもふにげにも玄か有べし遠き國の事なれば京にて聞あやまりかく書るならん【さらしなの記に玄もづさの國とむさしの境にてあるふとゐ川といふ又むさしとさがみとの中にゐてあすた川と云は在五中將のいざこと丶はんとよみけるわたりなり中將の集にはすみだ川とあり舟にてわたればさがみの國なり】既にちかき神なび山龍田川をだにあやまりしなりみやこ鳥は鷗の事なり萬葉に「舟ぎほふ堀江の川のみなぎはに來ゐつゝ鳴は都鳥かも」

順集に「こしの海にむれは居るとも都どりみやこのかたぞ戀しかるべき」かゝれば海にも河にも居ること今あみるが如し其外六帖うつぼ物語にもよめりされどそれらはみな都人によせていふのみ

名にしおはゞいざことゝはんみやこ鳥我おもふ人はありやなしやと

都鳥と云名におはゞ都の事を云りつべければ都に我思ふ人の事なくてながらへあるやなきやを問んとなり遠き境に來ておもふらむ心あはれともあはれなりありやなしやは生死の事なり拾遺集にも生死の事を云かよめる歌見えたり

風さらす　よみ人しらず

北へゆく雁ぞなくなるつれてこしかすはたらでぞかへるべらなる

かへる雁の鳴音悲しきを聞て或はとられなどして連てこし時の數に足らで歸るをなげきて鳴が如しといへるなり土佐日記にくだりし時の人の數たらねば古歌に數はたらずぞかへるべらなると云事を思ひ出てと書たり【たらずぞとあるかた正しきにや又一本にはたらずでと有わろし】いかさまにもさるよしの有てよめりとはみゆれど題云らずと有には明らかに心得べからぬをこの古注に「むかしある人男女もろともに人の國へまかりけりをとこまかりいたりてすなはちみまかりにければ女ひとり京へかへりける道にかへる雁の鳴けるを聞てよめるとなん云と見えしは後に大和物語などをとりあはせて書入しなり或說に滋春が歌なりといへるもひがことなり土佐日記には仲麻呂業平などの歌は名を上たれば此歌ただ古歌とのみいへるにて歌ぬし云られぬ方を正しとすべし

あづまのかたより。京へまうでくとて。みちにてよめる　おと

山かくす春のかすみぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ六帖にはかすみぞ春はと見えたり

是は父か夫などの東國の任にてくだるに云たがひてゆきしが今歸るにいつしかとなつかしまる、京の方の山々を霞のかくすを恨しなるべしはじめてのぼらん人のかくまでうらむべきにあらず

こしのくにへまかりける時。志ら山なみて。よめる　みつね

きえはつる時しなければこしぢなる志ら山の名は雪にぞありける

紫式部が集に名に高き越の白山雪なればとよめるは卽ゆきのつもりてやまとなれるものぞと云なりとみゆ

【後撰其外にも今をとりてよめるが多し】是をあはせて雪のきゆる時なきを思へば白山と云は卽雪のつもりてなれる山ぞと云なり

あづまへまかりけるとき。道にてよめる　つらゆき

拾遺にはゐなかへまかりける時とあり

糸によるものならなくにわかれぢの心ぼそくもおもほゆるかな

意は糸にてあらぬと云にて明らかなり源氏の物語には次の句を物とはなしにとひかれたりされど家〻集も今と同じさて此歌を此集の歌くずと云事はいかなるをこ人のいひ出けんよき歌なればこそ拾遺にも二度入り源氏物語にも書出しなれ

甲斐の國へまかりけるとき。道にてよめる（甲斐の少目の時なるべし）　みつね

夜なさむみおく初霜をはらひつゝくさの枕にあまたゝび寐ぬ

下の句は京より甲斐までの旅寐の多きをいふ此歌はかくれたる所なくてつゞけがらおもしろくあはれなり初霜は秋の霜なる事上にいへりあまたゝびは多くの度といふ事なり

たちまのくにのゆへまかりける時に。ふたみの浦といふところにとまりて。夕さりのかれひたうべけるに。ともに有ける人々歌よみける。ついでによめる

或人但馬の城崎（キノサキ）といふ所の湯なるべし二見の浦は播磨なり今所のものはうたみと云なせりといへりかれいひはほし飯の事なり【かれいひをつゞめてかれひといふ】いにしへは旅ゆく人必ほしいひをもちて所々にて水にほとばしてくふなり今も深き山路ゆくには必是をもたすなり

藤原のかれすけ

夕づく夜おぼつかなきを玉くしげふたみのうらはあけてこそみめ

玉櫛笥はふたみとかけごあればこゝはふたと云かけたりさて明ともよせたるなり舟どまりして夕暮なればおぼつかなくさだかならぬまゝに夜明て後見んといふなり重之集に玉くしげ二見の浦の中に落る月の影こそ鏡なりけれ二見の浦は伊勢三河にも在名なり【重之のよまれしはいづこならん】

今但馬の國にも二見とよべる所ありそれは卽城の崎の湯あるほとりなり兼輔のこゝにてよまれしとかの里人はいへど所のさまを見るに云かるべからず此歌によりて附會したるものぞかしこにゆかんは難波よ

り舟に乘て播磨路を經つゝ高砂のあたりより舟をあがりて北の方山路分入道ありいにしへは其道をや行けん玄かれば播磨なるぞ道のゆくてなる

これたかのみこのともに。かりにまかりける時に。あまの河といふ所の。河のほとりにおりゐて。酒などのみけるついでに。みこのいひけらく。かりして。あまのがはらにいたるといふこゝろをよみて。さかづきはさせといひければ。よめる

ありはらの業平朝臣

天の河は河内國交野郡に在ともにといふに友なると從ふとふたつ有こゝは從なり

かりくらしたなばたつめにやどからんあまのがはらに我は來にけり

天の河原と云所なれば空に有天の河になして織女に宿からんといへり

みこ。此歌をかへすがへすよみつゝ。かへしえせずなりにければ。とりに侍りてよめる

此ともゝ從なり是は歌よくよみたまふ皇子なるが時にとりてことゆきたまはざりしなるべし

紀のありつね

此人の事伊勢物語古意にくはしくいへり

三代實錄に元慶元年正月從四位下行周防ノ權ノ守紀ノ朝臣有常卒有常左京人正四位下名虎之子也性清廉有儀望少年侍奉仁明天皇卒時年六十三云々

ひとゝせにふたゝびきます君までば宿かす人もあらじとぞおもふ

【君までばを君まではとこゝろ得たるはわろし】

年にたゞ一度來ます彦星を待織女なればあだし人に宿はかさじとなり宿かす人とは織女をさして云萬葉に一とせに七日の夜のみ來る人のと云人は彦星を云なり

他國にても天人などゝいへばうたがふ事なかれ

朱雀院の。奈良におはしましける時に。たむけ山にてよめる

是は寛平上皇を申す奈良へ御幸の事は物に見えねど昌泰元年に此上皇吉野の宮の瀧御幸の次手に住吉へも御幸有しなれば奈良も道のゆくてにておはしませるなるべしおはしましと云は御座と聞ゆるを是は御幸の事を云なるべしたむけ山萬葉に長屋ノ王なら山に馬をとゞめてよめるとて「佐保過てならのたむけにおく幣は妹をめがれずあひ見玄めとぞ」是をもて相坂山の坂の上に手向の神をいのるが如く奈良の都より旅たつ人奈良坂の上にてたむけしてゆけばおのづからそこをたむけ山といひしなりけり【或說たむけ山は東大寺の邊にあるといふはよしなし又むさし塚といふ所の次につゞりの袖はとよみし所なりと云も俗のいひ事なり】

すがはらの朝臣

此たびはぬさもとりあへずたむけやまもみぢのにしき神のまに〳〵

此度は御從なれば幣をもえとりあはせず旅の手向を此山のもみぢの錦もて卽神の御こゝろのまゝに手向とするなりとよめり此度はに旅をかねたり後撰に草枕此たびへつる年月のと云に同じとりあへずと句を切て意得べし手向は下の紅葉の錦を神のまに〳〵たむくるてふ意にておけりまに〳〵は萬葉に語意と書る所も有に付て皆心のまゝてふ事とおもふはわろし彼集は其歌の意を玄らせんとて字をそへたるも多したゞまゝにと云をかさねたると意得べし

素性法師

たむけにはつゞりの袖もさるべきにもみぢにあける神やかへさむ

つゞりの袖は天竺のいにしへの僧の衣はこゝかしこにて絹布の切々を得てつゞりつけてする故にいふ後の袈裟を色々につぎたるも其かたち故に袴衣といへり然ば旅の手向に袴の衣の袖をも切たちてすべけれど此山の神のもみぢの錦にあきたりておはせばうけたまはじといへり上にもいふいにしへは絹を裁て手むける事なかりしなり萬葉に「あはなくに夕占をとふとぬさにおく我衣手は又ぞつくべき」是もおくといへり

古今和歌集卷第九打聽終

古今和歌集卷第十打聽

物名

もの、名とよむ是をかくし題といふ人もあれど題とはあらはに云意なれば叶はずかくし詞などはいひもすべし此歌共には其詞をかくして其物の心をよめるも有異事をよめるに其詞をかくせるも有なり【今の俗に又たちいりともよめり】

うぐひす　　藤原敏行朝臣

心から花のもとづくにそぼちつゝうぐひすとのみ鳥のなくらむ

【此歌によりて後々によみあやまれるうたども多し】花の滴に濡そぼちつるは己が心よりなるを何とて憂く乾ずと鳴らんとなり是鶯の名をかくして又其鳥のうへをよめり

ほとゝぎす

くべきほどときすぎぬれや待わびてなくなる聲の人をとよむる

此歌はよくも說えぬが多し或人來べきほど時過ぬればにや誰々も待わびて後に鳴音の人をとよましむるといへり是に從ふべきにや猶思ふに時鳥の妻などの彼が待ほど時も過ぬればにや打わびて鳴ぬの間人をとよましむると意得べきなり是もかの鳥がうへをよむに名をかくしてよめれば上四句は必彼がうへにて說べくおぼゆ此人をとよましむるは彼が鳴音をめづるにつけて人のいひさはぎ思ひさわぐをいふ也

うつせみ　　在原ふげはる

此集には蟬は蛻殼の有物なれば今鳴をるをもうつせみと云と心得て歌によみたればこゝもたゞ蟬の事とせしなり是は今の京となりてのならはせごとなり【萬葉に空蟬と書は借字にてうつゝの身てふ事をばうつし身といへりしはあきといふ詞の略なるを轉してうつそみともうつせみともいへるなり猶委しくは冠辭考にいへるを見よ】

涙のうつせみれば玉ぞみだれけるひろはゞ袖にはかからむや

波の打よする瀨をみれば玉ぞ亂る是を袖にひろひ入ば波の玉なる故にはかなく消むやといひて忠岑にとひかけしなりうつせみは一二の句の間にかくせり

かへし　　壬生忠岑

たもとよりはなれて玉なつゝまめや是なむそれとうつせみんかし

玉と見れど袖に拾ひ入ば、かなからんやと云を難じて玉とみて拾はんには袖をおきて外の物につゝむ物あらば先そこの袖につゝみて是ぞかくの如なりと我袂にとりうつせかしそれをみて後いかにともこたへん物ぞと云なり玉にうつすといふ古ごとの有てぞこゝも云けるなるべし【玉にはうつすと云詞有糸などつなぎかふる時は彼是手にうつすより云が今もわざをき人の物と物とへ玉をうつすを玉うつしといへるもおもふに古くいへる詞のありてか】

うめ　　讀人しらず

是を後にむめと書り萬葉に宇米烏米など書たり其上烏梅とも書又梅の字をめの假字にも用ひし事多し思に此木はおほよそ飛鳥の都の比より歌にもよめば本はから國より渡來し物なるべしそれが世に廣まりて歌にもよむ事となれり然ば菊を字音のまゝにきくとよめる如くうめも烏梅の字音とおもはるゝなり烏梅とは梅の子を干たるをはじめ藥用の爲にから國より渡し來て後又其木を根ごして來りし時是ぞかの烏梅の木なりといへるよりつひにその木を烏梅の木とよべるならんかゝらばいよゝむめとは書べからぬことわりなり【烏梅をうばいとよむこと、なれど萬葉には宇女を烏梅とかゝれたればうめといふも卽字の音なるを云るべし】

萬葉の梅の歌は筑紫の任に在る人々のよめるが多きをみればから國よりわたし來りて先かしこに多く植生しつるによりてならめさて都にもうつし植られしかど他の國の物なれば多からず後の世の如く櫻におしならべてあまねくは玩ばざりしなるべし續日本紀天平十年七月天皇西池の宮に幸まして殿前の梅樹を指て詔曰人皆有レ志所レ好不レ同朕去春欲レ玩二此樹一而未レ及二賞玩一花葉遽落意甚惜焉宜二各賦一二春意一詠二此梅樹一文人三十人奉レ詔賦レ之と見えたるにもそのかみは專らならざりし事おろ〳〵こゝろ得らるゝなり

あなうめに常なるべくも見えぬかな戀しかるべき香はにほひつゝ

あなうめにはあゝ憂しや目には常にひさしかるべくも見えぬ花なるかな散て後戀しかるべき香のみは深くにほへりといへりあなはあゝなどなげく詞なり物は初の句にかくせり

かにはざくら　　つらゆき

是は萬葉に櫻皮卷つくれる船とよみて今も櫻の皮を物に卷或はとぢなどする是を後にはかば櫻と略きていへり源氏物語にかば櫻のうつくしき色あるよしに書る所々見えたりそれが中に外の花はやへさく花櫻さかり過

てかば櫻はひらけ藤はおくれて色づきなどはすめるを
と書ればいとおそき花の色あるなりさて其皮の物に用
ひてよければかには櫻とは云【是を櫻桃の事と云はあ
やまりなり櫻桃は端午に子を奉る山からぶみに見えて
かには櫻とは異物なり和名抄に樺和名加波今案皮有レ
之と書るもの是なり】一條院の御時近江のみやす所の
歌合に「かには櫻ふかれくる香には櫻ぞそひて散春に
おくれぬにほひなるべし」是もかくせる物を卽よみた
れば春の葬かたに咲る事を玄るべし

かづけとも涙のなかにはさぐられで風吹ごとにうきしづむ玉

水底にくゞりてとらんとすれど風ふくごとに波の立さ
わぎて玉の浮沈しつゝえさぐりとられぬとよめり物は
二三の句にかくしてさて櫻のうへにはよまざるなりか
づくとは頭を地につきてうやまふ事をぬかづくと云又
祝詞にうなねつきぬきともいへり其をうつして頭に衣
など打かくるをもかづくといひ海人の海に入をもかた
ちもてかづくといへり

すもゝの花

味の酸きをもて酸桃と云李の字あたれり

今いくか春しなければ霜もゝのはながめて思ふべらなり

【物は三四の句にかくせり】

春の名殘を思ひて鶯の物うれひ顔に鳴が如しといへり
ながめは物おもひ有時物見るとはなしに久しくまもり
をるを云仍て物思ひすることをながめといふ後にたゞ
みる事とするは誤なり

からもゝの花　ふかやぼ

杏の字を用ふ韓桃の意なるべし又酸桃にむかへて味の
辛ければ辛桃と云と何れにや玄られず

あふからもゝのは猶こそかなしけれわかれむことなかれておもへば

【物は一二の句にかくせり】

あひ見ては嬉しかるべきを其あひ見しによりて猶々物
はかなしとなりことわりは末にて聞ゆ

たちばな　小野のたげかけ

あしびきの山たちはなれ行雲のやどりさだめぬ世にこそありけれ

山にかゝる雲のいつ立はなれゆきて方も定めぬ如く世
の中も玄か也といへり

此題は山たち花と有しを後に山の字を寫もらせしが
今は傳へしなるべし歌には玄かよみて猶次々もをか
だまの木山がきの木などついでならべたるにて玄か
おもはるゝ也

なかだまの木　とものり

是は岡玉の木也是を柄の木ともいひてつるばみといふ
子の生る木なり其子は又玉がしはとも云なり【今どん
ぐりと云木のみなり】いにしへは玉を寶としてたふと
めるより草木の子にも圓きは緒にぬきて身にも帶たる
故にか、る子有をば玉の木といへりさてまことの玉な
らぬ由にて岡玉野眞玉などはいへる也【ぬば玉の事冠
辭考にいへりすべて相似てそれならぬは山たち花山か
ぎなど、云此類あぐるにいとまなし】或物に引たる歌
「玉がしはをか玉の木のかゞみ葉に神のひもろぎそな
へつるかな」てふは後の歌ざまにあらず是に玉柏をか
玉の木といひかゞみ葉と云【是三くさの神寶のひとつ
なり御賀玉の木てふ事なりなど云はよしなきいつはり
なりおとをのかなもたがひしをいにしへの假名玄らぬ
人はたま〳〵もてつけて說あやまれるなりさるから一
つとしてとるべきなし】台記其外の古記の饌膳に柏葉
の事を鏡葉と書殊に神に奉る御贄には柏葉を敷てもり
御酒をも柏葉にて飲事古代の常なり今も伊勢の御祭に
は玄かする由なりかゝれば此歌こそたしかなる所なれ
其故に此物の名の次第も上に橘といひ岡玉の木山柿の
木とならべあげたるには何の疑ひかあらむ

この物かく說れたれど猶おぼつかなければ契冲がい
へるいかなる木とも玄られず六蛸等にも出さず此集
の外によまねば或抄に說々多しといへどもさしたる
證據なし分明の相傳もなしといへり是を正說とすべ
しといへるに玄たがひてやみぬべきかか、る類推き
はめたりとも何の益なき事なりとぞ思ふ

みよしの、吉野の瀧にうかびいづるあわなか玉のきゆと見ゆらむ

沫をか玉のと云かくせりをの假名あきらかなり又岡も
いにしへはをかと書るなり

勝臣

かけりても何なか玉のきても見むからはほのほとなりにしものを

【物は二三の句にかくせり】此歌昔はこゝに入て有しを
此をかだまの木は御賀のいはひごとなりなど云ひが言
より後に家々の本に墨もてけしたりといへり今そのけ
したりし歌ども卷の末に集めて書りそれを見るになか
ばあまりはけすべからぬ歌なり是も必こゝに入べき物
なり歌の意は人死て魂は天をかけりあるくといへど屍
は燒てなければ二度來て見る山なしといへり

やまがきの木　よみ人しらず

和名抄に鹿心柿と書てやまがきとよめり且柿ノ小而長也と見ゆ西京ノ賦に小ノ山柿と見ゆるも是か後世ちひさくて澁きを山がきといへり今も見る物なり

秋は來ぬいまやまがきのきりぐすよなくなかむ風のさむさに

意明らかなり物は二句にかくせり

あふひかつら

あふひは常の如なりかつらは桂なり鬘の事にはあらず西宮抄に四月祭時近以レ桂爲二挿頭一と見ゆ是は加茂祭の御使のかざしに近來は桂を用ふと云なり【かしらには鬘に作りて花などをかくるなれば桂はかざしにして鬘にはせねど頭にさすなれば玄ひて鬘ともいひなせる歟又是をもかづらとしてかけし事の有歟】されどここにかく并べて云からは此祭に古くより桂をも用ふれど御使のかざしにはちか比より桂をさすと云歟或人此二つをもて諸かづらと云といへるは玄かるべし

かくばかりあふひのまれになる人ないかゞつらしとおもほざるべき

逢日といふに葵をかくせり「かつらはいかゞつらしに」人めゆゑのちにあふひのはるけくばわがつらさにやおもひなされむ【あふひをあをいの如くとなふれど歌には逢日とよめり】心にはおもへど人目をはゞかりてあはでひさしくなれるを我心のつらしとや思ひなされんとなり

くたに　僧正遍昭

こは木丹を略きて云字書に木丹は梔子花也と書る是なりくちなしの子は木の子にては色ある物故に木丹と云源氏をとめの卷に四季をいへる其夏の方に「花橘なでしこさうびくたになどやうの花くさ〳〵うゑて」と有是皆夏なりくちなしの花は五月に專さくものなれば右に云とあはせてくたにはくちなしの事なる明らけし又源氏やどり木に「み山木にやどりたる蔦の色にまで殘りたるこだになどすこし引とらせ給て宮へとおぼしてもたせたまふ」枕の草子に草はとて苦こだにと有然ばこだには別の物なりくたにとことばの近ければこゝをも云はわろし

散ぬれば後はあくたになるものを思ひあらずもまどふてふかな

【物は二の句にかくせり】蝶は花を玄たふ物なれば云出てあまりに物に思ひなづむ人を教へてよめりさて蝶は字音にのみいひて和名をいはず新撰字鏡に蝶の和名かはひらごといへり今も陸奥にてはあまびらと云山さるはこゝのよび名も有しを字音にのみいひならはして是にもてふとよみつるなり是は物の名なれば俳諧歌の類にてかゝる事も有べしよろしき時の歌によむはいかに自露を玉とぬくとやさゝがにの花にも葉にも糸をみなへし

ぞや

六帖には末の句まどふ今日哉とありさらば人のうへにてよく聞ゆるなり

さうび　つらゆき

薔薇也うばらの花とも云其白きは專藥用にす庭に植てめづるは大かた薄紅の花なり白氏文集に階庭薔薇入レ夏開などいひてから國にてもめでし花なり

我はけさうひにぞみつる花の色をあだなるものといふべかりけり

【物は一二の句にかくせり】我は今朝初にぞ花の色をみつるがげにうつろひやすくあだなる物と云べかりけりといへり【さうひをかくしてうひとよめり初をうゐと書はあやまりなり】是は花といふ物をはじめて見たる心によめりいせ物語に人はこれをや戀といふらんとよめる其返しに何をかも戀とはいふと、ひし我しもなどよめる歌にはかくもいひなす事なりうひは、じめなる事を云

なみなへし　とものり

をみなめしとよむべの濁れるをめと、なふるなりされどこゝはをみなべしと、なへしなるべし

糸を績並しと云か又糸を皆經しと云歟此二ついづれにても聞ゆるが如しされど氏の麻績を乎美と云は乎宇美の略なりこゝは上に糸といひて又麻績とはいひがたきやうなれば是は暫おきて糸を皆經しと云と思ひをりてむさゝがには蛛なりもはら笹原にすむ物にて蟹にかたちの似たればさゝがにと云なり又笹原にのみもあらねと名は一かたによりて付る事有【或人さゝは小き事なりといへど玄かにはあらじ】

朝露なわけそぼちつゝ花見むと今ぞ野山をみなへしりぬる

今ぞ野山を悉經あるきて知たりとなり新撰萬葉には玄らぬ山べをと有

朱雀ぬんの。なみなべしあはせの時に。なみなべしと云いつもじな。くのかしらにおきて。よめる　つらゆき

なぐら山みれたちならしなく鹿のへにけむ秋を玄る人ぞなき

歌は明らけし立ならしはふみたひらぐと云に同じ萬葉に夕されば小倉の山に鳴鹿のとよませ給ひしは大和の龍田山の奥なる小倉山なり是は今の京の北なる嵯峨の小倉山なるべし

きちかさの花　　とものり

桔梗の字音なり和名抄にはありの火ふきといひたれどよきあたりにはいやしげなる名なればいはぬにやさて此物の名どもに字音のあるは常にいひつけたる事を其まゝによめる成べし

あきちかう野は成にけり白露のおける草葉もいろかはりゆく

或人是は夏の末に秋近くなれりといふにあらず秋にて草の枯ゆくべき時ちかくなれりと云なり萬葉の秋の歌に「夕されば野べの秋萩うらわかみ露にしかれて秋待がたし」此うたを思ふべしといへり今おもふに萬葉の秋待がたしは時待がたしと云意なりされども萬葉の比のよみなしと此比とは多くたがひて事せばく成たれば右の歌の如くはあらじたゞ秋の近くなりて草葉のさま露の色も何となくかはりゆくを色かはりゆくとよめりとおぼゆ【六帖に「秋の月ちかうてらすと見えつるは露にうつろふひかりなりけり」拾遺に「あだ人のまがき近うな花うゑそにほひもあへず折つくしけり」是らもきちかうをかくせり】ちかくをちかうといふは常のことなり歌にはいふまじきを是は物の名をかくさんとていへるなりすべて物の名の歌は雅言のみにてはえいひとられねばなり

ゑなに　　よみ人しらず

紫苑の字音なり和名抄にはのしといへり六帖に此うた多し萬葉に玄こぐさといへるは此事とみゆ花は野菊に似て薄縹葉は蕪菁の如し

萬葉に玄こぐさと云は此事とみゆと云打聞は此事にあらずと云打聞の誤にや萬葉に玄このしこぐさとよみたるは忘草を罵ていへるなりとこそおぼえたれ歌はわすれぐさ我下紐につけたれど玄このしこ草ことにし有けりとよめり其意は憂をわすれ草と云からわするゝやと我下紐にみそかに著たれど中々それに又いざなはれて物思ふひまなきは忘草とは言のみにして有けりさるは醜の醜草なり今より忘草とはいはじと罵言せしなり字は醜とも鬼とも書て玄ことよめるは見にくきを云古言なり紫苑より見にくき草も有べしこゝの詞は玄こ草といへるは此事なりといふはあやまりなりといはれしを聞あやまりしなるべし又後世におにのしこ草とよむ事とするも鬼は見にくき物によりて玄こといふ事に書るともえこゝろえぬなりおには隱の字の音なりと和名抄に見えし事上にも出せり萬葉の世頃に於二といふことばゝなし且紫苑はさばかり見にくき花にあらずかへりて玄ほらしとはよむべし

ふりはへていざふるさとの花見むとこしなにほひぞうつろひにける

意明らかなり來しを艶ひと云にかくせり

りうたむの花　　友則

龍膽也和名抄にえやみ草又にがなとも云今りんどうと云は唐音の轉せるか

我やどの花ふみしだくとりうたん野はなければやこゝにしも來る

鳥うたんとかくせりさて彼がすむ野はなければやこゝにしも來て花を踏玄だきてそこなふ鳥なれば礫をもうたんとにくむなりふみ玄だくはふみひしぐと云に同じ六帖に「鶯の花ふみしだく木のもとはいたく雪ふる春べなりけり」又「夏がりの玉江の蘆をふみしだきむれゐる鳥のたつ空もなし」源氏手習の卷に「水の流どもふみ玄だく駒の足音も」などいへりさるに友則集には花ふみちらすと有は後に書あやまりし物と見ゆるを其に玄たがひて玄だくは散すなりと云はわろし末の句顯注には野はなげなるをとあるもとらず

友則集末の句こゝにじも鳴とあり

なばな　　よみ人しらず

是を萬葉に尾花とも書るによりて獸の尾の如き穂ある故に云と誰もおもへり然るに萬葉に家持卿のよめる「秋の野に今こそゆかめものゝふのをとこをみなの花にほふ見に」と云はを花を男花とし女郎花をゝみな花とせし意とおぼゆ凡草木にも男女有尾花は有が中に長だちて葉などの男々玄げなる故に男花と云べくをみなべしのなよびたるは女花とすべし是によれば尾と書は借字にて男花なるべし

ありと見てたのむぞかたきうつせみのよをばなしとやおもひなしてむ

物は四の句に隱せり萬の事を有物とのみ心をよせをるをすべて必と頼みがたければ世の中は我も人も無しとおもひて有なんやとなり六帖に「かげろふをありと見てたのむぞかたきかげろふのいつとも玄らぬ身とは玄る〳〵。

けにごし

牽牛子也和名抄にあさがほといへりこゝはその事なり此國上古に朝がほと云は木槿の花なり萬葉に「朝がほは朝露おきて咲といへど夕影にこそ咲まさりけれ」是木槿の花のさまをよみたるなり六帖などに野べによみ

たるもむくげなり後に蕓草の朝のみ花さくを藥用の物にから國よりもてわたりしが多くなりたるよりむくげを朝貌と云事人皆わすれたり槿花一日ノ榮と云て朝より咲き出て夕づけまで花あるなり萬葉のうたはことに物陰などにや咲たらん秋もやゝ深く日の影薄きころほひ夕影まちてさかりを見するをめづらしみてやよみつらむ

野によみつるはゝたむくげなるべしけにごしはかきなどをたのみてさくものなればあら野には見えぬ也

やたべのなざれ

攝津國矢田部郡より出たる氏なり名實はいまだ考へず

打つけにこしとや花の色なみむおくしら露のそむるばかりな

花の色はもと白露の染る物なるを見るめのさしあたりにまかせて色濃しと見ん物にもあらずといへり花の色は露の染るものにはあらねどもみぢなどの色によりて借ていへるなりばかりはのみと同じきが多し

二條の后の。春宮のみやすむ所と申ける時に。めどにけづり花させりけるを、よませたまひける

けづり花は今云つくり花なり延喜の圖書式に金銅ノ花瓶二口菊削花二枚云々朝忠集朱雀院のみかど院にならせたまひて御佛名のあしたにけづり花をさして御あそびのをりに「年毎に梅はをれどもいかなればけふ折袖の露もかわかぬ」小大君ノ集にも御佛名のまたの夜まゐりたるにけづり花を庭にさしたりけるにとて歌有續古今集にひえの山にかたわきてけづり花玄ける事侍るにかたきの方にをみなべしをつくりたりけるを云々此ほか作花の事後々の集共にも多くみゆ本は木などけづりて花のかたちにせしよりおこりて紙又絹などにて作りたるをも皆けづり花といふなるべし【けづり花は玄られがたき事にいへるまゝに好事の人さまぐゝいへどみないふにたらず或人眞言家の書に花なき時はくさぐさの綵ある帛を花につくりて供養すべしと有といへり萬葉に「はつせめのつくる木綿花」ともよみていにしへより有事なり】著はめど萩てふ草の一もとより六十本餘り莖の生出る故にめど萩と云といへり易の卦に用ふる蓍てふ草も是が事にや其莖に彼けづり花をさして作れると誰もいへりさも有べき事なれば暫是にしたがふ

文屋やすひで

花の木にあらざらめどもささにけりふりにしこのみなるときもがな

異本に花の木にを花の色にとあるはわろき歟

其花の木にあらざらめども咲にけりと云は作り花の常なりさて其木ならねどもかく花は咲を我老たる身もなり出る事もあれかしとなり此身に木の子をそへたりさてめどの二言をかくせしはこともなけれど一首に削花のこゝろをいひこめたれば是も物の名のにほひとなれり

紀のとしざだ

志のぶぐさ

和名抄に苔の類にて垣衣一名烏韭玄のぶぐさといへるも是にて古き軒古き築土などに生る物なり委しくはいせ物がたり古意にいへり【後世玄のぶ草といふは山ふかき岩根などに生る物にていづこにも有ものならねば軒の玄のぶなどはよむべからず】

山たかみつれにあらしのふくさとはにほひもあへず花ぞちりける

あへず堪ずなり薫りも皆風に吹やられてにほふともなく花の散ぬるとなり二三の句にかくせり

やまし

和名抄に知母をやましといへり或人同抄に羊蹄菜を之といひ紫苑をのしといひ白英をほそし蒼蕪をすし大黄をおほしといふ類のものなりといへり

平のあつゆき

ほとゝぎす峯の雲にやまじりにしありとはさけど見るよしもなき

二の句にかくせり歌は明らかなり

からはぎ　よみ人しらず

秋萩に三種有こはぎは木萩にて上にいへり又春生出て冬枯るは草萩なり此二種はいづこの野山にも生て此國の種なり今一種糸のほそくたれて花の色深き有是は必野べにおのづから生るを見ずかの唐なでしこと云類にてから人のもてわたりし物故にから萩といふ名はよびたる歟

うつ蟬のからは木ごとにとゞむれど玉のゆくへをみぬぞかなしき

蟬の殼は木に殘して身は蛻しいづちともなく飛去れるをたとへて人の屍は棺の内にあれど魂はゆく方玄らずなれるをいへり上に何をか魂の來ても見んとよめるに似たり人の骸を入るを棺といひそれを納めし塚を奥槨といひそれを乘る車を棺車といへりよりて骸は棺ごとにとよせていへり

かはなぐさ　深養父

和名抄は河苔かはなといへる是なり何ぞなれば式の鎮火祭の祝詞にいざなみの尊の火の神かぐづちを生給て後の事をいふに更生子水神匏川榮埴山姫四

種物乎生給比此能心惡子乃心荒比弁波水ノ神 勉埴山姫川栄乎持氏鎮奉禮止 敬悟給 支云々【心さがなき子は卽火の神をいふ荒比弁波の弁は奈の誤にてあらび奈ば成べし】是を合せ見よ其河栄は川に生る藻草也水の中に生なびく物なれば和名に苔の類に入たりから國にも風俗通と云書に堂殿上作二藻井一井藻以厭レ火といへばからやまと同じく此水草を家のこゝかしこに雕つけて火を鎭むる物とせる事相かなへりかゝる事を玄らぬ人のさまゞ〳〵云なして秘傳なりとするは云に足ず

和名抄の苔の類にさる物見えず打聞の誤なるべし草の部に女菁一名雀瓢注に子似二瓢形一故以名レ之和名加波禰久佐といふもの有是にはあらぬか

ぬば玉の夢になにかはなぐさまむうつゝにだにもあかぬこゝろを

【ぬば玉冠辭考にいへりむば玉うば玉ことによりてわかちあるといふはひがごとなり】二三の句にかくせりさて夢は昔は寢目とのみいひしを今の京となりてゆめと、なへあやまれり

いめは寢目の義朝寢をあさい宿直をとのいなど皆寐をいともいへり宿直をとのゐと云は居の字の意にあやまれるなりさてゆめとは勤務の事にて上古はよくわかてり

此うたは戀の心によめり

さがりこけ

是は日陰といひて白青なる苔の奥山の古木の枝などに生たるを云【日陰はさるをがせと云物なりいにしへ神事には人のけがさぬおく山のさか木日陰などをとり用ひしなりある人は地をはふ苔のやうに思へるはあやまれり】或人は堀川院百首に「よそぬ島玄た葉におふるさがり苔露かゝらぬどかるゝ夜もなし」と云によりて常の苔也といへど地をはふ苔の木の上までおひのぼりてさがるはなしことに下葉よりおふると云もよく聞えぬ歌なり其比の人はみだりに古ことめきてよみたればことわりなく證には引がたきがあり

たかむこのとしほる

高向氏なりとし春は来考【或抄に甲斐守といへり】

花の色はたゞひとさかりこけれどもかへすゞくそ露はそめける

物は二三の句にわたりてかくせり歌はたゞ白露の染るばかりをとよめるに似たりこけれどもは濃あれども也

にがたけ　まげはる

和名抄に長間笋笋青最晩生味大苦也といへり是なるべし今は女竹ともしのめ竹ともいふなり

いのちとて露なたのむにかたければ物わびしらになく野べの虫

二三の句にかくせり秋の虫は多く露をのみはみてをるなりよりて露を命にたのめどはかなき露なればそれもたのもしからで物わびしげに鳴といへりわびしらのらはそへたるにて佗しげにといはんが如し

かばたけ

和名抄に苦竹かはたけといへる是なり呉竹の類は笋秀ぬれば皮は脱おつるに苦竹の類は皆いつまでも皮のつきて有故に皮竹といへり是を河竹と書くは例の借字なり

かげのりのおほきみ

景式王は惟條親王之子也といへり

さよふけてなかばたけゆく久かたの月ふきかへせ秋の山かぜ

二の句に隱せりたけゆくは更去と云が如し

わらび　眞せい法師

此法師の名戀の二の清行朝臣の端書にも見えたり是は後撰集に眞靜法師と眞名書したるが見ゆ同人歟或抄に眞濟僧正也といへどそれは貞觀二年に卒せられたれば此集には僧正と擧べし法師とは記すべからず

烟たちもゆとも見えぬくさの葉か誠がわらびとなづけそめけむ

巖を藥火にとりなせり六帖にも「みよしの、山の霞をけさみればわらびのもゆる烟なりけり」かくざまによめるが多し

さゝまつびばせなば

和名抄に芭蕉の二字をはせをばと訓たるによれば葉と云字を添て書はわろし且ばせうといはでばせをと、なふるは蒸の音の字は昔よりせをと書る例也長谷雄の字をかへて博昭と書し類なり西行法師のはせうとよみしはいにしへにたがへり

紀のめのと

めのとは乳母を云こゝにかく書るは天皇又は東宮の乳母故なるべし

或抄に陽成天皇の御乳母或說紀朝臣全子源益母也といへり

いさゝめに時まつまにぞひはへぬるこゝろばせなば人に見えつゝ

【一の句にさゝ二の句に松三に枇杷四にばせをばをかくせり】假初のやうにてあはん時を待ほどにいたづらにひさしく日を經たりかくとは玄らで既に我心のほどを人に見えつるが恥かしとなりいさゝめは萬葉に「眞

木柱つくる柚人いさゝめにかり庵のためと作りけめやも」又集中に卒爾と云しもいさゝめとよむべき歌どもなりさてかりそめてふ意なりとはおもはる

なし　なつめ　くるみ

或人云三代實錄仁和三年二月信濃國例貢梨子大棗吳桃子雉腊別貢梨大棗等貢獻之期元不レ立レ制太政官議二定例貢一毎年十月別爲レ期爲二立恒例一云々是をもておもふに此貢物をもて來たる時是よめとおほせごとなどの有てよめるにやと玄かにも有べし

兵衛

藤原兼茂之女大和物語に忠房が許に侍りける兵衛と有は是が此下の詞書に業平朝臣の家に侍りける女といへるになぞらへば忠房の妹かといへり

あぢきなしなげきなつめそうきことにあひくる身をば捨ぬものから

【一の句になし二になつめ四にくるみをかくせり】世の中は憂事に逢とても身をすつる物にあらざるからはいかに憂けくともなげきなつめそゝはあぢきなき事よと人をいさめてよめる也あぢきなしは上にもいふ心うしともにが〳〵しきとも云意なりなげきなつめそはなけきをあつめそと云なり物からはすべて物ながらを略ける詞なるを【自の字をよりともからともよむべき所もあるにはものからを物よりとこゝろうべき事も有まじきにあらず】こゝは捨ぬ物によりてと云意と見ゆ此意によめるも古歌にはたま〳〵有しとおぼゆ

からをよりと心得るは此次の歌けさからことに聞ゆるはと云は今朝よりことにと云意なり然ども物と云詞を上におきて例有やおぼつかなし此うたさまでなげきなつめそ我が如く憂事あまたあひくる身をばえすてぬ物ながらにかくて有はといさむるにてはなき歟

からこと　いふところにて。春の立ける日。よめる

唐琴は備前の國にある所なり

安倍清行朝臣

三代實錄大納言阿部朝臣安仁之子なるよしみゆ

涙の音けさからことに聞ゆるは春のしらべやあらたまるらむ

今朝から殊に、唐琴をそへさて春の調子や改るらんといへり下に「都までひゞきかよへる唐琴は波の緒すげて風ぞひきける」といへるも同じ唐琴といふ所を唐の琴によせて下をも其詞にていへり

いがゞさき　かれみのおほきみ

こはたしかならず崎は山崎岡崎など水邊ならでもいふ河内茨田郡に伊香の郷在近江に伊香郡在又蜻蛉日記に石山に參りて舟にてかへるとていかゞさき山吹の崎など云所を盧の中よりこぎゆくといへり是によれば近江の打出の濱より勢田田上あたりまでの内にいがゞさき山吹の崎と云も在しなるべし萬葉に近江の伊香郡のいかご山をよめる歌有語のかよひて聞ゆればそこにやとも思へど或人は蜻蛉の日記に打まかせていへり清少納言の草子に崎はからさきいがゞ崎此外にも彼是見ゆれど何處にも在ところと見えてさだかならず【源氏常夏の卷に「草わかみひたちの海のいがゞさきいかであひみんたごのうら波」高光集にたむの峯にすむ頃あさみつの大納言枇杷の北の方わづらひたまふ祈りせよとのたまふに「昔より聞ならしこしいがゞさきあさからじとをおもひなされん」是もいづこにやさだめがたし】

かぢにあたる波のしづくな春なればいかゞさきちる花と見ざらむ

浪はさく花玄づくはちる花と見なせり

からさき　阿保のつれみ

阿保氏は伊賀國阿保の郷より出たる事續日本紀延曆三年に見えたり經見は延喜六年日本紀竟讖の歌の作者の中に見えたり

かのかたにいつからささにわたりけむなみぢは跡もこらざりけり

二の句にかくせりさて彼方とはすべて所をおきてかなたの事を云こゝは江にても河にても向ひの方を云さて彼方にはいつか渡つらん浪には跡もなきといへり

伊勢

涙の花おきからさきに散くめり水の春とは風やなるらむ

風吹て立波は花と見ゆるが此花はいつの時よりさきそめて今散くるぞや思ふに水の春とは風のなりてかく花の咲散らんといへり水の春てふ詞秋の歌に「もみぢばの流ざりせば龍田川水の秋をば誰か玄らまし」とよめるに同じ

風やなるらんてふ詞いぶかし今の本に成らんと有成の字はなすらんと有しを眞名に成らんと書なせしより又なるとはうつしなせしものか水の春とは風やなすらんにて心詞ともによく聞ゆるなるべし

かみや川　つらゆき

是は北野と平野の間を流るゝ川なりいにしへこゝにて紙をすかせ給へり拾芥抄に紙屋院圖書別所在二野宮東一と云て圖書寮は書物を司どる故に紙すく所をもかぬ知

るなり

ぬばたまの我黒かみやかはるらんかゞみのかげに見ゆるしらゆき

【二三句にかくせり】歌は明らかなり是を拾遺集に玄はすのつごもりがたに年の老ぬる事をなげきてとて二三の句は我黒髪にとしくれてとあるはもし家の集などに二様に書てありしにや後撰にも「ふりそめて友待宵はぬば玉の我黒髪のかはるなりけり」又家の集にも此こころなるあり

よど河

足引の山べになれば白雲のいかにせよとかはるゝ時なき

四五の句にわたりてかくせり歌は山住のさまなり

かた野　たゞみれ

河内の交野郡山城の境也

夏くさのうへはしげれるぬま水のゆくかたのなき我こゝろかな

四の句にかくせり心ゆくとは思ふまゝに心のゆくをいふなり其ゆくかたなきは萬を心にまかせぬなりさて沼池などは流れぬ物なるをもてゆくかたのなきとはいへり【萬葉に水たまる池ともよめり】

かつらの宮

今昔物語に五條西ノ洞院にかつらの宮と申人おはします其前に大なるかつらの木有故になづけまゐらせたるなり云々こゝの事なるべし

源のほどこす

施は揚之子也といへり源氏にして一字名なるが嵯峨源氏と云

秋くれど月のかつらのみやはなゑ光なる花とちらすばかりを

二三の句にかくせり秋は月の桂の光の花の如くちるばかりよ花さくとみれど子はならぬといへり月の桂とは月の中に木の如くなる物のみゆるを漢文にも月桂といひなせり其桂と云より子といひ花といふは歌のいひなしなりばかりをはゞかりよと云に同じ

百和香　よみ人しらず

和名抄神傳ニ云淮南王張錦繡之帳ニ燔ニ百和香ニ漢武内傳云武帝好ニ長生之術ニ求ル道七月七日帝ニ宮掖之内ニ設ニ座殿上ニ紫羅席ル庭燔ニ百和香ニ云々から國の書有し香也こゝにも傳へ來しなるべし後世此香の傳をいろ〳〵いへどさだかに傳はれりとも見えず

花ごとにあかずちらしゝ風なればいくそばく我うしとかは思ふ

三四の句にかくせりいくそばくと云かぎりもなく憂と思ふと云にて【幾十許にて數のかぎりなきなり】此かは、例の打かへして聞とはたがへり此類も作例有ちらしては今レ散也

すみながし　しげはる

紙に墨を流して文なせるなり今も有物なり

春がすみなかしかよひ路なかりせば秋くる鴈はかへらざらまし

霞の中に通路の有なしを云は歌のあやなり雲のかよひぢなど云に同じ中しのしは助語なりされば是は中しものもをはぶきて云が如し

おき火

炭をおこしたる火なりはぶきておきとのみもいふ

みやこのよし香

此氏は本桑原公秋成之子弘仁十三年奏して都氏となりし事文德實錄に見えたり此人はじめは都ノ宿禰言道といひしを良香と改たり其後又朝臣の姓を賜へり元慶三年二月文章博士從五位下兼大内記行越前ノ權ノ介都ノ朝臣良香卒と見えたり

ながれ出るかたゞに見えぬ涙川おきひむときや底はしられむ

いとせめてかなしき時は涙の流るゝを河にたとへて此河は流出る方だに見えずもし沖の方まで干ん時や底は見えつらんとなり河には沖と云事うたがふ人も有べし萬葉によしの、川の沖になづさふとよめるなりおきは奥の字の意にて海河をわかず遠く深き所をいふなり

ちまき　大江千里

粽は飯を青き眞菰草にてつゝみ黄絲をもてまく事大膳式に見えたりから國にては五色の糸もてまく由なり拾遺集に五月五日ちひさきかざりちまきを山すげの籠に入て【山菅は今りうのひげとて根は麥門冬と云物のなるなり此葉をもて組つくりて籠にせしなるべし】「心ざし深きみぎはにかるこもはちとせのさ月いつかわすれん」と有も同じかるべけれど是はことにちひさくや作りけんかざり粽といふはから國にならひて五色の糸もて卷ぬらんかし又眞名伊勢物語に粧燕尾と書てかざりちまきとよまれたるを思ふに今の如く眞菰の葉の末をそろへて打ひらめたるを燕の尾に見なしたる物にやちまきと云名は本は蔣につゝみて上を茅もてまきたる故に云歟

のちまさのおくれておふる苗なればあだにはならぬたのみとぞきく

初の句にかくせりさて種をおそく蒔と云のみにてもあらず是は種の生そこなへる所には二度蒔を云なるべしと或人いへり其は後れて生る事本よりなり其もあだに

おろそかにはなしがたき田の子とぞいふをきけるとなりさておそく物をはじむるもつひにはほど〳〵の事はなるものぞと教ふる意成べし

はなはじめ。るなはてにて。ながめをかけて。時の歌よめと。

人のいひければ。よめる

春をはじめ終にしてながめと云詞を歌の中に云かけてさて今の時のうたをよめと云此ながめは春の長雨の事なるべし

僧正聖寶

聖寶は寛平二年に貞觀寺の座主となり延喜二年僧正位となる同九年七月に卒す弘法大師三世目の眞言宗なり或説に此集撰まれし時はまだ僧正になられずと云はあやまれり此僧正の歌後撰に今一首ありされど此詞書にては歌よみとこそ見えたれ

花のなかめにあくやとてわけゆけばこゝろぞともにちりぬべらなる

散がたなる花の中をわけゆくによめり

古今和歌集打聽卷第十終

古今和歌集卷第十一打聽

戀歌一

萬葉には男女の相思ふ事のみならず親子兄弟朋友の相思ふを作るにも俱に相聞と題して部を分てり戀と云て男女の中のみの歌とするは此集が始也然部を立るには雜の歌ぞ多かるべきをたゞ二卷とし戀を五卷とするは故有など云もあれどさる心ばへ序にも書れず但戀にはよき歌多き故五卷となれると思へから國にても上代には戀の歌多かりしなり其後人の心に表裏の出來てよりかくしていはぬをよしとす仍てかしこは代々治らざるなりこのことわりを辨へぬ人は戀をばたはれ事とのみ心得て信實のかぎりなる事を云らぬなり【戀の歌萬葉にも此集にも專多きなりそれぞ人の心のまことなれば云か有べき事なりから國の事をなま〳〵に聞ならへる人は戀といへば男だましひもなき物にいひかくせりいにしへは人の心をよくして表のみをよくする事はなかりしなりかくせば必あしき心ぐせのつきなす物なりよて此戀の歌の多きはいにしへ人の心の猶殘れるなりと知るべし

題しらず　　よみ人しらず

郭公なくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀もするかな

時鳥は五月をむねとなく故に鳴や五月といへり【萬葉の長歌に「時鳥なくやさ月のあやめぐさよもぎかづらぎ」とよめる詞をとりたるなり】此やはよに通はして見よ然歌はあやめも知ぬと云ん序にいへりあやめも知ぬとは本は紺の文より云あやなきとは何事にもわかちなきを云めとは物の分ちめ限りめなど云めに同じ此歌戀の始に出せるを思ふにまだ見もせず聞も定めぬ人を戀るなり次の音にのみ聞くと云をむかへて知らるゝなり

素性法師

おとにのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへずけぬべし

音にのみ聞たる人に夜はいもねず晝も思ひにたへずして身も消うせぬべしと云事を菊の露によそへたり大方は思ひのひを火にとりなしてよめるを是は露にむかへていへば目にとりなして云ならん六帖に此歌たへずけぬべしと見えたりあへずたへず同義なるを知べし是は堪こらへずの意なり

紀貫之

よしの河岩波たかく行水のはやくぞ人をおもひそめてし

上はゝやくといはんの序なり或人云此歌六帖に年へて云といへる題に載たればはやくをはやくよりとは誰も心得たるなりされど上の歌に次で出せる心知べからず又上は序ながら岩波高く川水とはいたりて早きといはんためなり然れば聞ても見ても即思ひそむるなり此集は歌をつらぬ載たる樣によりて心得るに年經て云とは云かるべからずされどはやくてふ詞は舊くよりてふ事に用ひたり亦てしと云詞も過さりし事なればこゝの集めざまを考るに始なるは何のわかちも思ひさだめぬほどをいひ其次は音に聞てより戀る間をいひ此歌は年經たるにもせよ其おもひ初し時をいへば是又初戀に次此次なるは媒を求めていひよらんずる事其次には音にのみ聞てとしを經ると云をついでたりといへり

藤原のかちおん

まら涙のあとなきかたに行舟も風ぞたよりのまろべなりける

風を媒になずらへて中立をもてまだ云らぬ人にいひ初るを似げなき事に思ひ跡そなき波の上をも風を云るべにして舟の行如くまだ云らぬ人なりともしるべあるからいひよるぞといひつかはす成べし

在原元方

おとは山音に聞つゝあふさかの關のこなたにとしをふるかな

音羽山は逢坂の西南につゞきて關より西は山科なりされば山しなの音羽山ともよめり歌は音にのみ聞てあはで年經ると云心をそこの地名ふたつあはせてよみたるなり

たちかへりあはれとぞ思ふよそにても人にこゝろをおきつしら波

是はまださだかに見もせぬ人を戀るなり然ばよそながらのみ人の上に心をおきて有は中々に面白きこゝちすると云り本より逢みるを願はぬにはあらねどそれはいとかたき事なればせめてかく餘所ながらに思ふもをかしきぞかしとなりさて立かへりとは波によせていへり人に心をおくとは其戀人の上に心を思ひおくなり

つらゆき

よのなかはかくこそありけれ吹風のめにみぬ人もこひしかりけり

吹風の如く音にのみ聞てまだ見ぬ人を戀るとなりなべて世はかくこそ有けれと心にくき物にいへり【萬葉の長歌に「吹風のみえぬが如く行水のかへらぬごとく」とよめるをとれるなり】

右近の馬場のひをりの日。むかひに立たりける車のしたすだれより。女のかほのほのかに見へければ。よみてつかはしける

右近ノ馬場は一條より大宮の方を云それより東の方は左近ノ馬場なりひをりの日とは騎射の日の事なり【ひをりの日の事いせ物語古意に委しく論ぜり此事天下第一の難義なりとて袖中抄の始にも上て論ぜられたり】車のした簾は車簾の下に帷幕の如くしてかけたる物なり

在原業平朝臣

みすりあらずみもせぬ人の戀しくばあやなくけふやながめくらさん

見るにてもなく見ぬにてもなきにてほのかなる事を巧にいへりあやなくは上にも云俗にわけもなく差別もなしなど云に同じながめは物思ひをる時のさまなりたゞ打見る事にはあらず

歌の心を聞もらしたり見ぬにもあらず又見るともなくはつかに見し人をかく戀しめば何のわきなき物思ひして物見にとて出しけふの日をむなしくゝらすにこそあれとてほのかなりしが心にしみておぼゆるといひおくりしなり

かへし

志るしらぬ何かあやなくわきていはむおもひのみこそしるべなりけれ

是は前の歌をうけていへり見ずもあらずは知るなり見もせぬは云らぬなりたゞ思ひこそ云るべにてあれまめやかに深く思ふ心だにあらば云るしらぬにもよらず逢時も有べしと云心を何のあやなくわけていはんとよめるなり

春日野のまつりにまかれりける時に。物見に出たりける女のもとに。家なたづねてつかはしける

にぶの忠岑

春日野ノ祭延喜式に春二月冬十二月並上申日祭之と有是は歌によるに春の祭なり

かすが野の雪まをわけておひ出くる草のはつかに見えし君はも

上の句は序なりはつかはゝつ〳〵と云に同じはものもはそへたる言にて君者といふに猶心をこめたるなり此類古歌に多し

人の花つみしける所にまかりて。そこなりける人のもとに。

つらゆき

よみてつかはしける

山櫻かすみのまよりほのかにも見てし人こそこひしかりけれ

花摘の事春の卷にいへり此山櫻をたとへ云事さなくとも有べけれど飼書に花つみしけるとあるに霞のまよりなど云おもしろくつゞきたり

題しらず

もとかた

たよりにもあらぬ思ひのあやしさは心を人につくるなりけり

文にも何物にも便を得て人に付るを是は我思も便なき物にはあらぬをあやしく心を人に付るとなり

初鴈のはつかに聲を聞しより中空にのみ物を思ふかな

中空に物思ふとは鴈の鳴わたる空よりいひよせて心のうきたちて物おもふとなり

凡河内躬恒

逢ことは雲井はるかに鳴神のおとに聞つゝこひわたるかな

是はまだ逢事なくて音にのみ聞なりはるかになるとうけたる詞にあらず杳に音に聞つゝにて逢なん事は雲井の如くはるかにしていつとも志らぬとなりさて其人の名は高く音に聞つゝ戀わたるとなり

よみ人知らず

かた糸をこなたかなたによりかけてあはずば何を玉の緒にせん

より合せぬを片糸と云それはよわき物なれば萬葉に「片糸もてぬきたる玉の緒をよわみ亂やしなん人の志るべく」とよめり逢みぬほどはこなたもかなたも片糸の如なればこなたのみよりかくるやうに思ひてもかひなしかなたよりも相思ひてあはずば何を命にしてなが

らへんと云心を命も玉の緒といへばたとへの玉の緒にそへていへり

ゆふぐれは雲のはたてに物ぞおもふあまつ空なる人をこふとて

新撰和歌集には初の句夕されば奥儀抄袖中抄には末の句人戀る身は

はたては旗手なり其旗手の立横の如く物を思ふと云を雲の旗手と云かけしより天津空といひし物ぞさてあまつ空は未だよそ人にして心もなきをいふなり【萬葉にわたづみの空はた雲に入日さしとよむも夕日になびく雲を旗に見たてしなり】

かりごものおもひみだれて我こふと妹さるらめや人しつげずば

苅たる藺は亂るゝ物なれば思亂とつゞけたり我かく思亂て戀るとは人の告ずば妹は知らじ物をとなり

つれもなき人をやねたく白露のおくとはなげきぬとほしのばんねたくは妬ましきなりおくとは、起るとてはなりぬとは、寢るとてはなりなげきは長き息にてあゝと長嘆するなりそれはうれしきにも悲しきにもなげく聲なりここにては悲しきに云ふのばんは古くは云たふ事に云が多しこゝも其意なり亦物を堪忍ぶにもいへり

ちはやぶる加茂のやしろのゆふだすきひと日も君をかけぬ日はなし

顯注に神の社のと有清女が枕の草子に見る物臨時の祭の下に「陪從の品おくれたる柳の下がさねにかざしの山吹おもなくみゆれども扇いとたかくならしつゝ加茂の社のゆふだすきとうたひたるはいとをかし云々」かかれば此歌をうたふ成べし【密勘ニ神加茂兩説歟用ニ加茂之説ニ云々拾遺に「ちはやぶるかもの河べの藤波のかけてわすれゝ時のなきかも」こゝの歌をとりたるなるべし】さては神の社にあらぬかゆふだすき木綿を禪にするを云神官等が常にする事なればかけぬ日はなしといはん序にいへりかくるは心にかくるなり

我戀ほむなしき空にみちぬらし思ひやれどもゆくかたもなし

思ひやるはいにしへは皆思ひを過しやる意なり【おもひやる漢字に遣情遣悶等の義なり】後の歌によむはおもひはかるやうの事にいへりこゝも思ひを過しやる意なりむなしき空にといへどたゞ天にみちぬらしと云なり

駿河なるたごのうら浪たゝぬ日はあれども君をこひぬ日はなし

萬葉に「から泊の此浦波のたゝぬ日はあれども妹を戀ぬ日はなし」と有歌を少かへたるのみ此集には入べくもあらず猶此たぐひ見ゆ歌の心はあきらかなり

ゆふづく日さすやなかべの松の葉のいつともしらぬ戀もするかな

今の本に夕月夜とあれど一本に夕附日と有をよしとす夕つく日は岡方の景を云なり岡べはことに朝夕に日のさす所なり歌は松を待にとりなして待心よりいつともわかぬと云にて上は序なり

あし引の山した水のこがくれてたぎつこころをせきぞかねつる

紀氏新撰に山した水のうづもれて上は人云れぬたとへなり下は心に涌かへり沸る如く思ふによりて堰かぬるなり萬葉に「ことに出ていはゞゆゆしみ山河の瀧つ心をせきぞかねつる」と云を下の句はまたくとりていへるなりさて此歌後撰には女のもとにつかはしけるよしのぶの朝臣と有てかへしよみ人云らず「木がくれてたぎつ山水いづれかはめにしもみゆる音にこそきけ」とみえたり

よしの川岩きりとほしゆく水のおとにはたてじ戀はしぬとも

岩間推流るゝを岩切とほしと云なり水勢のつよきをいはんとてなりさて切なる思ひの忍びがたきたとへなり

瀧つ瀬の中にもよどはありてふなど我戀の淵瀬ともなき此淀とは淵の靜なる所をいへり我戀は常に思ひたぎりてよどむ時なくさわがるゝにたとへて瀧つせだにもよと瀬はあるにといへり上に瀧つ瀬と云て下にたぎる心をもたせたり

山たかみしたゆく水のまたにのみながれてこひん・こひはしぬとも

或人云山高み下行水とは深く思ふたとへなり以上四首水による戀の類なり是より下此卷の中に忍ぶ心をよめるは戀る人ひとりにいはじと忍ぶなり後の卷なるは世の人に忍ぶなりと

おもひ出るときはの山の岩つゝじいはねばこそあれこひしきものを

此題のつゞき夏にも見えたりいはねばといはん爲の序なり

人まれずおしへばくるしくれなゐの末つむ花のいろにちらんん

人知れずは我思ふ人に云られずなり紅の花は末より咲初るを摘とる故に末つむ花といへりと誰もことわれど思ふにたゞ輪の末少づゝ咲たるを摘物なれば云なるべし萬葉に「よそにのみ見つゝやこひん紅の末つむ花のかたにいづとも」とあり是を少しかへしのみ

秋の、の尾花にまじり咲花のいろにやこひんあふよしをなみ

尾花に交り咲は萬葉に「秋芽子の花野の薄穂には出ず我戀わたるこもり妻はも」此歌によれば萩かと云人あれど萩をみなべしの類いづれにても有ぬべし亦くさ

ぐさの花なりといひりんどうならんといふすべて序歌はさまゞのけしきをかりてよめる例なれば何の花とさゝでもやみぬべし色にやこひんは色に出てや戀んなり忍びにて逢よしのなければ今は色に出てあらはにこひんにとよめる成べし

我その〻梅のほつえに鶯のねになきぬべき戀もするかな

是は高く音にあらはれて泣ぬべくなりぬの心なりほづえは上枝を云ゑづえは下枝を云日本紀應神天皇の御歌に「かぐはし花橘ゑづえは人皆とりほづえは鳥居がらし」とよめり

あしびきの山鄙公我ごとや君にこひつゝいねがてにする

我如やいねがたくするなり萬葉に「朝ゐでにきなくかほ鳥汝だにも君にこふれや時を經ず鳴」六帖に「我如く君に戀れや鄙公此夜すがらをいねがてにする。

夏なれば宿にふすぶる蚊やり火のいつまで我身たもえにせん

此夏なれば〻夏されば誤りしか亦六帖に夏くればとあり云かにもあらんか夏はふすぶるかやり火の如くいつまで心のうちに思ひ燃つゝをらんと云なり【拾遺に「かやり火は物おもふ人の心かも夏のよすがら下にもゆらん」曾丹集に「蚊やり火のさよ更がたの云たこがれくるしや我身人しれずのみ】萬葉に「足引の山田もるをぢがおくかびの下こがれのみ我こひをらく。

戀せじと御手洗川にせしみそぎ神はうけずぞ成にけらしも

御たらし河神山より流出て加茂の御社貴船片岡の森の内より通れる小河なりといへり歌の心は或人の人はつれなく我思ひは苦しきにわびて今は戀せじと祓しているのるにそれをだに神はうけず成にければにや猶人の戀しきはとなり【萬葉に「いかにしてわする〻物ぞあめつちの神をいのれど我おもひます」「天つちの神をも我はいのりてき戀とふものはすべてやまずけり」是らの心に同じければまたく是をやとりたらん六帖に「つらき人わすれなんとてはらふればみそぐかひなく戀こそまされ」是は今をとりたるなり】本は逢事を祈るよりおこれりみそぎは身そゝぎと云義なり祓せんとて先身をばそゝぎ清むるなり仍て身禊と祓除は二つの事なるを後にはみそぎとのみも祓除の事にいへり猶いせ物語の古意に委しくいへり

あはれてふことだになくば何をかも戀のみだれのつかれ緒にせん

あはれは上にもいへりあゝと長嘆するなりなげきしたればとて物思ひのうするにはあらねど云ばし思ひをやるに似たれば束麻にすると云あながちつかぬ麻にするにはあらねどいと愚かげに云にて歌の心深く聞ゆるなり或説に人のあはれとだにもいはずば何をか亂たる戀を〻さめてつかぬ麻にせんとなりさにては此篇次の心にもたがひたりあはれと人のいひ侍るにより戀のつかぬ苧と成たりといはゞはやく逢て物思ひもなきなりさる部立にはあらぬをもておもへ

おもふには忍ぶることぞまけにける色には出しと思ひしものを

是は人を思ふ心と堪忍ぶ心とあらそふ時は思ふ心のつよくて堪しのぶ方はまけたるなり

我戀は人しるらめやおき妙の枕のみこそあらばしるらめ

人知るらめやは深く忍べば人云らじの心なりしきたへは夜の物に冠らする辭なり

あさぢふのをの〻しの原おのづから人知るらめやいふ人なしに

淺茅生は小野といはん冠辭なり云のぶといはんとて篠原と云さて此云のぶは戀したふにていかほど戀したふとも我思ふほどを云人無しに云るらめやとなり

人しれぬ思ひやなぞとあしがきのまぢかけれどもあふよしのなき

蘆垣の間ぢかけれども顯注は蘆の細きをこまかに組て間なければひまなしとも間ぢかきともよめるにこそといへり【萬葉にあし垣のふりにし里あし垣の思みだれ蘆がきの末かき分てなど云は蘆もてゆひたる垣のわびしきさまをいふなり】或人はたゞ蘆垣の一重へだて〻住身なれ共と云にや萬葉に「うつせみの人めを云げみいは橋のまぢかき君に戀わたるかも」とよめるに同意なり又思ひやなぞとはたゞ思ひやぞなりと〻云辭はいはれぬやうなれど辭の助におきたるなり古歌は足ぬ所には加へ又多ければ〻ぶきても言なりと此説よろし

六帖には思ひや何ぞとあるにてもとは助語なるを云

らる又一本になぞもと云にてもおもふべし

おもふともこふともあはんものなれやゆふ手もたゆくとくるした紐

是は女の歌なるべし今は思ふとも戀ともあはれじ物をと我のみうらぶれをるに人は戀らんさまに我した紐のいたづらに度々解るがなまなかに悔しとなり人に思はるれば下紐のとくるといふ諺よりいへり【萬葉に「君こふとうらぶれをればくやしくも我下紐のゆふ手もただに】

いで我を人なとがめそ大船のゆたのたゆたに物思ふ比ぞ

いでは日本紀に厭乞と書萬葉にも乞の字のみを書りたとへば我心得たる事を云らぬ顔にて在に人のおどろか

したる時いで物見せんなど云類なりさらば發語にて物をおこし乞詞なりとがめそはとがめ給ふなにてあやしむなゝど云ほどの事なりゆたのたゆたは舟の浪にゆらるゝ如くゆられたゞよふ事なりゆたはゆられの略なりとおぼゆ【萬葉に「大舟のはつる泊りのたゆたひに物思ひやせぬ人の子故に」大船のたゆたひみればなどあまた見えたり】歌の意は次の歌にも心ひとつをさだめかねつるといひ上には人のおもふとも戀ともといひてとかくにつく方なく物思ふ篇なり

伊勢の海に釣するあまのうけなれやこゝろひとつをさだめかねつる

萬葉に「住の江の津守網引のうけの緒のうかれやゆかん戀つゝあらずば」六帖に「玉くしげ明方になる秋の夜は心ひとつをさだめかねつる」歌の心是らをあはせて明らかなりうけは水にたゞよひて所さだめぬ物故にたとへていへり【和名抄に泛子うけとよめり】

いせの海の蜑のたく縄打はへてくるしとのみや思ひわたらむ

一本つり縄と有はおぼつかなし萬葉以來釣縄と云詞なしたく縄は萬葉に栲縄と書りたくはたへとも云て楮と云木なり今はかうぞと呼て紙にすく物なりいにしへは其木の皮にて布を織且縄などにもせしなり網などの縄には今もゝちふとなりすなはち其縄をたく縄といへり打はへては打延てと云が如しさてくりよする物故にくるしといはんとて上はいへるなり

涙河なにみなかみをたづねけん物思ふ時のわが身なりけり

涙川伊勢に在といへど其地名にはあらず物思ふ時の我身に涙川の水上はあればあながちは尋るにおよばずと涙の多き身なればいふなり

或人もろこしの張寒事が河源をきはめんとて天にいたりし事をもよせてよめるなりといへり

たれしあれば岩にも松はおひにけり戀をしこひばあはざらめかも

戀をしこひばゝ戀にしこひばとも云如くいとなりがたきも玄ひて猶こはゞと云なり生がたき岩ほにも種さへあれば松はおふ物なれば玄ひてこはゝ逢ぬ事もあるまじきと今はよわりもてゆく心をみづからはげましなぐさむるなり

あさなさなたつ河霧の空にのみうきておもひのある世なりけめ

空に浮てといはんとて上は翌たり歌は明らかなり【朝朝あさなさなとゝなふ】

わすらるゝ時しなければあしたづの思ひみだれてねをのみぞなく

是も音をのみ泣といふに上は云出たれど鶴には亂るとは戀しきに命をかふるものならばしにはやすくぞあるべかりける

是は戀しさのくるしきに命をかへばをしき物は命なれど死やすからんと思ふなりといたう戀のくるしきを云なり或說に逢る戀かと心得しはあやまりなり【萬葉に「中〳〵にしなばやすけん出る日の入わきしらぬ我しくるしも」是をおもひ合すべし】

人の身もならはし物をあはずしていさゝらみんこひやしぬるとならはし物は俗にならはしからと云事なり【元眞集心をぞならはし物と云なれど片時の間もえやは忘るゝ】

さて心は人の身もならはしからの物なれば我思ふ人に逢ずしてあらば戀死するやいざ試んとなり

忍ぶればくるしき物を人しれず思ふてふ事誰にかたらん

忍べばくるしと有ても心に思ふと云事を誰かゝたらんとなげくなりいせ物語に思ふ事いはでぞたゞにやみぬべき我にひとしき人しなければと云るを思ひあはすべし

こむ世にもはやなりなんめのまへにつれなき人をむかしと思はん

來ん世は我知ぬ來世なりはやは疾くなりなゝんはなりねなど云に同じなりねを約めてなれと云

つれもなき人をこふとて山彦のこたへするまでなげきつるかな

云詞有【鶴とのみ書てもたづとよむを後に田鶴と書はわろし】萬葉と赤人の「朝露にたづは亂れてゆふ暮にかはづはさわぐ見るごとに音のみしなかゆ昔思へば」とあるも鶴の亂るゝと云詞よりよめるなり

からころも日もゆふぐれになる時はかへすがへすぞ人はこひしき

から衣紐ゆふとかけて日も夕暮とつゞけたり萬葉にいつとても戀ぬ時とはなけれどもゆふかたまけて戀はすべなし此歌の心なり

よひ〳〵に枕さだめんかたもなしいかに寢し夜か夢に見えけむ

新撰和歌集こひ〳〵てとあり

よひ〳〵は夜々の事なり枕さだめんとはふしまろびいぬかへりて伏も定ぬを云萬葉に「敷妙の枕うごきていねられず物思ふこよひはや明んかも」此枕うごきてと云に同じ【萬葉に「敷たへの枕うごきてよるもねずおもふ人には後あはんかも」後撰に「夕されば我身のみこそかなしけれいづれの方に枕定めん」小町集「はかなくも枕さだめずあかすかな夢がたりせし人をまつとて】思ひのいやまさるまゝに今はよる〳〵に枕も定ぬを我思ふ人を夢に見し事の有しはいつのいかに寢し夜の事にてかありけんとおぼめくなり

山彦は今の俗にこだまと云なりなげきつるかな今の人は歎する哉とよむべきなりつるは過去の詞にてつひにかひなきうへにていへるなり

歌の心思ひあまりて歎きつるが山彦のこたふるばかりなる哉と打恨たるなり新撰萬葉には人を待とて山彦の音のするまで

ゆく水に數かくよりもはかなきはおもはぬ人を思ふなりけり

【いせ物語は此歌をとりてあやなせり】水の上に物を書ばかくまゝに消れば、かなき事の限ながら夫よりも思はぬ人を思ふがはかなしと也萬葉に「行水に數書如き我命妹にあはんとうけひつるかも」とよめるにて思へさて是は涅槃經に是身無レ常念々不レ住猶如二電光暴水幻炎一亦如レ畫レ水隨レ畫隨レ合此意をとれるなるべし

人をおもふ心は吾にあられねばや身のまどふだにあられざるらむ

我にあらねば順集に「誰がために君を戀らん戀わびて我はわれにもあらずなりゆく」此我は我にもあらずと云に同じまどふはまよふに同じ

歌の心なべて人は身を思ふがならひなるにそれをもわすれてまどふは我にもあらぬ物思ひの故なりとよめり

思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢路にあふ人のなき

おのずから我思ふ人との中の遠くや成ぬらんと云心なるべし其人の方を思ひやるにはるけく成ける故にや夢路にまどへど其人に逢ぬをと歎きたるなり

夢のうちにあひみんことなたのみつゝくらせなよひの袖むかたもなし

いとせめて夢をのみ頼みつゝ思ひ寐にねなんと思へば其事をのみ亦おもひていねられずとなり

戀しれとするわざならしぬば玉の夜るはすがらに夢にみえつゝ

現のごとくつれなくはあらで夢によもすがら見ゆるはなまなかに心にかけてやあらんそれは戀死せよとてするにやあるらしとなり萬葉に「戀しなばこひもしねとや玉鉾の道行人にこともつげゝん」六帖に「戀しねとするわざならし玉章の使も見えず成ゆくみれば」此歌は使さへも見えずなりゆく故に戀しねとするわざにやといひ今のはつれなき人の夜もすがら夢に見ゆる故に戀しねとするわざにやといへり

なみだ川枕ながるゝうきねには夢もさだかにみえずぞありける

物思ふ故にいもねられねばさだかに人をみぬと云事を波の浮寐の旅の泊によせていへり萬葉に「しきたへの枕をくゞる涙にぞ浮ねをしける戀の左げきに。

戀すれば吾身は影となりにけりさりとて人にそはぬものゆゑ

我身は戀に思ひわすらで影の如にやせおとろへたりさらば影は人にそふ物なれば我思も人にそふべきをそれはえそはぬ物ながら影とのみ成しとなり此もの故は物ながらの義なり【つらゆき集に「身にそへる影とゐなしに何しかも外にわびしき人となりけん】

新撰萬葉には二三の句我身ぞ影となりにけるとあり

かゞり火にあらぬ我身のなぞもかくなみだの川に浮てもゆらむ

是は鵜川の篝火みて河にもゆれ我思ひも何とて涙の川にもゆらんとなり【拾遺「まだしらぬ思ひにもゆる我身かなさるは涙の川の中にて】なぞもかくはなぞとゝがめて如斯といへり後撰には此歌女につかはしけるよみ人をらずかゞり火にあらぬ思ひのいかなればと有浮てと有には此身と有がよく聞ゆたゞ身のもゆるとは聞えがたきやうなれど但に思ひを兼て身と云なり河に浮物は身なりもゆる物は思ひなる事おのづから含むべし

かゞり火の影となる身のわびしきは流て下にもゆるなりけり

是は亦篝火の影の水底にみゆるを我身の影の如く成たるにいひよせたり流ては水の流るゝと我世にながらへをるとに添ていへり下に燃るは水底をいひて心の中に思ひやるなり心の中に思ふを下におもふと云はあまたよめり

はやき瀬に見るめおひせば我袖のなみだの川に植ましものを

早瀬にも海松の生る物ならば我袖の涙の川にも植んものをと海松を我思ふ人に逢みるをかねていへり或人は海松は海にこそ生れ河にはいかで生んといぶかしむ人も有べしあひみるを海によせて云も歌のならひなれば海川のたがひまでを云べくもなし水に生るも有て水松とも書ば似つきたる所によめるなりと云說はよろしさて六帖には五の句植て見ましをとありて貫之の歌なり

おきへにもよらぬ玉藻の濱のうへにみだれてのみやこひわたるらむ

おきへにも沖にも邊にもなりおきは奥と云にて海の深く遠き所を云邊とはへたともいひて海ばたなり世俗に海べたと云へはゝたの事なりほとりと云にも通ず【神代紀天孫の御歌沖つ藻は邊にはよれども萬葉に「沖に行へにゆき今は妹が爲我すなどれる藻ぶしつか鮒】

歌の心中々にえ思ひやまで沖にも邊にもつかぬ玉藻の如く打亂てのみや戀わたらんと月日を經つゝなげくなり

蘆鴨のさわぐ入江のしら濱のしらずや人をかくこひんとは

上は云らずやといひかくる爲のみにして人を如斯こひんとは知らざりつるとよめるなり云らずやは疑のやにあらずよにかよひてみづからなげく詞なり【鴨は蘆邊に住物故蘆鴨と云說はいかゞあるべき】

萬葉に「あしたづのさわぐ入江の白菅の云られんためとこちためるかも」と讀るを少し心をかへたる也

人しれぬおもひおもひを常に駿河なるふじの山こそ我身なりけれ

ふじの山こそ我身なれとは思ひの火の常に燃ればとなりもゆるとはいはねど彼山のもゆる事人あまねく知るにまかせたり或人は不二の山は烟たちてもゆといへどたゞ火の如くあらはに見えぬによそへたりといへりふじの山も烟たゝずと云其比ならばさも有ぬべし

とぶ鳥の澄も聞えぬ奥山のふかきこゝろを人はしらなむ

云らなんは前にいへる如く云らなもにてかく深く思ふ心をおのづから人は云れとなり

相坂のゆふづけ鳥も我ごとく人やこひしきねのみ鳴らむ

ゆふづけ鳥の事世に云說共古書により所なければ用ひがたし祈年祭に白馬白猪白鷄を供る事の山みゆれば神に白鷄をさゝぐるにつけて白鷄をゆふづけ鳥とも云歟亦何にても神にそなふるには木綿をつくれば誰がみそぎゆふづけ鳥かなどもよめる類ひならんか相坂にあるは神にそなふるにあらず關には曉を告る鷄をおくべきなりされどゆふづけ鷄をおくと云より所なしいひなれたる詞によりて此歌にはたゞ鷄の事に云たるならん歌の意明らかなり

あふ坂の關にながるゝいはし水いはで心におもひこそすれ

歌の心あきらかなり六帖には下の句いはでしもこそ戀しかりけれと有

浮くさのうへはしげれる淵なれや深きこゝろをしる人のなき

續古今集に「水草ゐてありとも見えぬ沼水の下のこゝろをしる人ぞなき」心明らかなり

打わびてよばれんこゑに山彦のこたへぬ山はあらじとぞおもふ

後撰に此歌を載て詞書に返しせぬ人につかはしけると見え其かへし「山彦の聲のまに〳〵とひゆかばむなしき空にゆきやかへらん」此贈答にてよく聞えたり

こゝろがへするものにもがゝた戀ほくるしさものと人にしらせん

我心とつれなき人の心とを取かへらるゝ物ならば我片戀の苦しさをおぼし云らせんとなり心をかふると云事もろこしに公扈齊嬰といへる二人の者病有て扁鵲と云醫に治を求む二人ながら既に愈たり扁鵲云曩の病は藥石の驗あり獨生と偖なる病有てそこ達の體とゝもに長せり是をも攻め得させんとて二人に毒酒を飲しめて三日ばかり死せる間に二人が胸を割て心をとりかへて後神藥をもちひてさましめたり是は公扈と云人の志はつよけれど其氣よわし故に謀ありて是を斷めあへざりけり亦齊嬰は志は弱けれど氣力つよかりけり故に思ひはかりすくなくてすゝみがちなるをやがて心をとりかへられしかば志氣俱に均しく成にけりと云事列子と云書に見えたるを今はとり出たるなるべし

よそにしてこふれば苦しいれ紐のおなじこゝろにいざむすびてん

入紐は雌紐雄紐とて裴束の時とりあはせてさし入る物なり仍て入紐と云太刀にも入紐ありて片方を輪にしてそれへ入て結ぶなり【萬葉に「何故かむすばずあらん紐の緒の心に入てこひしき物を」六帖に「入紐のさしてきつれどから衣からくいひてもかへしつるかな】仍て同じ心にむすばんといふによそへていへり

春たてばさゆる氷のゝこりなく君がこゝろは我にとけなむ

歌の心明らけし

消る氷の如くと心得べしかくざまにのと云は如のと云心なり此よみざま古歌に多し

明たてば蟬のをりはへ鳴くらしよるはほたるのもえこそわたれ

明たてば、夜の明ればなり明發者也たつと云とおこると云と意同じをりはへは打はへに同じはへは經るなり日めもすよもすがらの歎きを云なり六帖に「晝はなき夜はもえてぞなからふる螢も蟬も我身なりけり」うつぼ物語に「なく蟬もゝゆる螢も身にしあればよる晝物ぞかなしかりける」此類によめるが多し

夏むしの身ないたづらになすこともひとつ思ひによりてなりけり

ひとつ思ひは虫と我とひとつなり思ひを火にとりなすは例の事なり仍て身をいたづらにとはいへり飛蛾とも蜀蛾とも云物なり萬葉に夏虫の火に入がごとくよめり伊勢が歌に「夏むしの思ひに入てなぞもかく我心からもえむともする」「よひのまに身を投はつる夏むしは消てや人にあふと聞らん。

ゆふされば いとゞひがたきわが袖に秋の露さへおきそはりつゝ

心明らけしそはりはそふを延たる詞なり

いつとても戀しからずはあられども秋のゆふべはあやしかりけり

此歌は小町集に入て下の句あやしかりけり秋の夕暮と見えたりあやしとは常に異なるをいへるなり【萬葉に「つるばみの ときあらひ衣あやしくもことにきほしき

此ゆふべかも】

秋の田のほにこそ人なこひざらめなどか心にわすれしもせん

ほにこそは穂にあらはるゝを云なり歌は明らけし

あきの田の穂の上へてらすいなづまの光のまにも我やわするゝ

六帖に二の句ほのうへてらす落句君ぞこひしきと有て其次にいなづまの光のまにもわすれじといひしは人のことにぞありけると云歌見ゆ或人云今の歌のかへしなどにやといな妻の光の間はまたゝくばかりのまも我やわするゝ忘れはせぬといへるなり

人めもる我かはあやな花すゝきなどかほに出てこひすしもあらむ

今は人目を忍ぶ我にもあらぬになどかほにあらはして戀ずあるとなり思ひにあまりてよめる歟又よし有てよめるならん萬葉に家持の歌「戀死なんそれもおなじぞ何しかも人め人言こちたく我せん。

あわ雪のたまればがてにくだけつゝ我物もひのしげき比かな

沫雪はあわしき雪と云事なり【萬葉に「玄はすには沫雪ふるとしらぬかも梅の花さくふゝみてあらずて」是冬の歌なり】春に限らず冬にもよめりたまればがてにたまればえ堪ずと云意なりありがてましをなど云に同じくふりたまりては其まゝにありがたき雪なればなり思ふに堪で其まゝくだくる我思ひにたとへたり

奥山のすがの葉しのぎにやる雪のけぬとかいはん戀のしげきに

此歌は萬葉と高山の菅の葉しのぎふる雪のけぬとかいはも戀のしげゝくといふをすこし詞をかへたるにて此集に入ましき歌なり今の本に菅の根とありてことわり聞えがたし葉を根にうつしあやまれるを傳へたるものかしのぎは菅の葉をおしなべおしわけて雪のふりとほるさまをいへり菅の根にては詞とゝのはず歌は上は序にて雪の消ぬるに我身の消うするよといふ意をよせていへり

古今和歌集卷第十一打聽終

古今和歌集卷第十二打聽

戀歌二

題しらず　　小野小町

思ひつゝぬればや人のみえつらむ夢と知りせばさめざらましを

思ひ〳〵して寐たればにや我思ふ人の夢に見えつらんとなり其夢なる時夢なる事を玄らば覺ざるやうにせん物をとなり【莊子云方二其夢一也不レ知二其夢一也夢之中又占二其夢一焉覺而後知二其夢一云々今と相かなへり】かくはかなげによめるをよく味ひて歌の心を玄るべし萬葉に「思ひつゝぬればかもとなぬば玉の一夜もおちず夢にし見ゆる。

うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふ物をたのみそめてき

うたゝ寐は轉寐なり俗にころび寢と云初てきはそめたりけりを約めていへるなり歌の心明らけし

いとせめて戀しき時はぬばたまのよるの衣をかへしてぞきる

いとは甚の字にあたれりせめてはせまりてなり夜の衣をかへして寐れば戀しき人の必夢にみゆると云諺あればよめるなり萬葉には袖かへすとあり「わぎも子にこひてすべなみ白妙の袖かへし、は夢に見えきや」「吾妹子に袖かへす夜の夢ならしまことの君にあへりしが如」後撰には「白露のおきてあひみぬ事よりはきぬかへしつゝ寐なんとぞ思ふ」ともよめり

秋風の身に寒ければつれもなき人をぞたのむくるゝ夜ごとに　　素性法師

秋風吹て肌さむき夜みづからの衾に心悲しく人の戀しさもまさるにつれなき人も心よわりしてかなたよりも思ふよしもやと打たのまるゝなり萬葉に「よしゑやしこはじとすれど秋風のさむく吹夜は君をしぞ思ふ」と有に大方同意なりよしゑやしはよしやよしと云に同じ【うつぼ物語に「いつとてもたのむ物から秋風の吹夕ぐれはいふかたぞなき」と云は今を取てよめるなり又重之集に「あさぢふにけさ吹風は寒くともかれゆく人を今はたのまじ」と云は今を打かへしてよめり】

まもついづも寺にて。人のわざしける日。ふんせい法師のだうしにていへりけること葉か。歌によみて。なの、小町がもとにつかはしける　　安倍清行朝臣

和名抄山城國愛宕郡出雲（以上毛在上下）拾芥抄二十一寺之中上出雲寺下出雲寺見えたり人のわざしけるは追善の法事を云玄んせい法師は上の物の名の所に出たると同人な

るべしけふの導師にていへりける詞とは其時の經文の詞なり

つゝめども袖にたまらぬ白玉は人な見ぬめの涙なりけり

法花經五百弟子品曰以二無レ價寶珠一繫二其衣裡一與レ之去云々此文講ずる時清行も小町も倶に座に在て聽聞しける故に是に事よせてよみて贈る成べし

歌の心かねて思ひよすれどまだ逢みぬ戀の歎きの涙を袖につゝみあへずも玉ならで落るぞとなり

がへし　こまち

おろかなるなみだぞ袖に玉はなす我はせきあへずたきつ瀬なれば

おろかは疎かなりそなたはおろそかなる涙なれば袖の上に玉なすばかりよ我は瀧つせなしてえもせかれとゞめずとなり

思ふに此返しは戀の心にはあらでたふとき經文の義をうけ給はりてはありがたさの涙の瀧つせなしてあるをそなたにはおろそかにや聞せたまへるとかなたのたはれごとしていひよるを聞しらぬさまにてこたふるなるべし

寛平の御時。きさいの宮の歌合の歌　藤原敏行朝臣

戀わびて打ぬるなかに行かよふ夢のたゞちはうつゝならなん

たゞちはすぐ道の意なり萬葉に直路と書るにて知べしまどひなく直に行道なり現にはかよふ事もなきに寐たるうちに逢見つゝ行かふはいとまどひなければそれがうつゝにてあれかしと云なり

新撰萬葉には行かよふをゆきかへるとしたゞちを只徑と書れしは借字にて義は直路を正字とすべし

住の江のきしによる波よるさへや夢のかよひち人めよくらん

是は波のよるを夜にいひかけて上は序なり【後撰には此詞を取てすみの江の岸の白波よる〳〵など云類のつづけあまた見えたり】畫はもとよりにて夜のまの夢にさへ思ふ方へかよふ道にも人めをよぎて苦しとなり萬葉には曲道と書てよぎみちとよめり

なのゝよしき

わが戀はみ山がくれの草なれやしげさまされどしる人のなき

我戀の繁さまされど太山がくれの草の如く云る人のなきと上はたとへたり知る人は思ふ人を指なり

新撰萬葉に落句云る人もなきとあり

紀友則

よひのまもはかなくみゆる夏虫にまどひまされる戀しする哉

よひの間にも命をつくす夏虫にまさりて今たゞに戀死べきまどひを爲るのかなとなり夏虫は燭蛾なり

新撰萬葉に夏の部に出たり六帖には落句戀にもある哉とありて夏むしの歌とす

ゆふされば螢たるよりけにもゆれどもひかり見えぬや人のつれなさ

夕になれば螢にもまさりて我思ひの燃れども光の見えねばにや我思ふ人のつれなきとなり萬葉は勝異殊等の字をけとよみてことにまされる義とす

さゝの葉におく霜よりも獨ぬる我衣でぞさえまさりける

新撰萬葉に我衣こそさえまさりけれと有て冬の歌なり今の本の方衣手と云は詞のよきに付て後にはなほされけん【衣手といへば袖の事なる事上にもいへり】我衣こそと有ぞ古意にてことわりもよろしきなり

我宿の菊のかきねにおく霜の消かへりてぞ戀しかりける

上は序にてかくれたる所なしきえかへりてはさえかへると云に同じくさえたるうへに又さゆるなり今きえかへると云もきえつゝと云も同じことわりにてきえ〳〵なるを云なり

新撰萬葉に「菊のかきほにおく霜の消かへりてもあはんとぞ思ふ」とありて冬の歌に入られたり

河の瀬になびく玉藻のみがくれて人にしられぬ戀もする哉

みがくれは水に隱るゝなりみごもりと云も水にこもれるなり歌は明らけし

にぶの忠峯

かきくらし降ふらゆきの下ぎえに消て物思ふ比にも有哉

消て物思ふは心のきえうするやうになるをよそへたり六帖に上の句はまたく同じくて戀うせぬとや人のつれなきと云が見えたり

藤原興風

君こふる涙の床にみちぬればみをつくしとぞ我はなりぬる

涙の床にみちて海をなせば我身はみをつぐしと成ぬると云て身を盡すにいひよせたりみをつぐしとは舟のかよふ所を水尾と云【みをつぐしなるを今はみをつくしとのみいへり】それに標の杭をたつるなりつは助辭にて水尾杭なり延喜式に難波津頭海中立二澪標一若有二舊標朽折一者搜求拔去云々土佐日紀にみをつぐしのもとより難波につきて河尻に入とありかゝれば難波ぞ澪標の故なるをもておのづからかぎりたる物のやうにいひ來れどいづこにても有べき物なり【萬葉に遠江いなさ細江のみをつぐしともよめり】さらば其所につきてよむべし

新撰萬葉には二の句涙の浦にとあり又一本身をつくしてぞとあるはわろし

志ぬる命いきもやすると心みに玉の緒ばかりあほんといはなむ

今はつれなきに死ぬべき命の玄ばしあひ見ばもし生もやすると試に其玄ばしがほどをもあはんといへかしと思ひくゝをれてよめるなり新撰萬葉に消ぬべき命もいくやとあり六帖には末の句あひ見てしがなとあり玉の緒ばかりは玄ばしのほど、云にいへり萬葉に「さぬらくは玉の緒ばかり戀らくはふじの高根の鳴澤の如」と云にも玄ばしの心によめり

侘ぬれば志ひてわすれんと思へども夢てふものぞ人だのめなる

今はわすれだにせばやと玄ひておもへど夢といふ物ありてなまなかに見えつるぞ其夢は人だのまれなる物にぞありけると云なり人だのめは人たのまれなるといふ事なり

或抄に云詞花集に「侘ぬれば玄ひてわすれんと思へども心よわくもおつる涙か」とあるはまたく今の歌の上の句にて下の句は下に菅野忠臣の歌に「つれなきをいまは戀じとおもへども心よわくも落る涙か」と云二首の上下をとりあはせて一首になせしなり何人の玄わざにかあらんいかにしてか撰集には入られけんといへり詞花集の事こゝには用なけれど事のついでにいはれたればこゝにあぐるなり

わりなくもれてもさめても戀しきが心をいづちやらばわすれん

新撰萬葉には「わりなくぞ寐てもさめても戀らるゝうらみをいづちやりてわすれん」とあり六帖には上の句それと同じく下の句は今とおなじ歌の心はさるべきことわりもなきまで寐ても覺ても戀しき哉其心をいづ方に思ひ放て忘れんとなり

師云うらみをと云はあやまりならんか

戀しきにわびてたましひまどひなばむなしきからの名にや立なん

今の本には名にや殘らんとあり新撰萬葉に名にや立なんとあるが聞えやすくことわりもよろし【六帖に三の句出ていなばとあり】歌の意戀しきに打わびて我魂の身にそはずまどひ出なばむなしき體にうき名やたつらんとなり殘るとても聞えぬにはあらず

紀貫之

君こふる涙しなくばから衣むねのあたりは色もえなまし

新撰萬葉には一の句人を思ふとあり【後撰に貫之「涙にもおもひのきゆる物ならばいとかくむねはこがさゞらましし」とあるは今を同じことわりをうらうへにいふなり】是は思ひに焦る、胸のあたりは火の色に成らんを涙のひまなきに思ひを打けすより色には出ずと云なりこがる、色など云も皆火より云さらばもゆる火の色に出ましをと云を色燃なましと云しなり色もゆると云もやがて火の色の名あり

題しらず

世といもにながれてぞゆく涙川冬もこほらぬみなわなりけり

世と俱にといひて夜をもそへたるなり世と俱にながらへてぞ絶ずふる涙なれば流る、故に冬も氷らぬといへりたゞ涙の絶ぬを云なりみなわはい水沫なり

ゆめ路にも露やおくらんよもすがらかよへる袖のひぢてかはかぬ（貫之集露ぞおくらし）

夢路にもかよふ袖には露やおくらん夜もすがらひぢてかはかぬとなり夢路は夢中にかよふ道なりひぢと云詞春の上にいへり【六帖に「秋のよの夢路に露ぞおきけらしかよふと玄つる袖ひぢにけり」是は今をとりてうつせるにや】

素性法師

はかなくて夢にも人を見つる夜はあしたの床ぞおきうかりける

此はかなくはあへなく夢に見しを云なりはかなくも夢に人をみし夜はなごりをしくて其床の起がたしとなり六帖に貫之「けさのあさけ露おきながら戀しきはあかぬ夢路を戀るなりけり」又伊勢「夢ならであふ事かたき世の中はおふかた床をおきずやあらまし。六帖に夢にてもこひしき人を見たる夜は此下の句またく今と同じ

藤原忠房

僞の涙なりせばから衣しのびに袖はぬぎばらざらまし（〇本云ぬらざらましとあり）

いつはりの涙にぞあらば人にこそ見せめかく忍びに袖はぬぎばらずあらんとなり六帖に「まことなき物思ひせば僞に涙はかねておとさゞらまし」今と同じ意なるはいづれか前ならん

大江千里

我なげきの涙にて袖のひぢしなれども人とはゞ春雨にてとこたへんとなり春さめは其時なるべし

敏行朝臣

我ごとく物やかなしきほとゝぎす時ぞともなく夜だゝ鳴らん

其夜の時の定めなく鳴を云なり夜たゞは夜直なり夜ど

ほしに鳴と云ほどの事なりたゞ鳴になくといふはひたぶに啼と云に同じ

つらゆき

五月山槍を高み郭公なくれ空なる戀もする哉

是はたゞ空なる戀をするといはんの上は序なりそらなるとはあなたへもこなたへもつく方なきをいへり【五月山地名にあらずさ月の山なりやよひ山といふに同じ萬葉に「此山の峰にちかしと我見つる月の空なる戀もするかも」などもよめり是も序なり】源氏物語に道の空にてといへるも中途の事なり萬葉に「立居する空も去られず戀れども妹に告ねば眞使も來ず」おもふそらなどもよめる有空なる戀といへば戀にまよはさるゝと云ほどの事なり

凡河内躬恒

秋ぎりのはるゝ時なき心にはたちぬの空もおもほえなくに

立居の空上に用じ意なりおもほえなくはおもほらぬを延たる詞なり

或人云秋霧の晴る時なきといふ縁もて立居の空とは云なりと又云立居の空は何をせん空もなしと云なり

清原深養父

虫のごとこゑにたてゝはなかれども涙のみこそ先に流るれ

是は音にあらはしてはなかねども涙は絶ぬとなり此歌に諸説あれど皆入過てあやまれり

是貞のみこの家のうた合の歌　よみ人しらず

秋されば山とよむまで啼鹿に我おとらめやひとりぬる夜は

今の本に秋なればと有は秋さればの誤成べし秋に人の倦(アク)をいひよせたりと云説あれど是は古歌の體にていとやすらかによみたればたゞ時節をいひて啼鹿に我劣らんやといへるのみなりとよむは動響の字にあてゝこゝろ得るなり

題しらず　つらゆき

秋のゝにみだれて咲る花の色のちぐさに物をおもふ比かな

六帖には二の句を千ぐさに咲るといひ四の句を亂て物をとあれども今の方よろし亂れてを思ひ亂るゝにたよれり

みつね

ひとりして物を思へば秋の田のいな葉のそよといふ人のなさ

六帖には二の句物をぞ思ふ五の句いふ人もなしとあり【六帖に「秋風の荻のはを吹音きけばそよ〳〵我も物をこそおもへ」骨丹集「木がらしの秋とたちにし其日より

いな葉のそよといふ人ぞなき】是は稲葉の風にふれてそよ〳〵となる音をそれよといひかけたり人とは思ふ人のみならず他をも云べし猶おもへばそれが思ひのうき物なりけれと云なぐさむる人の無きとなり

ふかやぶ

人を思ふ心は雁にあらねども雲井にのみも啼わたるかな

人を思ふ心はかりそめならずと云に雁をいひかけてそれより雲井と云て雁の縁につゞきたりさて雲井とは遠き方の事にいへり【雲井のよそと云も遠き事に云なり】

たゞみれ

秋風にかきなす琴の聲にさへはかなく人のこひしかるらむ

餘所にて人のかきなす琴の音を聞にさへなどか無計(ハカナク)も人の戀しかるらんとみづからあやしむなり【後撰「秋のよに人をしづめてつれ〳〵とかきなす琴のねにぞなきぬる】又思ふ方の琴のねを秋風の吹つたへて聞ゆるをはかなきつてにだに人のこひしきなどもきこゆ上の雲井にのみと云次手にあればなり

或抄云かきなすはかきならすなり萬葉に響の字鳴の字をなすとよめり時守のうちなす鼓といふも打ならすなり

つらゆき

まこもかる澤の澤みづ雨ふれば常よりことに增る我戀

常よりまさるといはん序なり猶雨の日はことに思ひまさる淋しさの意も有べし

やまとにはべりける人に。つかはしける

こえぬまは芳野の山の櫻花人づてにのみ聞わたるかな

家の集には聞や渡らんとあり櫻花に思ふ人をそへていへれば上のこえぬまは山をこえん詞ながらあはぬまに譬へたり

やよひばかりに。物のたうびける人のもとに。またまかりて。

せうそこすときゝて。よみてつかはしける

物のたうびは物のたまひけるを延て云詞なりよく云は我よりたふとき人成べしせうそこは消息にて故(モト)は人の生死に云詞を轉(ウツ)して安否を訊(ト)ふ事と成又うつして文をせうそこといひ又たゞに人におとづる事にもいふ事となりぬ

露ならぬこゝろの花におきそめて風吹ごとに物思(モ)ひぞつく

六帖に末の句物をこそ思へと有是は散やすき花のうしろめたく風に心をおくが如く彼人もせうそこ爲(ス)る人に

さそはれやせんとおぼつかなさに物思ひの其度に添ぬるとたとへしなりつくはそふに同じ

題しらず　　坂上是則

我戀にくらぶの山の櫻花さなくちるとも歎はまさらじ（一本我戀はとあり）

山の名をくらぶるに云かけしのみ意は明らかなり

散花の方は數もまさらじを我思ひの數はひまなきのみならず思ひまさるとなりさらばくらべかちたりとよめる歟

むねなかのおほより

宗岳をむねをかと假字書せしは後の人のしわざなりそがとよむ事なり此事契沖が抄に委しくいへり

契沖云三代實錄元慶元年十二月二十七日右京人前長門守從五位下石川朝臣木村散位正六位上箭口朝臣岑業改二石川箭口一並賜二姓宗岳朝臣一木村言始祖大臣武内宿禰男宗我石川生二於河内國石川別業一故以二石川一爲レ名賜二宗我大家一爲レ居因賜二宗我宿禰一淨御原天皇十三年賜二姓朝臣一以二先祖之名一爲二子孫之辟一諱詔許レ之云云　又云　散位從五位下宗岳朝臣木村言建興寺者先祖大臣宗我稻目之所レ建也云云按に蘇我或は宗我とも書來れるを宗岳に改られしは馬子蝦夷入鹿其後も赤兄など皆逆臣なりしかば赤兄の後は蘇我氏の人も聞えず亦絶ざりけんも先祖の罪によりて官位いやしき人のみにや續日本紀續日本後紀等に至るまで此氏見えず木村にいたりて又見えたり然ば蘇我宗我など書る時逆臣ありしを忌て宗岳とは改られけん雜の下卷に躬恒が詞書にも今の如くむねをかのおほよりと假字にかけれど其かへしの名は宗岳大賴とあれば此集の古本には眞名にて宗岳とのみ書れけんを此氏の人も稀にて聞なれねば音なる事を忘らで和訓の氏かと心あてに推はかりてむねをかとは後の人の書なせる成べしといへり實によろしくいはれたり猶思ふに雜の下卷紀氏の古本の寫なりと云にもむねをかをかな書にしたれば木村岑齋等が氏を先祖の宗我に復されしかど文字を宗岳に改させたまひ猶其となへをもむねをかとよみもてめされけんを忘らずさらずばいかでみだりなる訓讀はすまじき事なりとも思はるるなり　猶古本を得て其音訓いづれを定むべき事なり

冬川のうへはこほれる我なれやまたにながれて戀わたるらん

【ふゆがはと濁りてよむ】今の本に下にこがれてとある

はわろし一本流てと云をよしとすながれては例のながらへてなりがならへをりつゝ戀わたるらんとなり【敎忠集「下にのみ流まさるは冬川の氷れる水と我となりけり」今をとりてよめり】

だゞみれ

たぎつ瀬にねざしとゞめぬ浮草のうきたる戀も我はするかな

上は浮たるといはん序なり意は明らけし

ともの り

よひ〳〵にぬぎて我ぬるかり衣かけておもはぬときのまもなし

衣を脱ては衣桁にかくれば衣をかくるといひかけて心に掛て思はぬ時の間もなしとなり後撰に「から衣かけて頼まぬ時ぞなき人のつまとは思ふものから」「中々におもひかけては唐衣身になれぬをぞうらむべきかな。東路のさやの中山中々に何しか人をおもひそめけん」上は中々にといはん序なり中々はなまなかに同じくあなたへもこなたへもつかぬ中にして却りてあしき方になるとなりさやの中山和名抄遠江國佐野郡とあり續日本紀養老六年二月割二遠江國佐益郡八郷一始置二山名郡一と見えたりそこに在る山なればさやの中山といへり歌の意明らかなり【後の說にたゞよぶにはさやといひ夜などにいひかくるはさよといふといへるはあやまれり又中山を長山と云說ありひがことなりきびの中山みのの中山ささの中山など皆中なる山と云事なり】

ふきたへの枕のしたに海はあれど人をみるめはおびずぞありける

袂きたへは冠辭なり枕の海は涙の多きを云さて海にはみるめのおふる物なるに我は逢みるめのおはぬといひよせたり

としを經て消ぬ思ひはありながらよるの袂は猶こほりけり

きえぬ思ひとは思ひを火になして其火にても涙にぬるる袖は猶かはかずといへりぬれけるともいはで猶氷けりと打こえていへるなり【うつぼ物語に「きえずのみもゆる思ひもあるものを何か袂の氷りしもせん」とよめるは今をまたくとりたるなり】

つ ら ゆ き

我戀は知らぬ山路にあらなくにまどふ心ぞわびしかりけり

袂らぬ山路は迷ふべきをそれにもあらぬにかくまよふとなり

家集には三の句あらねども六帖には下の句などか心のまどひけぬべきとあり

紅のふりでつゝなく涙には袂のみこそ色まさりけれ

紅をふり出して染ると云より涙の紅に打出つゝなくといへり紅涙は血に泣と云に同じ

白玉とみえし涙も年ふればから紅にうつろひにけり

意あきらけし家集には末の句成ぬべらなりと有

みつれ

夏むしなにかいひけむ心から我も思ひにもえぬべらなり

夏虫の火に飛入てもゆるを哀とは何かいひけん我も思ひの火にもゆるとなり

たゞみれ

風ふけば嶺にわかるゝ白雲のたえてつれなき君がこゝろか

上は序にいひて絶てつれなきと云なり新撰萬葉には上の句は同じく行かへりてもあはんとぞ思ふとあり其歌の句の轉せるか然ば寛平の御時后宮の歌とあるべきを題しらずに入られたるは別の歌にや六帖には末の句人のこゝろかとあり心かのかはかなの略なり

然ば寛平の御時后宮の歌合の歌とあるべきをといへるは打聞のあやまり歟新撰萬葉集の歌悉くかの歌合の歌にあらず

月影にわが身なかふる物ならばつれなき人もあはれとやみむ

【今の歌拾遺に並び入て四の句おもはぬ人もと有六帖には相思はぬと云題に入】是は月影はおもしろく見るべければ月に身を易て人に思はれんと願ふなり新後拾遺に天暦の御歌「月かげに身をやかへましあはれてふ人の心に入て見るべく。

ふかやぶ

戀しなば誰名はたゝによの中の常なき物といひはなすとも

我戀死なば誰が名かはたゝん君が名こそたゝめよしや世の中の無常に人はいひなすともとなり萬葉に「里人もいひつぐがねによしゑやし戀ても死なん誰が名ならめや」「人めおほきたゞにあらずてけだしくも我戀しなばたが名かあらん。

貫之

津の國の難波のあしのめもはるにしげき我こひ人ぞあらめや

蘆の萠もはるにてそれを春にいひかけたりいにしへは春に草木の繁き事をもはらよめりされば蘆の芽も春と成てしげきと云に我戀の玄げきをいひかけて上は序なり

手もふれで月日經にけりゑらま弓おきふしよるはいくそねられれ

六帖に末の句物をこそ思へと有上の句は人に手もふれずしてひさしく成ぬるにたとへ下の句はされば夜も寐られず物を思へば起ふしなどしてわぶるさまを云なり弓におきふしと云事はいにしへの弓射るさまは今とたがへり左の脇まで引ふせてひきはなちおこしなどせしより弓に起ふしの事をよめるか古歌に多し【或説に手もふれずしてひさしくさし置たる弓は節のおきてくせづけるを云と有はあやまれりそれは今の弓の竹を上下にあてたると心得てさて其竹のふしのおきてくせづけると思へるにやいにしへの弓はたゞ木をためて作れり延喜式に御弓の料を奉れるに竹は見えず】

友則

ことに出ていはぬばかりぞみなせ川下にかよひて戀しき物を

是は言に出ていはぬのみぞ水無瀬川は水なき川と聞ゆれど下に流てかよふ如く戀しき心あるものをとなり下底の意なり萬葉に「戀にもぞ我は死するみなせ川下にわすれず月に日にけに。

みなせ川今もゆきてみるに澁落る所をやゝ下れば其流の末いづちゆきけん見えず又の末にいたりては河となりて流るゝなりさるは上つ瀬は地中を行下つ瀬に又あらはるゝと見えたりよて下にかよひてともありて行水なくてともよめるなり説文に水脈行二地中一テ演々也といへるは是なるべし

みつれ

君なのみ思ひれにせし夢なれば我心からみつるなりけり

かくれたる心なし萬葉に我心と望み思へばあたら夜の一夜もおちず夢に見えけり今の本に思ひ寐にねしとあり一本思ひねにせしとあるをとる

忠岑

命にもまさりてをしくある物はみはてぬ夢の覺るなりけり

家集に昔物などいひし女のなくなりしかばあか時がたの夢に見はて侍らでさめ侍りにしかばとありて今の歌あり心は明らけし

春道列樹

梓弓ひけばもとすゑ我かたによるこそまされこひしき事は

六帖に落句戀しき事はとあり今の本には戀の心はとあり六帖の方玄かるべし是は弓を引ば我方に本末のよる物なればよるに夜を云かけて上は序なり一本二の句ひけどひかねどゝあるはとらず

みつれ

わが戀は行方もしらずはてもなしあふをかぎりと思ふばかりぞ

心あきらかなり

我のみぞかなしかりける彦星もあはですぐせる年しなければ

心あきらけし新撰萬葉に「戀わびぬ天の河原へ行てしがわたる彦ぼしありといふなり」貫之集に「としを經て戀渡れ共我ためは天の河原のなきぞわびしき。

ふかやぼ

いまはゝや戀しなましなあひみむとたのめしことぞ命なりける

心明らかなり後拾遺に和泉式部ひさしうとはぬ人のおとづれておともせずなり侍りければ「中々にうかりしまゝにやみにせばわするゝほどになりもしなまし。

みつれ

たのめつゝあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人はまちなん

是は心に頼みおきしがあはで年來を經る僞に物ごりして思ひやむべき事なるをそれにもこりぬ心を思ひ云れかしと也此歌後撰にひさしくいひわたり侍りけるにつれなくのみ侍りければ業平の朝臣とて伊勢が返し「夏虫の云る〳〵まどふ思ひせばこりぬかなしと誰か見ざらん」とありこは枇杷左大臣仲平公の官位ひくき時の歌にてなかひらの朝臣とかな書したらんを業ひらに寫なせしものよ業平と伊勢と時代かなはず此贈答もいせが集に入て枇杷殿なりさて枇杷殿は躬恒と時を同じうするを此集に躬恒が歌として入し事いとも不審なり殊にいせが返し歌もあればかへすぐ〳〵もいぶかしき事也【後撰に又「いせの海にあそぶあまともなりてしか浪かきわけてみるめかづかん」と云歌も枇杷殿の伊勢におくり給へるを在原業平朝臣と眞名書したるは是も物にすゞろげなる人の藤原を在原に書改めしはなかひらを業平に見あやまりし故に氏をもなま心してうつしなせしものなるべし業平の集と云にも此歌を入たれどかの集は後の人の書あつめし物なればとるにたらず】

友　問

いのちやは何ぞは露のあだ物をあふにしかへば惜からなく

命は何ぞ露のあだ物なり我戀人にあふにかへば惜からぬとなりいせ物語に「思ふには云のぶることぞまけにけるあふにしかへばさもあらばあれ。

家の集には命かはとあり

古今和歌集卷第十二打聽終

古今和歌集卷第十三打聽

戀歌三

やよひのついたちばかり。今の木ついたちより　ものびに。人に物らいひて。のちに。雨のそほふりけるに。よみてつかはしける

在原業平朝臣

【いせ物語には打物がたらひてかへり來て時はやよひのついたち雨のそほふるにやりけると有てこゝをつくりなせしものなり】物ら云てとは逢たる事をもいへど篇次を見るにもはらさとも見えねばこれらは物いひかはせる成べし物らを物をと書たるもあれどいにしへにあらずらはなど、云に同じく助けながら他をもかねず亦は其事をさだかにいはぬにも用ふ詞なりそほぶるは俗に云よぼ〳〵ふると云なり【或說に添降にてふりそふ意なりと云はわろし箱根のわたくし雨と云類に云よぼ〳〵とふる雨なり】萬葉に「伊夜彦のおのれ神さび青雲のたな引日すら小雨そほぶる」とあるにて小雨なる事を云るべし

おさもせず寝もせでよるをあかしては春の物とてながめくらしつ

終夜終日と日を經て思ひやるさまをいへりながめは春の霖雨に物思ふながめをかねていへるなり

なりひらの朝臣の家に侍ける女のしたに。よみてつかしける

敏行朝臣

いせ物がたりによりて此女とは業平の妹なりといへれどさらばこゝにしか有べきを家に侍りける女なりとては妹なりとも聞えず彼物語は僞事を專ら作りなせし物なれば證となしがたし

つれ〳〵のながめにまさる涙川袖のみぬれてあふよしもなし

是も霖雨に物思ひのながめをかねたりつれ〳〵と降なが雨に涙川の水まさりて深ければわたりこえて逢よしもなしと云心をたとへを本意にむすべるなり

かの女にかはりて。返しによめる　なりひらの朝臣

あさみこそ袖はひづらめ涙川身さへながるときかばたのまむ

淺みこそは淺くしてこそと云なり萬葉に「廣瀬川袖つくばかり淺きをや心深めて我思へるらん」とよめるもいにしへの袖はいと長ければ川におりて袖の漬ばかり淺きといへり今も淺くしてこそ袖はぬるらめと云なり涙川身さへ流るとは逢みん爲にはたゞ淵ともいはずただわたりに渡りて身も流るゝをいとはぬときけば思ひけりともたのまんをとよめるなり

題しらず　　讀入しらず

よるべなみ身なこそとほくへだてつれ心は君が影と成にき

よるべは寄方なりなみはなくしてなり緣無くして身をこそ遠く隔つれども思ひやる心は君が身をはなれねば君にそふ影となりにけりとなり

いたづらに行ては來ぬる物ゆゑにみまくほしきにいざなはれつゝ

物故には物ながらになりいざなはれつゝは我心にさそはれつゝなり此歌いせ物語にては例の作り事なれば難なし六帖に人まろの歌とせしは不審なり

あはぬ夜のふる白雪とつもりなば我さへともにけぬべき物を

思ふ人にあはぬ夜頃の雪と俱に日數のつもりなば我身も又雪とゝもに消ん物をとなりさてこゝにも注ありて「此歌は或人のいはく柿本人丸が歌なりといへり【人丸の歌萬葉をよく見ん人は我詞をまたずしておのづから知べし】是もとるべからず詞づかひ去らべのさま人まろには似もつかぬものぞ

なりひらの朝臣

秋の野にさゝ分しあさの袖よりもあはでこし夜ぞひぢまさりける

上の句露といはで露有下は涙をいはで涙をしらせたりいせ物語古今六帖等にはあはで寢る夜とみゆ

小野小町

みるめなき我身なうらとふられぬやかれなであまのあしたゆくゝる

見るめは海の海松を我かたちもなきと云にいひかけて皆海の事にてつゞけたり我身をうらは我身を憂とかけたるなりいやしきにも又かたちのあしきにも云かれなでは別れなでの上略なりこゝにては絶ずといふほどの事に聞べし足たゆくは足の酸きまで來るにて度々くると云ほどの意なりさて見る事もなき身を我はうしとおもひをるとも去らねばや絶ず度々人のかよひくるはといひてみづからをくだりてあはじとはいはずしてあはぬなり

源宗于朝臣

あはずして今宵明なば春の日のながくや人をうらしと思はん

心明らけし

にぶのたゞみね

晨明のつれなくみえしわかれよりあかつきばかりうきものはなし

有明月はあくるも去らでつれなく見えしにあはずしてかへす人のつれなきをかねたり【猶百人一首古說に委しくいへり】

ありはらのもとかた

逢事のなきさにしよる涙なればうらみてのみぞ立かへりける

こは渚に無きをかけて皆波の緣もてつゞけたり且波は我によそへて云なり六帖に「あふ事の渚に身をしなしつれば袖も涙にぬれぬ日ぞなき。

よみ人しらず

かれてより風にさきだつ涙なれや逢事なきにまだきたつらん

【六帖「我のみやあだ名はたつと磯に出て渚をみれば波もたちけり】是は風に先だつ名と連くるに浪といへり萬葉に「風ふかぬ浦にさきだつなき名をも我はおふかも逢とはなしに」此歌をよみかへしとおぼゆ

たゞみね

陸奥にありといふなる名取川なき名とりてはくるしかりけり

上は名をとりてといはん料なりとるとは我におふ心なり日本紀に負の字をとるとよめり名に負は名をとると云に同じきをおもへ

みはるのありすけ

御春ノ有助は貫之集に兼輔ノ兵衛ノ佐加茂川の邊にて左衛門の官人みはるのありすけ甲斐の國へゆく馬のはなむけによめる歌有其人成べし

あやなくてまだきなき名の立田川わたらでやまんものならなくに

あやなきは物のわかちなき事上にいへりまだきはいまだきと云にてきは時の上略なりこゝにてはゝやきと云心にて俗にまへ方と云ほどの事なり

逢みるとも見ぬともわきなきにはやく名のたつはいよゝ戀わたらでやまんやはやむべくもあらずと云なり

もとかた

人はいさ我はなき名のをしければむかしもいまも去らずとをいはん

昔も今も前も今も更にしらぬよしなりとをいはんのをは助辭なり後撰集には大つぶねに物のたうびつかはしけるを更に聞入ざりければつかはしける元良親王「大かたはなぞや我名のをしからんむかしの妻と人にかたらむ」返し大つぶね在原棟梁ノ女と有て今の歌あり【後撰に此贈答をかんがへ出られしかば二首共にのせられしなり】元方も大つぶねも但に棟梁の子なれば此集には元方の姉とか妹とか有つらんを文字の落たるを寫傳へしならんさて此人と云を世の人の心なりと云は後撰にいたりてつうせず

よみびとしらず

こりずまに又もなき名は立ぬべし人にくからぬ世にしすまへば

【いせ物がたりにすまふちからなしといへるも母のおひ出さんとするをあらがひて出まじとすまふちからなきを云なり】必しもあはねどなつかしく物がたりなどすればよその人はあひきと云に亦もなき名の立ぬべしとなりこりずまこりずまひと云詞なるべし一度こりたる事はすまじき事なるを又もすまひて爲(ス)ると云とすべしすまふはかたみに負じ心してすまふなり人にくからぬと云なり俗にさまでなき事に物あしくはしたなき人を人にくしと云り兼盛集に「ひたぶるにいひもなはてそ世にふれば人にくからぬ物とこそきけ。

ひんがしの五條わたりに。人なしりおきて。まかりかよひけり。忍びたる所なりければ。かどよりしもたいらで。かきのくづれよりかよひけるを。たびかさなりければ。あるじきゝつけて。かの道に。夜ごとに人をふせてまもらすれば。いきけれど。えあはでのみかへりて。よみてやりける

なりひらの朝臣

嗣の心かくれたる所なし東の五條とは東の京の五條なりわたりはあたりなり

人ふれぬ我かよひぢのせきもりはよひ〳〵ごとにうちもねなゝん

人しれぬは人に云らせぬの約めなるべし又知られぬとも云べし歌の心明らかなりねなゝんは寢よかしなり

だいしらず　つらゆき

志のぶれど戀しき時は足曳の山より月の出てこそくれ

三四の句出てこそくれといはん料ながら時にあひて聞ゆ

讀人しらず

こひ〳〵てまれにこよひぞ逢阪のゆふづけ鳥はなかずもあらなん

心あきらかなり

なのゝこまち

秋の夜もなのみなりけりあふてへばことぞともなく明ぬる物を

逢見なば事あり顔に思ひをりしもあひてのこよひはさせる事なくていとはやく夜も明るとなり此歌六帖にはふせりと云題にて三の句あひしあへばとあり【後撰に「見る時はことぞともなくみぬ時はことありがほにこひしきやなそ」と云は今をとりてよめるなり】小町の集にはあひとあへばと見えたりあふてへば、逢と云へばの約めなり萬葉に「秋のよを長しといへどつもりにし戀をつくせばみじかゝりけり。

凡河内躬恒

ながしともおもひぞはてぬむかしよりあふ人からの秋のよなれば

是はさき〳〵より我思ふ人に逢による習ひなれば秋の夜なれど長しともおもほえぬなりあふ人からはあふ人よりの心なり

よみ人しらず

志のゝめのほがら〳〵と明ゆけばおのがきぬ〴〵なるぞかなしき

志のゝめの事冠辭考にいへり】ほがら〳〵はほの〴〵と云に同じおのがきぬ〴〵或人は脱(ヌギ)おきたる面々の衣をとるを云といへりいはれたれど衣をかさねて寢るがわかれ〳〵に著るによりて云それから袖のわかれとも云なり

藤原國經朝臣

贈太政大臣長良公之嫡男也日本紀略之延喜八年六月廿八日大納言藤原國經薨年八十一云々文德實錄長良公薨せらるゝ日の傳に有三子六人一弟三子基經今攝政右大臣也基經幼少之日敬愛異二於諸子一古人有レ言知レ子不レ如レ父誠哉(カナル)と見えたり卿は太郎子ながら何事も三男の公におくれさせ給ふ故に高齡にて大納言にとどまり給へるをもて太郎の大納言と申せしなり

明ぬとて今ほの心つくからになどいひしらぬ思そふらむ

顯昭本には末の句思ひなるらんとあり六帖には閑院大臣の歌とす閑院大臣は時平公なり今はとてかへりなんとおもふ心のつくからになりいひ志らぬは詞もなきほどのおもひがそふなり

寬平の御時。后宮の歌合の歌

としゆきの朝臣

あけぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそぼちつゝ

こきたれはこきおろすが如き事に云花こきちらし稻こきたれなど云たれはおろすと云心なり或說にかきたれと云なりかとこと音通ふなり

かへるあしたの空の雨ふりくるさまによみなす成べし

だいしらず　寵

寵の字の誤とにや古くよりてふとよみ來れりさらば訓(ヨミ)もてめで子などよむ歟寵はあなとよむ字なり

しのゝめの別れなゝしみ我ぞまつ鳥よりさきに啼はじめつる

はやく別るゝよしなりと云說はわろしやゝわかれんとする時のいたりて鳥より前(サキ)になくといふなり【六帖に「庭鳥にあらぬねにても聞なん明ぬることを我鳴しかば】

よみ人しらず

ほとゝぎす夢か現か朝露のおきて別れしあかつきのこゑ

是はたゞ別るゝ時に郭公の鳴を聞てよめる成べしその人の聲に郭公をよそへて云たひたる心なりと云說はわろし朝露はおきてといはんとてなり

玉くしげあけば君が名たちぬべみ夜ふかくこしを人見けんかも

玉櫛笥は冠辭なり明てかへらば君が名の立ぬべしと夜深くかへりこしをさへ人の見あらはさんかもとなり萬葉に「玉くしげおほふをやすみ明てゆかば君が名はあれど我名しをしも」「月しあれば明らんわきも云らずして疑て我こしを人見けんかも。

大江千里

けさはしもおきけんかたもまさりつゝ思ひいづるぞきえてかなしき

けさはにてしもは助語なるを朝霜のおくにいひかけてさて起來りけん方も知ざりつるが歸り來ては思ひ出るに消かへるばかり悲しきと云て思ひのひを目に取なして日影に霜のきゆるをかねたり【後撰興風「おもひにはきゆる物ぞと知ながらさはしもおきて何に來つらん」今とまたく同じ】

人にあひて。あしたに。よみてつかはしける

ねぬる夜の夢なはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな

是は人に逢たる事の夢の如くにはかなきをせめて夢にだに見んとてまどろめば其事のみを思ふ故に寢もやらでいよゝ夢にも見るべきやうなくてはかなさの成まさる哉となり

業平の朝臣の。いせの國にまかりたりける時。齋宮なりける人に。みそかにあひて。またのあしたに。人やるすべなくて。おもひかりけるあひだに。女のもとよりおこせたりける

業平の伊勢に下向の事たしかなる物に見えずいせ物語に出で狩の使の由にいへどそれも慥なるより所を見ず彼物語はわざとにまうけて作りなせし事のみなれば信じがたき事共なり猶此事はいせ物語の古意に委しくへりこゝは齋宮の御事にはあらでいつきの宮の内につかへて有ける女の事なるべし女のもとよりおこせたりけるなどいやしげに書たるにて云か心得らるゝなりけるとはに有けるを約めたる詞なり然ば齋の宮に有ける人と云にて明らかに聞えたり【いせ物語を本說のやうに心得て此段をさまゞ〳〵いぶかしみて云もあれど云か論ずる迄もあらずたゞ作物語なれば彼はかへりて難なし若滅に齋宮犯されたまはゞ卽おろされ給ふかいにしへの例なりかく勅をたまはりて撰びしには實に犯され給はゞはゞかりて書まじき事なり文德淸和の御時の齋宮にはさる罪ありし事たしかなる書に見えたる事なし】

よみ人しらず

君やこし我やゆきけんおもほえず夢かうつゝかねてかさめてか

こはかなく別來つれば云か思はるゝ後朝の心を述たるのみにてさま〴〵深く思ふ心こもれり下の句におなじ詞をはかなく云ならべて上の句をことわれるなり【萬葉にうつゝにか君が來ませる夢にかも我はまどへる戀のしげきに】

返し　業平の朝臣

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつゝとは世人さだめよ

我も夜べの事はかきくれたる心にえさだめあへざれば夢か現かを世の人さだめわかでとよめりをさなく世人といへるぞかぎりなくめでたし

題しらず　讀人不知

ぬば玉の闇のうつゝはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり

こはくらまぎれに逢しは現ながらさだかにみつる夢はくらぶれば何ほどもえまさらじとなり此下二首も後朝のありさまをいへりさなくば上のあふ人からのと云あたりに入べし

さよふけて天のとわたる月影にあかずも君をあひみつるかな

是は月の夜思ふ人にあひていとも興をましたるを云成べし上は闇の夜に逢てかひなしといひ是は月夜にあひて夜よしと悅べるをむかへてついでし物なり【六帖に足引の山下とほる月影にあかずも人にあひみつるかな】

月と闇とをもてついでたると云はさる事にて歌は月影の如にあかぬよしによめる成べし六帖に山したとほる月影にと云はまたく同歌なるをすこし詞のかはりたるなり彼歌は月かげにと云が卽月影の如くにと云にこゝろ得ではことわりのあはぬなり

君が名も我名もたてじ難波なるみつともいふなあひさともいはじ

難波の三津を見つにかけたる序にして君を見つともいひ給ふな我も逢けらしとはいはじとなりもしあひきと云は三津の網引にいひよせし物にやともおもはるゝなり

なとり川瀨々の埋木あらはればいかにせんとかあひ見初けむ

名取川陸奥の名所なり埋木は唯久しくうづもれたる木なり谷のうもれぎなどもいへり

歌の心名取川と云名に名のたゝん事をこめてさて名にあらはれなばいかにせんと思ひてか逢見そめけるぞと人聞のつゝましさにおのが心をもいぶかしむなり

よしの河水いこゝろは早くとも瀧つおとにはたてじとそ思ふ（今の本には瀧のとあり）

是はせちに思ふ心のたぎりてとく落る水のごとくなれどもよくねんじて音にたてゝはなげかじと云を水に譬へていへり水の心とは水中と云が如しさてたゞ云かけしのみなりこゝにはやくと云は堪忍びがたきを云

戀しくばしたにな思へ紫のねずりの衣色に出なゆめ

下にをのをは助語なり紫草（ムラサキ）の根ずりの衣とは根にて染る事今も玄かり摺と染ると同じからず昔は紫草の根もて摺たるべしされば根ずりの衣とはいへりさて色に出るといはんのみなりゆめはいましめいさめなど云詞を約めたるなり【たゞに其事をいみつゝしむをゆめと云ゆとといとはかよひて同意なり】其色に出んとする心をいましめやめよと云義なり

人によそへもせで玄のびく〳〵に藤衣はよるこそ著めとなり

思しらず　こまち

現にはさもこそあらめ夢にさへ人めなりるとみるがわびしさ

人目を守は人めをはゞかりつゝしむを云歌の心明らかなり

限りなき思ひのまゝによるもこん夢路なさへに人はとがめじ

現には人の見とがむべければかく限なき夢路にかよひ來んをよもや夢路は人も見とがめじとなり【萬葉に「人の見てこと、がめせん夢に我こよひいたらん宿さすなゆめ」】

いめ路には足もやすめずかよへどもうつゝにひとめみしことはあらず

夢路には度々かよひて逢見れども一め見し現の如にはあらぬとなり一たびあひしのみに後はあはぬ戀なるべし【後撰に思ひぬのよな〳〵夢に見し事をたゞかた時のうつゝともがな」とあるは今をとりたるなり】

よみ人しらず

おもへども人めづゝみのたかければ川と見ながらえこそ渡られ

河によそへてかしこにと見ながら人めづゝみの高くせかれてえゆかぬよしなり或人のかはゝかれはといひあはゝあれはと云またく同意なり後撰に「故郷をかはと見つゝもわたる哉淵瀬ありとはむべもいひけり」【つらゆき集に「あはと見し道だにあるを春がすみかすめるかたのはるかなる哉」此歌六帖にはかはと見るとありまたく同意なり】又枕の草子に則光が文の詞にひんなき事は侍るとも契り聞えし事は捨たまはでよそにてもさぞなどは見たまへといひたり此返しに「くづれよるいもせの山の中なればさらによしの、かはとだに見じ」と云もかれはとも見じの心なりといへるはよしたきつ瀬のはやき心をなにしかもひとめづゝみのせきとゞむらん

此はやき心とはあはゞやとすゞろに思ふ心をいへりいそぎはやむと云ほどの事なり歌の心明らかなり【六帖に「いひしらで人めつゝみにせかれたる池の水ともゆりぬこゝろか】

寛平のおほん時。きさいの宮の歌合のうた　紀友則

くれなゐのいろにはいでじかくれぬのしたにかよひてこひはましぬとも

かくれぬは隱沼にて草など生茂りたる沼なり下にかよひてはたがひの心の下にかよふなり戀は死ぬともは人めにさはりて悲しきあまりを思ふからにと云なり【萬

葉に「いふことのさがなき國ぞ紅の色になる出そおもひしるとも」

だいしらず　　みつね

冬の池にすむにほ鳥のつれもなくそこにかよふと人にしらすな

鴨鳥の底にかよふと句を隔たるなり【後撰にふたゝび入て四の句下にかよはんとあり】つれもなくは忍ぶ事のつれなくてあればなりさてかたく忍びて鴨どりの水底にかよひて知れぬ如く人にしらすなとなり

さゝの葉におく朝霜の夜なさむみあはつくとも色にいでめや

夜を寒みは夜をさむくしてなり【六帖にはおきゐる霜のさむければとあり】云みはつくともは染つくなり物を染れば必其色になるをさゝの葉は霜のおくに其痕はつきながら猶色のかはらねば我思ひの切なるにそへてさて云かり其色には出じといへり

よみびとしらず

山しなの音羽の山の音にだに人のしるべくわがこひめかも

是は名にたつばかりは戀せじよく忍びてあらんと云なり音にだには音にもと云が如しだにと云詞をかろく意得べしこゝの注に「此歌ある人あふみのうねめのとなん申すといへり例のとらず

みつしほのながれひるまをあひがたみ見るめのうらによるなこそまて

是は晝間は逢がたし夜をのみ待といへりみるめの浦とつゞきても名所にあらず浦にみるめのよるをこそと意得べし【みつね集「梓弓いるまとがたにみつ汐のひるあひがたみよるをこそまて」】

平直文

白川のあらずともいはじ底さへみ流てよゝにすまんと思へば（一本白浪のとらす）

【白川はいにしへは鴨川の上をいへり】是はさのみ人にあらがひて知ずともいはじ心の底清くしてふた心なく俱にながらへて相住んと思へば忍びはづべくも非ずと云なり

とものり

あたにのみこふればくるし玉の緒の絶て亂れん人なとがめそ

數の玉をぬきたる緒の切たえたらば玉はみだれぬべきを我下にのみ戀ればくるしきあまり穗にあらはれて亂んによせて人は其を咎めなせそとなり【萬葉に「いきの緒に思へばくるし玉のをのたえてみだれな云らばしるとも」】

我こひを忍びかねては足びきの山橋のいろに出ぬべし

顯注には末の句色に出ぬべくとあり心は明らかなり山橋は髮そぎの時山菅にそふる草なり今はやぶかうじとよぶ物なり

よみ人不知

おほかたは我名もみなと澪出なん世をうみべたに見るめすくなし

是は世の人の物いひさがなきを倦て磯がくれたる船のさまに忍びをれば中々人を見るめの少なきによりて水門より沖へ澪出る船の如く我名をもおほやけにあらはして人の見るめをやすからんとなり海べたは上にいへり【六帖には下の句人をみるめをおきにこそかれとあり】

平のさだぶん

枕より又しる人もなき戀を涙せきあへずもらしつるかな

枕よりは枕より外になり【上に枕のみこそ云らばしるらめ下にも云るといへば枕だにせでぬる物をなどよめり】夜々の涙は枕にかゝりて海をなせども人には云られぬとのみおもふもあまりに起居つゝして歎けばつひに見あらはされしとなり枕は耳ちかき物故に聞と云事にて云歎是らはいづれにてもあれ大方戀をすれば枕はもはら知べき物と云べし

よみ人しらず

風ふけば浪うつ岸の松なれやれに顯れてなきぬべらなり

浪打よする岸の松が根によせて音にあらはるゝといへる上は序なりこゝに注有て「此歌はある人のいはく柿本の人まろがなりとあり例のとらず六帖に松の歌に入て浪こす磯のそなれ松とありて作者人まろと云るせり其にあやまれり

或抄に此歌の體人丸の上古にあらず且べらなりと云詞萬葉に見えず此後にもなく此集のみにある詞なりといへり

池にすむなを鴛鳥の水なあさみかくるとすれど顯れにけり

名を惜むを鴛にそへて其鳥の潛くとすれど水の淺くてえかくれぬやうに名のたゝん事を惜みて人に云られじとつゝめどあらはれたるなり

逢事は玉のをばかり名のたつは吉野の川のたきつせのごと

玉の緒は長短いづれにもいへりこゝはみじかき方にてわづかなる心に云萬葉に「さぬらくは玉の緒ばかり戀らくはふじの高根の鳴澤の如」またく是をすこしかへたるのみ

むら鳥のたちぬる我名今更に事なしぶとも出るしあらめや

群鳥はたつ時にいとさわがしきをたとへたりさるは世の人に云ひさわがれたる成べしことなしぶとはことなしぶりにて事もなげに云なすなり【後撰に「かざすともたちとたちぬるなき名をばことなしぐさのかひやなからん」】後撰にをとこの物にまかりて二とせばかりありてまうで來りけるをほど經て後にことなしびにこと人に名の立と聞しはまことなりといへりければ云々源氏物語總角の卷にことなしびに書給へるがをかしう見えければ是らもことなしぶりの意なり

君により我名は花に春霞野にも山にも立みちにけり

六帖に君が名も吾名もおなじとて霞の歌に入たりさていづくにもたつ霞を花といへるは詞のあやながら其人をよそへたるなり後撰に相去れる人のひさしうとはざりければ花盛につかはしける「我をこそとふにうからめ春霞花につけても立よらぬ哉」返し「立よらぬ春の霞をたのまれよ花のあたりと見ればなるらん。

我名も花にたぐへられて世に立みちぬるなりけりと云なり野にも山にもとは世にあまねくたつと云心にて霞よりつゞかれたり

仲勢

枕は戀を知る物にいへばつゝましさにそれだにせずして寐しものを塵ならぬ名のかろく立らんとなりちりは枕のよせなり塵にたつらんはなき名のたつにはあらずもとより其事のありて名のたかく立をいへりなき名と云說はあしゝ此篇次皆なき名にあらず萬葉に「み空ゆく名のをしげくも我はなしあはぬ日あまた年の經ぬれば」六帖に「夢とても人にかたるなしるといへば手まくらならぬ枕だにせず。

古今和歌集卷第十三打聽終

古今和歌集卷第十四打聽

戀歌四

題しらず　よみ人知らず

陸奥のあさかの沼の花がつみかつ見る人にこひやわたらむ

かつ見るといはん序のみかつ見るはかつ〳〵逢見る人なりあさかの沼は安積郡に在あさか山も同所なりといへり或說にかつみは菰を云といへど和名鈔にもいはず六帖には菰につゞけて別に出せれば異物とおぼゆ又こゝも秋に成て花あれど花薄花橘等の例に云べき花にあらず其上こもは夏こそ賞すれおとろふ秋にさく花をもて云べくも非ずといへりさて是より九首は逢見て後の歌なり【東まろ云花がつみは水に生る浮草にかたばみと云物あり黃なる花さけりそれを云なり今按かたばみとはかだまめの義なり水に浮てならべるが籠の目の如しよて花がたみとも云なり枕のさうしにかたばみの綾の紋にてもこと物よりをかしといへりもろこしにては田字草と云花も葉も四ひらに并べるが田の字のかたち玄たりとて名付しとなり】

三河美濃の國にてかつみとよべる物あり水草にて菰の類なりといへり其根をとりてさらし粉にはたき餅につくり又切麥などにもして食すなりと其物かの國のたよりある家よりおくられしを試しに大かた蕎麥に似たる味ひしたる物なり其花はいつ咲ならん猶かの國の人にあひて委しく問正さばやとおもへり

あひ見ずば戀しき事もなからまし音にぞ人をきくべかりける

心明らかなり

つらゆき

いそのかみふるのなかみち中々に見ずば戀しとわもはましやは

上は中々にといはん序なり逢見ざるさきは戀しと思はんやさは思ふまじきを中々に逢見てよりぞこひしきはとなりいそのかみ布留は大和の山邊郡なり中道はそこの中に在る途なり美濃の中山さやの中山など云に同じ齊宮の集に鈴鹿山ふるの中道君よりも聞ならすにぞおくれがたけれ此歌によりてたゞ古途なりと云說もあれど古途をふるの中みちとは云べからず此歌はふとよみやまりしとおぼゆ

藤原のたゞゆき

遠江守有貞之子也といへり

君てへば見まれみずまれふじのねのめづらしげなくもゆる我身か

此歌友則集に如斯見えたり今の本には君といへば末の句もゆる我戀とあり我戀のもゆるとては少ことわりたらず是は君といへば見るにも見ざるにも不二の嶺の當にもゆる如くに我身も燃るとなり【見ざれ見ずまれは見るにもあれ見ざるにもあれをつゞめたる詞なり】めづらしげなくもゆるとは常にもゆるをいへり

仲　勢

夢にだに見ゆとはみえじ朝なく我おもかげにはづる身なれば

朝ごとに鏡にむかひて見るに思ひにもえて色のおとろへたるがはづかしさにうつゝは更にもいはじ今は夢にも入てだに見ゆとは見えじとなり女の歌にはいと川意ありてやさしきなり朝ごとにといふにて鏡といはでもことわりつくせり【中務集に「心してあらまし物を夢とてもいかでおもなく見えわたりなん」今をおもひてよめるなり】

よみ人しらず

いはま行水のしら波たちかへりかくこそは見めあかずも有がな

是は見るにあかぬ人なれば石間ゆく水の如く立返りて見めとなり【元眞集「我宿に咲にし日よりさくら花かくこそは見めあかずもある哉」下句はまたく同じ】いしまとよむべからずいはまとよむが古語なり

いせのあまの朝なゆふなにかづくてふ見るめに人をあくよしもがな

朝な夕なは朝夕なり此なは助語なるをさま〴〵の說有皆よからずかづくは盤らが海に入て海藻魚貝をとるさまを云なり【萬葉に「いせのあまの朝なゆふなにかづくちふあはびの貝の片もひにして」上はまたく同じ】さて上は序にて海松に我おもふ人に逢見るをよせてあくまでにもがなと願ふなり

友　則

はるがすみたなびく山のさくら花見れどもあかぬ君にもあるかな

逢みて後は猶あかず見えんとなり

こゝろなぞわりなき物とおもひぬる見る物からや戀しかるべき

是は萬葉に「朝夕に見る時さへや吾妹子が見れど見ぬごと猶戀しけん」と云如く今逢見るものながら且つ戀しきはげに心をぞことわりもなき物に思ふとなり後撰に「戀のごとわりなき物はなかりけりかつむつれつゝかつぞこひしき。

凡河内躬恒

かれはてん後をもしらで夏くさのふかくも人のおもほゆるかな

人のかれ果てんのちを去らずして今は夏草の深きが如く深く思ふと也六帖には「かれはてん事をば去らで夏草の深くも人を頼みつる哉」と有【萬葉に「此比の戀のしげゝく夏草のかりはらへどもおひしくが如」「我せこに我こふらくは夏草のかりそむれどもおひしくか如】

よみ人しらず

あすか川淵は瀬になる世なりともおもひ初てん人はわすれじ

是は或人のいはく下にあるきのふのふちはけふの瀬になると云をとれるなりとそめてんはそめたらんのつゞめなり歌の意明らかなり

寬平の御時。后ノ宮の歌合の歌。

おもふてふことのはのみや秋を經て色もかはらぬものには有らむ

是は人の心はかはりても思ふと云詞のみはいく秋を經てもかはらずおもひ出るとなり【或人秋を飽によせしなりといふ說はあしゝ】

ある人云續後撰集に昌泰四年八月十五夜うた合の歌によみ人去らず「おしなべてうつろふ秋もあはれてふことのはのみぞかはらざりける」と見えたり寬平の御時と年もあまた隔たらず同じ歌合の歌なるにいと相以たるがいぶかしとなり

だいしらず

さむしろに衣かたしき今宵もや我をまつらん宇治のはしひめ

さむしろは延喜式に廣席長席狹席と有て狹席はせばくみじかきむしろなりされ共かくよむはそれまでもなくさは發語にてたゞむしろの事に心得べし衣かたしきは獨寐の丸寐をすれば我衣のかたゝかる、故にかたしきとはいへり宇治のはし姫といふ事につきて奇しき說どもあれどより所もなく云にたらぬ事なり【こゝの注に「又はうぢの玉姫とあれど例のとらず】思ふに萬葉にはしき妻はしき妹など多くよめりはしきとはくはしきと云事にてくはしきはいにしへよき事をのみいへり卽うつくしむ意なりさらば橋姫はゝし妻と云に同じく我うつくらむ妻の宇治にあるを思ひて今宵もや我を待らんにとよめる成べし又是は古歌なればゝし妻と有けんを後になほしつらんとおぼゆ

宇治のはし姫の事たしかなる書に見えず橋姫物語と云あとなしごとは取用ふべからず歌の心もくはし女に說なさんぞやすく聞えたるべしされど歌にはいにしへよりたしかならぬかたり事をもよみたるが見ゆれば今もそのたぐひとして難なかるべしくはし女をはしき妻はしき子らなどはよめれどはしびめと云し

例もなく又ゑひてはしづまなりしをはしびめにうつしなせしなりといはんもいかゞおばゆいにしへよりたしかならぬかたりごとをも歌によむは柘枝の仙女浦島子竹取の翁がたぐひ多かりけり【又濱ひめたつた姫も所につきて神をさへ申すなりこゝは橋本なる神の名によせて宇治なるおもひ妻が事に云歟】

君やこん我やゆかむのいざなひに槙のいた戸もさゝずねにけり

六帖にはやすらひに槙の板戸もさゝでとありいざよひやすらひ共にためらふ心なり【萬葉に「紅のすそ引道を中におきて我やかよはん君やきまさん」六帖の方古意にてよろし今はなほしてうつくしからんとせしものか眞木の板戸或説に櫻戸と云をむかへて枝の戸なりといへど萬葉におく山のま木の板戸と云はみ山には必大木の多きよりたゞ眞木と云なり【いにしへ眞木と云は大木を云にて何の木とはさゝぬ事なり】枝のみおく山に有物とするか櫻戸杉戸など云は杉の門櫻の門にて門に杉や櫻のあるさまを云にて戸の字に非ず板戸闇の戸などは家に付たる戸の字にて別なり歌の心あきらけし

今こむといひしばかりに長月の長明の月を待出つるかな　そせいほうし

けふの日の暮たらばとくこんと云をたのめおきし其人はこぬを猶僞とも云らず長き夜を今か〳〵と待に有明月の出るほとまで夜は更たれど人はまつにかひなく待ぬ月の出きぬと云て來ぬ虛言をあらはせるなり有明月は十五夜より後をいへどかやうに待わびたらんは昔日より後の月を成べし【ある説に一夜の事にあらず秋の始より長月までをかけて待心なりといへどたゞこよひとたのめる心にして感もふかくかつ篇次にもかなへり】

月夜よし夜よしと人に告やらばこてふにゝたりまたずしもあらず　よみ人しらず

月夜よしは月の明き夜なり夜よしは雨風雲のまよひもなくて靜なる夜なりこてふにゝたりはこんと云に似たりと云なりこよひこそよき夜なればと告やりたれば來んと云にゝたり【一説に月もよし夜もよければかゝる夜をいたづらに過さできませと告やらば人の心をはかり見るにさだめてこんと云に似たり吾も又此よき夜にはまたぬにしもあらねばいざ告やらんといへるにやとなりさらば告やらばの詞は聞ゆれどいとむづかしく説なしたり】さらば我も待ずしもあらずと忍びて待心也

萬葉に「我宿に梅咲たりと告遣者來云に似たり散ぬともよし」と云は花咲たりと告やりたれば來れかしと云にゝたりかく告やりたればよし物ちりぬともと云なり今はまたく此歌をうつしたるなればこゝも告やればと有べきを寫あやまれるにや

萬葉によりて告やればとよまんぞよかるべきが猶似たりの詞を説おほせぬにやとおぼゆかく告やりたればかしこにもこの夜おもしろきにいざなはれてやがてまからんなどいひこし給ふにゝたりと人して告やりて其使のまだかへらぬほどのひとり言なるべしかく思ひはかりて我も又またずしもあらずと云は戀する人のみだり心よりなり

君こずばれやへもいらじこむらさき我もとゆひに霜はおくとも

一説にこむらさきは濃紫なり男の髪とる元結は紫の糸してよるなりと又一説に元服の初もとゆひなりといへり男に限らず女の笄するにも男の元服のやうに髮をとり上て笄をさして額におくなり【萬葉にうま人のひたひがみゆへる染ゆふのとよめり】さらば女の始て笄するをも紫の初もとゆひと云べし近代絶たりとなり今按人を待歌なれば女の方成べしとて此注はあるなり

打まかせて云かなれども君や來ん我やゆかんとはいづれぞ男女を定がたし女のもとゆひの事さだかにより所を得て後云べし和名鈔に髻を毛度由比といへれば卽髮をもて元を結をもいひ又糸もてゆふをも云なり萬葉に「ゐあかして君をばまたんぬば玉の我黑髮に霜はおくとも」「待かねてうちにはいらじ白たへの我衣手に霜はおきぬとも」是らと同じ心なり

宮木のゝもとあらのこはぎ露をおもみ風をまつごときみをこそまて

木萩の枝をたわゝに露おきて風を待さまにいへるは歌の文なりさて其如く君をこそまてと云也もとあらの萩は木萩にて丈にあまりて生出る其根本はあらはなるを云世にめづる草萩は木よりも枝は云げく生てあらはならず萩の古枝と云も木はぎの方なり小萩とこゝろ得て草はぎの方に云はたがへり

ある書に陸奥の宮城野の邊にもとあらの里と云里在そこに生出たる故もとあらの萩とよぶといへりはやくに事好むものゝさる名を此歌によりてかい付たる成べし

あなこひし今も見てしか山がつの垣ほにさけるやまとなでしこ

あな戀しや今も見てしかなとねがふなり花の云まひを

見て我思ふ人をよそへて云なりいとあやしの所にこよなくうるはしきなでしこを見ていひたらんはいはん方なくをかし

つの國のなには思はず山城のとはに逢見んことをのみこそ難波の名を何はによせ鳥羽を常磐によせて何も思はずたゞ常磐に逢見ん事をこそおもへとなりとは、とこしなへの略にて常と云心なり

つらゆき

ふきしまのやまとにはあらぬから衣ころもへずして逢よしもがな

是は逢見て後まだほども經ずして又逢よしもあれがなとねがふなり上は序にて ふきしまは大和の地名なり欽明天皇磯城金刺宮に世を ろしめしてめでたき都なれば大和の國の冠辭にいひならはせり【磯城郡をわかちて城上城下と云もとは ふきしまの名のはぶかれたるなり】大和も一國の事なれど日本の總名となすに同じこと ふきしまの大和といひて日本の總名にいひなして唐とはつゞけたり

ふかやぶ

こひしとはたが名づけ〻む事ならんあぢさゐにいふべかりける

是はたゞ一すぢにいひ入たるにて歌の心明らけし六帖には誰が名づけ〻ることの葉ぞとあり

よみびとしらず

みよしの〻大川のべの藤なみのなみに思ひ我こひめやは

上は序にいひてなみ〳〵におもはゞ戀まじきをさは思はぬ故にいとこひしとなり大河の邊は地名にあらずいづこにても大河のほとりを云なり

かくこひむ物とは我も思ひにき心のうちぞまさしかりける

如斯戀しからん物とはかねて心のうちに占べおきつる其うらかたのたがはず戀しきはとなり源氏薄雲の卷にさがしき人の心のうらどもにも物とはせなどするにも云々心のうらとは心のうちのうらなり

天のはらふみとゞろかしなる神も思ふ中をばさくるものかは

思ふ中のはなるまじきを甚しくいはんとてなりとゞろは其鳴音なりさくるは鳴神の蹴さくを云

梓弓ひき野のつゞらすゑつひに我思ふ人にことのたげ〻む

我と思ふ人の中をとかくにいひそむれば後には人にいひさわがる〻事の ゑげからんとおもひけるなりひき野は河内國日置と書て今の俗にへきと云所在是なるべし梓弓をひくと云かけし冠辭也つゞらはかづらなり千葉の葛野といふごとく ゑげきよせにてあらん末つひには行すゑはたしてとの心なりこ〻に注有て「此歌はある人あめのみかどあふみのうねめにたまひけるとなん申す云々とらず

天のみかどの御事契冲委しく論せられていづれのみかど〻申御事さだかならずといへり

夏引の手びきの糸なくりかへしことたげくとも絶んとおもふな

ある人の云春子がひして糸は夏ひけば夏引の糸と云手して引ば手ひきの糸と云なりと一說に萬葉に夏麻ひくとよめれば麻の事なりと云說もあれどかひ子も夏引ば糸といひくりかへしと云によりて蠶の糸と云方よきに似たりさて人言はよし ゑげくとも夏引の糸をくりかへす如くかへすゞ〻中絶んと思ふなとなり隔句なり注に「此歌は返しによみて奉りけるとなん云事ありとらず

里人のことは夏野のしげくとらかれ行君にあはざらめやは

今やかれゆく方になる共あはざらめやよし人はいひさわぐとも今逢ずばつひにたえんぞとの心なり夏野の茂くともとは夏野の草の如くしげく人のいひさわぐと云なり

藤原の敏行の朝臣の。なりひらの朝臣の家なりける女をあひ ふりて。ふみつかはせりける。ことばに。いまはうでん。雨のふりけるをなん見わづらひ侍るといへりけるを。きゝて。

かのなみなにかはりてよめりける　在原業平朝臣

かずく〻に思ひおもはずとひかたみ身をしる雨はふりぞまされる

是は數々の女の中に思ひ給ふ方は雨にもとひ給ふらんさまで思はぬ方は雨にはとひがたく聞えこし給ふらむ我はそのおもはれぬ身をしる雨のふりぞまされると云なり

ある女の。なり平の朝臣なる所さだめすありきすとおもひて。

よみてつかはしける　よみ人しらず

おほぬさの引手あまたに成ぬれば思へどえこそたのまざりけれ

大ぬさは人あまた集りて手ふれて引物なればひく手あまたとはいへり能宣集に「みそぎする川の淵せにひく網を大ぬさなりと人や見るらん」古事記仲哀天皇の條に國の大ぬさもて祓せしめ云々天武紀にも大幣と書て ゑかよめり是らは朝家の幣なればこ〻とはこと物なり歌はさばかり心あまたなるには思ふともえこそたのまれずとなり

返し　なりひらの朝臣

おほぬさと名にこそたてれながれても終によるの瀬はあるてふものを

是は大麻の引手あまたと云をうけてさる名にこそたて

れ其大ぬさもはては川瀬にながれてよるべ有がごとく我もつひによる瀬はあらめ其瀬は君が所をとぞ思ひたのむと云なり流ても川の流に命のながらふるをよせてながらへて見たまへと云ほどの心をそへたるなり

だいしらず　　よみ人しらず

須磨の蜑のたほやく烟風をいたみ思ほぬかたにたなびきにけり

【すまはつの國也　域人は播磨也といへり誤まりなりされど二國の境にあれば播まぢやとはつゞくべしといへり】歌の心明らけし六帖にはいせの蜑のとあり萬葉に「玄かの蜑の鹽やくけぶり風をいたみたちはのぼらで山にたなびく」上はまたく是をとりたる也又躬恒集に「もしほやく蜑のたく火の烟こそおもはぬかたに立昇るらし」是は此歌の下をとりたるなり心もまたく同じ

玉がづらはふ木あまたに成ぬればたえぬ心のうれしげもなしかづらのはふ木あまたに成ぬるにかたぐ〳〵になびくをたとへてそれが故に我方にたえずおとづるゝ心の有もうれしげもなしとなり

誰が里に夜がれをしてか郭公たゞこゝにしもなれたる聲する

誰が里にか夜ごとにかよふ人の今宵たゞ一夜そこを疎くして我方にのみも寐たらんさまの聲するぞと郭公にたとへてうらめるなり夜がれ新撰萬葉に夜遊ともかけり

いで人はことのみぞよき月草のうつしごゝろは色ことにして

是は人にうつりやすき心は言葉に似ずと云なりつき草は俗に露草とも云此花をもて紙にそめ又それをうつして物を染ればうつし花と云なりうつし心は人にうつりやすき心なりことのみぞよきは源氏の蓬生につねにしもとふらひ聞えねどちかきたのみ侍りつるほどこそあれいと衰にうしろめたくなんなどことよかるをさらにうけひきたまはねば云々

偽のなき世なりせばいかばかり人の言のはうれしからまし

是は常言によみて心明らけし六帖に「世の中に絶て偽なかりせばたのみぬべくも見ゆる玉章」

いつはりと思ふ物から今更にたがまことなか我はたのまん

偽にこりながらも猶君がことの葉をこそたのまめ他心をもたねば誰まことをか今更に賴むべきとなり

素性法師

秋風に山の木の葉のうつろへば人のこゝろもいかゞとぞ思ふ

散をもかはるをもうつろふと云うちに秋風と有にはちる方なるべし然ば心の我によらずうつろふにたとへたり

ちるとかはるの論はおきてたゞうつろふと云のみにて人の心もいかゞとぞ思ふにてたりぬべし猶いはゞかはるといふ方に說なさばやとおぼゆ

寬平の御時。きさいの宮の歌合の歌

友　　則

せみのこゑきけばかなしゝまつごろしうすくやひとのならんとおもへば

上は薄くやといはん爲に時節の物をもてつゞけなせるのみなり【六帖にはならんとすらんとあり】蟬は六月の節たてば鳴物故に夏衣の薄さもおぼえて秋風さむくなるもほどなければ時節の變改する事を思ふなべに人の心もうすくやならんと思ふには此聲を聞が悲しきなりと云は入過たる說なるべし

だいしらず　　讀人不知

うつせみのよの人ごとのまぎれねばわすれぬものゝかれぬべらなり

うつせみは現身なり世の人と云冠辭なり是は思ふ人の去ばしかれ〳〵に成時よめるなるべし物のと云詞は物ながらをつゞめていへる也【いせ物語に「君こんといひし夜ごとに過ぬればたのまぬものゝこひつゝぞふる」】

あかでこそ思はん中はゝなれなめそなだに後のわすれがたみに（頭注わがれなめ）

とてもはなれなん中ならばあかぬうちにこそはなれなん其あかぬ心をだにとゞめおきて後のわすれがたみにせんとなりそをだにはそれをだになり

わすれなんとおもふ心のつくからに有しよりけにまつぞこひしき

さのみ思ふもくるしきに今は忘れなんと思ふ心のつけばかへりて思ひまさりて戀しきとなり【いせ物語に「わするらんとおもふ心のうたがひにありしよりげに物ぞかなしき」と有を新古今に入られしは今と別の歌とおぼせしものか是は今を少かへしにて我を他になしたるなり】げには殊異等の字義にてことにと云事已にいへり玉葉集に「わすれなん今はと思ふ時にこそありしにまさる物思ひはすれ」と云は今をとりてよめるなり後撰に今と上はまたく同じくて下の句ことのはさへやいへばゆゝしきといふもあり

わすれなん我をうらむな郭公人の秋にはあはんともせず

是は郭公は秋にあはぬさきに山へかへる物なるにたとへて人のあきなん時に逢じとおもへばまだきに我は絶んずるぞうらむる事なかれといへり六帖に「人よりも我こそさきに忘れなめつれなきをしも何かたのまん。

此歌兼輔集に入て女の歌なり返しは「わすれなば誰をいへり萬葉に天つちのそこひの浦天地のむかふすきかは人をうらむべきうきにおくれてしるは我かは。

たえず行あすかの河のよどみなば心あるとや人のおもはん　よみ人しらず

はみなど云に同じく雲の居るかしこのかぎりなり又野のそぎ山のそぎといへるはそこひをつゞめてそぎといへるにて野のかぎり山の限りを云なり

是は絶ずかよふ中にさはる事の有て夜がれせば事有故にやと人のうたがひ思はんとなり萬葉に「人ごとを玄げみこちたみあはざりき心有ごと思ふな我夫」「夏葛紅の絶ぬ使のかよはねば事しもある如思ひつるかも。

ばつ花そめの色ふかく思ひし心我忘れめや

意明らかなり紅の初花染はさいはりに衣はすらんともいふに同じく總て初花を專らとする中に紅は房のあまた有が中に其最中なるがはやく咲てよき色なる故に初花染の色ふかくと云なり

注に或人のいはくなかとみのあづまうどが歌なりとあり例のとられぬなるべし

淀川のよどむと人は見るらめどながれてふかきこゝろあるものを　河原左大臣

是はかよふ中のひまあるをいかにぞと人はうたがひぬらめど行末かけて長く思はんの心ふかければ中々にかかる物をとなり深きは淀のよせなり

嵯峨天皇之第八子母大原氏也貞觀十四年任左大臣寛平七年薨源朝臣融公と申す

そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそあだ波はたていたりて深き淵は水のさわぐ事なきが如くとかく人の云さわぐにもうつる心なし思ふ心の淺きにこそあだ波はたてと云を山川の淺みの立さわぐは色めきてとゞくしく見ゆるにたとふなりそこひは海の底川の底など下の限りをのみ云にあらず上下四方いづれにも遠く深き

みちのくのあさのぶもぢずり誰ゆゑにみだれんとおもふわれならなくに　そせい法師

是は陸奥に信夫郡と云がある故にしのぶ草といはん冠にみちのくといひしのみさてしのぶ艸もて衣を摺もとろかしたるは亂れたる物故にそれを心の一すぢならず亂るゝにいへり一度契おきしにはたとひいかなる誰にもその人に亂んとおもふ我にはあらずとなりわれならなくにのには萬葉を見るに皆助辭なり此歌の論百人一首古說にいへり玄のぶ草の事いせ物がたり古意に委しくいへりかの書共に見るべし

思ふよりいかにせよとか秋風になびくあさぢの色ことになる　よみ人しらず

ある說に思ふに過ていかにせよとか思ふにあらん淺ぢふの秋風になびくさまに玄たがへる人の色かはりて故のけしきに似ぬはとよめるなりといへりいかにせよとかといへるに戀の亂は聞ゆれば右の心につゞけり色ことになるは次の歌にて見るに色のことにかはり行なり秋風になびくを我になびくまでそへじと云はわろしただ色の異になるといはん爲に三四の句はよめりと見るべし

ちゞの色にうつろふらめどあらなくに心し秋のもみぢならねば　つらゆき

是は人の心はいろ〳〵にうつりかはるらんなれど其心は秋の紅葉の如く色に出て見えねば玄られぬと云なり色もなき心な人にそめしよりうつろはんとはおもほえなくに小町が「色見えでうつろふものはよの中の人の心の花にぞ有ける」と云歌の類なり

色ある物はうつらぬと云事なし色もなき我心なればうつろはん事は思はずと云なりされどいろもなきと云はまめなる心に染しをいへるか【六帖「おぼつかな何の色とはしらねどもたゞふかくのみ思ひそめけん】この歌は人の方より我心のかはれるやうにいひおこせし時の

蜑のすむ里のあるべにあらなくにうらみんとのみ人のいふらむ

是は海士の住里のしるべする物にこそいで其浦見んとはいはめそれにもあらぬ我をなどうらみんとは人の云らんとなり浦見んと云て怨みんをそへたり【六帖に「わたづみはつらき心やふかゝらんあまてふ蟹のうらみぬはなし】此歌は人の我を怨みんと云事をいひおこせしか又は人づてに聞てよめる成べし

ふもつけのをむれくもりびのかげとしなれる我なればめにこそ見えね身をばゝなれず　ふもつけのをむれ

【顯注くもる日のとありいづれにてもよし】慇したふ心は常に君が身をはなれずとなりさておもひやせて我身は影の如く成たれば影は身をはなれぬものゆゑいひよせてされどもくもり日のかげは眼に見えぬものなる如く人のめにこそゝれと見えねとふたゝびいひたるなり

こたへなるべし

よみ人しらず

めづらしき人に見むとやおもかもせぬ我した紐のとけわたるらん

【是より下五首は立かへりて戀る心なり】或人云珍らしき人とは絶て久しくとはぬ人なり去かもせぬはさもせぬなり我とかぬ下紐のおのづからとくるは來ぬ人に逢見ん去るしにやとなり古歌のすがたなり

かげろふのそれかあらぬかむら雨のふる人見れば袖ぞ濡ぬる

是はおぼめくばかりに絶たる人に逢見てそれかあらぬかと思ひ定ぬほどにも胸せまりて涙のこぼるゝと云を袖のぬるゝと云はふる人といはん爲の春雨よりつゞけたり【萬葉に「うつゝとも夢とも我は思はざりきふりたる人にこゝにあはんとは」】かげろふもそれかあらぬかといはん冠なり【かげろふは後世糸ゆふとよむ物なり】今の本文與儀抄にもふる人なればとあり六帖顯注等にふる人見ればと有をとる

堀江こぐたなゝしを船漕かへりおなじ人にや戀わたるらん

大船にふな棚うちてなど萬葉によめり小舟には其棚無きなり堀江は日本紀に仁德天皇の御時ほらしめたまふ事見ゆ難波ほり江ほり江の川などよめり歌は棚なし小舟【和名抄に枻をふなだなとよめり】のおなじ江に漕かへり世をわたるごとくつらく怨めしと思ひつゝ同じ人に年月を戀わたらんとなげくなり

六帖に下の句おなじ人のみおもほゆる哉とあり

伊勢

わたづみとあれにし床を今更にはらはゞ袖やあわときゆらん

【六帖には沫ときえなんと有】是は枕の下に海はあれどといへる如く涙をつよくいはんとて海と其にあれにし床といへり或説には海はあるゝ物なればあれにし床とつゞけん爲にわたづみといへるなり同人の長歌におきつ波あれのみまさる宮のうちはと云つゞけに同じといへりさてあれたる床とは問たえてほどへたるをいへりわたつみをうけて袖や沫と消なんといへるは涙の上に袖は沫の如くうかぶとなりはらはゞは床の塵をはらはばと云をことをはぶきたるなり【萬葉に「眞袖もて床打はらひ君まつとをりしあひだに月かたぶきぬ」】人の來るには必はらふべき物なり此歌後撰に宮づかへし侍りける女ほどひさしくありて物いはんといひ侍りけるにおそくまかりければ枇杷左大臣「よひのまにはやなぐさめよいその上ふりにし床も打はらふべく其かへしと

て今の歌有いせの集も同じ【此贈答のさまおぼつかなし別にろんあり】

つらゆき

いにしへに猶たちかへるこゝろかな戀しきことにものわすれせで

ある人云萬葉にいにしへ人とよみ此集にふる人とよめるはもとあへる人なりたとへばひさしくゆかぬ道などはわすれはてゝ行かたもおぼえずなるを戀しき事ばかりはさばかり物わすれもせでいにしへ人に猶立かへり戀る我心かなと人をそしるとて打かへしてほむる事有其體によめりと

六帖に戀しき事に物わすれしてとありさらば心かはれり

人をおのびにおひしりて。おひがたく有ければ。その家のあたりをまかりありきけるなりに。雁のなくなきゝて。よみて

つかはしける

大友のくろぬし

おしひでゝこひしき時は初かりの鳴てわたると人おるらめや

或人云鳴てわたるは詞書に見えて其家のあたりをまへわたりする心なり大和物語に盛命婦がふる里をかはとみつゝもわたる哉と云歌の詞書にも堤に在ける家を賣て後そのいへのまへをわたりければと書るに同じ

有のおほいまうち君。すまず成にければ。かのむかしおこせたりける文どもなどとりあつめて。かへすとて。よみておくりける

住ず成にけるとはいにしへは女の方へ智たる者のいきて住しなり枕のさうしにたのもしきものいみ去うしたてゝむことりたるにいくほどなくすまぬむこのさるべき所にて去うとにあひたるいとほしとや思ふらん云々

典侍藤原のはるかの朝臣

たのめこし言の葉今は返してん我身ふるればおきどころなしはやくたのめつる時の文などはことたがひて今の身にふさはしからねば有てかひなし偽てかへしてんとなり我身ふりたりとて人に忘られたれば身をおくべき所なしと云をふみのおき所なきにそへたり

近院の右のおほいまうち君

かへし

拾芥抄ニ云近院ハ春日ノ北烏丸ノ東號ニ松殿一右大臣能有ノ家也此右大臣は文德天皇の御子にて源ノ朝臣なり

今はとてかへすことのはひろひおきておのが物からかたみとや見む

おのが物からはおのが物ながらなり仁德紀に謗ニ曰有海人耶因已物以泣云々歌の心あきらかなり

頤ふらず

よるかの朝臣

玉鉾の道は常にもまどはなん人なとふとも我かと思はん

【玉ぼこは道といふ冠辭なり】或說に是はかよふ方有人のたま〳〵かりそめに來たる時君は道をまどひてこそ心ならずも我宿には來らめど猶今よりかく途にまどひつゝ人をとふとてはとひまどはし給ふとも我をさして問くると思ひてなぐさまんとなり又一說には人の許へ行文を門たがひして常にもまよひこよかしせめて我かと思はんとなりといへるは六帖に文たがへの歌として入たればなりされど歌の表にはしか聞えず同六帖に「月影に道まどはして我門にひさしく見えぬ人も見えなん」と有是に准らへて使にまどへと云にあらぬを知べし

よみ人しらず

まてといはゞねてもゆかなんしひてゆく駒のあしなれまへのたなばし

是は寢てゆけと止むれど聞かで去ひてゆく人の乘たる駒を爪づかせて膝を折てふさせよと橋にあつらふなり前の棚橋は人の家のまへの小川などに板にて棚のかたちに柱たてゝ渡したる小橋なり後撰に「去ひて行駒の足折る橋をだになど我やどにわたさゞりけん」と有は全く今をとりたるなり

中納言源の昇の朝臣の。あふみのすけに侍けるときに。よみてやれりける　閑院

源ノ昇は河原ノ左大臣の男淵の弟也閑院は源宗于朝臣の女なり

相坂のゆふづけ鳥にあらばこそ君がゆき〻をなくく〻もみめ

近江介は近江へ往來するをもて相坂をよめりさてゆふづけ鳥の如く泣くも見めとなり相坂はゆふづけ鳥をいはんとてなり

題しらず　伊勢

故郷にあらぬものから我ために人の心のあれてみゆらむ

是は凄まじきまで人の心のかはりしをふるさとによせてあれるとはいへり

窟

山がつの垣穂にはへるあをつゞら人はくれどもことづてもなし

和名抄に防己一名解離和名あをつゞらと見え延喜式にも青つゞら見えたりさてつゞらはくりよする物故に人のくるに云よせて上は序なり此歌六帖にはたづねくれども逢よしもなしと有て作者なし

さか井のひとざね

大和物語に土佐の守なりけるさかゐのひとざねといひける人やまひしてよわく成て烏羽なりける家に行とてよみけるゆく人はそのかみこんといふものを心ばそしやけふの別はと見えたり

大空は戀しき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらん

歌は明らかなり六帖に「大ぞらに我よぶ人も聞えぬを物おもふごとになぞといはる〻。

よみ人知らず

あふまでの形見も我はなにせんにみても心のなぐさまなくに

心明らかなり

おやのまもりける人のむすめに。いとしのびにあひて。物いひけるあひだに。おやのよぶといひければ。いそきよべるとて。裳をなんぬぎおきて入にける。そのゝち。裳をかへすとて。よめる　與風

まだ親のゆるさぬ中にたま〳〵あへるなり親のにはかによべば女あはたゞしく入ぬるあとに裳ばかまを脱わすれたるを男のとりてかへりて後にかへしつかはすなり

逢までのかたみとてこそとゞめけめ涙にうかぶもくづなりけり

浪にうかぶ藻に裳をそへたり源氏あかしの卷に御使なべてならぬ玉もかづけたりと書るも所がらによりて玉藻によき裳をよせていへるなり

題しらず　よみ人しらず

かたみこそ今はあだなれこれなくばわする〻時もあらましものを

是はかたみこそかへりて讐となるなれとなりあだはかたきなり此讐敵だになくばわする〻あひだもあるべきにえわすれぬがねたさにうれしかりつるかたみを今はあだがたきにさへおもふとなり

古今和歌集卷第十四打聽終

古今和歌集卷第十五打聽

戀ノ歌ノ五

五條のきさいの宮の。にしのたいに住ける人に。ほにはあらで。ものいひわたりけるを。む月のとほかあまりになんほかへかくれにける。あり所はきゝけれど。え物もいはで。またの年の春。梅の花ざかりに。月のおもしろかりける夜。こそ。なこひて。かのにしのたいにいきて。月のかたぶくまで。あばらなるいたじきにふせりて。よめる　在原業平朝臣

五條ノ后宮閑院ノ左大臣冬嗣公之女也仁明天皇之皇后文德天皇の母后諱順子と申奉る　西のたいは對ノ屋（對屋在二東西一）住ける人は誰ならん實に知がたし【住ける人とは御姪高子後に二條后と申がいとわかき時の御事なりと云はおしはかり言なり信ずべからず】ほにはあらで穗には あらでにてあらはにはあらでなり【穗とは草木のみの事にあらず何事にも秀にあらはれたるをいへり】今の本にも流布のいせ物語にもほいにはあらでと有我定まれる妻にはあらで物いふ故に本意にはあらぬ義に皆いへれど眞名伊勢物語には穗爾者と書たり今も玄か有けんを流布の伊勢物語によりて後になほせしものか本意とてはこゝの詞にふさはず梅の花ざかりに是も眞名いせ物語には【猶此段いせ物語の古意に委しくいへり】前之梅之花盛爾と有業平の家の前栽の意なり其頃かの西の對にも梅のある事歌にて玄らるあばらなる板敷は和名抄に亭をあばらやとよみて四壁なき事なれどこゝは思ふ人の他へうつりて人し住ねばかく云なり

板じきはよき人の家の客殿を云なりいせ物がたりに板敷のもとをはひあるきてと云所に見るべし

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

月もかつ見ながら昔の月に非ざるかとおぼえ梅も且見ながら去年見し花にはあらぬかとおもはるさらば吾身はいかにと思ひめぐらすに我のみ故のまゝにてこゝに來るはと云なり去年に似ぬと思ふ月と花とにむかへて我身一つはと云はのてにはにてことわれりさていかに月花のけしきのかはれるこゝちするにやと尋るに思ふ人のこゝにあらで物かなしき情より玄か見ゆるとなり

題しらず　藤原のなかひらの朝臣

枇杷左大臣仲平公也昭宣公之第二子にてまします日本紀略天慶八年九月一日出家同五日薨云々

花すゝき我こそしたに思ひしかほにいでゝ人にむすばれにけり

伊勢の集には二三の句我こそふかくたのみしかど有て詞に此男の兄なるをとこ有けり今はあの人は世にもとはじ何かたのみ給ふ我を思へなどせちにいへどふみばかりは見つゝも更にあはで有けりかくいふけしきもとの人は知たりけん女里に出て秋せんざいなどのをかしかりけるを花をなん手ずさびにむすびたりける此つらかりし人の來てよみたりけると見えたりある人も是にてよく聞えたりといへり【いせの集にはかく委しけれど今は題しらずとあればおぼつかなし】むすばれにけり日本紀に約の字をむすぶとよみたれば下に思ひし我はかひなくてあらはにも人に約したりとねたみてよめるなり【又思ふに約の字を云までもあらず草にはむすぶといふ詞のあるもてよせたるにもあるべし】人と指は兄の時平公なり薄は高くおふる故に下にとそへたり若は萬葉に「道のべの尾花がもとの思ひ草今更に何物かおもはん」とよめるによりて下に思ひしかとよまれたるにやあらん

藤原の兼輔の朝臣

よそにのみきかましものをおとは川わたるとなしにみなれそめけり

こはたゞ餘所にして音にのみ聞まじ物をといふを音羽川の名によせていかでかあふ事もなきに見馴そめて物思ふらんといふを川と云からわたらぬ物の水になるゝと云にそへたり川をわたるは人に逢にたとへて云事多くあり

凡河内躬恒

我如くわれな思はん人もがなさてもやうきと世をこゝろ見ん

【此歌拾遺に再び入て發句我ばかりとてよみ人玄らずと有】我思ふごとく我をも思ふ人もがなあれかしさありても猶世は憂物か試んとなり我思ふ人の我如く思はざる故によめる成べし人とては大かたを云がごとくにて思ふ人をふくめたり

もとかた

久かたの天津空にもすまなくに人はよそにぞおもふべらなる

人は我をよそに思ふさまにみゆるとなり

よみびとしらず

見ても又またもみまくのほしければ我人はいとふべらなり

我はあやにくに見まくむつるゝを人はかへりていとふげに有といとたがひたる事を云かけたるなり

紀のともの

雲もなくなぎたる朝の我なにやいとほれてのみ世をばへぬらむ

なぎたる朝は朝和なりなぐとは和らぐ意にて波のたゝぬをも風の吹やむにも云心のうへにてなぐさむと云も心のやわらぐなりさて雲もなく和たる朝といひて下にいと晴るると空のけしきをいひて我厭はるゝといふにそへたり

讀人しらず　秋

花かたみめならふ人のあまたあればわすられぬらん數ならぬ身は

花がたみは籠の目の花の如く見たてゝ云成べしかたばみと云も籠目なり【管家文草に霜雛數歩菊花殘更有二何人一比レ目沼此比目の字よくあたれり】めならぶは籠の目のならびて有がごとく其男の方によき女あまた並べもたれば數ならぬ我身は忘られぬらんと云なり目並ぶと云てあまたの人の事となれり

うきめのみおひてながるゝうらなればかりにのみこそあまはよるらめ

こは君が我にうとければ我は憂くてのみながらふるをたま〳〵よりくるもかり初の事にて實はなかるらんと恨みたり浮和布に厭目をよせ刈に假をよせていへり

伊勢

あひにあひて物思ふころの我袖にやどる月さへぬるゝがほなる

相に逢て袖と月とたがひにぬるゝとなり涙といはでもぬるゝといひ袖といへば聞ゆ濡るがほはぬるゝかたちと云なり濡るが如しと云に同じ【狹衣に「こひてなく涙にくもる月かげのやどる袖さへぬるゝがほなる」と少しかはりて今はくはしく聞ゆ】

よみ人しらず　秋

秋ならでおくしら露はねざめする我手枕のしづく成けり

心明らかなり

すまのあまの鹽やき衣なさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ

六帖にはいまだ來まさぬと有をさは筬の字なりある說に鹽やきのきる藤衣は筬のあらくよみの少ければ其間遠なるによせて【萬葉に「玄かのあまのしほやき衣のふちごろもまどほにしあればいまだ來なれず」全此歌をとりたるなり】君が住里と我宿とその道のほどの間遠にしあればにや君が來まさぬとなり

山しろの淀のわかごもかりにだにこぬ人たのむ我ぞはかなき

將はかる物故に假にだにといはん序なり或說にこもはわかき時からねばかりにだにも刈ぬを假初にも人こずとよせたりといへるは誤なりいと老てはかる物にあらず萬葉に若ごもをかるぢの池ともよむは弱きを賞して刈故なりさてたゞかりにといはんとてなり

あひ見ねば戀こそまされみなせ川なに、ふかめて思ひそめけむ

逢見ねば戀のみまさるを何とて心深く思ひ初けんと悔てなげくなりみなせ川を水なきとうけて淺き契りによせていへばふかめてに反しておける詞なり【みなせ川は水生川とも書て水のあさきよしなり水無瀨と書て水なき川とするは後のあやまりなり】

みなせ川の事既にいへり水の淺きとのみにあらず水たらで又川とも流るれば水生川とも書るなるべしここはたゞにふかめてといはんとにやあらん

曉の鳴のほれがきもゝはがき君がこぬ夜は我ぞかすかく

鳴の羽がきとは萬葉は羽振鳴といひたるにて心得べしはね打をあまたする鳥なり【日本紀に擊刀をたちがきとよめりかくは打の心なり】數かくといふに云よせてさて君がこぬにつきては幾度となく君が方へ心をかけわたすなり六帖には上の句は同じくてかきあつめてぞわびしかりけると有て又外に此歌をも入たり

搨のはしがきと云事は作物語に此歌をもて作りかへしものなりさるを同じ事に心得てもちひたるはいかにそれをも物がたりの方にて用ひんには難なかるべし

玉かづら今はたゆとや吹風のおとにも人の聞えざるらん

玉かづらは絶るといはんとてなり吹風も音といふ序なり心は明らけし

わが袖にまだきしぐれのふりぬるは君がこゝろに秋やきぬらん

時雨は秋よりふる物なれば秋や來ぬらんといへり立秋を云にあらず歌は聞えたり

山の井のあさき心もおもはぬなかげばかりのみ人のみゆらむ

こは人の我に玄たしからぬなり山の井はあさきものなれば淺き心によせて我はさも思はぬをいかで影などのやうにほのかにのみ見ゆらんとなり

わすれぐさたれとらましな逢事のいとかくかたき物としりせば

逢事のかくかたき事と玄りせばいかでわするゝやうにこそせましをと云を忘草の種をとりてうゑんものをといへり【わすれ草の事既にいへり】

こふれども逢夜のなきは忘草夢路にさへやおひしげるらん

【此歌後撰に再び入たり】我はかくばかり戀れども人の心のかよはねば夢にも見えぬ故にそなたの忘草の我夢路にさへ生らんとなり

夢にだにあふ事かたく成ゆくは我やいなれぬ人や忘るゝ

夢にも人に逢事のかたきは我嫌ぬ故か又は人の忘れはて、玉しひのかよはぬかとなり或説に逢ぬ夢をば見れどあふとは見ぬとまでいふは過たるべし下に我やいをねぬとあれば上の夢にだにをもやすく見るべし

けん牙い法師

もろこしも夢にみしかばちかゝりき思ほぬ中ぞはるけかりける

思はぬ中はゝるかに心の隔たればいへり

さだのゝぶる

登は仁明天皇の御子母は更衣三國氏也はじめ源ノ朝臣の姓をたまへり其後母の過失によりて屬籍をけづられ出家して沙彌源叡といへり貞觀八年還俗の勅ありて貞の朝臣を給ふ事三代實錄に見えたり

ひとりのみながめふるやのつまなれば人をしのぶの草ぞおひける

獨のみうれふにはながめがちなる年月をふるを長雨古屋とそへて其長雨によりて軒のつまに玄のぶ草のおふるを人をしたふ心のまさるとそへなしたり【しのぶ草の事既にいへり】

僧正遍昭

わがやどはみちもなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに

心明らけし

いまこむといひてわかれし朝よりおもひくらしのれをのみぞなく

【拾遺の物名に忠岑が歌とす】今來んといひて別れし其あしたより日ごとに思ひくらしてなげくといひてほどを經たる心なりさて蟬の鳴音をそへたり

讀人しらず

こめやとは思ふ物からひぐらしのなくゆふ暮はたちまたれつゝ

今はよもや問こじとは思へどさおもふ物ながらも日ぐらしの鳴音に催されて猶立またるゝとなりこめやとは思ふといひ立待れつゝと云にて日數をへたる心もあるなり

今しばとわびにし物をさゝがにの衣にかゝり我をたのむる

ひさしく待に問ざれば今はつひに來じとおもひ絶て打わびつゝもひたすらに思ひ絶がたきを蜘の糸の衣にかかりて人のくべき玄るしを見せしかばおもひたのまるると也今しのとは助辭にて今はと云なりわびにしと云にてほどへたる心有さゝがには日本紀私紀に云蜘蛛の別名也言其體如レ蟹住二左々原一故云と又蜘の衣にかゝれば思ふ人來ると云諺有によれりもろこしにも爾雅の説に一名長脚荆州河内人謂二之喜母一此虫來著二人衣一尙有二親客至一有レ喜也云々似たる事なりたのませるをつづめてたのむると云なり

いまはこじと思ふ物から忘つゝまたるゝ事のまたもやまぬか

止ぬかはやまぬかなの略なり心明らけし

月夜にはこぬ人またるかき曇り雨もふらなん花つゝもれん

絶て久しくこぬ人の待るゝをいへりたゞに今夜こぬ人にはあらず貫之集「雨ふらん夜ぞおもほゆるぬば玉の月にだにこぬ人の心は」六帖に「月夜にはこぬだにもこそ待ときけ曇るをかへす者にぞ有ける」「月夜にはこぬ人まつといとへどもふるよしもこそねられざりけれ。

うゑていにし秋田かるまで見えこねばけさはつ雁のねにぞなきぬる

心明らかなり萬葉に「住の江のきしを田にはりまきし稻のしかも刈まであはぬ君かも」又「春がすみ棚引田井にいほりして秋田かるまで思はしむらく。

こぬ人を待ゆふぐれの秋風はいかにふけばかわびしかるらむ

久しく來ぬ人を心に待暮の秋風はさこそとおぼゆ曾丹集に「我せ子がきまさぬよひの秋風はこぬ人よりもうらめしきかな。

ひさしくも成にける哉住の江のまつはくるしきものにぞありける

心明らかなりすみよしと書はわろし住吉と書てもずみのえとよむ事なりいにしへすみよしといひし事なし吉をえとよむは古言なり後によしとよみあやまりしなり【ひえを日吉とも書しを日よしとよみ來るは後のあやまりなり】

かれみのおほきみ

すみの江のまつほどひさに成ぬればあしたづのれになかぬ日はなし

心明らかなり鶴は松に多く住といひ久しきものなればいひかけたり

なかひらの朝臣。あひまりて侍けるを。かれがだに成にければ。ちゝがやまとのかみにはべりけるもとへまかるとて。よみてつかはしける　伊勢

いせの集に人のむこに成にければ今はよもとはじと思ひてもと在ける大和にいきて玄ばしあらんと思ひてと有てこの歌有此前に右のおほいまうち君のむこにとられにけりと見ゆ枇杷殿は菅原の右大臣の聟にならせ給へる時の事なり

みわの山いかに待見む年ふともたづぬる人もあらじと思へば

我は今はとはるべくもあらねば人をいかに待とも相見る事を得んやと深く思ひなげきたるなりよくとゝのひてやさしき歌なり同人のよめる「我宿は三わの山本さびしくとゝふらひきませ杉たてる門」是にはとふらひ

來ませといへど今はとはるべくもあらねばいかに待見んとなり

だいしらず　　雲林院のみこ

仁明天皇の御子諱人康と申奉る後に出家したまへり

吹まよふ野風なさむみ秋茅子のうつりもゆくか人のこころの上は序にて秋はぎのうつりゆくが如く人の心もうつりもゆくかなとなり

　　なのゝこまち

今はとて我身時雨とふりぬればことの葉さへにうつろひにけり（今の本にはしぐれに）

我身のふりぬれば今はとてたのめし人の言の葉もうつろふとなり時雨とふりぬればとは人のことの葉をもみぢによせんとてなり【新古今小町「木がらしの風にもゆきかへり空にのみしてふることは我ゐる山の風はやみなりこは贈れる歌にをとこを天雲によそへしかばそれをうけて其雲の如くいたづらに往かへりて中空にのみ經る事は山風のあらければ雲のおりゐる事もならぬが如くつらき心にえ住つかぬとなり我ゐる山とはやがてたとへられたる雲になりて女をさして山風といへりさておくれる歌の天雲と云をうけて往復（イキカヘリ）とのみいひて雲の詞をはぶけりすべていにしへは意をもはらとよむ故にしみちて人しれずうきことのはのつもる比かな】

返し　　小野のさだき

人をおもふ心このほにあらばこそ風のまにまにくちりもみだれめ風に玄たがふ木の葉の如き我心ならねばやすくは亂れじとなり

なりひらの朝臣。きのありつねがむすめに住けるを。うらむる事ありて。ふばしのあひだ。ひるは來てゆふさりはかへりのみしければ。よみてつかはしける

あま雲のよそにも人のなり行かさすがにめには見ゆるものから

天雲はよそといふ冠辭なりそれからよそに成行とも眼にはみゆる物からと云は天雲をうけていへるなり萬葉に「かくしのみ相思はざらば天雲のよそにぞ君は有べかりける」此外にも天雲のよそにさへ見し吾妹子などよめるは雲は遠くてのみ見ゆる物故に冠にのみおきたるをかく下へかよはせてたとへとせるはいにしへはなき事なり【萬葉にてもならの朝にいたりては一二首ばかり冠辭をも下へうけてよむなりと見ゆるがあり】物からはものながらなり

かへし　　なりひらの朝臣

こは贈れる歌にをとこを天雲によそへしかばそれをうけて其雲の如くいたづらに往かへりて中空にのみ經る事は山風のあらければ雲のおりゐる事もならぬが如くつらき心にえ住つかぬとなり我ゐる山とはやがてたとへられたる雲になりて女をさして山風といへりさておくれる歌の天雲と云をうけて往復（イキカヘリ）とのみいひて雲の詞をはぶけりすべていにしへは意をもはらとよむ故にしか贈れる歌の詞にゆづりてか又はし書などにも打まかせてそれがうへをよむ事なり風はやみは風はやくしてなり

だいしらず　　かげのりの王

唐衣なればみにこそまつほれめかけてのみやは戀んと思ひしつゝ

衣の馴れては身にまつはれつく如く人にもなれゆかばさりともむつまじくこそならんと思ひし人の玄かあらで今逢事はなく衣架（ハンガケ）にのみ懸おく如くよそにのみ心にかゝりて戀ん物とは思はざりしとなり

　　とものり

秋風は身を分てしらふかなくに人の心の空になるらむ（友則集にはふかれども）

秋風は我身人の身とわけてはよもふかじをなどかく君が心のひとつにはなくて空に成らんとなり一本に空に散らんと有【大井川の序につたなきことのはゝ吹風の空に亂つゝといへり後撰に「身を分て霜やおくらんあだ人のことのはさへにかれもゆくかな】それにつきて或說には次の歌の秋よりさきの紅葉といへるによりて思ふに空に散らんとは紅葉にそへていへるか秋風にちる物は木葉なれば其詞をすゑざれどそれと聞ゆるをば後の歌の如くきびしくはいにしへはいはざりければ此歌も其心にや身を分てと云に人をわけてと云との二義可有と云々

　　源宗于朝臣

つれもなく成行人の言の葉ぞ秋よりさきのもみぢなりける

是は始よりつれなきにはあらで後にしかなりたる人の心なり秋より前のもみぢ葉とはことのはのはやくかはれるをいへり【宗于集三の句ことのはや末の句もみぢなるらんとあり】

こいちそこなへりける比。あひ志りて侍りける人の。とはで。こいちおこたりてのち。とむらへりければ。よみてつかはしける

　　兵衛

高經朝臣のむすめなりといへり

志でのの山ふもとを見てぞかへりにしつらき人よりまづこえじとて

死出の山の山の麓までは行たれど我一人さきだゝん事のさすがなればこえずしてかへりしとなり【顯昭本ふもとよりのみかへりきぬ】死出の山は黃泉（コセヅク）の道なり後撰に公賴朝臣のむすめにしのびて侍けるに煩ふ事ありて玄ぬべしといへりければ朝忠朝臣「もろともにいざといはずばしでの山こゆともこさんものならなくに」又人

のもとより久しくこゝちわづらひてほとゞしくなん有つるといひて侍ければ閑院の大君「もろともにいざとはいはでしでの山いかでかひとりこえんとはせし。

あひしれりける人の。やうやくかれがたになりけるあひだに。やけたるちの葉に。文をさしてつかはせりける　こまちがあれ

後撰にも小町が姉として三首まで見えたり又小町がうまごと云も有小町が名の高きによりて先名を上てさて姉孫など、云るせりやけたる茅の葉とは春野をやきたる時に燒のこりたるなり

時過てかれゆくなの、あさぢには今はおもひぞたえずもえける

こは我齡の時過て人のかれゆくをそへ小野の淺茅といふに我氏をもよせたり伊勢が歌にいせの海のあまとよめるが如しさて今は思ひぞ絶ずもゆると云は思ひのひに火をよせたり

物おもひけるころ。ものへまかりける道に。野火のもえける　伊勢

なを。見てよめる

冬がれの野べと我身を思ひせばもえても春を待たまし物を

【六帖には末の句待べきものを】冬野の草も霜かれて後野火に燃ても猶春を待たのみあるを我うき中はかれて後我おもひのみひとりもえてたのむ方なきこゝろなり

題しらず　友則

水の沫のきえて憂身といひながら流れて猶もたのまるゝ哉

こは水の沫の消てうくといひかけてうき身と云ながら猶ながらへてもたのまるゝなりうくといひ流るゝと云皆水の緣の詞なり六帖には三の句思へども友則集には知ながらと有て流れて猶といへり

よみ人しらず

みなせ川ありて行水なくばこそつひに我身をたえぬと思はめ

こゝみなせ川といへど水は有て流行を其水の名のごとくたえてなくならばこそ人の我に絶えなるもつひに我身も思ひ忘れぬると思はめありつゝ行水の有が如く猶思ひにかけとまりて有となり

みなせ川の水のながれては一度地下をくゞりて又あらはるゝにたとへて又もたのまるゝ事もや絶たるまにてはあらじとの心なるべし

みつね

よしの川よしや人こそつらからめはやくいひてしことは忘れじ

今こそ我思ふ人のつらくとも其人のもといひし事はわすれじとなり

よみ人知らず

世の中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞ有ける

世中の人とひろくいひて心は一人にて有なり花染はつき草をもて染るなり六帖には卽月草とあり宇治拾遺物語に色背き大君を背經と付てわらひける事を書るも色は花をぬりたるやうに青じろにてとかけり

心こそうたてにくけれ染ざらばうつろふこともなしからましや

【うたてはことざまなる心既にいへり】我こゝろこそうたてにくけれなりもし染ずしてあらばうつりかはる事もをしまざらんをといへり或人の是は上の歌と二首にていひはてたるなり萬葉には此格多しいろともいはで染ざらばとは上の花染にすれるをうけて云なりもし別人のうたならば用をいひて體をあらはすと知べしと云々うつろふはかはるなり

こまち

いろ見えでうつろふ物は世の中の人の心の花にぞ有ける

【色見えてと淸てよむといふはわろし】是はなべて草木の花はうつろふ色を見する物なるに人の心の花のみうつろふ色も見えずしてうつり行とよめりこも世中の人といへど人ひとりを指すなり

よみびとしらず

我のみや世をうぐひすと鳴わびん人のこゝろの花とちりなば

人の心の花と共に散なばたゞ我のみ世をうき物と泣わびてやあらんとなり世をうきといふをうぐひすにかけてなくとはいへり

そせい法師

思ふともかれなん人をいかゞせんあかずちりぬる花とこそ見め

相思はでかれゆく人をば怨ひて思ふともいかゞといめん花のちるをもさこそをしめどせんすべなくてちらせば其たぐひの如く見てこそ過さめとなり

よみびとしらず

今はとて君がゝれなばわが宿の花なば獨見てやしのばん

【以上四首は一類なり】或人云女の歌と見えて哀にやさしく侍る哉下の句は二人見たりし時を思ひ出てや忍ばんとは云なり

むねゆきの朝臣

忘草かれもやするとつれもなき人の心に霜はおかなん

つれなき人の心に霜はおけかしおひたる忘草の枯もやせんとなり

寛平の御時。御屏風に。歌かゝせたまひける時。よみて書け

そせい法師

わすれ草何なかたれと思ひしほつれなき人の心なりけり

忘艸は何をたねにて生らんと思へばつれなき人の心が種なりけりと始て知となり小町集に「忘草我身につまんと思ひしは人の心におふるなりけり。

題しらず

秋の田のいねてふことのかけなくになにをうしとか人のかるらん

こは行去と云事もいはぬに何を我上にうしとてか人はかるらんと云を秋の田の稻につゞけさて刈ものなれば疎るにそへたり

紀貫之

ほつ歴の鳴こそわたれ世の中の人の心のあきしうければ

此世の中の人も人ひとりをさすなり

よみ人しらず

あはれともうしとも物を思ふ時などか涙のいとなかるらむ

憂時はいたくなげく事なればいたく物思ふ事をいはんとて哀と憂とをかさねていへりさてうき事をいたく思ひなげく心のいとまなきにいかなるひまより涙のもり來てそれも又いとまなく流るらんとあやしむなり【後撰「春の池の玉藻にあそぶにほ鳥の足のいとなき戀もするかな】いとなきはいとまなきなるをいとながるゝと云にかけていへり【日ぐらしの聲もいとなく聞ゆるは秋くれかたになれるなりけり】

身をうしと思ふに消ぬものなればかくてもへぬる世にこそ有けれ

身の憂時は消もうせなばやと思へどそれも叶はねばかく人に忘られて有にもあらぬ身ながらせんかたなくながらふる世なりといへり

典侍藤原直子朝臣

六帖には内侍のすけきよい子とあり

蟲のかる藻にすむゝしのわれからとれなこそなかめよをばうらみじ

藻に住蟲の名をわれからといへばかくつゞけたりわれからとは何事も我からと思ひ人は怨みじと云を廣く世をば怨みじといへりわれからと云蟲をさま〴〵と說あれど正しき事はいまだ知がたし【近來物產者の小虫の圖をして是なりといへどいつはりごとなり】

われから六帖には別に題に出せれば其世には人云りたる物なるべし且歌に藻にすむ虫の名をわすれつゝとよめるは貝などの一名にてわれからは破殼の事とも思はるゝなりいせ物語にもわれから身をもくだきつるかなとよめりとこは友なるまさのりが思へるなり猶くはしき事はえれがたし

或注に桓武天皇の孫基世王之女也といへり此王は仁和五年正月任二因幡守一云々又或說に因幡ノ權ノ守なりといへり伊勢守繼蔭が女にて伊勢とよぶに同じ

いなば

あひみぬもうきも我身の唐衣思ひまらずもとくる紐かな

こは人のつらきにあらず吾心と人にあかるゝそれ故に憂思ひの有もみづからの心よりなりさるに下紐のとくるは人に逢べきさいつさがの如くなれば吾心を下紐は思ひしらずとなり

寛平の御時。きさいのみやの歌合のうた

すがのゝたやおむ

三代實錄元慶三年十一月中宮ノ大進菅野朝臣直臣等並授二從五位下一

つれなきを今は戀じと思へども心よわくもおつる涙か

こは相見て後つれなき成べし涙かは涙かなゝり

だいしらず

伊勢

人をれすたえなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはましものを

【六帖に三の句やみなましかば】人に知れず中絶たらばそれなだに思ふ事とて我やどをみきとないひそ人のさかくに

今はそれば かりの事も有しより思ひ馴たる事とて人の聞所に吾宿を見つるとないひそ人のうたがひ思ふべきにとなり【後撰に「なき人を人のきかくにかけしとてしのぶるほどぞわするとな見そ】中々に云られず知ぬ昔にかへりて絶たる時の歌なり見きとないひそは見けりとないひそなりきかくはきくをのべたる詞なり大和物語に桂のみこいとみそかに逢まじき人に逢たまひたりけりをとこのもとへよみておこせたまへりけるとて此歌ありされどそこにては心たがへれど作物語なればかれは論無し

逢事のもはらたえぬる時にこそ人の戀しきこともまりけれ

心明らかなりもはらは專の字の義なり

わびはつる時さへ物の戀しきはいづこを忍ぶ涙なるらむ

人の絶てわびはつる時さへ猶とにかく我は忘れやらず物の悲しく思はるゝは何をなごりとてか忍びに涙はおつらんとなり此歌後撰には男の忘れ侍りければ伊勢が

歌とせり且家の集にも見ゆ

藤原のおきかぜ

うらみてもなきてもいはんかたぞなきかゞみに見ゆる影ならずして
鏡の影より外には今は我にむかふ物なければ絶にし人
のつらさを怨みても泣てもいひやらん方なしとなりさ
て影に非ずしてと云殘して人は絶はてたればと云事を
云らせたり

讀人しらず

夕されば人なき床を打はらひなげかんためとなれる我身か
人の絶て後かゝる歎きせん爲とて世には出こし我身か
と獨寢の床を打はらひて女のぬるとてよめるなり【萬
葉に一あすよりは我玉床をうちはらひ君とはねずてひ
とりかもねん】

わたづみの我身こす波立かへり蛍の住てふうらみつるかな
是は陸奥歌に末の松山浪もこえなんと云をとれりかは
り果たる人を立返り恨むるもはかなしとなり

あら小田なあらすきかへしくても人の心を見てこそやまめ
人の心のかはりはてたるとは見ゆれど猶委しく見はて
て後こそ思ひやまんずれとなり或説には小田は度々す
きかへし作るなり始にすくをばあらすきとてあらく
とすくなり

ありそ海の濱の眞砂とたのめしはわする、事のかずにぞ有ける
こは濱の眞砂の數に寄て末ひさしくかはらじとたのめ
しは忘る、事の多きなりけりとなり後撰に「ときは
にとたのめし事はまつほどの久しかるべき名にこそ有
けれ。

鷹べより雲井をさして行雁のいやとほざかる我身かなしも
心明らかなり萬葉に「秋風に山飛こゆる雁がねのいや
遠ざかり雲がくれつゝ。

しぐれつゝもみづるよりもことの葉の心の秋にあふぞわびしき
人の心の秋にあひてたのめつる言葉のうつろふが時雨
してもみづる比の大方の秋よりもわびしきとなり【新
撰萬葉に「ことのはをたのむべしやは秋くればいづれ
か色のかはらざりける】

秋風のふきと吹ぬるむさし野はなべて草葉のいろかはりけり
或説に秋風を人のあくにそへたり武藏野は紫の一本ゆ
ゑの心にてなべて草葉の色かはるとは皆ながらあはれ
といひしゆかりの人さへつらくも我をあきぬる時は皆
心かはりぬとそへて云なるべしといへり

秋かぜにあふたのみこそ悲しけれわが身むなしく成ぬと思へば
秋の野分にあふ田の實はむなしく成をたとへていみじ
くたのみし事も忘られぬればむなしく成ぬると云なり
むなしくは死を云にあらず我身かひなくといはんが如
しそれは田の子のなきより空しくといひたのめし事の
我身にむなしく成たるとなり

平のさだぶん

秋風の吹うら返すくずの葉のうらみてもなほうらめしきかな
此秋風もあくをそへていへり或注によろづの草の中に
眞葛はことに風にうらがへる物なりよてくずの葉のか
へるともうら見ともよむなり【六帖に秋風に吹かへさ
るゝとあり】

讀人しらず

秋てへばよそにぞきゝしあだ人の我をふるせる名にこそありけれ
あだ人にふるさるゝをも我身の秋なるをしらでよその
事に思ひつるがはかなきとなり【一本よそにて聞しと
ありよからず】古せるはめづらしまぬなり秋てへば、
秋と云へばなり時雨つゝと云より是まで秋をあくによ
せたる歌どもなり

忘らるゝ身をうぢはしの中たえて人もかよはぬ年ぞ經にける
身をうぢ橋とよするに寄て中絶て人もかよはぬともい
へり【こゝにも注有て又こなたかなたに人もかよはず
と云々】中たえてと云はたゞ歌のうへにていへり宇治
橋の中絶たる事は古紀によん所なし

坂のへのこれのり

逢事をながらのはしのながらへてこひわたるまにとしぞへにける
あふ事を無きとかけたりこれも中たえての後あふ事の
なきなり

友のり

うきながらけぬる沫とも成なゝん流れてとだにたのまれぬ身は
こは水の沫の水に浮ながら消ぬると云浮を憂にそへた
りながれてはながらへても末つひにあふべきたのみも
なしとなりさらばたえ死なんとねがふなり【六帖には
きえせぬ沫と有て末の句もたのまれなくにと見えたり
後撰に「流ての世をもたのまず水の上の沫にきえぬる
うき身と思へば」中づかさの集に「うきながらきえせぬ
物は身なりけりうら山しきは水の沫哉」是ら今をとれ
り】ならんと云詞萬葉に「秋の田のほむけのよれる片よ
りに君によりなくこちたかりとも」此よりなゝはよら
なを延たる詞なり今のなりなゝんも成なんといふなり

よみびとしらず

ながれては妹背の山の中におつるよしの丶川のよしや世の中流ては丶ながらへての心なり妹背の山の中にさへもよしの川の流來て隔たるを思へば男女の中らひもすべて我のみならず世は皆かくぞよしや世の中とひろくうらみたるなり序によしの川を引て恨つると書る此歌を思へるなりよしやとは假にゆるす詞にて心にはあらねど世の中のならひにしあればよしやと云なりいもせ山萬葉集に越二勢能山一時阿閉皇女御作歌「是や此大和にしてはわが戀る紀路にありとふ名におふせの山」此皇女の夫とよばせ給ふは草壁皇太子の御事なり常にも御契ふかきものから此勢山と云山を越ます時に我こふる夫の山ぞとよませ給ふなり是をもて思ふに妹山は大和に在て勢山は紀の國に在其中を流る丶川を大和にしてはよしの川とよび紀路に入ては紀の川とよぶもて中におつるよしの丶川とはいへるなり此歌は廣く夫婦の中らひをいひてこと葉をべと丶もによくと丶のひてめでたきなり夫の山の事猶萬葉に委しくいへり

古今和歌集卷第十五打聽終

古今和歌集卷第十六打聽

哀傷歌

あいじやうのうたこ丶の詞にはかなしびうたと丶なふべし

いもうとの身まかりける時。よみける　小野のたかむらの朝臣

此妹の事或抄に云玉葉集に妹のをかしきを見て書つけ侍りける參議篁「中にゆくよしの丶川はあせな丶んいもせの山をこえて見るべく」返し參議岑守ノ女「いもせ山影だに見えでやみぬべくよしの丶川は濁れとぞ思ふ」又新千載集に此かへしも見えたり「にごる瀬は袁ばしばかりぞ水しあらばすみなんとこそたのみわたらめ」此贈答ありし妹なるべし又續古今集に「身のならん淵せも袁らずいもせ川おりたちぬべきこ丶ちのみして」是も妹につきてよまれたる成べしと云々さておもふにか丶れば此朝臣は常の行ひみだりなりと云べきに其事跡を尋れば袁かるべくもあらずわかき時は弓馬のつとめ專らにて學業の聞えなし蟋蟀天皇のはづかしめにあたりて始て志誠をおこしほどなく文章生より立て大内記東宮の學生等に進て承和元年の唐使にえらばれ律の文義の辨じがたきをことわりなし父の岑守の喪にあひてかなしび禮に過たりといひもとより家まづしかれど母につかへて至孝なりといひ公條は皆親友にほどこすと云事々道にあたれる人なり仍て按ずるに是はいにしへ同腹の兄弟は配偶を禁しむれども異腹なるは婚せし事皇子皇女にあまたありて國史にいち袁るし此代までは猶さる法令の遺りて此妹も異腹なれば咎なき事にて有ける成べし法令は其時々有物なれば今を以ていにしへを論ずまじき事なり異腹だにも罪とせる代にいたりてはこれらの歌はえらびとらるまじき事なり玉葉新千載等の御代にはいかゞありけんを袁らず

なく涙雨とふらなんわたり川水まさりなばかへりくるかに

こは我泣涙のとてもならば雨の如くふれかし其雨にてわたり川の水增りなばえわたらでかへりくる事もあらんをとなりわたり川は三途川の事なりみつせ川ともいへり【拾遺に「みつせ川わたるみざをもなかりけり何に衣をぬぎてかくらん」】

或抄に十王經には奈河と云よし見えたり彼經は信用に足ざる物なりされどわたり川三つせ川ともふるくよみたりと云々

ささのおほきをほいまうちぎみを。白川のあたりにおくりける夜。よめる　そせい法師

三代實錄貞觀十四年九月二日太政大臣從一位藤原朝臣良房薨同十月四日贈正一位又以二美濃國一封之爲二美濃公一謚忠仁公云々白河のあたりとは愛宕郡の後愛宕墓と申すなり【一說に白川に住たまへると云はあやまりなり】おくりける夜は葬送の夜なり

ちの涙おちてぞたぎつ白川は君が世までの名にこそ有けれ

今は血の涙の瀧津瀨と落て流るれば卽紅涙の川と成て白川と云は君が在世までの名にてこそありけれとなり

ほり川のおほきおほいまうち君。身まかりにける時に。ふかくさの山になをさめてけるのちに。よみける

關白太政大臣基經公也堀河の家におはし丶故に堀川の大臣と申す寛平三年正月十三日薨謚曰二昭宣公一

榮花物語にこはたと云所は太政大臣もとつねのおとど後に御いみな昭宣公なり其おとゞのてんじおかせり給へし所なり藤氏の御はかとおぼしおきてたりける所にと云々この木幡は深草山のうしろにて尾つゞ

きなれば深草山にと云が卽こはた山にや猶かんがふべし

僧都勝延（しやうえん）といなふ

俗姓紀氏承均法師の兄也といへり

空蟬はからを見つゝもなぐさめつふか草の山煙だにたて【遍昭集に此歌をのせて深くさ山に納奉りしを思ひ參らせん心のほどはおもひやるべしと有て歌は下の句烟だにたてふかくさの山とあり然ども遍昭集は信ずべからぬものなり】

虛蟬はゝかなき物にあれど蛻（ムケガラ）を見つゝもなくさむるを人は骸（カラ）をもとゞめねばせめて烟だにたてこれを今云ばし見てだになくさまんとなりうつせみとはいにしへの詞には現身の事にてうつしみうつそみなどもいひて蟬の蛻（ムケ）の事にいひしはなしや、此比よりもぬけがらの事にいへりと見ゆ猶冠辭考に委しくいへり

かんづけのみれな

或抄云崇神紀云以二豐城命一（トヨキノミコトヲ）令レ治レ東是上毛野君下毛野君之始祖也三代實錄云貞觀五年十月廿一日天皇宴（スル）二太政大臣於內殿（ニ）一以賀（スル）二滿六十之齡（ヲ）一太政大臣家令從五位下難波朝臣淺麻呂菅野朝臣弟門並授（トニトモニ）二從五位上（ニ）一從五位下上毛野朝臣滋子授（ニ）二正五位下（ニ）一慶賀之餘歡恩普及（ニ）二餘家人（ニ）一也云々此家人の中に上毛野氏の女もあれば岑雄も家人なるべくおぼゆ

深くさの野べの櫻し心あらばことしばかりは墨染にさけ

是はなき人を納る野べなれば櫻も心して人の藤衣を著る春には花も墨染にさけと悲しみの切なる心よりいへり【拾遺にすざくゐんの御なゝなぬかの法事にこの池の面に霧のたちわたりて侍りけるを見てあつたゞ「君なくてたつ朝霧はふぢ衣池さへきるぞかなしかりける】公の薨じ給ふは正月なれ其詞書に深草山に納めてける後にとあれば二月の末などに花の咲たるを見てよめる成るべし

藤原の敏行の朝臣の。身まかりにける時に。よみて。かの家につかはしける

紀友則

拾芥抄に延喜七年卒すと見えたり後撰集にやまひし侍りて近江の關寺にこもりて侍りけるにまへの道より閑院のみこの石山にまうでけるを唯今なんゆき過ぬると告侍りければおひてつかはしけるとしゆきの朝臣「逢坂のゆふつげに鳴とりの音を聞とがめずに行ぞ過ぬる」此度の事にやれてもみゆれでも見えけりおほかたはうつせみの世で夢にはありけるど顯昭本並に六帖にも見えけりとあるをよしとす】寢でも見えけりはうつゝを云さるは寢て見るばかり夢にもあらず現（ウツツ）も又夢なれば世は何事も夢なり敏行朝臣の身まかられしを世のはかなきに思ひくらべてなげくなり

あひまれりける人の。みまかりにければ。よめる

きのつらゆき

夢とこそいふべかりけれよの中をうつゝある物とおもひける哉

【此歌拾遺にふたゝび入られたり】こゝろ明らかなり今の本に世の中にとあるはわろし六帖に世の中をとあるをよしとすうつゝある物と世の中を思ひけるかなとつづくなり

あひしれりける人の。身まかりにける時に。よめる

にぶのたゞみね

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはんはかなき世をも現とはみず心あきらけし

あれの身まかりける時に。よめる

閑院

さきだゝぬくいのやちたびかなしさは流るゝ水のかへりこぬなり

こはさきだつべき身のさきだゝずして悔む事の幾千度も悲しきは流水の如くにて人のみまかりしも其如歸來ぬとなり萬葉の長歌に「行水のかへらぬごとく吹風のみえぬが如く跡もなき世の人にして」下略之

紀のとものりが。みまかりにける時に。よめる

つらゆき

或人云是は此集成て後にくはへたる歌なり後の歌も同し又一說には友則は秋の部までの撰に立あへしといひ瀨をせければ淵と成てもよどみけり別れをとむるしがらみぞなき

【此歌家集には相知たる人のすまひの使に遠き國へくだるにと有て事たがへり】こはゝやき瀨もせきとむれば淵と成てもよどみとまるを死の別れはとゞめんよしのなければと云を淵瀨の緣によせて云がらみぞなきといへり萬葉にあすかの皇女をいたみて人まろのよめる歌「あすが川云がらみかけてせかませば流るゝ水もものどにかあらまし。

藤原のだゞふさが。昔あひしりて侍ける人の。身まかりにける時に。弔ひにつかはすとて。よめる

閑院

又一說には撰集終らぬうちに失ける時よめりといへり
共にあやまりなり其故は泉の大將の四十の賀は躬恒集
に延喜十四年と有にも友則の歌入たればなりと

あすしらぬ我身と思へどくれぬまのけふは人こそかなしかりけれ

【此歌拾遺にふたゝび入られたり】こゝろ明らけし家集
六帖等には二の句命なれ共と有て末の句家集にあはれ
なりけれと有

たゞみれ

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだに戀しきものを（一本時しまれ）

【六帖に「思ふどちあるだに秋はかなしきに草のかれ
がれなるぞかなしき】是は世に在人を見るだに何とや
ら戀しき心のせらるゝ秋に人に別るべきかは時にもよ
るべきにとなり時しものしもは必しもなどの例にて助
語なり

はゝがおもひにて。よめる（一本おもひにはべりてよめる）

凡河内みつね

父母の喪はおもひといへり

神無月時雨にぬるゝもみぢ葉はたゞわび人の袂なりけり

わび人は悲しみにまどひぬるわび人の事にてたゞに自身をいへり【後撰に「から衣たつ田の山の紅葉はものおもふ人のたもとなりけり】

ちゝがおもひにて。よめる

たゞみれ

ふぢ衣はつるゝいとはわび人の涙の玉の緒とぞなりける

藤衣とは喪服を云端を縫ぬ物故日來有中に糸のはづる
るなり兼輔集に「藤衣うきをかぎりにはづれつゝ涙の
玉をぬきてかしつる【此歌拾遺に再入て服ぬぎ侍ると
てよみ人不知三の句君こふる末の句緒とやなるらんと
云たり】

おもひに侍りける年の秋。山寺へまかりけるに道にてよめる

つらゆき

あさ露のおくての山田かり初にうき世の中をおもひつるかな

【一本おくてのいな葉とありいづれにても聞ゆ】よの中
のはかなきをさきぐ〳〵には唯假初に思ひしが今ぞ深く
世の常なき事をしらるゝとなりつる哉とは過し事なれ
ばなりさて朝露のおくとつゞけ山田をかりといひ序な
がら道のゆく手のけしきをもてよめるなり

おもひに侍りける人を。とむらひにまかりて。よめる

たゞみれ

墨染の君が袂は墨なれやはれず涙の雨とのみふる

【拾遺によみ人しらず「すみ染の衣の袖は雲なれや汨の
雨のたえずふるらん」と有大方同じきはいぶかしき也】
詞書にあはせてかくれたる心なし墨染の袂はこれも藤
衣なり

めの。おやのおもひにて。山でらに侍りける。ある人のとむらひつかはせりければ。返り事によめる

よみ人しらず

落くぼ物語に大將の女の父の喪に里にゆきてこもりた
まふを大將もこもらんとのたまひしを御子などあつか
ふ人なければこもり給はぬよし有今も去うとの喪にこ
もるなり

足曳の山邊に今はすみ染の衣の袖のひる時もなし

心明らか也

涼闇のとし。池のほとりの花を見て。よめる

たかむらの朝臣

涼闇日本紀にみものおもひとよめり嘉祥三年三月廿一
日に仁明天皇崩御なり此年なるべし

水の面にしづく花の色さやかにも君がみかげのおもほゆる哉

水の面にうつれる花のさやかに見えておほんおもての
まさしくおぼゆるとなり去づくの去づは下の字なり去
づきて有と云を約めていへるなり沈むと云も同じくて
こゝはうつる浪を云なり【萬葉に「藤なみのかげなる海
の底清みしづく石をも玉と我見る」「わたのそこしづ
く白玉風ふきて海はあるともとらずばやまじ】

深草のみかどの。御國忌の日。よめる

仁明天皇なり

文屋のやすひて

草ふかき霞の谷に影かくしてる日のくれしけふにやはあらぬ

深草といはずして草ふかきと云は深き霞の谷といはん
とてなり霞の谷とは折ふし三月なれば霞のふかきをも
いひさて尊骸を深草山に納奉ればかすみの谷に影かく
しと云照日の暮しはおのづから夕日に成てくるゝにあ
らず日の俄にかきくらすなり【萬葉に草壁のみこのか
くれさせたまへる時舎人らが歌の中に朝ぐもり日の入
ゆけばとよめるに同類なり】御代のさかりを思ふほど
に俄に崩御させ給へばなりけふにやはあらぬは其日の
世の中のなげき我かなしびを今更に思ひ出てしのび奉
るなり

深くさのみかどの御時に。藏人のがみにて。よるひるなれつかうまつりけるを。諒闇に成にければ。さらに世にもまじ

らすしてひえの山にのぼりて。かしらおろしてけり。その又のとし。みな人御ぶくぬぎて。あるはかうふり賜はりなどよろこびけるを。聞てよめる　僧正遍昭

藏人頭は殿上を管領して宮中にてはいはんかたなき官なり枕の草子にめでたき物の中に藏人を云にうへのちかくつかはせ給ふさまなど見るにはねたくこそおぼゆれ云々かしらおろしては文德實錄云嘉祥三年三月左兵衛少將從五位上良峯ノ朝臣宗貞出家爲僧宗貞先皇之寵臣也先皇崩後哀慕無已自歸佛理以求報恩一時人愍焉

みな人は花の衣に成ぬなりこけの袂よかはきだにせぬ

心あきらかなりこけの袂は羅薛衣也隱者の服なり

河原のおほいまうちぎみの。身まかりての秋。かの家のほとりなまかりけるに。もみぢの色まだ深くもならざりけるを。見て。かの家によみて入たりける

拾芥抄云河原院六條坊門ノ南萬里小路ノ東八町云々融公寛平七年八月廿五日薨年七十三

近院の右のおほいまうち君

藤原朝臣良世公なり寛平三年任右大臣同八年任左大臣の事扶桑略記に見えたり七年はいまだ右大臣なる故かくしるされしものなるべし

打つけにさびしくもあるかもみぢ葉もぬしなき宿はいろなかりけり

【一本にもみちばのとあり】こと書にはまだ薄もみぢなるを反してかく色なきと云せたまふを合せてよく見るべし打つけには打は詞にてつけは其事に卽てなり俗に其まゝすぐになど云ほどの事なりあるか有哉の略なり

藤原のたかつねの朝臣の。身まかりての。又のとしの夏。ほとゝぎすの鳴けるをきゝて。よめる　つらゆき

或抄に寛平五年五月十九日に卒すといへり

郭公けさ鳴こゑにおどろけば君にわかれし時にぞありける

心あきらかなり

櫻をうゑてありけるに。やうやく花咲ぬべき時に。かのうゑける人身まかりにければ。その花を見てよめる　きのもちゆき

花よりも人こそあだに成にけれいづれをさきにこひんとか見し

【朗詠集に「朝がほを何はかなしと思ふらん人をも花はさこそ見るらめ」】人はゝかなき物といへど老てもながらふれ花は春を限れば花をこそさきに戀んと思ひしに思ひのほかに花より先に戀るなんあはれとよめり

あるじ身まかりにける人の家の。梅花を見て。よめる　つらゆき

色もかもむかしのこさにゝほへどもうゑけん人のかげぞ戀しき

【六帖並顯昭本にはむかしにこさずにほへどもと有ことわりたらずわろし】

色も濃く香も深きがむかしの如と云のみなり

色のこさとは是も紅梅なるべし

河原の左のおほいまうちぎみの。身まかりて後。かのいへにまかりて有けるに。志ほがまといふ所のさまをつくれりけるを。みて。よめる

菅家文草に大臣薨じたまへりし又の年河原ノ院は燒たるよし見えたり

君まさでけぶり絶にし志ほがまのうらさびしくも見えわたるかな

心さびしに浦さびしをよせたり

河原院の燒たる事或抄にもいへれど彼文草には見えず第六卷に路次觀源相公ノ舊宅有感と云下注に相公去年夏末薨逝其後臺榭失火參議源勒公元慶五年薨ありて詩中に殘燼ノ華博苔老色半燋ノ松樹鳥啼聲と云句あり文草八年序をもてゝるしおかれしかば融公の薨寛平七年の後はさる事見えぬをもて勒と融とのたがへるなりと云らる且源の順が河原院の賦にも一度燒たりともいはず勒は融の弟なり兄公より前に身まかられしなり顯注には池をほり水をたゝへて潮を毎月三十石づゝ入て海底の魚貝をすましめたりといへり

藤原のとしもとの朝臣の。右近の中將にて。すみ侍けるざうしの。身まかりて後。人もすまずなりにけるに。秋の夜ふけて。物よりまうできけるついでに。見いれければ。もとありしせんざい。いとしげくあれたりけるを。見て。はやくそこに侍ければ。むかしを思ひやりて。よみける　みはるのありすけ

右近中將利基は內大臣高藤公の兄中納言兼輔卿の父なり中將の住たまふ曹司の今は人すまずなりしなり

君がうゑし一もと薄むしのねのしげき野べとも成にけるかな

一村薄玄げき野と成にける哉と云に虫の音もしげき物なれば冠辭の如くして卽あれたる秋のさまをいへるなり

これたかのみこの。ちゝの侍けんときに。よめりけん歌どもを。こひければ。書ておくりけるおくに。よみてかけりける

とものり

父のありけんは友則の父の世に侍りけん時になり或抄に友則が父は有常なりと云へり物に見えたる事にや有常は惟喬の皇子のをちにて云たしく參りたる人なればさも有べくおぼゆ

ことならばことの葉さへもきえなゝんみれば涙のたぎまさりけり

こは父が消うせて今はなき世には言のはさへも共に消ねよと思ふを是をかい云るすにぞあへなく涙の瀧つせなすばかりなりとなげくなり

題しらず　　諸人しらず

なき人のやどにかよはゞ郭公かけてれにのみなくとつげなん

なき人の宿とは黄泉の事なり時鳥は死での田をさとも云てよみちの鳥といへばなき人のよみちの宿にかよひゆかば我なき人を心にかけて昔にのみ絶ず泣と告よかしとなり【いせ集しでの山こえてやきつるほとゝぎすこひしき人のうへかたらなん】

誰見よと花さけるらん白雲のたつ野とはやくなりにしものを

白雲のたつ野とは此比も專ら火葬しつれば雲烟共にそれによせたり歌は其人はゝやく身まかりて見る人もなきに誰見よとか花はさくらんとなり

式部卿のみこ。閑院の五のみ子にすみわたりけるを。いくばくもあらで。女みこの身まかりにける時に。かのみ子の住ける。帳のかたびらの紐に。ふみをゆひ付たりけるを。とりて見れば。むかしの手にて。このうたをなんかきつけたりける

或人云式部卿ノ皇子は二品敦度親王也宇多天皇之皇子母は贈太后藤原ノ胤子延喜帝之同母弟世に玉光宮と申す好色無双の美男にてましませしとなり閑院の五の親王はいまだ考へずとなりかたびらは帷なり帳はかいしろなり

かず〳〵に我を忘れぬ物ならば山の霞をあはれとは見よ

かず〳〵に思給ふ人はあらんが其中に我をもわすれたまはぬ物ならばなからん後なきがらを納むる山の霞を見てもなつかしみて哀と見おこせたまへと成べし萬葉に家持卿妻のみまかりしをかなしむ歌「さほ山に棚引霞見るごとに妹を思出てなかぬ日はなし」小町集に「はかなくて雲と成ぬる物ならばかすまん空をあはれとは見よ。

なとこの。人のくに。まかりけるまに。女。にはかにやまひなして。いとよわく成にける時。よみおきて。身まかりにける　　よ見人しらず

人の國とは他國にて京より外の國を云又異國をもいへり是はいづれにや云らねど死に臨みて便りせんよしなきは遠き國なるべし

聲をだにきかで別るゝ玉よりもなきとこにねん君ぞかなしき

【六帖三の句我よりはとあり】我夫の聲をだにえきかで死別れ行身のかなしさはもとよりなれどもそれに增りて我身のなくてのゝちむなしき床に獨寢たまはんを思へばいとゞかなしきとなり

やまひにわづらひ侍ける秋。こゝちたのもしげなくおぼえければ。よみて。人のもとにつかわしける　　大江千里

病は其なやむ事を體にいひ煩ふは何事にもわづらはしき事に云て身のいたみをわぶるに云

紅葉なる風にまかせてみるよりもはかなきものは命なりけり

かくれたる所なし　　藤原のこれもと

露をなどあだなる物と思ひけん我身も草におかぬばかりを

あきらかなり拾遺集にやまひして人多くなくし年なき人を野らやぶなどにおき侍るを見てすけ清「皆人のいのちを露にたとふるは草村ごとにおけばなりけり。

やまひして。よわく成にける時。よめる　　なりひらの朝臣

つひに行みちとはかねてきゝしかど昨日けふとは思はざりしを

心詞あきらかにげにとおぼゆるまことのかぎりをいひたりかねては豫兼等の字を萬葉に書たり元慶四年五月二十八日年五十六にて卒すと三代實錄にみえたり

かひの國に。あひしりて侍ける人とむらはんとて。まかりける道なかにて。にはかにやまひをして。いよ〳〵となりにければ。よみて。みやこにもてまうで。母に見せよといひて。人につけ侍けるうた　　在原のまさはる

滋春が母は右大臣良相のむすめ染殿内侍なり此歌やまと物がたりに見えたり

かりそめのゆきかひぢとぞおもひこし今はかぎりのかどでなりけり

往反の道と云を甲斐路によせてよめり歌の心かくれたる事無くいとあはれなり

一本此はし書をかひの國にまかりて身まかりける時よめると有

古今和歌集卷第十六打聽終

古今和歌集卷第十七打聽

雜歌上

萬葉にては相聞挽歌客旅を部に立るのみにして四季にても長歌短歌旋頭歌などをもて春の物を詠たるを春の雜の歌といへば此集の雜體と云に似て侍るを序文をもて見るに四季戀賀哀傷旅などにあらでたゞにいひたるを雜の歌とせり雜は種々の義にてくさ〴〵とよめり又いろ〳〵と云におなじ【此集四季戀賀等ならぬ事を雜といふは今少ことわりをつくさゞるに似たり】

題しらず　よみ人しらず

我うへに露ぞおくなる天の川とわたるふねのかいのしづくか

契冲云此歌のつゞきは皆よろこび有歌のたぐひなるを其始に出せるをもて思へばこは七月七日の夕べ思ひかけず内宴にめされて祿など賜はりし人の御惠みのかゝれるをかくはよせたるにやおもふどち圍居せるなど云歌のつゞきたるにも心をつくべしと實に去かるべく思ゆ萬葉に七夕の歌「この夕ふりくる雨は彦星のとわたる船のかいの散かも」と有をとりて惠の露にとりなしたるものなり【いせ物語には絶入たる人の面に水をそゝぎければいき出てよめるにあやなしたるなりそれによりて今をとくはあたらぬ事なり後撰に「我袖に露ぞおくなる天の川雲の去がらみ浪やこすらん】

おもふどちまどゐせる夜は唐錦たくまくをしきものにぞありける

思ふどちつどひて圍居したる夜は立去がたきと云を唐錦の裁をしく思ふにそへていへり左傳に有二美錦一不レ令二人學制一焉又史記にも片錦雖レ微猶雜レ學制など云心をばとれるにや是らは錦をばよくたちおぼえたる人ならではたゝせず今たちならふにはたゝせずと云事なり

うれしきなにゝつゝまんから衣たもとゆたかにたべといはましを

【朗詠集に「うれしさを書は袖につゝみけりこよひは身にもあまりぬる哉】いはじとたゞ思ふ物をも袖につゝむといへばうれしき事をも云なりゆたかは廣く大なる心なり

かざりなき君がためにとなる花は時しもわかぬ物にぞありける

【いせ物がたりには詞をつくりて時しもに雉子をかくしたりそれをもてこゝをいふはあたらず】是は時ならぬかへり咲の花などを折て公朝などに奉りし時なりけん限なきとは君を祝へりと見ゆ六帖にはかたみの歌として限りなき君がゝたみと折花はと見えたりこゝに注有「ある人のいはく此歌はさきのおほいまうちぎみのやとゝらず

むらさきの一もとゆゑにむさしの〻草はみながらあはれとぞ見る

紫は色のうるはしき草にて武藏野のはてもなく廣きに紫草も多かる所なれば我ゆかりの人一人が故に末々までもむつましと云事をばそへてよめるなりみながらは皆ながらの略なり此歌よりして紫の一もと故とも紫のゆかりともよむなり

めのおとうとをもて侍ける人に。うへのきぬをおくるとて。　よみてやりける　なりひらの朝臣

めは業平の妻なりおとうとは其妹なりそれを妻にもてる人におくるなりうへのきぬは袍なり【和名抄袍うへのきぬ】

紫の色こき時はめもはるに野なる草木そわかれざりけり

業平の妻の妹を妻として有ける人も其に紫の袍を著るべき人にてそれを贈る故に紫の云々といひて下には其紫草の生る同じ野のくさ木を擧て皆ながらうつくしまるゝにたとへたるなり【いせ物語には妻の妹をもたる人をいやしき人として六位の袍をおくるとつくりかへたるは歌のたとへのとりなしごとなりそれをもて今を云べからず】めもはるに土佐日記に松原めもはるゞにと書るに同じくこゝは其紫を本としてそれが遠近なる多くの草木もと云なり草木の萠も發をもいへどそれは詞は同じくて異なり

大納言ふぢはらのくにつねの朝臣。宰相より中納言に成ける時に。（或注に寛平六年五月五日任中納言從三位）そめぬうへのきぬのあやをおくるとて。よめる　近院の右のおほいまうち君

色なしと人や見るらんむかしより深き心に染てしものを

是は染ぬ絹故色なしと人や見るらんといひて我心を淺しとや見るらんさにはあらずもとより交りは深く心にそみて年月をこしとなり【上に色もなき心を人に染しよりと云に同じ】

いそのかみなみまつが。宮づかへもせで。いそのにといふ所にこもり侍けるを。にほかにかうぞりたるはれりければ。よろこびいひつかはすとて。よみてつかはしける　ふるのいまみち

三代實錄に仁和二年正月七日授二從七位上石上ノ朝臣並松一從五位下一

日の光やぶしわかればいそのかみふりにし里に花は咲けり

こは公朝の御惠みを日の光にそへて日の光はいづこをわかねばいとあれたる藪原をも照せる光のいたりて花も咲ると云は俄に恩光のいたりてくらゐ賜りたるをいへりやぶは彌生の義にて木などいやかさなりておふる所を云笠にのみ云は誤なり【源氏蓬生に心ひとつにおほしあがるともさるやぶ原に年へたまふ人を大將殿もやんごとなくしも思ひ聞えたまはじなどえんじうけひけり此やぶはらも竹原ならぬに思ふべし】

布留の今道何人をゑらねどいその上の里人にてやありけんさらばふりにし我里にもめづらしき花の咲ぬと共によろこびてよめるなるべし並松がこもりをるあひだの友歟親屬などにてもあるべし

二條の后の。とう宮のみやすん所と申ける時に。おほはら野にまうでたまひける日。よめる

二條〻后の春宮の御息所と申ける時と云事春の上にいへり大原野の春日の社は閑院〻右大臣冬嗣公の藤氏の后女御達のまうで給ふに便して勸請ありしなり春日は藤氏の祖神なり

なりひらの朝臣

今の本にはまだとう宮のと有まだの詞上の二所に見えねば例によりて除かれたるにや東宮のみやすん所は陽成天皇の御母を申すと云事上にいはれたり貞應本にも春宮の御母儀也と小注見えたればうたがふべからず又一本に「まうで給ひける日御くるまより御うちぎをたまひてよめると書るが有こはいせ物がたりに有詞をこゝにうつし入し後の衣わざなるべし

おほはらやをしほの山もけふこそは神代の事もおもひいづらめ

こは小鹽山にいはふ神は藤氏の祖神にて神代の神なればけふの詣給ふよそほひを見そなはしても神代の事も思し出らめといへるのみにていとやすらかにめでたき歌なり然をいせ物語のつくり事を宗として今を說はひがことなり【二條后と業平はやくのみそか事ありしと云よりこゝをもときなすはこれを作り物がたりとゑらぬ人の心なり】其外さまゞの說あれど皆とるにたらず

五せちの舞姫を見て。よめる　よしみねのむねさだ

五節の舞姫續日本紀天平十五年五月橘諸兄公太上天皇へ傳奏し給ふ詔に天武天皇禮樂なくしては世を治るに事闕たりとて此舞樂を作らせ給ふと有又三善清行が異見封事には天武天皇よし野にましゝける時に天女あまくだりて舞けるより事おこれる由を書り本朝文粹に見えたり

天津風雲のかよひぢ吹とぢよをとめのすがたしばしとゞめむ

こは宮中なれば天上の事にたとへていへり只今舞姫の舞はてゝ入を天女の雲を分て天にのぼるによそへて天津風雲のかよひ路を吹とぢよ其ゑばしがほども見まくほしと名殘をゝしむなり【百人一首古說にくはしくいへり】

五節のあしたに。かんざしの玉のおちたりけるを。見て。たがならんと。とむらひてよめる　河原の左のおほいまうち君

ぬしや誰とへどしら玉いはなくにさらばなべてやあはれとおもはむ

五節はてゝのあくるあしたにこの物の落たるを拾ひてぬしは誰ならんとゝへどことゞゑらずとこたふればさらば誰となくありつるをとめ達のかぎりをやあはれと思はんとなり

寬平の御時に。うへのさむらひに侍けるをのこども。かめをもたせて。きさいの宮の御かたに。大みきのおろしときこえにたてまつりたりけるを。くらふどゝもわらひて。かめをおまへにもていでゝ。とものかくもいはずなりにければ。つかひのかへりきてさなん有つるといひければ。くらふどの中におくりける　としゆきの朝臣

上に侍らふは殿上人なり大御酒は酒の古語をきと云黑酒白酒など云におもへおろしは殘りなり聞えには上へ申上るなり藏人どもは后宮の御方の女藏人なり俗に表使と云如く使などにあるくなりこゝは殿上人大御酒のおろしを乞に瓶をもたせて出したるに其かめのかたちのよくもあらざるを女藏人共の中にをかしがりてかかる物いとめづらかに見せ奉らんとて御前に持出てかへりことも世ずわらひけるなり此歌おくれる敏行は卽殿上人の中にありしなり顯注には大みきのおろしきこしめしとあり今を合せてみるにおほみきのおろしみきこしめしとありしにや

玉だれのながめやいづらこよろぎの磯の浪わけおきに出にけり

此小瓶は大御酒のおろしをとてそこ達のもとにこそ乞につかはしけれすゞろに奥深く出すべき物にあらぬをと云をかめと云より海のよせもて奥の御前を海の奥にとりなしてかゝる小がめの海原に出べくもあらぬをと云なり小瓶を小龜になしていへりこよろぎは相摸の國の名所なりこゆるぎとも後にはいへり玉簾の小簾玉だれの越の大野なども玉簾の緒とつゞけたる冠辭なり今

も小瓶と書てをがめと讀けんを後には小籠を鈎籠也とこゝろあやまりてこがめとよみかへし成べし猶冠辭考に委しくいへりいにしへ大をばおほ小はをと唱へしなり【萬葉に今の本の訓に小籠越の大野などよみあやまれるは後のしわざなり越の大野をゝちの大野とかむにてかよはせては宇智の大野ともいひしなりうはこにかよふ事なし】

女どもの見て。わらひければ。よめる　けんげいほうし

後撰にすがたあやしと人の笑ひければみつね「いせの海の釣のうけなるさまなれど深き心ぞ底に沈める。かたちこそみ山がくれの朽木なれ心は花になさげなさなんかくれたる心なし

かたゝがへに。人の家にまかれりける時に。あるじのさけなさせたりけるを。あしたにかへすとて。よみける　紀友則

方違へと云事は陰陽師のいひ出たる事にて此比もはらせしなり物にゆきてかへると其かへる方ふたがりの方なれば又一宿他の家にかりねしてかへるなり此神をなか神と云よし歌には一夜めぐりの神ともよめり【「君こそはひとよめぐりの神ときけなどあふ事の方たがふらん」「あふ事のかたふたがりて君こずば思ふ心のたがふばかりぞ】

蟬の羽のよるの衣はうすけれどうつりがこくもにほひぬるかな　此時夏なるべし其夜上に著る衣をかしたるがそれは薄けれど移香は濃きといひて其人がらをほむるなり

題しらず　よみ人しらず

おそく出る月にもあるか足びきの山のあなたもなしむべらなり

こは月の遲く出るは山のあなたの人のをしむ故に月のやすらひて出かぬるにやとなり六帖にみつね「こゝに又我あかぬ月を山のはのをちの里にはおそしとやまつ」是は今をとりてよめるなり

我こゝろなぐさめかねつさらしなやをば捨山にてる月を見て

更級は信濃ノ國更級郡に更級の郷在そこにある山なるべしいにしへ此山に姨を捨たると云事を云ならはしたるより歌にもよめり【今の集解に信濃の俗老人を山にすつる事有し山あれど事跡たしかなる事にもあらで諺をのせられし也小町集にも是をとりてよめる「あやしくもなぐさめがたき心かなをばすて山の月も見なくに】山川の名にはいとあやしきが多しそれに山來を云

は皆附會せたる作りごとのみなり大和物語にも此山に姨をすておきてかへるとて甥がよめると云歌有はこの歌をとりてつたなき作物語なりそれにつきて云説共はとるに足ず此歌は古く云傳へたる山の名によりてあはれによめりとのみ心得べし實に姨をすつる山とならば心もなぐさみかぬるといとはかなくよみなせるものなり

おほかたは月をもめでしこれぞこのいもれば人のおいとなるもの　なりひらの朝臣

是は大方はと有に付ていはゞ大抵ならば月をも愛まじ此めづる影のつもりては卽年月の月と成てそれが身の老となる物をと打なげきたる也これを眞字伊勢物語には大方之と有にていはゞ常に見る月を大方のといひさてそれがつもりてはつひに身につもれる年月の月となるといへるなり今の大かたはと有にては下にかけて見る時むづかしく且明らかに説得がたく古意ならぬ處あり仍て思ふに伊勢物語に大かたはと寫誤りしを古本もて正しもせずかへりて今をも其方に引直せし後のしわざとおぼゆこれぞ此は何にても語同じくて心異なる物をいひつゞけて曲をなす詞なり此詞はいづれの歌も其義もて聞ゆなり【これぞ此これや此同じことばなり萬葉に「これや此大和にしては我こふる紀路にありちふ名におふせの山」是も夫を山の名によせたるなり】ものといひとゞめたる歌いにしへ一二首ありたゞはかなくいひ捨たるなり

月おもしろしとて。凡河内の躬恒がまうできたりけるに。よめる　きのつらゆき

かつみれどうとくも有かな月影のいたらぬさともあらじと思へば

【上にも「時鳥汝が鳴里のあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから】

是は月面白しとて來たる人なれば月影のいたらぬ里なき如く我のみを友と思ひてもこじと思へばとはれて逢見ながらかつ疎く思ゆると月にそへてよめりかへりて玄たしき友なれば成べし

池に月のみえけるを。よめる

ふたつなき物と思ひしを水底に山のはならでいづる月かげ

秋に一もとゝ思ひし菊を大澤のとよめるに同じ心なり

題しらず　よみ人しらず

天の川雲のみなもとはやければ光とゞめず月ぞながるゝ

こは水の深き筋をみをといへば天の川と云につきて雲

の水尼といひて月をとゞこほらさずはやく流すと云なりみをは水のはやく流るればなり萬葉に「さよ更て堀江灣なる松浦舟かぢおとたかしみをはやみかも。

あかずして月のかくるゝ山もとはあなたおもてぞ戀しかりける

是は又山の西のあなたを思ひやるにて上の遲く出る月にも有哉を打返したる心なり

これたかのみこの。かりしけるともにまかりて。やどりにかへりて。夜ひとよ酒をのみ。物がたりをしけるに。十一日の月もかくれなんとしけるなりに。みこゐひて。うちへいりなんとまければ。よみ侍ける　なりひらの朝臣

あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげていれずもあらなん

皇子酒に醉て夜の御座に入なんとし給ひけるを入なんとしける月にそへていへり【土佐日記にこよひの月は海にぞ入是を見て業平の君の山のはかげて入ずもあらなんと云歌おぼゆるもし海べにてよまゝしかば波たちさけて入ずもあらなんとよみなましやと云々そのかみの人々のめでたがりしをおもへ】あかなくには絶ぬになりかくるゝかは隱るゝ哉なり山のは逃ては後の世には聞よからずとすれど時につきては興有事に感けん其夜のさま思ひやらる六帖に友則「入月を山のは逃ていれずとも人の心をいかゞたのまん」昔は面白き詞としてとりてよまれし成べし

田村のみかどの御時に。齋院に侍ける。あさらけいこのみ子かな。はゝあやまち有といひて。齋院をかへられんとしけるなる。そのことやみにければ。よめる　あま敬信

文德天皇山城國葛野郡田村に納奉る故に田村のみかどと稱奉る　慧子は文德之皇女也母は列子從五位上藤原是雄女なり文德實錄云天安元年二月廢鴨齋內親王慧子更立述子內親王遣右大臣正三位藤原朝臣良相於神社告事由其事祕者世無知之也とかく齋院を廢らるゝ事何故と見えざれども今のこと書にておろ〳〵意得らるゝなり【文德實錄に云は此歌より後につひにかへられし時哉るせしものか】今の本にはかへらんと有かへられんのれの字落たる成べし眞應本にはかへられんと有さて此歌はその定有しがいまださだかならずしてかへられん事の停たる時の事と見えたり尼敬信は典侍因香朝臣の母なりといへり

大空なてりゆく月し清ければ雲かくせどもひかりけなくにこは月影のいたりてきよければ雲のかくせども光の消ぬ如く人のなき事をいひさやめくもくもりなき事なりしとたとへなせり

題しらず　よみ人しらず

いそのかみふるからなのゝもとがしほもとの心ほわすられなくに

石の上は布留と云冠辭なりふるから小野は大和のふるの小野の枯野なるを云【應神天皇の御代に伊豆の國に有しからのといふ舟をも枯野とかけり】もとがしはのもとは木の事にいへり舒明紀にもとごとに花は咲ども萬葉にもとしげみなどいへりされば柏木とのみ云べきを布留と云地名を出したればもとゝいひてもとの心といはんための上は序なり

いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ

是も舊の心を忘れぬを云なり秋はぎの古枝に咲る花みればと云に同じ野中の清水はいづこともより所なしただいづこにもあれもとは家居など有て石井板井のわき出つらん所のあれて野と成しを昔思ひてもとめよりし人のよめるにや題不知なればえるべからずある人は播磨の印南野に在といへり又或人は布留野に有たるなり貫之集にいそのかみふるのゝ道の草分て清水汲には又もかへらん寂超法師の歌に「昔見しふる野の澤のわすれ水何今更に思ひいづらん」又堀河院初度百首に「いにしへのふるのゝ道をたづねきて清水を猶も結びつるかな」是らによらば布留野にいにしへの跡とむべき清水有しなるべし【布留の事猶冠辭考にくはし】布留とは振の義なるを崇神天皇の御時はじめて振の社をいはせたまひてみづ垣のひさしき所なれば昔より舊き心に云なし來たるより古野といふ心になして又其をうつしていにしへの野とつゞけたるかといへりさもあらんか猶さだかなるより所を見ざればおぼつかなし

いにしへのまづのをだ卷いやしきもよきもさかりはありしものなり

上は序にいひて心明らかなり古しへの玄づとは神代にはじまりし倭文布を云萬葉にいにしへの玄づ機いにしへのしづのをだまきなどよみていにしへは倭文布に冠らしめたるのみなり【神代のしづ布は青と白とを織ませたれば今のしま織といふに似たり日本紀に大君の御帶のしづはたといへればいやしきものゝきる故に云といふ說のあたらぬをしるべし猶冠辭考にいへり】さるに或說に賤が著る故に玄づ布と云といひ又玄づ布をきる故にいやしき者を玄づと云などいへどわろし賤は下にて沈みたる者を云然に倭文と下賤とことば同じきが故に今の歌にいやしきもといへれど倭文を下賤にとり

なしていへりと心うべし

或人は萬葉にしづだまき數にもあらぬ我故ともしづだまきいやしき我身ともよみたればいにしへよりいやしき事によめりといへど倭文を下賤にとりなせしとまでは心ゆかざりしなり

をだまきはその倭文を織る料の卷子なり麻をうみてまくは外を丸にして内をむなしくつくるもて麻環とよべるなるべし

今こそあれ我もむかしはをとこ山さかゆく時もありこしものをさかゆくは榮え行なり序にをとこ山の昔をおもひ出てと云所の注にいへりそこにて見るべし

世の中のふりぬる物は津の國のながらの橋と我となりけり

【長柄の橋文德實錄仁壽三年絶たるよし序の注にいへり此歌はいまだ朽ざる代の人のよめる成べし】かくれたる所なしたゞ身の老朽たるをたとへしにて感情あまり有或說に才能有ながら世にふるされて用ひられぬ人の述懷せる歌なりと云は歌のおもてに見えぬつけそへ事なり

さゝの窠にふりつむ雪のうれをおもみしとくだちゆくわがさかりはも

一本に我宿の竹のしら露うれをおもみとも見えたり

【六帖に五の句我心かなと有】こは笹に雪のつもりて末のおもくなればもとのかたぶくを我齡のかたぶくにそへていへりさかりはもは盛はと云入てなげくにもは例のそへて助けたるなり

おほあらきの森のした草おいぬればこまもすさめずかる人もなし

【六帖には小町が歌として入たり】こは老はてたる草をば駒もすさめず人も刈ぬによせて身の老ぬればいとはるゝをなげくなり神名式大和ノ國宇智ノ郡に荒木ノ神社有そこの森なるべし【或人山城に在といふはおぼつかなし】すさめずは進まずなり

今の本こゝに「又はさくら麻のおふの去た草おいぬればと有例のとられぬなるべしさくらあさ六帖にはさくらをとよめり

かぞふればとまらぬ物をとしといひてことしはいたくおいぞまにける

ある人上二三句引つゞけてよみて心得べしとしといひては年を疾にかけていへり下にとゞめあへねば諸も疾とはいはれけると心得べしといへり

おしてるやなにはのみつにやく鹽のからくも我はおいにけるかな

上の句はからくもといはん料のみさて鹽の辛きをうけて年のいたく老たるにたとへていへり【萬葉に「むかしよりいひけることのから國のからくもこゝにわかれするかも】からくもおうるとはもと鹽の味のからきより出て俗にゝがゝしと云に同じく辛苦して老るなれどこゝは其意を含みていたく老ると云ほどの心なり

又こゝにも「又は大伴のみつのはまべにと有思ふに此歌はいとふるくてもとは去か有けんを此撰者遠の今は時のさまになほされしものかそれを他の物に見出て何人かこゝに注せしなるべし又公任卿の九品の下には此歌をあらしほの鹽のやほあひにとありて下は今と同じ是も古めいたることがらなれど荒汐の汐の八百會とは大海原の沖べに汐さゐするあたりを云詞なり此下にもわたづみのおきつ汐あひにうかぶ沫のと云をむかへて去るべし鹽は濱べにてやく物なればしかはいはれぬことなり

おいらくのこんとふりせば門さしてなしとこたへてあほざらましを

心明らかなり老らくとは老ると云詞を延ていへるなり

らくを約むればるとなるなりさらば老るといふ語の川らけるなり【おいらくと云詞古言に見えず此頃よりいひ出しなるべし】たゞ老と云心に云なして體の語とするは此頃の手ぶりなるべし仍て老の來んと云其門をさすべきといへるなり

こゝに注有「此みつの歌は昔有ける三たりの翁のよめるなりとなん或人云此三人の翁の事此撰者遠も勘へずして付たるを末の世に不學殘智の身として考へ去らん事いかであらん秘事など、云人有信ずべからずと此說を又或人はすなほなりとて尤可ノ用といへり此集の注は撰者のしらぬ事なりといふ事所々にいはれて證などたしかなり仍てこゝも例の捨て論なき事なるべし

さかさまに年もゆかなんとりもあへず過るよはひやともにかへると

心明らかなり

とりとむる物にしあらねば年月をあはれあなうと過しつるかな

是もかくれたる事なし

とゞめあへずむべもとしとはいはれけり去かもつれなく過るよはひかこはとゞめてもとゞめあへぬ物なれば暮行事のとしとは寔によく名付たりとなり是も年を疾に云かけたり去かもは如斯もと同じつれなくはとゞめんとすれどさりげなくて過行をいへりよはひかは齡哉なりこは一の句を下の句へつゞけて二三の句を其下へ付て見るべし

鏡山いざたちよりて見てゆかんとしへぬる身はおいやしぬると

年經ぬるが老るはもとよりの事ながらかくいへる心老人の心なるべし鏡山は近江なり

こゝに注有「此歌は或人のいはく大友のくろぬしがなりといへり例のとられぬなるべし

なりひらの朝臣のはゝのみこ。ながなかに住侍ける時に。なりひら。宮づかへすとて。時々もえまかりとむらはず侍ければ。まばすばかりに。はゝのみ子のもとより。とみの事とて。ふみなもてまうできたり。あけてみれば。ことばゝなくて。ありけるうた

母のみこは桓武天皇の皇女伊登内親王也長岡は山城國の乙訓郡なりとみの事は疾み速みなどの意にてみはそへし詞なり俗に急ぎの事と云ほどの事なり

おいぬればさらぬ別もありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな（一本さらぬわかれの）

老てはえもさけのがれがたき死別の有を云さてとみの事とは心ちそこなはせ給ふ時ならん然ばいよ〳〵見まくほしくおぼゆとなり

かへし　なりひらの朝臣

よの中にさらぬ別のなくもがなちよもとなげく人の子のため

【いせ物がたり今の本には千代もといのるとあり眞字いせ物がたりには齋の字をかけばいはふとよむべし皆同じ心なり】贈られしをうけて其さらぬ死別の世になくもがなあれかし親をばいかで千代もましませとなげきて願ふ子の爲にとなりかくわりなく思ふぞ切なるときの實情なるを其まゝによめるなりなげくの詞上にいへりこゝにては願ふ心をいへり人の子とはひろく世の中をいひてさてわが事はこもれりされどかゝる時他の事までもおもひめぐらすべからずたゞ我を人の子と云なるべし

寛平の御時。きさいの宮の歌合の歌　ありはらのむねはり

しらゆきのやへふりしけるかへる山かへす〳〵もおいにけるかな

上は序にてたゞかへす〳〵も老にける哉といへるなり今の本にはかへる〳〵と有少聞えがたし顯昭本にはかへすゞとあり是をとれり

おなじ御時。うへのさむらひにて。なのこどもにおほみきたまひて。おほみあそびありけるついでに。つかうまつれる　としゆきの朝臣

上のさむらひは殿上の侍所なりおほんあそびは管絃なり

おいぬとてなどか我身をせめきけんおいずばけふにあはましものを

こはさぬとて今までなどか吾身を責來けんけふまで生て世にあらずばかゝるめでたき御遊びに參り奉る事もあらじをとよろこびのあまりに老をもみづからいはふなりあはましものかはあはんものかあふまじとなり

題しらず　よみびとしらず

ちはやぶる宇治の橋もりなれなしぞあはれとぞ思ふ年のへぬれば

ちはやぶる【ちはやぶる冠辭考にいへり】氏とつゞく冠辭にて氏を宇治の里にとりなせり橋守は野守關守など各其物を守者に名づくるなりなれをしぞは汝をぞなりしは助辭橋守の汝が年へぬるをあはれとぞ思ふとなり【日本紀天武之上卷命ニ兎道橋守一者遮下皇太弟宮舍人運ニ私粮一事上】或人は此橋守を才德ある人の世に沈みてあるをあはれみて橋守によせて云かといへり然ど題しらずとあれば推はかりの說は用ひがたし猶去ひていはば宇治に住る人のいふかひなくて年老たらんをあはれとぞおもふと高貴の人のゝたまひしにもあるべし橋守ならずとも其わたりなる人を時にとりてさもいふべき作意古例あり

我見ても久しくなりぬ住の江のきしの姫松いく代へぬらん

こは我としのいとふりにたるにつきて此墨の江の松のおひ立るを我みてもひさしく成ぬるが今はいく世かへぬらんと云なり此歌萬葉に「いにしへの事は去らぬを我見てもひさしくなりぬあめのかぐ山」とよめるを所をかへ松に云かへたるのみ

住のえの岸のひめ松人ならばいく世かへしとゝはましものを

是も我老たるによりて松の經し年をもかぞへてきかまほしとなりいくよかへしは幾代をか經しなり幾代かゝはりたると云にあらず【六帖に「玉つしま入江の小松人ならばいく世かへしとゝはましものを」】

梓弓いそべの小松たが代にかよろづ世かれてたれなまきけん

梓弓は冠辭なり磯邊のいを弓射るいにかけたるなり萬葉に「白眞弓いそべの山のときはなる命ならばや戀つつをらん」と云を本としてよみつらんされどかく磯べはたゞ石のほとりの意と聞ゆ小松は今は年ふりて喬木なれど種まきけん時を指て云成べし【源氏かしは木に「たが世にかたねをまきしと人とはゞいかゞ岩ねの松はこたへん」】

此歌はある人のいはく柿本の人まろなりと云注あり例のとられぬなるべし

かくしつゝ世をやつくさん高砂のをのへにたてる松ならなくに

是はさせる事もなくおいゆく身のいたづらをなげくに高砂の松のいたづらに年をへたるに對して松にもあらぬ身のかくいたづらに世をやつくしはてんといへるなり高砂は山の總名にもいへどこゝは播磨の名所を云と見ゆるは歌の篇次かつ序に高砂墨の江の松といへるによてこゝをもしか說なすべくおもふなり

藤原興風

誰をかもしる人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに

こはいたりて老ぬれば昔の友も一人もなく成ぬさらば高砂の松は世にふりたればかれをや友にせんと思ふにかれはた非情の物なるには我昔の友にあらずと今は我ばかり老て世にある事をなげくなり序に高砂墨江の松も相老のやうにと云を相生と心得て此歌をもふるき友をしたふと云はとるにたらず【相老にて相生にあらずと云事序の注にいへり】

わたづみのおきつしほあひにうかぶ泡のきえぬものからよるかたもなし

此歌ある人の本によみ人しらずとあり興風の集にも以下三首ともに見えず善本なるべし

上は消ぬものからといはん序なり歌は年老ていまだ消失ずしてあれどもよる方なしと身をなげきたるなりおきつ汐あひは沖に汐の滿あふ所なり大祓の祝詞に汐の八百路のやしほぢのやほあひといへるに同じ消ぬ物からはきえぬ物ながらなり

わたづみのかざしにさせる白妙の涙もてゆへる淡路しま山

こは海神の挿頭にさせる淡路島山と見立しなりわたづみは海を持ませる神なるを轉して海の名と成ぬれどこは海神の御事なり【山の神を山づみといひ海の神をわたづみと云海はわたる故にわたと云て海の名となりしなり山をこしてゆく國を越の國と云が如し】白たへの波もてゆへる淡路しま山とは冠帽の巾子のもとに日かげのかづらとて白糸を組たるにて日陰と云物をゆひて其絲のはしを總角に蟾をむすび下てかざる所に花の枝の作りたるなどを此かづらにまとひて立るをこゝろ葉と云是上代に髢華にさすといへる物なりかざしは後の世に冠のわきに挿物なれども其に是をかざしにさすと云べければ白たへの波を日陰のかづらによせてそれもてゆへるあはぢしま山とかざしの事にいひなせりと見ゆ

淡路は島國にて難波方播磨路より見さぐればいとおもしろくよきほどなる島山なり其わたりより見てよめるなるべし

わたの原よせくる浪のしばしも見まくもほしき玉津しまかも

上はけしきをいひて卽叙の如くしばしも見まほしきとなり云ばしは俗にかさねぐと云に同じ云き波と云も重及等の字を書ばまたく同じきをしるべし

思ふに波のしばしは波のしき〳〵しく〳〵などを寫たがへしにや波のしばしは古歌には見しらぬ詞なり

玉津嶋は三代實錄に玉出嶋と書たり是によらば玉出る嶋の義にて玉づしまと濁てよむか【萬葉に「玉つ嶋みれどもあかずいかにしてつゝみもてゆかん見ぬ人のため」「玉づしまよく見ていませ青によしならなる人のまづとはゞいかに」書よりかくけしきをめでゝよめり】なにはがた鹽みちくらしあま衣たみのゝ島にたづ鳴わたる

田簑ノ嶋は津國に在あま衣は雨衣にて簑とつゞく冠辭なり田簑と云物別に有にあらず

萬葉に「なには方汐干にたちて見わたせば淡路の嶋にたづ鳴わたる」大かたに同じ

つらゆきが。いづみの國に侍ける時に。やまとよりこえまうできて。よみてつかはしける　藤原のたゞふさ

君をおもひおきつの濱に鳴たづの尋ねくればぞありとだにきく

君をおもひて尋ねくればこそつゝがなくありときけといひてそこよりはおとづれの絶たりと恨る心なり君を思ひおくとつゞけたり沖津の濱は和泉にて忠房のいたられしあたりの名成べし【おもひおくとは上に露ならぬ心を花におきそめて又人に心をおきつしら波と云に同じ】なく鶴のたづねくればぞとつゞけたり

かへし　つらゆき

おきつ浪たかしの濱のはま松のなにこそ君をまちわたりつれ

【高砂の濱大鳥郡なり】上は序にて卽其國の地名をもていへり松を待にいふは例の事なりさて君來ませんと兼て待つれと云てされば待つけたるはとなり待わたるは久しくまつ心なり

此歌をかく說時は上の詞書をそこまでゆかざりけるといはん事いかゞ詞書の表にも云かは見えず忠房大和守にて貫之が隣の和泉の國に在を事のついでなどにとむらはんとてかしこより立越來たるに先使して

歌をおくりやがてぞ參るべく音づれしにこたへも國の隣におはせばかねてとひや來まさんと待わたりつといへるやとも思はるゝなり拾遺集に此歌再び入て詞書にいづみの國に侍りける時に忠房の朝臣大和よりおくれる返しと有をもて忠房は來まさで歌のみをおくれりといはんに上の歌たづねくればぞといべるには心たがへり且詞にも大和よりこゝまうで來てと有にかなはず又貫之集にいづみの國にあるあひだ藤原のたゞふさの朝臣の大和よりこえきておくれるとあれば拾遺をあやまりとすべし高師の濱は今高いしと里の名によべり其わたり今は濱寺とよびて松むら長きはへしまさご路ありいと清き濱べなり

なにはにまかれりける時。よめる

難波がたおふるたま藻をかりそめのあまとぞ我は成ぬべらも也

或抄に京より來て海邊のめづらしさにかり初にこゝにすみつきて玉藻かる蜑とも成ぬべしと所をほめてよめり拾遺に井出といふ所に山吹の花おもしろく咲るを見て惠慶法師「山吹の花の盛に井出に來て此さと人に成ぬべき哉」今と同意なり

あひしれりける人の。住の江にまうでけるに。よみてつかはしける

住吉と蜑はつくともなかぬすな人忘草おふといふなり

にぶのたゞみれ

六帖にあまはいふとも又岸におふなりと見えたり歌の心明らけしさて住吉と書てもすみの江とよむ事にてすみよしと云し事いにしへなし

江とは卽海にてなには江水の江藤江などいふに同じ萬葉に清江と書てすみの江とよむ正義なるべし【貫之「月影はあかず見るともさらしなやをば捨山に長居すな君」】

こゝも住の江と蜑は告ともと云てもすみよしと云心といにしへを云れる人は聞べけれと此うたはもとよりすみよしとよむ歟はどなき代の和名抄にあやまりてすみよしとよめり

或人云墨の江を長居の浦と云は此歌によりて名付たるか古くは見えぬ事なりと

なにはへまかりける時。たみのゝしまにて。雨にあひて。よめる　貫之

たみのゝ嶋今大わだとよぶ里ありちかきむかしまではみのわだとよびしなり是たみのゝわだの語のはぶかれたる成べし今難波とよぶ里もそこに遠からず

【玉藻集にたみの、島の菊をよめる「たみのとも今はたのまじ立かへり花のしづくにぬれんと思へば】

雨によりたみの、しまをけふゆけばなにはかくれぬ物にぞ有ける（一本けふゆけど）

是は田籠と云より名にはかくれずして雨にぬる、といへりさて難波をそへたり

法皇。にし川におはしましたりける日。つる淵にたてりといふことをだいにて。よませ給ひける

或抄に延喜七年九月に此御幸有て九首の題を各に歌詠を給ふ友則貫之躬恒是則頼基等也序は貫之書り西河は大ゐ川なり

日本紀略に延喜七年九月十一日天皇幸二大堰河一と見えその前日に法皇召二文人一賦二眺翠九詠之詩一とあり

洲にたてる鶴は眺翠のひとつなるべし

あしたづのたてる川邊を吹風によせてかへらぬ涙かとぞみる

川べをと切て次を心得べし心は明らけし

中務のみこの家の池に。船をつくりて。おろしはじめて。あそびける日。法皇。御覽じにおはしましたりけり。ゆふさりつかた。かへりおはしまさんとおけるなりに。よみて奉りける

中務親王は扶桑略記に延長五年十二月廿七日三品行中務卿敦實親王卒〻と見ゆ是なりあそびは管絃なり源氏こてふに山の木だち中島のわたり色まさる菩のけしきなどわかき人々のはつかに心もとなく思ふべかめるにからめいたる船つくらせたまひけるいそぎさうぞかせたまひおろしはじめさせ給ふ日はうたづかさの人めしてふながくせらるみこたちかんたちめなどあまた參りたまへりと云々たぐひなる事なり

仲勢

水の上にうかべる船の君ならばこゝぞとまりといはましものを

是は今日の船遊びのついでに君を船と云からこともあれば詞のよせとしてこゝぞ船のとまりといひてとゞめ奉るべきものをと還御をゝしみ奉るなり荀子云君者舟也庶人者水也水能載舟亦能覆舟也といふ事をおもへるものか

からことといふところにて。よめる　眞せい法師

都までひゞきかよへるからことの涙の緒すげて風ぞひきける（六帖には涙の緒よりて）

唐琴の泊吉備の國にと云事上にいへり是は都まで名高く聞えたる所と云をから琴といふ名なゝればひゞきかよへると云なり古言に次をばすぎともいへば是はつげ

をもすげと言なるべし

布引のたきにて。よめる　在原行平朝臣

こきちらす瀧のたま玉ひろひおきて世の憂時の涙にぞかる

かくれたる心なし後撰に「朝ごとにおく露袖にうけためて世のうき時の涙にぞかる」是またく同じ【六帖に「わび人の袖をやかれる山川の涙の如も落るたきつせ」今を採てよめり】布引の瀧は津の國生田川の上に在此歌世のうき時のといへるは下に田村の御時に事にあたりて津の國のすまといふ所にこもり侍りけるにといへる度なるべし須磨よりほど遠からぬ所なり

布引の瀧のもとにて。人々あつまりて。うたよみけるときに。よめる　なりひらの朝臣

或抄に云上の歌と同所なれど是はこと時によめれば別に詞書はせしなるべしと

ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに

是は水上に人こそあるらめ我に得させんとて白玉の緒をぬき亂するに是をつゝむべき袖のせばきにあはすればおのが分に過たるとなりちるかは散哉なり

こと書に打まかせて布引ともいはず猶瀧とさへいはでやみぬ其所にいたりて其物にむかひたるにはおのづから聞ゆべきなり後の人きゝをおもひわたれるたぐひにはあらず

よし野の瀧を見てよめる　承均法師

たがためにひきてさらせる布なれや世をへて見れどゝる人もなき

心明らかなりなれやは布にあれやなり

六帖に二の句かけてさらせる末の句きる人ぞなきと有さて世を經てと云に布をへるといふ事などをもおもひてよせしにやさまでは見ずともよきにやよし野の瀧よしの川の上に何がしくれがしの名多し

題しらず　神たい法師

或人云文德實錄に嘉祥三年五月に雨をいのらしめたまふに時に應じて雨ふる此日諸神のために七十人を僧となし各神の字を冠らしめて名となさせ給ふ事有此法師も其一人なるべしと云々

清瀧川に落る瀨々の浪を白糸と見ていざや是をくりためて山分衣を織て著んとなり山分衣は山隱りする僧又は隱士などの服を云清瀧は山城の高雄山にあるをよめる成べし前後の歌によりて大和にも清瀧川在とやうにいへどかゝる所はこと書によりて云るべきに題不知とあれば其名高きにつきておもふのみなり

りうもんにまうでゝ。瀧のもとにてよめる　伊勢

伊勢の集に大和に三月ばかりすむにさふ〳〵しく寺めぐりせんと思ひてありきけるに龍門といふ寺にまうでてむ月の十日餘りになん有ける見ればその堂のありさま瀧は雲の中より落くるやうに見ゆ仙のいはやと云はいたく年つもりていはのうへに苔八重むしたりあはれにたふとくおぼえて涙おつる瀧におとらず見云らぬこゝちにたぐひなくめでたく見てものかなしくみやこおもひやられていはのもとに云ばしながむるに此寺いとくろうなりぬ雨やふらんとすらんとゝもにある人々いそぎければ雨はふらじ雪などいふほどに雪さらばかりにてかきくらしふるある人々いざ歌よまんといひければとありてこゝの歌有てとよみたれば人よまず成にけりと見えたり

たちぬはぬきぬきし人もなき物なれに山姫の布さらすらん

裁縫ぬ衣著る人は仙人なり其やま人もなきに何しに山姫の布晒すらんとなり扶桑略紀に云古老傳本朝往年有三人仙一飛二龍門寺一所謂大伴仙安曇仙久米仙也大伴仙有レ基無レ舍餘兩仙室今猶在云々懷風藻に葛野王遊二龍門山一一首命レ觴遊二山水一長忘冠冕情安得三王喬道一控レ鶴入二蓬瀛一素性集に「雲と見て人まどはすは流出て瀧の門より來たる水かも。

すざく院のみかど。ぬのびきの瀧御覽ぜんとて。ふん月のなぬかの日。おはしましたりけるときに。さむらふ人々に。歌よませ給ひけるに。よめる　たち花のながもり

作者部類に橘長盛長門守秋成之子直幹之父也といへり

ぬしなくてさらせる布をたなばたに我こゝろとやけふはかさまし

瀧を瀑布ともから人のいへるもてこゝはたゞに布と見て瀧とはいはでできかせたり

此たなばたは七月七日によめれば織女星にて天なるおとたなばたと云神代の古事にあらず

比叡の山なる。おとはの瀧を見て。よめる　たゞみれ

うつぼ物語に住わたりける所は其あたりはひえ坂本小野わたり音羽川ちかくて瀧の音水のこゑあはれに聞ゆる所なり或人云此瀧を又は音なしの瀧とも云か六帖に「いかにしていかによからん小野山のうへより落る音

なしの瀧」源氏夕霧に「朝夕になくねをたつるをの山はたえぬ涙やおとなしの瀧」などよめるが見えたりとおちたぎつ瀧のみなかみとしを經て老にけらしなくろきすぢなし

【うつぼ物がたりに「君こふとみなかみしろくなる瀧は老の涙のつもるなるべし」】落たぎつは落たぎるなりかく重ねて云はもとはたぎると云より瀧とも名付たる故なりさて水上と云に髮をそへて黑きすぢもなく老にけらしとなり

おなじ瀧を。よめる　　みづれ

風ふけど所もさらぬ白雲は世をへておつる水にぞ有ける

こはいかで白雲の風ふけども所をも去でをるらんと思ひじは寔に世を經て落る瀧の水にて有ける物をとなり

能宣集に「浮嶋と名にきゝくれど波の上に所もさらず世をぞへにける」今をとりてよめるにや

たむらの御時に。女ばうのさむらひにて。御屏風の繪御覽じけるに。瀧おちたりける所おもしろき。これを題にて。歌よめと。さむらふ人におほせられければ。よめる

女房の侍ひは臺盤所と云主上の御座也後涼殿の東にあり

たいばん所を主上の御座なりと云事打聽のあやまり

なるべし詞書に卽女房の侍らひと有て女ばう達の物をくふ所主上もまれ〳〵おませる所なり殿上のだいばんの事は是と別なり朝がれひの間の南鬼の間の北といへり

三條の町

是は紀ノ靜子と申て名虎の女也文德天皇に宮づかへし奉りて惟喬親王をうみ奉れり

おもひせく心のうちの瀧なれやおつとはみれどおとのきこえぬ

是はたゞ繪をよみたるなれば昔なき瀧のさまをいはんとて心のうちにいひ出ずして思ひたぎる事のあるにたとへたりと見るべし思ひせくといはんと思ふ心を瀧河などのせきとむるにそへたり【いせが集に「かぎりなき心のうちの瀧なれば世につたはりてながれこそせめ」】一說に更衣の歌なれば思ひせきてくるしき心の中をこそせくとはいひながらいさゝか色に出たまひけめといへり色に出てなど有は何の思ひとは云らねど戀などの事と聞ゆさらば戀の部に入べしといへり

屏風の繪なる花をよめる　　つらゆき

咲初し時よりのちはうちはへて世は春なれやいろの常なる

或抄に云咲そめしといひて花といはぬは繪にゆつるなりと歌は明かなり

屏風の繪に。よみあはせて。かきける　　さかのへの是則

かりてほす山田のいねのこきたれてなきこそわたれ秋のうければ

よみあはせてとは繪に合せておのが情をも云なりさて歌は稻を刈て干すに雁をそへたりこきたれてはおつる涙に稻をこきおろすをよせたり稻と雁とをいへるは繪にあるなるべし

古今和歌集卷第十七打聽終

古今和歌集卷第十八打聽

雜歌下　古本無下字

いにし年うまきぬし一とせの任にて難波におはせし

あひだ何がしの家に藏めたる此卷の古本紀氏の筆なりそれを正しく寫せしと云をかりて見せ奉りしに師詳すらく此假字の書ざま寔にいにしへ也云かはあれど猶いぶかしむべき事もなきにあらず紀氏の原本には有まじくやと此度是をも牽き合せて所々けぢめをことはれるものなり

題しらず　　よみ人しらず

世の中は何かつれなるあすか川きのふの淵てけふは瀨になる（古本けふの瀨となる）

こは昨日淵と見し所の今日は瀨となればけふは瀨と見る所も翌は又淵となる如く世の中はいづれの事いかなるわざか常ならんと思ひとれるなり【後撰「ほかの瀨はふかくなるらしあすか川きのふの淵ぞ我身なりける」】

いく世しもあらじ我身なぞもかく蜑のかる藻に思ひみだるゝ

或抄に幾世しもあらじは幾許の年もあらじと云なり日本紀に萬歲をよろづよとよめるにて知べしといへり幾

世もあらぬ我身をと云をあらじと云はかく蟹のかる藻の如くみだりがはしき思ひのみなるにはながらへて幾世もあらじと意得べし、もは例の助辭のしなり【かるもの亂はかりごものみだれと云に同じ】

紀氏の新撰にはいくばくもあらじと有心得やすき歟

麁のくる嶺の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ上は、れずといはん叙なり心明らけし

小野のたかむらの朝臣

ふかりとてそむかれなくにこさしあればまづなげかれぬあなう世の中（六帖にまづなけかるゝとあり）

是は事有時は先あな憂の世やと歎かるゝにもさりとて世はそむかれぬ物故いよゝ物うきとなり

かひのかみに侍ける時。みやこへまうのぼりける人に。つかはしける（古本つかはせりける）　なのゝきだき

文德實錄に仁壽二年九月從五位下小野朝臣貞樹爲三甲斐守云々京へ上る人は甲斐の介掾いづれの人にても朝集使稅帳使などに上るなるべし京へと書てもみやこへとよむ今の本にまかりのぼりと有はまうのぼりの誤なりまかりとは都より下る詞なり仍て改めつ

朝集使稅帳使の事延喜の太政官式部勘解由等の式を見て知るべしこゝにはことわらず

みやこ人いかにといはゞ山たかみはれぬ雲井にわぶとこたへよ

山高みはれぬ雲居とは甲斐の白根などをこめて心のはれぬによするなり行平のもしほたれつゝと云歌にあはせ意得べし

文屋のやすひでが。みかはのぞうに成て。あがたみにはえいでたゝじやといひやれりける。返りことによめる（古本よりける）　小野小町

三河掾にてくだるなりあがたは本は班田とていにしへ六年に一度づゝ國々の田を班ちかへりて作らしめ給ふ其使を班田使と云事のあるよりやがてゐなかの事を指てあがたとよぶことゝ成ぬ【あがたとはわかち田といふが名目にてあがたと云今田舍をゐなかとよむも同じことわりなり】

わびぬれば身を浮くさの根をたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ

是は世に住わびぬれば今は藻の根を絶たるが水のまにまにさそはれ行が如く我もさそはゞいなんと思ふとなりかくのみいひてえゆかぬ山をいはぬぞよきかゝるをよく〳〵味はふべし【六帖にいせ「夏の池によるべさだめぬうきぐさの水より外にゆく方もなし】

後撰にさだめたる男もなくて物思ひける比小町「蜑のすむ浦こぐ舟のかぢをなみ世をうみわたる我ぞかなしき」とよめるは此いざなはれしに同じ比の事かだいしらず

あはれてふ事こそうたて世の中を思はなれぬほだしなりけれ（紀氏新撰事こそうけれほだしなりけり）

是は中々に人の我を哀といへるこそうたてけれ世を思ひはなれて今は捨もすべき身のさすがに心よわくえ捨ぬほだしとなるとなりあはれは人の我をあはれと云也【「あはれてふ事だになくば何をかも戀のみだのつかねぞにせん」上に出たり】うたては既にも云別樣の義にて我思ふとは別樣にてせんかたなきとなりほだしはつながるゝ事なり萬葉に馬にこそふもだしかくもとよめるもほだしの古語なり釋名に絆をほだしとよめり【ふもだしをつゞめてほだしといふなり】馬の足をつなぎとむる物なり

よみ人しらず

あはれてふことの葉ごとにおく露はむかしを戀る涙なりけり

こはあはれといへばかく有し物をと過にし方をいひ出るなり【六帖に「あはれてふことに哀るしはなけれどもいはではえこそやまぬなりけれ」是もあゝとなげく也】さて露の草木の葉におくによせてむかしを戀る涙を言の葉ごとにおく露とはいへり此あはれはあゝとなげきするなり

世の中のうきもつらきも昔なくにまづしる物は涙なりけり

【後撰に「見し夢のおもひ出らるゝよひ〳〵にいはぬをしるは涙なりけり】世は憂ともつらきとも我告ぬに先涙は哀りて落るとなり

よの中は夢かうつゝか現とも夢ともしらず有てなければ

是は凡世の事を觀念するにうつゝも夢の如しされば世の中と云物は有ても無きがごとくなりといへり

世のなかにいづら我身の有てなしあはれとやいはんあなうとやいはん

我身をいづらと求れども有てなければあはれあな憂とやいはんとなりいづらは俗にどれどこにと云ほどの事なり下の句はいたりて憂をあなうといひて猶いひたらざれば又歎きの辭をかさねたるなり上にあはれあなう又あはれともうしともなど云例なり

山里は物のさびしき事こそあれ世の憂よりはすみよかりけり

かくれたる所なし小町集には物のわびしきと有期詠集には物さびしかる事はあれどゝ有

これたかのみこ

白雲のたえずたなびく嶺にだにすめばすみぬる世にこそ有けれ（六帖にはよみ人しらず）

或人云誰身の上にもかく思ふべきをことに文德天皇の第一の皇子にまし〳〵て御うつくしみも他にすぐれさせ給へる御身をやつして世をのがれかすかにおはしけるほどの事思ひやるべしと

ふるのいまみち

ありにけんきゝてもいとへ世の中は涙のさわぎに風ぞしくめる

人は知にけんや我云を聞てもいとへ波のさわぐにそひて風さへ吹が如くに世の中の穩やかならぬとなり吹しくとは重波の玄くにて吹重れる意なり

そせい（古本そせい法師）

いづこにか世をばいとはん心こそ野にも山にもまどふべらなれ（古本いづこにか）

こは野にも山にも心はまどふべければいづこにか住て世を厭はんとなり【今の本にいづくにかとあるはわろしいづこと云が古意なり】

よみ人しらず

よの中は昔よりやはうかりけん我身ひとつのためになれるか

世は昔よりかくうかりけん若昔はうからで只我今の身一つにうきよと身を責ていへるなりやはのはゝたゞ言に見るべし倒すこゝろにあらず【やはもしは玄もののあやまりなる歟】

よの中をいとふ山邊の草木とやあなうの花の色に出にけん（古本いとふ山路の）

是は人の世を厭ひて住べき山の草木もて心をつけずに世の中はあな憂とてさる名おひたる花の咲出て見すらんとなり卯花は木なるを草木とはすべてにかけていへり

みよし野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせん（古本家もがな顯注同じ）

心明らかなり山のあなたとは山のおくと云意なり一說に吉野は深き山にて有を猶其あなたといへるはあしく次の歌にて思ふべし

世にふればうさこそまされみよし野の岩のかけ道ふみならしてん

世の憂さに吉のゝ山をふみ分て入てあらんとなりかげ道は和名抄に棧道を山のかけみちとよめりかけはしにてけはしき道を云

棧道と岩の陰道の二說有棧道は山のかけみちとよめば岩とあるには陰道玄かるべきか然ばかげと濁るべ

し

いかならん岩ほの中にすまばかは世のうきことのきこえこざらむ（古本すまばかも六帖にはすまばかな）

【或說に佛經を引てこと〳〵しく云はいとむづかしくこゝの篇次にもたがへり】是はみ山にはことに巖の多くたてれば其いはほの中に住居してあらば世の中の憂事もこゝまでは聞えこざらんさらばいかばかりの深き山にも住ばかと云なり山の中とはいはでいはほの中と云が面白くあはれなり住ばかはゝすまへばかにてはゝ助辭なり

古本すまばかもの方よろしき歟かもと云はなげきのこゝろつよきやうなり

あしびきの山のまに〳〵かくれなんうきよの中はあるかひもなし

山のまに〳〵は深き山に隨せて隱れんとなりまに〳〵とは何にてもそれに隨ふ意なり

世の中のうけくにあきぬ奥山のこのはにふれるゆきやけなまし

世の中の憂にあきて奥山にゆき隱れなましと云ことを雪の消るにかけていへり後撰に「人心憂こそ增れ春たてばとまらずきゆるゆきかくれなん」猶此歌の類多し消るはそこにて失るなりそこにてなくなるを隱れ失る心同じく成故にかくも云なり【源氏かげろふにゝはかにきえうせにけるを身投たるなめりとて云々】うけくはうきを延たる言なり

おなじもじなき歌　　ものゝべのよしな

世のうきめ見えぬ山路へいらんにはおもふ人こそほたしなりけれ

心明らけし是は歌の心同類なるをもてこゝに入ぬ

山のほうしのもとへ。つかはしける　　凡河内のみつね

家の集には世を怨みて山守にまかる人につかはすと有世を捨て山にいる人山にても猶うき時はいづちゆくらん

心明らけし家の集には一の句世をうしと三四の句山ながら又うき時はと有【六帖に「山ざともおなじうき世のうちなればところかへても住うかりけり」】

物おもひける時。いときなき子をみて。よめる

今更に何おひづらん竹のこのうきふしまげき世とはしらずや（一本竹の根の）

毛詩に我生之初尙無爲我生之後逢此百罹尙寐無叱とおのづから意かよへり

題しらず　　よみ人しらず

世にふれば言の葉しげき奥竹のうきふしごとに鶯ぞ啼

ことの葉茂きとは人の物いひさがなきなりよといひふしといひ言の葉と云皆竹の縁なり鶯も竹を宿とすれば身にそへて鳴と云なり

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我身はなりぬべらなり

是は竹は草木の間にてよの二つのふしの中に有如く著かたなき身になりぬべしとなげくなり竹を木にも非ず草にもあらぬとは晉の戴凱之が竹譜に植之中有二名曰竹一不レ剛不レ柔非レ草非レ木云々此詞をとりたる成べしはしとは間の事なりいづかたへもつかぬに云あひだをはしとは古言なり【萬葉にゆく鳥のあらそふはしにとよめるもあらそふあひだの義なり又間人と書てはしうどといふ氏有】

こゝの注に「ある人のいはくたかつのみこの歌なりと古本にも注有て或人の上に此歌と云詞有或抄に高津のみこは續日本後紀承和八年四月三品高津内親王薨云々 親王者桓武天皇第十二皇女納二從三位坂上刈田麻呂女從五位下全子一所レ誕也嵯峨天皇之初大同四年六月授二親王三品一卽立爲レ妃未レ幾而廢良有レ以也嵯峨の御代には專ら詩文を好ませ給ひける故に籠中にても皆詩をよく作らせ給ひて歌はまれ〳〵によませ給へり後撰にも此皇女の御歌みゆ「直き木にまがれる枝もあるものを毛をふき疵をいふがわりなき」今の歌とゝもに本文をひかへてよませ給へると見えたり歌をのみよませ給はましかば皇女の御身にかなひて爲のこほれる涙よりも玉をなす松風にかよへる琴よりも猶玄らべの高く侍りぬべきをといとくちをしくぞ思え侍るといへり寔に此歌は皇女の御歌成べけれど注は撰者の書るにあらねば例によりてこもけづりて見べしとてや講說なし

我身からうきよの中と歎きつゝ人のためさへかなしかるらん

世の中を憂物と歎くは我身からなりさる人の上をさへなげくらんとなり此歌もいかで悲しかるらんといかでの詞を入て聞べし此歌の意さま〳〵に聞ゆれど題しらずなればさだかにいひがたし

おきの國に流されて侍ける時に。よめる　たかむらの朝臣

おもひきや鄙のわかれにおとろへて蜑の縄たぎいさりせんとは

隱岐に配流の事旅の部にいへりかく左遷の身となりて海人のなすわざを玄てあらんとは思はざりしにと云なり思ひきやは思ひけりや思はざりしにと云なり鄙は廣く都の外なる國をいへり【ひなと云ことの心萬葉考別記冠辭考等にいへり】蜑の縄たぎは網縄鈎縄などをたぐる海人のしわざを云たぐりをつゞめてたぎと云いさりは磯狩の約めなり

ひなのわかれとは遠き島國に相わかれてをるありさまを卽體の語として云歎みやこ人の聞ためにいへる詞成べし

田村の御時に。事にあたりて。津のくにのすまといふ所にこもり侍けるに。宮のうちに侍ける人につかはしける　在原行平ノ朝臣

文德天皇の御時なり事にあたりてとは勅勘をいへど今はいさゝか御けしきのあしかりけるを玄ばし避て須麻に籠居られし成べし罪ありて流されしと云事文德實錄に見えず此天皇の御在位はわづかに十年がほどにて其間官位昇進年々にこそあらねとゝこほりなく見えたりいせ物語に翁さびの歌によりておほやけの御けしきあしかりけると云をもて今をもとけど彼は作物かたりなれば實事ならぬよし勢語臆斷古意等にいはれたりさて須麻に避たまふは御父阿保親王攝津守に任せられし事見えたれば其よせなどの猶かしこに有てにや業平も津國に遊びし事の有もいづれ在原氏の領地ありし故なるべし今もうばらの郡打出の里に御父親王の遺跡をとなふる寺院ありよて玄か思はるゝなりさて宮の中に侍ける人は誰とも玄らねど宮中にある玄たしき人なるべし

わくらはにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ

今は左すらへの身なれば誰問べきにあらねどたま〳〵訪らふ人もあらばとなり藻汐たれつゝは所につけてならはぬ蜑のしわざして月日を經るよしなり【齋宮の忌言に哭を鹽たると云よし式に見えたり】かく云は歌のあやなりわくらは、たま〳〵の意なり萬葉に見えたる詞なり

左近將監とけて侍ける時に。女のとむらひにおこせたりける。返り事に。よみてつかはしける　なの、春風

とけてとは解官とて司を停めらる、事也解官に三樣有一に喪解二に病解三に理解と云なり科有て解官するを憂ひと云なり

あまびこのおとづれしとぞ今は思ふ我か人かと身をたどる世に（紀氏新撰由彦の）

こはうれひに沈みて我身は存ども思えず我か他かと身

をたどる時なれば誰としてこと、ふべきよしなく今は成ぬるにと、むらひしをうれしくていふなり天彦は山彦に同じ音といはんにいへるなり

つかさとけて侍ける時。よめる　平のさだぶん

うき世には門させりともみえなくになどか我身のいでがてにする

此司解てと有は何の故とは云らねど過失ありてなるべしさらば籠居る事を歎くなり或抄に出がてとは成出がたきなりとさらば司とけて久しく召れざる時の歌とすべし詞書のやうにては只解官せし時の歎きとみゆればさまではいふべからず

有はてぬ命まつまのほどばかりうきことしげく思はずもがな（古本ほどだにも）

命待間とは限有ぞばしの間なり歌は明らけし

今の本にほどばかりと有はあしき歟ほど、ばかりは同用をなす詞なれば古本ほどだにもと有はよろしきなり

みこの宮のたちはきに侍けるを。宮づかへつかふまつらずとて。とけて侍ける時に。よめる

宮づかへ仕ふまつらずは俗に無奉公と云に同じ

みやづかのきよき

つくばれのこのもとごとに立ぞよる春のみやまの陰を慕つゝ

春宮の御陰を戀奉るより木の陰ごとに立よりて乞願ふとなり陰といはんに木のもと、いひて「筑波山はやま茂山ぞげ、れど君がみ蔭に增陰もなし」と云歌をもとしてよめりさて春宮の官人或は女房達へおくれる歌にて歎きねがふ成べし

時なりける人の。にはかに時なく成て。なげくを見て。みづからの。なげきもなく。よろこびもなきことを思ひて。よめる　清原のふかやぶ

ひかりなき谷には春もよそなれば咲てとくちる物思ひもなし

官位高きは日の惠みもよくあたる高嶺の如し數ならぬ身は日影もさゝぬ谷の如し其谷には春の光もいたらねば花も咲ぬ故にとくちるを歎く物思ひもなきはと恩光をも思ひかけぬたとへなり一說に物おもひなしとは物思ひの花もなしとなり花によりてはさくを待ちるを惜むとて物思ひとなれば卽花に物思ひと云名をおふせたるにこそ【後撰に時にあはずして身をうらみてこもり侍ける時文屋のやす秀「白雲のきやどる峯の小松原枝ぞげ、れや日の光見ぬ】貫之集に「としげき心より咲物思ひの花の枝をばつら杖につく」など云歌もていへれど今の歌を解にはかへりてあし、たゞ春の花の咲て疾ちる如き物思ひもなしと見るべし

かつらに侍ける時に。七條の中宮とはせ給へりける。御返り　伊勢

ことに。たてまつれりける

七條中宮溫子昭宣公の女寬平九年七月立后昌泰二年七月皇太后今此時は中宮にておはしけるなりいせの集に此女は是かれいへどきかず宮づかへをのみしてけるに時のみかどめしつかひ給ひけるにこそけしからぬ人のことをきかざりけると心にもおやなども思ひわたりけるうちにはらみにけりさて男みこをぞうみ奉りける我親みづからもうれしと思ひけりつかふまつりしみやす所も后になり給ひにけりうみたりける男み子は桂の宮と云所におきてみづからは后の宮に侍らひけるに雨のふる日打ながめてゐたりければ后の宮のよみて給へりける「月のうちのかつらの人を思ふとて雨に涙のそひてふるらん」御かへしとて今の歌ありさて歌の次にかくてみかどおりゐさせ給ひて云々かゝれば寬平九年の歌なり

此文によれば后に成たまひて後の事なり中宮と書るはいかに

久かたの中におひたる里なればひかりをのみぞたのむべらなる

六帖にひさかたの月の桂の里なればと有久方の中と云にさまゞの說あれど皆聞えず貫之が土佐日記に「久方の月におひたるかつら河底なる影もかはらざりけり」と有かたゞ考るにひさかたの中とつゞくべきよしなし【ひさかたは天とも月とも云冠ことばなり】中とは月の誤とみゆ歌の心は月を后宮に譬へて其中におふる此桂の里におき奉るみ子並にみづからの上も御惠みにまかせたてまつるとなり

紀のとしさだが。阿波の介にまかりける時に。馬のはなむけせんとて。けふといひおくれりける時に。こゝかしこにまかりありさて。夜ふくるまで見えざりければ。つかはしける　なり平の朝臣（古本ありはらの）

三代實錄に元慶三年十一月廿五日大內記紀朝臣利貞等並授二從五位下一

今ぞまろくるしき物と人またん里をばかれずとふべかりけり

こは人を待わぶる我心を捨て我をまたん里をば絕ずとはんと餘意をよめるなり【いせ物がたりには馬のはなむけせんとて人をまちけるにこざりければとあり】かれずは疎の字の意にて俗に絕ずと云に同じ此歌は朝臣

の口ぶりにて人の及ぶべきにあらず

これたかのみこのもとに。まかりかよひけるを。かしらおろして。なのといふ所に侍けるに。(古本侍ける時に) む月に。とむらはんとて。まかりたりけるに。(古本まかりて侍けるに) ひえの山のふもとなりければ。雪いとふかゝりけり。(古本ふかゝりけれど) 志ひて。かのむろにまかりいたりて。ながみけるに。つれ〴〵として。いと物かなしくて。かへりまうできて。よみておくりける

三代實錄に貞觀十四年七月十一日四品彈正尹惟喬親王薨レ病頓田家爲ニ沙門一云々此時御齡廿九也 小野は山城の愛宕郡なり【丹波の國の小野といふはわろし】神名式和名抄等に見ゆ比叡の山の麓と云にも云るし

云ひていたれるよしは雪いとふかきになづさひゆくなり

わすれては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみ分て君を見んとは (古本わすれつゝ)

【いせ物がたりには日くれにかへるとてよめると作りかへたればかくておもひよらぬさまにおはするをたゞに夢かとおもふとにて心かはれり】心明らけし朝に夕に馴つかふまつりにしをことに御くらゐにもつき給ふべき御身をかゝる山住してゆきにつれ〴〵とおはしましけるを見奉ればうつゝとはおもはれずとなり忘れてはの詞まことにさるべくおぼゆかへりて後の心にはさるべき事なり

深草のさとにすみ侍て。京へまうでゝとて。そこなりける人に。よみておくりける

年をへてすみこし里を出ていなばいとゞふか草野とやなりなん

こは年を經ていといたう草深く住なしたる里を我捨ていなばもとのあら野とやならんといひて深草の里を詞とせり

返し　よみ人しらず

野とならば鶉となきて年をへんかりにだにやは君はこざらん

野とや成なんをうけて野とならば我は鶉となりて鳴つつをらんさらぼ鶉を狩にだに君のこぬと云事はあらじといひて狩にそへてかりそめにだに人のとひくるをまたんとなり【六帖に「我やどは鶉ふすまではらはせじ小鷹手にすゑこん人のため」すべて鶉はあれたる野にすむ物故にあれたる所をいはんとてはうづらをよみあはせり】いせ物語には深草に住ける女をやう〳〵あきがたにやおもひけんかゝる歌をよみけると作りなしたりそれによりて今を說はひがごとなりこゝの前後友達などの贈答せる篇次なれば云たしき友だちなるべし【此次々男どちの贈答にも戀の如くよみたるをのせしをおもへ】もし讀人云らずなれば女にてもあるべけれど返しは親しき人の妻などに見てよかるべしいせ物語の如くならば戀の部に入べきものぞ

題しらず

我を君難波のうらに布しかばうきめなみつの蜑となりにさ

我を物の數とも思はず捨たるをつらく思ひて其憂めを見るが悲しさに尼となりてあるとなりなにはの浦と云より憂目を海人布にそへ蜑をば尼にとりなしたるなりこゝに「此歌は或人むかし男ありける女のをとことはず成にければ難波の一本なに三津の寺にまかり尼になりてをとこにつかはせりけるとなんいへる古本となんいふ是も後人の筆にて云にたらねばとらずさる故は此贈答いもせの事によりてならば戀の部に入べし雜の歌とせしからは戀慕の事にあらぬよし有て成べし世には戀慕ならでも怨むる事も有べきなり

返し

なにはがたうらむべきまもおもほえずいづこをみつのあまとかはなる

此いづこをみつとはいかなる所を見とがめて怨むにやさる疎々しく過せしほどもなきものを尼となりしがいぶかしとなり贈れる歌は事ともせざるを怨みたるなればこゝを得て怨むべき間も思えぬとはいふ

今更にとふべき人もおもほえずやへむぐらして門させりてへ

【此歌拾遺集に再び入て戀の部なり】是は荒の茂ければ分入がたくておのづから門をさす心なり荒のふかくおふるを八重むぐらといへりてへはといへを約めて云この歌は前の歌どもの題しらずとあるをうけて上のうたとは別なり例皆云かり前の又のかへしと見て云說はあし、

友だちの。ひさしくまうでこざりけるもとに。よみてつかはしける (古本よんでつかはしける)　みつれ

水の面におふるさ月の浮草のうきことあれやれなたえてこぬ

うき事あれやといはんに上はいへり何事とも思ひしらぬを絶てこぬとなりおふる五月の萍のとは其茂き月比を云なりあれやはありてやをつゞめて云根をたえては萍の根の泥土につかずして水の上に浮て有を云なり

【萬葉に「時鳥なく岡のべの卯花のうき事あれや君がきまさぬ」「鶯のかよふ垣ねのうの花のうき事あれや君

がきまさぬ」是らまたく下は同じ】

人なとはで。ひさしうありけるなりに。あひうらみければ。

よめる（古本あひでうらみければよめる）

身をすて、ゆきてしにけんおもふよりほかなるものは心なりけり（古本いにやしにけん）

我は怨みあればゆくまじとおもへども身を捨て心のそこへ行となり怨めども猶思ひはなれぬ交りにや

あひうらみければ、たがひに怨むるなり古本のあひてうらみければ久しくとはでさて逢し時にうらみられてよめるなり或說に思ふより外なるといはんとて身をすて、我心はいにやしつらんといへりとかく紛れて思ひながらとむらふ事のなかりしなりそれを本意にあらぬよしにいへりと云は古本のはし書にかなへり今の本は誤れる歟

宗岳のおほよりが。こしよりまうできたりけるときに。雪のふりけるを見て。おのが思ひは。この雪のごとくなんつもれるといへるなりに。よめる

古本むねをかのおほよりがこしよりまうできたりける時に物がたりなどし侍りけるに雪のふりけるを見て

君がおもひ雪とつもらばたのまれず春より後はあらじと思へば

【いせ物語に「思へども身をしわけねばめがれせぬ雪のつもるぞ我こゝろなり】後撰に女のうらむる事有ておやのもとにまかりわたりて侍けるに雪の深くふりて侍ければあしたに女のむかひ車つかはしけるせうそこにくはへてつかはしける兼輔朝臣「さら雪のけさはつもれる思かなあはでふる夜のほどもへなくに」かへしよみ人しらず「さら雪のつもる思ひもたのまれず春より後はあらじと思へば」是は今の歌をとりて少かへてをりにあはせたるこたへにや

返し　宗岳大頼

君をのみおもひこしぢの白山はいつかは雪のきゆる時ある（古本きゆる時のある）

心明らかなりおもひこしぢとは思ひつゞくるとなり

こしなりける人に。つかはしける　きのつらゆき（古本きの字なし）

おもひやるこしのふぶきの白山はれどもひと夜も夢にこえぬ夜でなき（古本こしのふぶきの一夜も夢のともによろしき歟）

心明らけし此にもひやるは思ひをおくる心なり

題しらず　讀人しらず

いさこゝに我世はへなんすがはらやふし見の里のあれまくもをし

いざ爰に我は世を經て住んものぞ我住つかずば此さとのあれんがをしとなり菅原の伏見は大和ノ國添ノ下ノ郡なり次の歌を三輪の神の歌なりと云說より此歌をも仙人のよめるなど僞ごとあれど、るに足ず

萬葉に宮人の蓑引ならしと菅原の里とよめるは奈良の都の時はこゝも西の京なればなりさらば此歌は桓武の都うつしの後に宮づかへを辭して菅原の里によせある人のすむとてよめるなるべし歌の體も古めいたり

我庵はみわの山もと慰しくばとむらひきませ杉たてる門

六帖には是を三輪の大神の御歌とす古來風體抄に初の句我宿はと見えて是は三わの大明神の御歌と申すと有何をかより所としてかく云るされけん【六帖も後の加筆とおぼしき事多しもとよりみだりし事も多ければ彼にか、はりてもたのまれぬるなり】此集には讀人志らずなるをもてうけがたし或抄に清少納言の草子に歌は杉立る門神樂歌もをかし今やうはながく、せつきたるふぞくよくうたひたるか、れば此歌もうたへるにこそといへり神樂歌を神のうたと寫もあやまれる歟いづれにもうけがたき事なり

前後の歌をもておもへばたゞ三わ山のほとりに世をさけたる人の志たしき友にいひおくりしと見てやすくきこゆ

きせん法師（古本基泉）

わか庵は都のたつみしかぞすむよをうぢ山と人はいふなり

我庵は都のよその宇治山にかへてすむとなり世の中をうく思ひとりてかく山住すると人は云といへるを山の名によせてよめり宇治山は都の辰巳の方なるを指て云なり凡て五畿七道も都をもとゝして云習ひなり志かぞはしかをつゞめてさと云さぞと云に同じくさて意は如是と云なり【猶百人一首の古說に委しくいへり】

よみ人しらず

あれにけり哀いく世の宿なれやすみけん人のおとづれもせぬ

こは住捨ていつぢへか行けん人のおとづれもせずしてありたるとなり六帖に此歌の作者伊勢と有たしかならぬ事なり【いせ物語には詞を作りていへりそれをもていふはあやまりなり】

ならへまかりける時に。あれたる家に。女の琴ひさけるを。きゝて。よみていれたりける　よしみねのむねさだ

これも在俗の時の歌なれば名をばかく書るなり

俗人の住べき宿と見るなべになげきくはゝる琴のねぞする

世に在わびたらん人の住べき宿と見るにつきてもはた其歎きくはゝる琴の音のするとなりなべは並の意なる事既にいへり俗にそれにつきての意なりなげきくはゝるとは琴の音を聞て打歎かるゝ事いにしへより見えたり萬葉に「琴とればなげきさきだつけだしくも琴のした樋につまやこもれる」「我せ子が琴とるなべに常人のいふなけきしもいやしきますも。

ほつせに(吉本長谷寺へ)まうづる道に。ならの京にやどれりける時。よめる　二條

或抄に源定の孫宿が女又一説には源至が女といへり續拾遺に女藏人二條「數ならぬ我身をうみの濱千鳥跡はかとなく思ばゆる哉」と書て硯に入て侍りけるを御覽せさせ給ふて延喜の御製「濱千鳥行へも玄らぬ跡なれやふみつけつらんしるべだになき。

人ふるすさとないとひてこしかどもならの都もうきな成けりこは我を古されたるをいとひて其故さとを出こしに平城も故郷ときけば我爲に憂名なりとよめり【後撰に身は早くならの都となりにしをこひしきことの又もふりぬる】人とは我なり我を愛られぬからふるされしによせて古さとを出こしと云なりある人云これは人にふるされたりし時なるべしもし女くら人の二條ならば延喜帝のわすれさせ給へる後の事にやと

だいしらず　よみ人しらず

世の中はいづれかさしてわがならんゆきとまるなぞ宿とさだむる

心あきらけし僧の歌なるへし

逢坂の嵐のかぜはさむけれど行へもしらず成ぬべらなり

是は行べき方も玄らねばあふさか山の寒き夜もこゝに寢るとなり

風のうへにありかさだめぬ塵の身は行へもしらず成ぬべらなり

忠岑の長歌に「塵につけとや塵の身につもれる事をとはるらん」萬葉に「ちりひぢのかずにもあらぬ我故におもひわぶらん妹が悲しさ」右の三首ある抄に蟬丸の歌なりといへりより所もなき事なり

家なりて。よめる　伊勢

あすか川ふちにもあらぬ我宿も瀬にかはり行物にぞ有ける(吉本わかやどは)

瀬にかはりゆくをば錢にかはりゆくとよみ入たりと云説もあれど俳諧に入ぬを思ふにたゞ瀬にかはるとたとへたるのみにてことわり足ぬべし

つくしに侍りける時に。まかりかよひつゝ。ごうちける人のもとに。京にかへりてまうできて。つかはしける　きのとものり

故郷はみしこともあらずをのゝえのくちしところぞ戀しかりける

是は故郷にかへりて見れば昔見し如もあらずみなうつりかはりたり今は碁打て遊びしそなたぞかへりて戀しきぞとなり見し如と云に碁をよみ入て下に碁の古事をいへり述異紀云晉王質伐木到信安郡石室山見數童子圍棊與質一物如棗核食之不飢局未終斧柯爛盡既歸無渡時人云々拾遺に院の殿上にて宮の御方より棊盤を出させたまひけるごいしげのふたに命婦清子「をのゝえの朽んも玄らず君か代のつきんかぎりはうちこゝろ見よ」【いせが集に屏風にごうちたる所「をのゝえのくつばかりにはあらずともかへり見にだに見る人のなき」後撰もゝしきは斧のえくだす山なれや入けん人のおとづれもせぬ」六でう「をのゝえはくちなば又もすげかへんうきよの中にかへらずもがな】

女ともだちと物かたりして。わかれて後に。つかはしける　みちのく眞應本橘のくすなおが女

或抄に橘のすなほが女なりと橘は源の誤歟

あかざりし袖のなかにや入にけん我たましひのなきこゝちする

心明らけし萬葉に「我夫子がきせる衣の針目おちず入にけらしな我こゝろさへ」「山菅のやまずて君を思へかも我たましひの此比はなき。

寛平の御ときに。もろこしのはう官にめされて侍ける時に。春宮のさむらひにて。なのこども。さけたうべけるついでに。よみ侍ける　ふぢはらのたゞふさ

もろこしのはうぐわんは遣唐使の判官なりけん唐使には大使副使判官主典あり船は四般にて出たゝすなり

なよ竹のよながきうへにはつ霜のおきゐて物をおもふころかな

こは夜ながきに悲居てはるかに海路を凌ぎてかへらん事はいつならんほども玄らねば物思ふ比哉となりよなが竹はしのとも云和名抄に長間笋をよなが竹とよめり詞は夜ながにとつゞけたり初霜はおき居てとはん料なり　だいしらず　よみ人しらず

風ふけばおきつしら浪たつた山夜はにや君がひとりこゆらん

上は序にして白浪たつ田山といはんのみ也下はかくれ

たる事なし萬葉に「わたの底沖つしら波立田山いつかこしなん妹があたり見ん」「二人ゆけど行過がたき秋山をいかでか君がひとりこゆらん」「玉がつま島くま山の夕ぐれに獨か君が山路こゆらん」これらを少しかへたる也立田山神武紀に皇師勸歩兵起龍田而其道狹峽人不得並行乃還更欲江東踰膽駒而入中洲云々萬葉に「白雲の立田の山の瀧のへのをぐらの嶺」とよめり今のくらがり峠と云はむかしの龍田のをぐらの嶺なるべし

今のくらがり峠をむかしの立田のをぐらの嶺かと云は名の相似たるによてふと思へるのみ立田は大和の平群郡くらがり坂は河内の高安郡なり其間南北はるかに隔れり立田山今は龜瀨越といふその山路やまと川の北にそひて東へこゆれば立田の立野といへる所也天ッ社國ッ社立田彦姫等の神祠立せます是龍田の風祭の祝詞に我宮は朝日の日むかふ所夕日の日がくる所の立田の立野の小野に我宮は定まつりて云々是によるに白雲のたつたの山の瀧の上のをぐらの嶺とよめる其瀧の上は卽今の大和川のたぎつ流にて今も龜の瀨などよべる急流のあるをもて思ふべし又をぐらの嶺と云は祝詞に夕日の日かくる所と云によれる名歟立野は立田の東の山足に在ば朝日にむかひ夕日は嶺にかくれてをぐらくなるを文の詞にしたるより大和人のをぐらの嶺ともいひしなるべし今の立田の里にも神祠あれど祝詞によりて見ればむかしはそこにてはあるべからず龍田川も其里にある川をいへど是も云かるべからず彼大和川の立田山にそふては立田川とよびしなるべし山のもみぢ葉のこゝぞちり流て秋冬のながめは今もおもしろき所なるかのくらがり峠はいこま山をこゆるひとつの坂路なり神武紀の詞にても山路の同じからざるはあきらかなるをや

注に「ある人このうたはむかし大和ノ國なりける人のむすめにある人すみわたりけるこの女親もなく成て家もわろくなり行あひだ（古本あひだに）このをとこかふちの國に人をあひしりてかよひつゝかれやうにのみなりゆきけりさりけれど（古本さりげれど）つらげなるけしきもみえでかふちへいくごとに男の心のごとくにしつゝいだしやりければあやしと思ひてもしなきまにこと心もや有とうたがひて月の面白かりける夜かふちへいくまねにてせんざいのなかにかくれて見ければ（古本見ればゝ）夜ふくるまで琴をかきならしつゝ打歎きてこの歌をよみてねにければ（古本ふし）これをきゝて（古本これをきゝていとおもひて）それより又ほかへもまからず成にけりとなんいひつたへたる（古本いひつたふる）」是も例の後の人の物語によりて書くはへしものなりいせ物語はこゝの詞をとりて歌の心をもそへたるなり此歌六帖には作者かく山の花の子と云るし末の句獨行らんと有

たがみそぎゆふつけとりか唐衣たつたの山にをりはへてなく

【から衣はたつといはん冠なり】こは龍田山に庭つ鳥のなくをきゝて誰が身禊するぞとなりゆふつげ鳥のゆと既にもいへるごとくたしかなるより所なし神樂歌に「さか木葉を神のみむろとあがむればゆふつげ鳥の時なりけり」とよみ此うたにも身そぎといひ立田山といへばいづれ神祠によれることなり【神代紀にとこよのながゝ鳴鳥といふより神社にはあるべき吉例なり】是にさまゞ〳〵の說あれど皆たしかならぬことゞもなり次のうたに濱千鳥をいひて雜の歌とすればこの歌は庭鳥をよめるをつらねて他の心あるべからずたゞ鷄の立田山に鳴をよめるなるべし

庭ッ鳥といひもろこしに家鷄といふ人家にやしなふ名なる事云るし山には鳴べき物にあらず或抄にみそぎとは六月祓にかぎらず凡祓除するを云四境祭にこそ鷄に木綿をつけて四關に放たるといへど今は誰が身そぎするとてゆふを付たる鳥ぞといへば四境祭にかぎらで鷄に木綿を付てはなつ事の有しにこそ顯昭の云ならの京にては立田山は津の國にかよふ道なれば西なる關のたつた山にゆふ付鳥をよまんに便有といへり天武紀八年に初置關於龍田山大江山云々仍ておもふに今の俗にも神に庭鳥を奉る事あり是はいにしへよりも有事にてもしはおのが罪科を此物におふせて身そぎをなしそれを神に奉りしにやさらば立田山の神に身そぎせし鷄をたてまつりしが鳴をきゝてこは誰人の身そぎぞといへるにやあらんさらずばいかで山中になく事のあるべきをりはへては雞のあまた居りはへてなり

わすられん時しのべとぞ濱千鳥ゆくへもしらぬ跡をとゞむる

是はいづこへか行人の歌にても文にても書てとゞめおきたる成べし文字を鳥の跡と云はもろこしの古事なるは序にいへり濱千鳥をそれによむはこの鳥洲崎などに遊ぶに足跡の見ゆればなりさて立行鳥のさまをゆくへ

もしらぬと云よせしなり

貞觀の御時。(古本御時に)萬えふまふほ。いつばかりつくれると。問せ給ひければ。よみてたてまつりける

ふん屋のありすゑ(古本ありま)

貞觀は清和天皇の御時なり文屋ありすへ三代實錄に貞觀五年三月以二散位從五位上文屋ノ朝臣有眞一爲二下總守一又此比文屋、眞人有房と云人もあり名の相似たるはこれらが親子兄弟の間にや

古本にあり末とあれば有眞なるべし末とかな書したるをするゑと訓にあやまれるよりありすゑと寫來れる歟

神無月しぐれふりおけるならの葉の名におふ宮のふるごとぞこれ

上は叙にいひて柄の葉の名におふ宮の御時に撰ばせ給ふ古ことぞ是なりといへりさて萬葉集は奈良の朝に成たりと云て彼都七代があひだを廣く指ていづれの御時をいはぬなりと見るべし【平城天皇おりゐさせたまひて奈良におはしませし故にならのみかど、申せしなり其御時とこゝろ得たるは誤なる事序にいへり萬葉集の時代別に論ありことながければこゝにはいはず】玄かとは其かみも玄れぬ事故かくは詔らせ給へるなり答たてまつるもたゞ其比とのみ玄ろしめせと申せしなり

物語には高野の御時といへり　榮花

寛平の御時。歌たてまつりける。ついでにたてまつりける

大江千里

あしたづのひとりおくれて鳴こゑは雲のうへまできこえつがなん

是は友鶴は皆たてるに獨とゞまりて居るを諸人の官位進めるを我一人え昇らでおくれをるにたとへたりさて其なげくこゑは雲の上まで聞えつげとなり鶴鳴二九皐一聲聽二于天一と云をとりてよめるなるべし【日本紀竟宴歌一から衣下てる姫のつまこひぞ天にきこゆるたづならぬ音も」順集に「あまつ風空にふきあぐる雲もあらば澤にぞたづはなくとつげなん」】

ふぢばらのかちおん

人しれず思ふ心は春霞たち出て君がめにも見えなん

これも昇進を願ふ心なり人玄れず思ふ心とは望める事の有なり春霞は立出てといはんのみ

歌めしける時に。(古本うたなめしける時に)たてまつるとてよみて。奥にかきつけて。奉りける　伊勢

山がはのおとにのみきくもゝしきを身なはやながらみるよしもがな

こはこもりて後の歌なり今はたゞ音にのみ聞く大宮のうちをば昔の身になして見たきとなりみをはやながらは水尾のはやきに身をはやくの世になして見ばやとそへたるなりはやきとはむかしの身になしてと云がごとし上の山川は音といはん料にしてそれより水尾といひなせりもゝしきは大宮の冠ことばなるをいひなれてやがて大宮の事にいへり【もゝしきの事冠辭考にいへり】

古今和歌集卷第十八打聽終

古今和歌集卷第十九打聽

雜體

是は上の雜とは異にて長歌旋頭歌俳諧歌など、種々の體なるを集めたる部にておればざつていと云されど上にも云如くおなじくはこゝの言語もてくさ〳〵のすがたと訓てあらばや【或人これをざつたいとゝなふべからずたいとは物の本の事ときこゆていとは物のすがたの事となれるなりといへり】

長歌

ながうたとよむべし今の本には短歌と書るは誤なり其あやまれるまゝに說は三十一字の歌はみじかけれど詞つゞきて意長し句の數も定めずいひつゞけたるは云出せる事をも捨て詞に從ひ切ゆくなれば千尋の繩も切々に成てみじかしとするによて短歌と云といへるはいにしへの萬葉集をも見ぬ人の强言なり此集のはまづおきて萬葉の長歌をいはんかのよみざまは始の詞を又舉て轉じ下したる體有又たゞ云流したる有又序を長くいひて末に意をいへる有其外種々の體有ども皆始終いさゝかのたがひなく意の通らぬは無し其うへそれの歌一首

並短歌二首と書る長歌は一首三十一言の歌は二首なり其外たゞに三十一言の歌を短歌といひたる所も有て分明なり凡長きを長歌みじかきを短歌といはんに何の辨をか待べき此集にも冬の長歌目錄の長歌とて長き歌を上たるにぞいちじるかりける然ばこゝに短歌と書るは誤なる事明らけし仍て思ふにいにしへの人の草の書のなだらかなるには長をは長とやうに書たらんを紛とやうに見あやまりて短歌と寫なせしにやあらんを事の故をも按ずかついにしへの人の書風をも思ひいたらずことわりに故んの勤なきのみかはあまさへあらぬひが言もゝて付るなりけり【いにしへに手かくと云人は此頃までも今少後の世までも唐の代の人の手ぶりを學びなせし故に草の手の漫なるより見あやまりて後のまどひとなる事此一事のみにあらず】仍てこれは論なう長歌に書改るものぞ然に千載集には此誤をつたへて長歌を短歌と書れしを其子の定家卿は萬葉集を委しく考へて長きを長歌とし短かきを短歌とし給へりされど草の書より寫あやまれるとまではおぼしわたらせ給はねばただ撰者のあやまりのやうに心得給へりけり

慮しらず　讀人しらず

是は戀の長歌なり六帖にも古き長歌とて此歌を擧られたれどさのみ古體と云にあらず今の京と成て弘仁の比などの人の歌ざまなるべし

あふことの。まれなる色に。おもひそめ。

或人色といへば染と云にて思ひ染の意なり思ひ初の義にてはあらじといへど猶思ひ初し事を染るにいひよせし物なり

わが身はつねに。あま雲の。はるゝ時なく。ふじのねの。もえつつとぼに。おもへども。あふ事かたし。

天雲ふじの嶺共に冠辭なり

吾身は常にといひ次にとはにと云とはは常弊にて常にと云も同じさて常に思ひのはるゝ時なくといひて其おもひのひを火によせてとはにもえつゝおもへどもあふ事のかたしとなり

なにしかも。人なうらみん。わたつみの。おきをふかめて。おもひてし。思ひは今は。いだづらに。成ぬべらなり。

何しかも人を怨みんは「蜑のかる藻に住虫の我からとねをこそなかめ世をばうらみじ」と云に同じおきをふかめては海の沖はとに深きを我深く思ふにたとへたり

【萬葉にわたつみの沖をふかめて我思へる又わたづみの沖をふかめておふる藻の】さてかく深く思ひし事も今はかひなくむなしく成しとなりいたづらはむなしと云に同じ

ゆく水の。たゆる時なく。かぐなわに。思ひみだれて。

行水かぐなわ共に冠辭なりかぐなわはいにしへの唐果子なり和名抄に結果形如二結絡一此間亦有之和名かぐのあわと見えたり【かぐのあわをつゞめてかくなわといふ】顯注にかぐなわは唐くだものゝ中にとかくちがへたる物の透垣などのやうに亂て作りたる油物なり云々とざまかくざまにちがへたれば亂るゝ事によめり玉の緒を沫緒によりてむすべればとよめるはいにしへの結び緒に沫緒むすびと云有其むすべるかたちに似たる果子をば香の沫と名付たるかさて思ひ亂て絶る時もなしとなり

ふる雪の。けなばけぬべく。おもへども。

萬葉にふる雪のけなばけぬかに又は朝霜のけなばけなまし今は命の消うせんもいとはぬとなり

えぶの身なれば。猶やまず。おもひはふかし。

えぶのみはやくよりさまゞくいへどあたれりと思ふはなし其後の閻浮の身といはれたるは人界の身なれば思はじとおもへどえやまぬと云意にてかなへり是によるべし【いせ物がたりにえにしあればと云に緣にしの字音なりあふごかたみもあふは逢にて期は字の音なり】閻浮は字音なれば歌には有まじき事に思ひてさまゞく云めれど今の京と成ての人のよめるはさる事稀々有なり且此集にも字音によみし歌かたゞく見ゆ是のみとがむべからず

あし引の。山した水の。こがくれて。たぎつ心を。誰にかも。あひかたらはむ。

思ひにたぎる我心を誰にかたりてなぐさまんかもと歎くにて上はたぎるにかけたる序のみ戀の部にも足引の山下水の木がくれてと云歌見ゆ其も讀人しらずなればいづれか前なりけん

墨染の。夕のをぐらきを墨染にたとへて云也【後撰すみぞめのくらまの山に六帖にすみぞめのたそがれ時の】

あはれ〳〵と。歎きあまり。せんすべなみに。

あはれ〳〵はあゝと歎きするなりなげきは思ひ有て長息をつくをいへどこゝはあゝと聲を引て云をとわりてなげきといへりせんすべなみは歎息のあまりに

いかにともせんかたなきなり萬葉に多くよめる詞なり

庭に出て。たちやすらへば。ゐろたへの。衣の袖に。おく露の。けなばけぬべく。おもへども。猶なげかれぬ。卷がすみ。よそにも人に。あはれと思へば。

立やすらへば、行もやらず立もさだめぬさまなり或人立もとほると同じといへど似て異なり【萬葉の今の本に徘徊をたちやすらひとよめるはわろし立もとほりとよむべしそのあやまりもてこゝも立もとほりの心に見るはわろし上に立かへり「あはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつ白波」と云に相にたれどそれはとかくすれど逢がたきあまりに思ふはよそながら人に心をおきてあるもかへりてはおもしろきこゝちぞすると云なり】おく露のけなばけぬべくは上にもいへるを再びいひて命のきえばきえよと思ひつゝ猶々思ひはなれがたくてなげかるゝ也あはれは物をほむるにもめづるにも悲しむにもいへりこゝは其人をめでうつくしむなり春霞はよそといはん料なり雲霞は遠く見ゆる物なればなり又隔る心にてもよそと云よそにも人に是は人をと有べきを人にと云例古歌に見ゆると云説はよし萬葉にををに、かへて書し例多し

逢見て後はあふ事のかたきにいよ、思ひまさりて命も惜からず戀しのべと色に出さでなげきくらすいとせちなる心をよめり

ふるうたたてまつりし時の。もくろくの。その長うた。

つらゆき

こは序に萬葉集に入ぬ古歌を奉らしめ給ふと有其奉る歌の目じるしなる詞をよみつらねたる長歌なりみづからの事といへるはわろし是を目錄と書しはいかにぞや猶書やうこそあらめ

ちはやぶる。神のみよ、りくれ竹の。よ、にもたえず。

是は先歌の神代より傳はり來し事をいへりかくいひおこして次よりはえらべる歌の目錄を云なり

あまびこの。おとはの山の。春霞。おもひ亂て。

天彦は音といはん爲のみ春霞は亂てと云にかけたる隔句なり【春がすみの亂るゝとは上に「春のきる霞の衣ぬきを薄み山風にこそ亂るべらなれ」是をとりたるなり】然思亂てとは此度のおほせをかしこみていにしへ今の歌をとりあつめこれかれと心やりしてえらべるを云なるべし且こゝは春にあて、いへり

ざみだれの。空もとゞろに。さよふけて。山ほとゝぎすなくごと

に。たれもねざめて。

夏なり思亂て五月雨のとかけていへりさて時鳥に付て誰も寢ざめてと云は夜畫是をのみ思ふなり

唐錦。たつ田の山の。もみぢばを。見てのみしのぶ。

【上に立田川もみぢ亂てながるめり又こひしくば見てもしのばんもみぢ葉を】是をのみ思ひつゝ古歌どもを見てそのいにしへのうたのめでたきをしのぶとなりこゝは秋なり

神無月。しぐれ〳〵て。冬の夜の。庭もはたれに。ふる雪の。なほきえかへり。としごとに。時につけつゝ。あはれてふ。ことをいひつゝ。

冬なりはたれはまだらと云に同じ萬葉には雪のみならず霜にもはたれとよむ冬の夜の時雨にも雪にも身はきえかへりつゝして是をつとむと云を心としてさて春夏秋冬の歌どもを時につけつゝとはことわれるなりあはれてふことをいひつゝとは其時々をはかなくいひとれるなりこゝのあはれは面白きをいふ

君なのみ千よにといはふ。

【君が代はちよに八千よにさゞれ石の】

賀の卷にあて、いふ

世の人の。おもひするかの。ふじのねの。もゆる思ひも。

【おもひを常にするがなるふじの山こそ】

戀の部にあつ

あかずして。別る、涙。

【あかずして別る、涙瀧にそふ】

離別に旅をかねたり

ふちころも。おれる心も。

哀傷なり藤衣は喪服を云おれる心もとは衣を織といひよせてさて緒に物思ふと云が如くとざまかくざまに心をやれるを云次に八千種のことの葉ごとにと云にて心うべし

やちぐさ。のことの葉ごとに。

こは物の數品の多きなり物名雜の上下雜體大歌所の歌などをかねて云なるべし撰び出し部の次序とはいさゝかたがへどこはまだえらびの始に奉りし故にさも有べしさて目ろくは是までにいひて次に此集をえらぶ心をいへり

えらびの始にまづ目錄をたてまつりし故なりとはより所有事にやこゝの詞書にては撰集成て奉るにそへし目ろくにてこそあらめことに序文にも四季につい

で、賀戀離別旅雜と見えたるも今と次序の同じきをもておもふに紀氏の原本と今の本とは次序のたがへるやうなり猶古本を得て正すべきものなり

すべらぎの。おほせかしこみ。卷々の。中につくすと。いせの海の。浦の汐がひ。ひろひ集め。とれりとすれど。玉の緒の。みじかき心。おもひあへず

【すめらぎともとなふなり】勅命をかしこまりて心を盡して古歌どもをあげつくすとなりすべらきみのみをはぶきてすべらぎと稱すなりかしこみは恐の字なりおそれみといふも同じいせの海の云々はうたどもをひろひあつめといはん序なり汐貝は汐海の千々の貝をいふ海舟を汐舟と萬葉に云へるごとしひろひあつめをひろひつめとよむはいにしへのよみざまなり【さいばらに「いせの海きよき渚に汐がひやなのりそやつまん貝やひろはん玉やひろはん」是は貫之よりすこしさきの詞なるべし】さて貝をも玉といへばたまの緒とつゞけたりその玉にぬく緒は長短あれば貫之の心のせばくみじかきにたとへなせりおもひあへずはうたのよしあしをも數をもすゞろに、はえおもひ堪ずこゝろのおよばぬをいふなり

なほあら玉の。年を經て。大宮にのみ。久かたのひろはるわかず。つかふとて。かへり見もせぬ。我やどのしのぶ草おふる。いたまあらみ。ふる春雨の。もりやしぬらん

これは年月をわたりて大宮の内にをりつゝよき歌とて採えらべども猶とし殘しやしつらんと云をかへり見もせぬ我宿のといふよりふる春雨のといふまではもりや玄ぬらんにいひかけしなりあまりに句を隔たるが上手のわざなり撰成るまでのとし月のさまをかくまでよくいひとれるものぞ

ふるうたにくはへて。たてまつれるながうた

壬生忠岑

同じく撰者の撰集成りて奉るにそへて奉れる也くはふるは添るに同じ加の字にそふるの訓あり古歌に琴とればなげき加はると云は琴曲には歌のそふと云なりなげきとは歌なり月花のなげきと云は歌よむ事也

くれ竹の。よゝのふること。なかりせば。いかほの沼の。いかにして。おもふこゝろを。のばへまし。

【いかほ山いかほの沼萬葉によめり神名式上野國群馬郡伊香保の神社あり】いにしへ神代より萬葉集などの古歌なかりせば後の世の人は何によりてかおもふ心を述いひてなぐさまんやとまづ云おこせり呉竹いかほの沼ともに冠辭なり

あはれいにしへ。ありきてふ。人まろこそは、うれしけれ。身はしもながら。言の葉を。あよつそらまで。聞えあげ。すゑの世までのあとゝなし。

六帖家集等にはあはれいにしへをあはれむかしへと有此あはれはあゝとなげくにて其事をほむる心なり【大井川の序にあはれわが君の御代なが月といへるあはれに同じ】有きてふはありけりと云を約めてきと云なりさて世々の古ごとの中にも柿本人麻侶こそ身は下官ながら歌に長たれば言の葉は大宮の内まで聞えあげたる故末の世までの例となれるが嬉しけれと云なり是までは人まろの事をいふなるが下情には此度の撰者達も官位おもからぬを此面おこせる仰せ承り侍る事を含みていへると見ゆ末の代のあとは例の字にこゝろ得べし【序におほきみつのくらゐとあるは此撰者の一人のかくよみしにてもあやしき事知べし】

今もおほせの。くだれるは。ちりにつげとや。ちりの身に。つもれることなる。とはるらん。

いにしへ人丸の歌をめしけるにつゞきて今も我徒に仰せ言のくだれるは彼人丸の例に繼とやとなり【萬葉集は人丸におほせくだりてえらばれしと云ひがごとをよくも見あきらめずしてこゝを思ふはあしゝかれは奈良の都にてあつめし物なり人丸は藤原の都の末に死せし人にて時代同じからず】此ちりは字書に塵は文也といひて文章などの事にも云を今は用ひ下のちりの身は萬葉に「ちりひぢの數にもあらぬ我故に思ひわぶらん妹が悲しさ」といへるごとく塵芥の如くいやしき我らにいにしへよ數りつもれることの葉を問せ給ふはかの人丸が例に繼とてやの心なり上の塵と下の塵とは心かはれど語をかさねひゞかせ且つもるはちりのよせ有詞もていへり

これを思へば。いにしへに。くすりけがせろ。けだものゝ。雲にほえしけむ。こゝちして。ちゞのなさけも。おもほえず。ひとつごころぞ。ほこらしき。

今の本には是を思へばけだ物のと有六帖と忠岑集にはいにしへに藥けがせるの二句見ゆありてよろしければ用ふ（今の一本にもいにしへも有て次に此二句あり）さて上をうけて塵の身のかゝる事にあふはけだ物の空中をかける如しとたとへたり神仙傳に仙となる藥を服て其人飛さりしが猶あまりの

藥を庭におきしを鶏と犬とがくひて鶏は天上に鳴犬は空中に吠たりと云事をとりてよめり【けだもの、雲に入し事萬葉にもよめり】さて右の如くなれば萬の事もわすれて心ひとつにおもひほこらるゝと世にうれしきあまりをいふなり千々と云に一つをむかへていへり

忠岑集嘉錄本ともに是を思へばいにしへに藥けがせるけだもの、四句を一字下て書たり

かくはあれども。てるひかり。ちかきまもりの。身なりしを。たれかは秋の。くるかたに。あざむきいでゝ。みかきより。とのへゐる身の。みかさもり。なさ〳〵しくも。おもほえず。

是よりは忠岑が身の上をなげき申なりいにしへは年久しき勤功の事をみづから奏して官位をすゝめる事有こゝも事のついでにかく申せり此比はまだいにしへの手ぶりの殘りて人の心直く思ふ事はかくさゞるなりてるひかりちかきまもりとは日を天皇にたとへ奉りてさて忠岑前には近衛の番長なりしを誰があざむきにたばかられてか今は右衛門府生にて大内の外重の御垣守を勤むる事年たけてをさ〳〵しからず年功もなきものゝごとしとなげくなり右衛門は西の方なれば秋の來る方といへり御垣とは大内の廓のかこみをいへりそれを守を御垣守といへり【近衛は左右の大將中將少將を上として次に將監將曹隨身など次第々々にかろき官人多し番長は其隨身以下の近衛どもの中にての長なり紫宸殿の御陛の下を守りて御身ちかきつかへをするものなり左右の衛門府は大内の外の重の宮城門を守て御身とほきつかへなり府生は門部の中にて其長なるをいふ】

こゝのかされの。うちにては。風のかぜも。きかざりき。

大内をこゝのかさねヌこゝのへとも云は文選に君門多九重其注に天門有二九重一といふ如くなり御國にては宮門すべて十二門ありこれを羅城といひて外廓なり其うちに天皇のましますの外御門を宮城門といふ左右の衛門守れり其内を中の重といふ左右の兵衛まもれり其うちを閤門といひてそれより内には御門なし然ば九重と云はたゞから文によりていふか又かの羅城門などより宮城門の間に坊門とての多くの御門あり是をすべていはゞ九重もありしにや嵐は山かせなりそれをひとつの名として後にはあらしの風ともいへり然近衛の番長の時は大内に在て山風の音も聞ざりしをとなり

今は野山し。ちかければ。春はかすみに。たなびかれ。夏はうつせみ。なきくらし。秋は時雨に。袖をかし。冬は霜にぞ。せめらる

る。かゝるわびしき。身ながらに。(一本身ながらも)つもれるとしなを。しるせれば。いつゝのむつに。なりにけり。

衛門は外廓を守れば巧に野山近しと云てさて春はと云より下八句は近衛にむかへて外衛のあしき山を云なり霞にたなびかれとは霞に交りてをるさまを云引れて遠く行と云にはあらず次々なきくらし時雨に袖をかし霜に責らるゝは上の嵐のかぜも聞ざりしと云にむかへて外衛に居ればかゝるわびしき身なりと奏すなり【なきくらしと云とて蟬と云は冠なりそれをうけてしぐれに袖をかすとは涙にひまなきなり霜にせめらるゝはいとさむきなり】五つの六は五六三十年の勤勞を云なり

これにそはれる。わたくしの。おいのかずさへ。やよげれば。身はいやしくて。としたかき。ことのくるしさ。

一本おいのかずさへせめくれば

是にそはれる私の老の數とは宮づかへに出身せざるさきの齡を私として凡五十齡あまりにてもあるかやよげればやは彌なりよげれば、さへぎればにて私の齡もさへぎりかさなるを云身はかくいやしきつとめをして年のみたかきがくるしきとなり

かくしつゝ。ながらのはしの。ながらへて。なにはの浦に。たつ涙の。なみのしほにや。おぼほれん

如斯いやしき身にてつひに老はつべきかとなげくなり長柄の橋はながらへてといはんのみ波の雜文をいふとて難波の浦をもいへり波のかさなりよするに我面の皺をたとへたり溺れんは水に沈むを云それを老の面の皺の波にしづみてんの身のはてをたとふなり

さすがに命。をしければ。こしの國なる。しら山の。かしらはしろく。なりぬとも。おとはの瀧の。音にさく。おいすしなずの。くすりもが。君がやちよを。わかえつゝ見ん。

かくいやしけれども玄かしながらに命のをしければよしや頭は白髮づくとも彼不老不死の藥をも得てがな八千世經たまはん君が御代のすゑまでを若がへりつゝ見來らんにと願ふなり【一本藥もると有はわがをうつしあやまれるなり】わかやげりを約めてわかえと云萬葉に「わぎも子はとこよの國に住けらし昔みしよりわかえましにけり。

君が世に逢坂山のいはし水こがくれたりとおもひけるかな

此反歌の心はかく古き事をおこし給ふ御代にあはんとも玄らで逢坂山の石清水の木がくれたる如く人玄れず

沈める身と歎きし事を今はくゆとなり【あふさか山の清水は木かくれにあるか又は君が代にあふといはんとてあふ坂といひかつ山の清水は木がくれなるが多きもて云歟】長歌の始は此御時にあへるを悅び次には身のうれひをかこち終に君をいはひ我身の命も長からん事をいへるに又此御時にあへる悅びをふくみていひ此反歌にはいよ〳〵よろこびの心をいひあらはせり萬葉に長歌の次に反歌と書て短歌を云るせりこゝにはいかで反歌と書ざりけんかつ此集に長歌五首有が是のみ反歌あるもいぶかしさて萬葉に反歌と書てかへしうたとよむなり上の長歌の心をつみとりて打反してうたへる物なればなり【萬葉にもことにいにしへなるは反歌なかりしを其次々よりは反歌なきがまれなり眞名序に短歌を反歌と書り是萬葉の反歌は短歌の事とおもひあやまれるなり】此頃は俗に云たがひてこたへ歌をかへし歌といへればいにしへのかへし歌と云意は忘れて今は反歌と書ざりしにや

冬のなが歌　　凡河内躬恒

家の集には内に奉るとかけりさる事ならばこゝにしか有べし家集はうたがはしきものなり

ちはやぶる。神な月とや。けさよりは。くもりもあへず。はつしぐれ。

【後撰に「かみな月ふりみふらずみさだめなきしぐれぞ冬のはじめなりける」是はふるくよき歌なればこゝにもとりたる歟】今の本にうちしぐれとあり一本又六帖にも初しぐれとあり又家〻集には初時雨くもりもあへずけふよりはとあり思ふに初しぐれも古言ならねどうちしぐれはとに後めきたり然ば多きによりて初時雨をとるさてけさよりはといへれば冬の始にありてよめるに末はとしの暮のこともていひはてたり思ふに已に冬のたてばことしもはやくるゝ事をおもふ故に今より有べき霰霜雪氷までをかぞへいひてかくしつゝ年をあまた經しことよとなげくこゝろにて云つゞけしなり然ばなかばの詞どもは末のとしのくるゝ事をいはん序のごとくに見るべし

もみぢといもに。ふるさとの。よしのゝ山の。山おろしも。さむく日ごとに。なりゆけば。

時雨と紅葉と俱にふると云てさてふるさとの吉野と云よしのはいにしへ離宮の在し故にそこを後に古さと、云り【古さと、はいにしへ都の跡をいふそれよりうつして人の住ずなりにし所又我むかし住し所をも又旅より本國をさしていふ事となりぬ】然ども かくざまに打まかせていはん事いかにぞやおぼゆる

今の本に山あらしもとあるはいはれぬ詞なりあらしは卽山かせなる事旣にいはれたり

玉の緒とけて。こきちらし。あられみだれて。霜こほり。いやかたまれる。庭のおもに。むら〳〵見ゆる。冬くさの。うへにふりしく。白雪の。つもり〳〵て。あら玉の。年をあまたも過しつるかな。

霰の緒にぬける玉をこきちらす如しと云とけてはおのづからとくるなりこきちらすはわざとちらすなり此つづけ體用のたがひ有もし本はときてとありしにやされど其あひだを隔てかくも云まじきにあらねど後の言がらめきたり霜こほりは二つにあらず霜のこほりて庭もかたまれるなり【萬葉に岩どこと川の氷こほりとよめり】いやは彌なり冬草は冬もかれぬ草を云よりてむらむら見ゆるとよめり

日影のあらはなる所は枯て木蔭岸かげなどに枯のこりたるもあればむら〳〵見ゆる冬草のとは云なるべし

ふりしくはふりかさなるを云さて此雪までを序の如くにいひて年をつむ事にいひかけたり

七條の后。うせたまひにけるのちに。よみける　　伊勢

こは延喜七年六月にみかくれさせ給へれば此集成て進りしより後の歌なり然ば是も後より加へられし成べし

おきつ涙。あれのみまさる。宮のうちは。とし經てすみし。いせの蟹も。舟流したる。こゝちして。よらむかたなく。かなしきに。

奥つ波はあれのみ增るといはんのみにて后のうせ給ひて人住ず成ぬるをあれのみ增る宮の中といへり年へて住しはおはしませし時つかへし女房達を云いせの蟹はおのが名をよみ入たりといへどさにはあらじ上下の詞のよせにていへるなるべし

伊勢のみづからの名をよみ入しは後撰にも見えたり「いせの海にとしへてすみしあまなれどかゝるみるめはかづかざりしを」又「おぼろけのあまやはかづくいせの海の浪高き浦におふるみるめを」今の歌のいせの蟹もみづからのなげきと見てやすく聞しかつ心も深きかと覺ゆ次に人々はおのがちり〴〵わかれ

なばといふぞ此宮につかふるをとこ女のうへにわたりて聞ゆこゝを女ばう達のうへとのみわかつはいかがあらん

おきつ波と云より皆海の詞もてつゞけしなり舟流したるは秋に蜑の流せる船かとぞ見る齋宮の女御の集に「淺ましく舟流したる蜑よりも我袖の浦の汐もかはかず」など見えたり

涙のいろの。くれなゐは。われらがなかの。時雨にて。秋のもみぢと。人々は。おのがちり〳〵。わかれなば。たのむかげなく。なりはてゝ。

涙の色より老ぐるゝといひもみぢより己がちり〳〵と云さて木葉の散て雨やどりのたのむ陰もなく成はてしと皆こと〳〵詞のよせもてたとへたりおのがちり〳〵は一めぐりの年月を經て宮の中の人々も御墓づかへするものもこと〳〵退散するをいふなり【信明集にていじ院のうせさせたまへる又のとしのみはてに「古さとの木末のもみぢ秋はてゝおのがちり〳〵なるがわひしさ」】

とまろしの　とは。花すゝき。君なき庭に。むれたちて。空をまれかば。ほつ鷹の。なきわたりつゝ。よそにこそ見め。

人々あらけまかりて跡にとゞまる物とては花薄のみ君もおはさぬ庭にむれたちて風吹ごとにむなしき空を招くにかあらん其時は初鴈の如く我らもなきわたりつゝ餘所にのみ見てあらんが悲しきとなり草木は多けれど薄をもて詞とするはかれが穂に出てまねくさまの心ありげに見ゆるを思へるなりとまる物とは、物とてはのてを略きて云事君が方にぞよるとなくなるのたぐひなり君が方にそよるとてなくなり【鶯の春となくをあやまれる説ありそれも春とてなくなり】

旋頭歌

是も字音にせどうかとよむなりはじめをめぐらす歌と云義なりいかにとなればまづ五言七言と云おこすは歌の始なり次々五七々々といひつゞくればいつまでもつらなるを七々とおく時いひ終れり是は五七々と云終て又五七々といひおこす故に頭に旋す歌と云なり【頭をはじめとよむ事萬葉に初句を頭句と書たるありこの義なり】さて再びはじめに旋らせて又七々といひ終れり是を濱成が和歌式に雙本歌と云も五七は歌の始はじめは本ともいへば五七々といひ又五七々と云本を双べていへれば聞えたり歌の本とは上の句を云末とは下の句を云にて思ふべし古事記に片歌と云が有五七々と云終れるのみなり是は歌のはじめはかくのみいひしを其後是を二つかさねていひしが一體となれりし故に五七七なるは此せどう歌の片方なる心にて片歌と後にいひしものなり又旋頭歌萬葉にあまた見えたりそれが中には一二首五七々〳〵の例にたがふやうに見ゆるもあれど猶よく思ふに右の如くによまるゝなり今の訓はあやまれりその誤もて五七々ならぬも有と云はよく思はざるなり

題しらず　よみ人しらず

うちわたすをちかた人にものまうすわれそのそこにしろくさけるはなにの花ぞ

打渡すは遠き所を指て云仍てをちかた人にといへり物申す我はわれ物いはんなりまうすはもとあがめ語なれど今はかろく心得べし【物申すと句を切て我を下へつけてよむ人ありことわりあしく萬葉に石まろに我ものまうすとよめるによれば今もわれもの申すといふべきをさてはいひはてぬやうに聞ゆれば物まうす我とはいふなるべし】其そこにそこも其所なるをかさねて云さて遠く見て白く咲るは何の花ぞとをち方人の立るそこにある花をとひもとむなり

返し

春されば野べにまづ咲みれどあかぬ花まひなしにたゞなのるべき花の名なれや

【見れどあかぬ花と句を切てよむべし】春にしあれば先咲花は梅なりされど戯れて我に物あたへずしてはただ云べき花の名にあらずとこたへしなりまひなしに萬葉に「天にます月よみをとこまひはせんこよひの長さいほ夜つぎこそ」此歌幣と書てまひとよめり【まひはもと神に物たてまつる事なるは萬葉に五七首も見えて云るしうつりて此頃は賄賂の事となれり】こは幣奉らんと云心にて人にも其禮代に絹布などを贈るをまひといへり今まひなひと云もこれなり名告は名をつぐるなり名なれやは名ならめやなり

題しらず

はつせ川ふるかはのべにふたもとある杉年をへて又もあひみん二もとある杉

二もと有杉は相むかひて立る杉なりそれにたとへて年を經て思ふ人に又も逢らんといへるなり杉はあまたの年をへる物なる故それをもよせて今よりとしを經ても

といへり【二もとの杉を後の物がたりにも歌にもあまたよめるが見えたれど今によりていへばより所にするにたらず】さて初瀬川ふる川のべと云事心得がたし初瀬川に古川と云所の在てそこに立る杉を玄か云ともいへり又はつせ川はいといにしへより絶ざる故に卽はつせ川を古河といへるよしにもいへり【今も國々にむかしの川の流をば古川といへるなり】いづれもさだかならず川の流はとかくかはる物なれば後の流とは所異にていといにしへ流し跡を古河といひてそこに二本の杉ありしにも有べし石の上布留の社にもいにしへより神杉とよめるが見えたれど此二もとの杉とはたがへる成べし川のべは川のほとりの義なり

つらゆき

君がさすみかさの山の紅葉のいろ神な月しぐれの雨のそむるなりけり

こはたゞ三かさの山といへるは雨に笠のつゞけなり君がさすは三笠といはん冠なり萬葉に大君のみかさの山君がきるみかさの山などよめり歌はあきらけし

俳諧歌

はいがいの字俳は雜戯也諧は和也合也と云てをかしきたはれ言をいへりさてから國にも俳諧とつゞきたる言はなけれど此國にはやくかくいひし故にこゝにはとりて書れしにや

史記に滑稽は俳諧也と云注はあれど其傳の本文には見えず唐の杜甫が詩に俳諧體と云事も見えたればから國には、やくよりある言なりされど今の歌のさまには必かなへる事にもあらぬやうなり

今の本に誹諧と有はうつしあやまれるなり

草の手にて俳と誹とのまぎれたるをおもはで後にさま〳〵いふはいたづらごとなりといへり

さて是にえらべるは常ざまの歌とすこし異體にて俳優がましき心詞なるをえらびたり

題しらず　讀人しらず

梅の花見にこそきつれ鶯のひとく〳〵といとひしもなる

鶯の切聲に鳴をひとく〳〵と聞なして人來々にいひなしたりいとひしもをるは厭居るなり心は花見んとて來しを人來〳〵と鳥はいとひげに啼をるとなり【萬葉に「烏とふ大をそ烏のまさでにもきまさぬ君を子らくとぞなく」とよめるに、たり「上にも「なく千鳥君が御代をばやちよとぞなく」此たぐひ猶多し】さて此歌より下の春の隣とよめるまでは四時をついでたり戀の一に

も此用意見ゆ

素性法師

山吹の花いろ衣ぬしやたれとへどこたへずくちなしにして

くちなしと云黄色なる木の子は萬の木草の子にたがひて口を開く事なきもて云さて其子の色の黄なればすべて黄なるをくちなし色と云事と成ぬ今も山吹色の衣のぬしをとへどこたへずむべこそ梔子色なれと口をひらかぬにたとへていへり一説に山吹色は下を梔子にて染上を紅花にそむるといへど山ぶき染と云色延喜の縫殿式に見えず【縫殿式に深支子一綾一疋紅花十二兩支子一斗黄支子一綾一疋支子一斗淺支子一綾一疋支子二升紅花三兩支子とは梔子の事なり音の同じきをもて通はせて書り】こゝはくちなし染を山吹の花の色に見たてて云なるべしかの櫻色に衣はすらんと云に同じ六帖に「くちなしの色に衣は染しよりいはでこゝらに物をこそおもへ」此外後にいはぬ色など云は今の歌をより所としてよめるなり

藤原敏行朝臣

いくばくの田なつくればか郭公しでのたをさを朝なゝよぶ

郭公は幾許の田を作ればにや玄でたをさ〳〵と朝毎に田長を啼よぶぞといへり玄でたをさと啼を田長をよぶ事に今はいひなしたりかれが聲はさま〳〵聞ゆるにやほとゝぎすと云も鳴こゑによりての名なりと【もろこしにも蜀の望帝の魂とて蜀魂とも鳴といへり又郭公と書もこゑによりての事といへり】又をとゝ戀しかけたかと啼又玄でたをさ或はほぞんかけたかとも鳴となり其國々所々にて啼音も異なるにや又は聞なす人の心と玄かゞ〳〵たがへるにや此鳥常は山のいづこにか隱れて夏ぞ世の中に出でなくを死出の山路より來て啼と云も玄でたをさと聞なしたる人のいへるなるべしかくざまに浮たる事はとてもかくても有べきをふかき事も有がごとくに思ふは後の人の心なり

七月六日。たなばたの心をよみける。

藤原のかれすけ

いつしかとまたく心をはぎにあげてあまのかはらをけふわたらん

年月にいつしかあはんと待々たる心いそぎに衣のすそをも脛までまくりあげて天の河原を渡るらんとなり待を延てまたくといふ其待心いそぎに衣をはぎにあげて跨ぐと云心をふくみたり

だいしらず　凡河内みつね

むつ言もまだつきなくに明ぬめりいづらは秋のながしてふ夜は
むつごとは相むつまじむ詞なり小町が秋のよも名のみなりけり逢といへばことぞともなく明ぬるものをとよめるに同じ心ながら末の詞のいひなしにて俳諧に入たるもの歟

僧正遍照

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花も一とき（一本あることごとし）

今をさかりとなまめきて色をあらそひたてるが、しまし事ぞすべて盛と云もたゞ一時にこそと女郎花をかりて人をいましめたるなり是もいひなしにてをかしければ此部に入たるかなまめきし物のまだなりと、のはぬを云それをあしきかたにいへばなま〳〵の心にいひまだと、のはぬ若き人には色をふくみたるありさまにいふなり

よみ人しらず

秋くれば野べにたはる、なみなべしいづれの人かつまでみるべき（一本つてに見るべき）

人をつむとはたはふれて人の身をつまむなり女郎花の野べになまめきたはれてある故に誰かつみたはふれざるべきとなり是らは寔に俳諧なり萬葉に「萬世に心はとけて我せこがつみしを見つゝ玄のびかねつも」後拾遺に「人の足をつむにて玄りぬ我かたへふみおこせよとおもふなるべし」【源氏の紅葉の賀にたちぬきたるかひなをとらへていたうつみ給へればねたきものからたへずてわらひぬ】

秋霧のほれてくじれば女郎花はなの姿ぞみえがくれする

若き女ばうなどの物陰にあらはならぬをたとへたり花とみてをらんとすればをみなべしうたゝあるさまの名にこそありけれ

たゞに花と見て折んとちかよればひとへに女と云べき花の名にこそ有けれとなり名にとは女郎花となづけしをいへりうたゝはうたてに同じ上に委しくいへり【うたゝを物のかさなるあまりしき心にもこれよりうつして云なり】轉をうたてとよむはいづ方へまろばしても云義もてかけりいづ方より見て女郎花とはよく名付たるぞと云心にこゝは見るべし

寛平の御時。后宮の歌合の歌。　在原棟梁

あきかぜにほころびぬらしふぢばかまつゞりさせてふきり〳〵すなく（一本ほころびぬらん）

藤袴のほころびぬらんつゞりさせてふ鳴となり顯注に蓋はつゞりさせか、ふひろはんと鳴故にかくよめりと玄か聞なせる事も有まじきにあらず新撰萬葉に四の句つゞりさせとてと有は聞えやすくてよし是によりてはきり〳〵すは詞にてつゞりさせとよめるにも有べし蓋の事秋にいへり【家持の集と云物に「から衣立田の山にあやしくもつゞりさせてふきり〳〵すなく」「蓋つゞりさせとはなきをれどむらぎぬもたる我はきゝ入ず」「きり〳〵す我きぬつゞれわび人のやども秋風よぎてふくなり】

ある人云顯注の一說に古物語には蓋をさせと云それに付てつゞりさせとはいへり蓋のつゞりさせとは鳴にあらぬにや又後拾遺の序に秋の虫のさせるふしなしと書るは此故なりと申されたりされどつゞりさせと皆よめば古物語も後拾遺の叙もとらずといはれたり

あす春たゝんとしける日。となりの家の方より。風の。ゆさゆさ吹こしける。見て。其隣へ。よみてつかはしける

きよはらのふかやぶ

此詞と歌の冬ながらを合せて見るに玄はすの中に春たつをいふなるべし

冬ながら春のとなりのちかければ申垣よりぞ花はちりける

翌は春たゝんとする日なれば人の家の隣になずらへて春のとなりといへり

六帖には末の句花はさきけるをと有

だいしらず　よみびとしらず

いそのかみふりにしこひのかみさびてたゝるにわれはいぞ寒かれつる

此歌拾遺に再び入てねぎぞかねつるとありさらば心ことなり

こは年久しく思ひこふに付て夜をもねずわびしきと云を【六帖に「ゆふかけていのるみむろの神さびてたゝるにしあればねずぞかねつる」】古き物は靈の出て化もしあるひは祟りなどする事の有になずらへて我戀の久しくなりてたゝるにや夜もねられずと云なり寔にはいかいなり石のかみは大和なりそこに布留の社あり仍ていそのかみふるともつゞけたり其をふるといはでふりにしと云はことわりなし此比はかゝる事をもいひて實をうしなへりかみさびは本は神の御心ずさみを云をうつして神びたりといふにいへり神びは神ぶりと云なり【又いと古き事をかみさびともうつりてはいへり】

枕よりあとより戀のせめくればせんかたなみぞとこなかになる

【狹衣に「人しらばけちもしつべきおもひさへあと枕よりせむるころかな」萬葉に玄きたへの床のべさらずたれどもをれどもさらになどよめる心に同じ】こひに思ひせまれるさまをいふさて戀を泥になして波の折と我居るとをかねたりせんかたなみせんかたなくしてぞなり

枕よりあとより神代紀に頭邊脚邊と有にてこゝも心得べし枕邊より脚べより戀のせめくるやうに思へば夜床の中に居かゞまりてあると云なり思ひにせまりて夜もねられずせんすべなきさまをよめり

戀しさがゝたもかたこそありときけたてれなれどもなきこゝちする（一本なきこゝちかな）

戀しきがはこひしき人のなりさて戀しきと思ふ人の方はそなたぞと云を聞ども我は立ても居てもいづ方ともなきこゝちすると思ひにせまりて心まどひするをいへり

ありぬやと心見かてらあひみねばたはふれにくさまでぞこひしき

【源じの帶木にいたくつなびきて見せしあひだにいといたくおもひなげきてはかなくなり侍しかばたはふれにくゝなん思ひ侍りし】玄ばしあひ見ずてもあらるゝやとこゝろみに日を隔つればさてはえたへがたき心ちするとなりあはでをるはたはふれてするわざなれば戯れにくしといへり躬恒集に「君見ではありぬべしやとこゝろ見にたゝまくもをしから錦かな」これは今をとりてよめり

みゝなしの山のくちなしえてしがなおもひのいろのしたぞめにせん

【六帖に「めなし川みゝなし山のみずきかずあかせば人はうらみざらまし】耳なしは人に聞れず口なしは人にいはれじといふにてそれを下に忍びておもひこふこゝろの下染にせんとなりおもひは例の火色にいひかけたるが紅染には梔子はくはへずくちなしそめにはかへりて紅花の入ばこゝはたゞした染にせんと歌のいひなしのみなり

あしびきの山田のそほづおのれさへ我をほしてふうれはしきこと

いとあやしの我をさへえまほしと云がうれたき事よとよめるなり萬葉に「山城のくせのわく子がほしといふ我あふさわに我をほしといふ」山城のくせ神樂歌に「あし原田のいなつき蟹のや巳さへ嫁をえずとてやささげてはさゝげやさゝげてはさゝげやかひなげをするや」是ら似たる心也山田のそほづは鳥に田の子をはませじのおどろかしに立る人がたなりと是をそほづと云事さだかならずある人は秋田のかゞしはいな葉の露にそぼぬれてをればそほつの心なりといへりいかゞあらん【一說に山しな寺の玄賓僧都備中の國へゆきて山田守わざして有しより田をもる人をばそほづといひならはせりと云は此歌に付ての作り事なり且僧のかなはそうと書りことにいにしへは僧家の職をもつとめぬ人に僧都の官をたまはる事なし此事何の書にも見えぬあとなしごとなればとるべからず後撰に「あけくらしまもる田のみをからせつゝたもとそほづの身とぞなりぬる」是はそほつの心もてよめり】荷田のうしは古事記に所謂久延毘古者山田之曾富騰者也此神者足雖不行盡知天下之事神也と云によく似たる事なりといはれきさるは鵬を豆に通はして後にそほづと云にやといはれたり古ことなれば是をよみしにも有べし

きのめのと

ふじのねのならぬおもひにもえぬべしもえ神だにけたぬむなし煙を

我はならぬ戀して思ひにもゆるがよしやもえばもえよ彼不二の嶽のもゆるを其山の神だにもえけし給はずさらば我もけす事のかなはぬむなし煙ぞとなり不じの嶽の火にもえとつゞくなりむなし煙は何のかひなくいたづらに立る思ひのけぶりなり【後撰に平の貞文「我のみやもえてきえなん夜さゝもにおもひもならぬふじのねの如」かへしきのめのと「ふじのねのもえわたるともいかゞせんけちこそしらぬ水ならぬ身は」同時の御時にや】

紀のありとも

あひみまくほしはかずなく有ながら人に月なみまどひこそすれ

ある人逢見まくほしく思ふ心は數かぎりなく有ながら逢べき月のなきに思ひまどふといへるを星と月とによせてよめりつきなしとは常に云詞にて便宜なきと云に同じ下の人は思ふ人を指す且人にあはん便なきを月なきにいひなしてくらくも思ひまどふとなり

なのゝこまち

人にあはん月のなきには思ひおきてむねはしりびに心やけなん

人に逢んのよしなきを思ひては夜もおきゐて胸をこがすと云なり是も月にたとへていへば思ひおきてをよるも起居てにたとへ且思ひを火のおこりしにたとへ次に其火にやけ居ると云さて胸はしるとは心のさわぐを云走火は火の外へはねとぶを云なり【むねはしると云こ

とば物がたりかれ是にみえたり】

寛平の御時。きさいの宮の歌合のうた　藤原興風

はるがすみたなびくのべのわかなにもなりみてしがな人もつむやと（一本なりもしてしが）

【二二の句は若なのおふる野べのさまを云のみさるをかくかざりてよむが姿のよろしきをわすれてことわりがましく云は後のよみくせなり】新撰萬葉には立出る野べのと有若菜にもと云よりは老たる人のいま一度若くなりてしがな人もつみはやすやと云なりそれを上に野べに戯るゝをみなべしいづれの人のつまで見るべきてふにおなじくわかきはうるはしびて人のたはれつみなどもすることのうれしかるべきを老てはうらやまるるなり

題しらず　よみ人しらず

思へどもなほうとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらじと思へば

こは人を我は思へどもその人はそなたこなたとかゝづらふ心あればうとく思はるゝと云を霞のいづかたの山にもかゝるにたとへていへり此心上に「大ぬさの引手あまたに成ぬれば思へどえこそたのまざりけれ」伊勢物語に「時鳥汝か啼里のあまたあれば猶うとまれぬ思ふ物から」拾遺に「いづくとも所定めぬ白雲のかゝらぬ山はあらじとぞ思ふ」是ら皆同じある人云是はかゝりあるく心もて俳諧に入たるかといへり

春の野のしげき草葉の妻ごひにとびたつ雉のほろ〳〵とぞ鳴　平真文

雉の妻戀にほろ〳〵と鳴と云心なるを雉は春專らつまごひすれば春の野をいへり且いにしへは春の草葉を茂きといへればかくいひさて草の葉のつまとは草のはしを云より雉がすむ所の物をもて草葉の妻戀といひかけたり【はしをつまといふ事木のはしをつま木といひ軒のはしを軒のつまといふ類なり】雉の聲はけん〳〵と鳴故にきゞしともきゞすとも云ほろゝは飛立羽音なり【後の歌に山鳥のほろ〳〵となくこゑきけば又朝たつきゞすほろ〳〵とぞなくこれらのほろゝの詞はわろし】されど此歌は戀なれば我しげき妻乞に涙をほろほろと落して泣と云を雉によせていへばほろゝと泣と云も嫌ひなし

秋のゝに妻なき鹿の年をへてなぞわが戀のかひよとぞなく　きのよしびと

六帖に秋山にといひ下の句なぞやいきてのかひよとは

鳴と有て作者伊勢なり鹿はかひろと鳴と云をかひよと鳴と我心からいひなしたり秋の野に年經て妻もなき鹿の何とて我戀のかひある如く鳴ぞといふなり【鹿は野にもかよへど秋山にといふかたもよろしき歟】

せみの羽のひとへにうすき夏衣なればよりなん物にやはあらぬ　みつね

今こそ思ふ人の心うすくあらめかくてもなれゆかば我に又思ひよりも云なんと云を夏衣の薄きにたとへ且衣はなるれば折目のまよひかたよるにたとへていへり【和名抄に紕をまよふ一によるとよめり萬葉に「ことしゆくかひさきもりが麻衣かたのまよひを誰かとり見ん】

かくれぬのしたよりおふるれぬ縄の寒ぬ名はたゞしくるないとびそ（六帖にそこよりおふる）　たゞみれ

もろ共に寢さへせずば名は立まじければたゞかよひくる事はいとひ給ふなとなりかくれぬは隱沼にて草など茂りてこもりかくれたるをいふかくれぬと云に忍び忍びの心をふくめり【かくれぬこもりぬともよめり】ねぬ縄尊菜なりぬなはと云が古名なりねぬなはと云は芹を根芹と云がごとしぬなはと云より縄によせて縄は繰る物なればくるないとひそとよせたり序歌なり【六てう「あだなりと名にはいはれの池なれば人のねぬなはたつにざりける】

ことならはおもはずとやはいひはてぬなぞ世のなかの玉だすきなる　よみ人しらず

是はひたぶるに思はずといひきらばよかるべきを中々にかけたるがくるしきとなりことならば上にも云如く異にあらばにて思ふ物ならば逢べきに思と云ながらあふゆるしなきは思ふと云に異ならばの意なり玉襷はかくるにいひよせたり【萬葉「玉たすきかけねばくるしかけたればつぎて見まくのほしき君かも】

おもふてふ人の心のくまごとにたちかくれつゝ見るよしもがな　思ふといへど猶おぼつかなければ心のくまにかくれて寔に思ふかおもはぬか見たきとなりくまは山阿河曲路隈などによせたり

思へどもおもはずとのみいふなればいなやおもはじおもふかひなしかくれたる心なし六帖には四の句今はおもはじと有

我をのみ思ふといはゞあるべきをいでや心はおほぬさにして我をのみといはゞ思ひたのみて在ぬべきをそこの心の

多きとなりいでやは心おほきをつよくとり出て云おこす詞なり大ぬさは引手あまたと云より心おほきに事よせていへり

われをおもふ人を思はぬむくひにやわがおもふ人の我をおもはぬ

心あきらかなりされど俳かいにあらず

思ひけん人をぞともにおもはましまさしやむくひなかりけりやは

我を思ひし人をつらかりし報いにて今我思ふ人の又相思はぬとつらき人に逢てむかしの事をくゆるなり

いでゝゆかむ人をとゞめむよしなさにとなりのかたにはなもひぬかな

是は出てけん人をとゞめんずるよしのなければいかにせんと思ふに隣に鼻ひよかしとおもへどそれさへひぬとなりはなひるは俗に云くさめなり【萬葉に「まゆねかきはなひ紐とけまつらんやいつしか見んとおもふわぎも子」「打なげきはなをぞひつる劔太刀身にそふ妹がおもひけらしも】出てゆかんとする人のはなひれば忌て出ぬと云諺の有しなるべし萬葉にはなひれば待人くると云ひ又人の思ふ時は嚔るともいへり

此二首今の本に一本ふかやふ一本よみ人志らずと有は奏覽の原本には有まじき事共なりすべて一本と有は定家卿の校正の時書くはへ給ふなりともいへり

紅にそめし心もたのまれず人なあくにはうつるてふなり

こはあかるゝ時に成ては一度深く思ひ志めし人もたのまれぬとなり人をあくとはすべての事をいひて我あかるゝ時をいへり然紅は蕋の灰汁にてあらへば色のさむる物故にあくにうつるといへり【六帖に二の句染し衣と有はあし、拾遺に「かぎりなくおもひ染てし紅の人をあくにぞかへらざりける】春の歌に心ざし深く染てしをりければといへる如く心をそむる事はあらぬどそむるは志むるに同じければ深く心を人に志むるを衣を染るにそへたり

いとはるゝ我身は春の駒なれや野がひがてらにはなちすてつる

馬をも牛をも放ちかふをば野飼と云なりそれによせて人を思ひはなつを今はいへり後撰に「みちのくのをふちの駒も野がふにはあれこそまされなつくものかは」又「君が手をかれ行秋のすゑにして野がひにはなつ馬ぞかなしき。

うぐいすのこぞのやどりのふるすとや我には人のつれなかるらむ

我はひさしく馴來るに古巣の如くに珍らしからねばとて人の我には今更つれなかるらんやと成べしふるすとは上にもあだ人の我をふるすとも人ふるす里をいとひてともよめり物の古びしは人の捨るごとく捨らるゝをふるされ人と云

さがしらに夏は人まれさゝの葉のさやぐ霜夜をわがひとりぬる

こは夏の夜こそあつければ人の獨寢するやうにさがしだてして我もぬれ冬の霜夜の寒きに獨寢るはあぢきなしとなりさがしらは賢良とも情進とも情出とも書り俗にかしこだてかしこげなど云にゝたり【萬葉に「大君のつかはさゞりしにさがしらにゆきしあらをら浪に袖ふる」六帖に「秋のゝに行て見るべき花の色をたがさがしらに折て來つらん】さやぐは笹葉などの霜風にさやさやと音する也そよ〳〵と云も鳴音なりさわぐもさわさわの音にて俱に鳴音なりされどわけていはゞ初秋の風の音は物にふれてそよ〳〵といひ冬の霜風はさや〳〵と鳴さわぐは廣く何事にもいふなり

平中興

下になかきと書る人なり一說に内膳正忠寶の子なりといへり

逢事の今はたつかに成ぬれば夜ふかゝらでは月なかりけり（一本夜ふかゝられば）

我あふ事のたみ〳〵なるのみかはたま〳〵あふとてもはつかにそれも夜深からでは逢よしなきとなり纔を廿日に便宜なきを月無きに云なしたり

左のおほいまうちぎみ

こはいぶかしきは此撰集の比の左大臣と申すは時平公なり此歌いせが集には枇杷殿とせり此殿は戀の部に藤原仲平朝臣と見えたり是より後延長六年に左大臣に任し給へば此集の比はいと微官なり此歌いせの集によればこゝも仲平朝臣と有たらんを後に左大臣に任し給へるをもてそれより後の人の書改しとすべし此歌三和の山いかに待みんのこたへなれば同國の名所を出していづくまでもおくれじと思ふと云などいせの集のごとく枇杷殿の歌にて有へし【いせ集にかくて世にさわぎいできておとゞも流され給けるむこにて兵衛佐より但馬介にそ其人も流されにける是より前の歌なる事知べし流されし大臣は菅家の御事なり枇杷殿は其むこなりし故に時平公の弟ながら志うと君の罪にかゝりて其に官を下され給ひしなり】

もろこしのよしのゝ山にこもるともおくれんと思ふわれならなくに

右に云如くみわの山の歌の尋ぬる人もあらじと云をうけてさる近きわたりは云も更なり吉のゝ山深きと云も

まだしき事にて遠きから國のよし野山にこもるとも後れじといへるなりもろこしのよしの山の事さまぐいへど皆わろしたゞこゝの吉の山の奥深きは更にてもろこしのよしの山にもおひいたらんといへるか俳諧なりから國によしの山と云が有にはあらず【よしの山はむかし隱者の住し所なりと云もおくふかき山なれば也】

ある抄にいせの集に人のむこに成ぬれば我を今はよもとはじと思ひてもと在ける大和にいきて玄ばしあらんとおもひて女みわの山いかに待みん云々又あるほどに心ばそげにのたまへればいみじくなんたづぬる人もとあるは人わろくもろこしのよしのゝ山に云云をとこ是をいとあはれと思ひてかへしをばえせでかくよみたりけるびはのおとゞ「世をうみの沫ときえにし身にしあればうらむる事の數まさりける」なら坂のわたりにぞおひつきておこせたりける女の返し「わたづみとたのめしことのあせぬれば我ぞわが身のうらはうらむる」云々此中に又あるほどにとはみわの山とよみておくりし後あるほどにと云なるべし心ばそげにと云よりは枇杷殿の詞なりをとこ是を見ていとあはれとおもひてとはみわの山の歌なりかくよみたりけるとはもろこしのよしのゝ山の歌なり返しと云說はかなはず共に此集に入たるに部をことにしたるにも返しならぬを玄らるとされどもいかに待見んの歌を心にうけたるなりといへり此說くはしくいはれたれど此伊勢の集のついでを見るにいかさまにもあとさきの亂たるとおぼゆ八雲の御抄に今の歌を本院左大臣と玄るし給へるはこゝに左大臣と有によりての事にや又他により所も有事にやこゝに左大臣とあるは延長六年に枇杷殿左大臣に任じ給ふ後に人の書改しなりといはゞ戀の部なる花すゝきの歌も書改むべきものぞ此いせの御は枇杷殿のあきがたに御兄の時平公もいひよらせ給ふ事卽かの集に見えたり此兄心いとつらければ吉のになんまかるとてよみたりける「ひたぶるにいとひはてぬる物ならば吉のゝ山に行へ玄られじ」返し「我宿とたのむよしのに君し入らばおなじかざしをさしこそはせめ」云々此贈答もよしの山にこもらんの心なり是を後撰には女につかはしけるとありて贈太政大臣返しは伊勢とあるはたがへるやよろしきやいづれかのいせの集の今ある本はいとみだりにてことに此もろこしのよしの

の山の歌の前後の詞ぞ心得かたかるを此歌ぬし御兄弟のうちにて必枇杷殿とはさだめがたくおぼゆかつある人のみわの山の返しならば部をことにすべからずといへるもいかにぞや部をことにしたるは俳諧歌なればなるべし下にも法皇にし河の御幸の時の歌も部をことにしてえらばれたり

なかさき

霞はれぬあさまの山のあさましや人の心を見てこそやまめ

是はたとひやむとも人の心を見はてゝこそやまめ雲はれぬ淺ま山の如く見ずしてやみなんはあさましきとなりあさましはおぞましと云詞なり我と我身をにくみあざむなりあざみと云花も花と葉のさまのいとおぞましとてよべる名也又見てこそやまめのてを濁りてよめと云人有雲はれぬ山の見えぬ如く人の心を見ずしてやまめそれなん淺ましと云ても聞ゆれど猶見てこそとすみて讀方に心得べし【六帖「うらみても玄るしなければ信濃なるあさまの山のあさましの身は」「いせの海のちひろたくなはくりかへし見てこそやまめ人の心は】

伊勢

難波なるながらの橋もつくるなり今は我身をなにしたとへん

「世の中にふりぬる物はつの國の長柄の橋と我身也けり」とよめるはまだふりながらも有し也伊勢が比は橋も朽つきて橋柱のみ殘りしならん仍てふりにし物のたとへに云なり【此の橋の事序にいへりいせの集には長柄のはしつくるなりときゝてと詞あり是も盡るなりと見るべし此橋文德の時にくちて其後は作られし事物に見えず】つくるは年ふりて盡るなり又も造るに見るはあしくさて此歌の前後皆戀なり然を此歌と次の歌のみ雜にはあらじ仍て此歌も戀の心と見ていはゞ上に人の心を見てこそやまめと云に既に絶んとする中なり此歌はふりはてし中を歎くなり今はふるされて人もかよはぬ中と成行を朽のこりたる橋にたとへて思ひをりしに其橋も朽つきたれば今はよたとへん物さへなしとなげきたるにや

まさのり云此歌の詞書家の集にながらの橋つくるなりと聞てと書るは朽盡るなりと云事とも聞えず作るなりと云心にいへるなるべし國史に又作らるゝ事見えずとも歌にはうきたる事をよめるが多しと此事古來風體抄にも此橋又作らねども橋はつくりつべき物なるが故に作るとよめるがはいかいの心にて侍るな

りといへるを或人は此說もいかゞにやとうたがへり おもふに國史にはもれまじき事のもれたるが他の書によりて見ゆるは後に寫もらせしにも有べしされど此橋今の京と成ては驛路にもあらねば作りあらためらるべくもあらじとおぼゆ又思ふにつくるはくつるとありしを顚倒して寫なせしにもやともおもはるゝなり盡るなりといふは今少おちゐぬやうにおぼゆかし

よみ人しらず

まめなれどなにぞはよけくかるかやの亂れてあれどあしけくもなし

是はもはら實情なれど何ぞはよくもなしさらばあだにしてもあしき事もなしといひて我は實なれど其かひもなきをなげくなるべしあしけくもなきは人の我につらきをかすりていへる歟まめは實情の義なり日本紀に忠誠の字をまめとよめりなにぞはよけくは何かはよきと云に同じ亂てはあだにして實なきなりあしけくもなきはあしき事もなきなり刈かやは亂るゝといはん料のみ六帖に「まめなれどよき名もたゝずかるかやのいざ亂なん玄どろもどろに」天かたは同じくて心ことなり【かるかやといふ草今は一種あれどそれにはあらず草をもかやと云事ありこゝもたゞ草を刈事なるべし神名にかやぬ姫といふを草野とかけるに玄るべし】

おき風

何かその名のたつ事の惜からんしりてまどふは我・人かはこは身を打捨てよめり心詞かくれたる事なし

いとこ成けるなとこに。よそへて。人のいひければ

く　ぞ

或抄にくぞは源の告がむすめなりといへり是は始にみづからの名をかくして屎がいとこなるをとこのおもひかけたるよしにほのめかしいひよりけるなるべしといへり

よそながら我身にいとのよるといへばたゞいつほりにすぐばかりなり

是はいとこにもあらぬ人の從弟なる男によそへて云ことは俗に僞にて過るのみなりといへりよそながらはよそよりしていひよるなり糸のよるとはいとこを糸にいひよせいつはりを針によせ過るを糸を針に著(スク)にいひよせたり

題しらず

さ　ぬ　き

或抄に安倍ノ清行かむすめなりといへり

ねぎことにさのみ聞けんやしろこそはてはなげきの杜となるらめ

こは神も願事をば聞給ふにそこにはいかで我ねぎことをばきかでつれなきぞとやうにをとこのいひおこせけんかへし成べし心は人の願ごとを聞給ひなん神こそ其ねぎなげく事のつもりては終になげきの森とも成らめといひて其如く我に人のいひよるを心よわく聞ばはてはてはなげきのみつもりぬべしと云なり【なげきの森大隅ノ國に在といふはおぼつかなし畿內などに在べし】ねぎことはねがひ事をつゞめていふさのみはしかのみにて如斯と云なり

大　輔

大すけは源のたすくがむすめなりといへり

なげきこる山としたかく成ぬればつらづへ玄のみぞまづ〻かれける

【いせ集に「よもすがらものおもふときのつらづゑはかひなだるさぞせられざりける】なげきは物おもふ時の嘆息なればたかしともつゞくるなりそれを木によせて山のごとくなげきの高くなればなげきこるやまといへりつらづゑは俗にほうづゑといふもの思ふときのかたちなりそれをも山路にはつゑつきてゆく故に木こりの息やすむるつゑによせていへりなげきを木になして樵(コ)るとつゞけたるいかにも俳かいなるべしやまとしのしは助辭なり

よみ人しらず

なげきをばこりのみつみて足引の山のかひなくなりぬべらも也

【下に「世の中のうきたびごとに身をなげばふかき谷こそ淺くなりなん」と云に似たる心なり】これはなげきをつみてもそのかひなくなりなんさきなりといふを木をこりつみてやまの峽もなく成ぬべしとつゞけしなり人戀ることをおもにとになひもてあふごなきこそわびしかりけれ

あふご逢期なりそれに物を荷ふ枴をそへたり和名抄枴の和名あふごと有此比には字の音をも歌によむ事となれり期は詞にあらず

よひのまにいでゝ入ぬる玉か月のわれて物思ふころにもあるかな

三日の月は片われなるよりわれてと云さてわりなく物を思ふ比かなといはん序なりわれてはわりなくをはぶきて云なり是は今の京と成ての詞なるべし【萬葉に我胸のわれてくだけてと云は胸中のわれくだくるやうの事なり是とは別なればまぎらはすべからず】新撰萬葉に「鶯のわれてはぐゝむ櫻花思ひくまなくはやも散哉」是もわりなく玄ひてはぐゝむ意下の句にて玄らる伊勢物語に二日といふ日をとこわれてあはんと有もわりな

くしひてあはんといへるなり

わりなくはことわりなくの略言なり又それをわれてとのみ云はいよゝうつりたる詞なりさて此歌六帖にはわれても物を思ふ比かなと見えたり

うへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさかさに

是は其方にとて左すればあしく右すれば又其方にもあしく行ちがひのみして思ふさまならぬを云なり或抄に云そへにとてと云詞【壬二集に「そへにとてたのめしくれもとにかくにいく夜過ゆく月日なるらん」これも其方にてよく聞ゆ】古今著聞集にある日又こし車にひかれて參りけるに國宗寺のまへにてたけ高く大なる法師のかきのかたびらばかりに袈裟かけたるが同行とおぼしき僧四五人具したるが行を見てこし車より飛おりて何といふ事もなく云やとくびをかきてすまひをとりけりたがひにひし〳〵と〻りくみて此法師を打まろばしてけり其後おのれは聞ゆる文學かなといへばそへにといらへておのれは聞ゆる壇光かなといふ又そへにとこたふいざゝらば今一度とらんとて又よりあひてとるに此度はだんくはうかちにけり云々此そへにといらへたるはさよと云心と聞ゆればうき事の有時のがれんともせずさよと打まかせてをれば其事のみにもはてず又異なる憂事のかさなりくるを打わびてとすればかゝりとはいへるなるべしといへり

そへには其方にてよく聞ゆ著聞集のそへにといらへたるは心異にて今の歌をとくにはやくなし又そへにといらふるをさよと云も假名たがひていかゞあるべきそれにての心といはゞ韵のかよひて聞ゆあふさきるさはとやかくとゆきあはぬ心なりあないひしらずはいふべきやうも云らずと云なり

世の中のうきたびごとに身なげば深き谷こそあさくなりなめ

こは世の憂事のいたく多きをいへり心は明らけし後撰に「よの中に云られぬ山に身なぐとも谷の心やいはでおもはん。

在原のもとかた

世のなかはいかにくるしと思ふらんこゝらの人にうら見られば心あきらけしこゝらはこゝらそこらといひて彼此と云を片方につきて云そこらといひこゝらといふ俱に多き事となれり

六帖にこゝらの人をよろづの人と有はこゝらは幾許の心なる事云るし此歌世の中を人心にいひなしたるがはいかいなり次の歌に年の思はんと云も同じく年を人心にしていへるなり

よみ人しらず

何をして身のいたづらに老ぬらん年の思はんことぞやさしき

ある人云此やさしきは〻づかしきなり常に心ある人をやさしと云も相むかひてまみえんも心づかひせられてはづかしき人と云なればこなたの心をかなたに名付るなりといへり萬葉に「まつら川此河かみに家はあれど君をやさしみあらはさずありき」又「世のなかをうしとやさしと思へどもとびたちかねつ鳥にしあらねば。

やさしといふ詞をはづかしと云心なりと云はいかゞあるべき

おきかぜ

身はすてつ心なだにもはふらさじつひにはいかゞなるとしるべく

身は捨たれど心は捨ずしてとゞめおくべしさらばつひの世を云るべきとなりはふるはつねに物を投捨るをはふると云にて放ち捨る心なり此歌の身はすてつを遁世の事に見るべからず興風が我身を捨ものにする心に見つべしと云人有よろし

日本紀に澄の字をはふるとよみたる所有水のあふれ出てすたれる義にや又おほきみを島にはふりと云歌も見ゆ罪ある人を遠き所へ捨はなつ心なり

千さと

志らゆきのともに我身ばふりぬれど心はきえぬものにぞありける

かくれたる心なし萬葉に「雪こそは春日きゆらめ心さへきえうせたれや立もかよはぬ」後撰に「身は〻やくなき物の如成にしをきえせぬ物は心なりけり。

志ら雪のともにとは白雪と〻もの心にはあらで白雪の徒と云がはいかいなるべし

題しらず

よみ人しらず

梅の花ささての後の身なればやすきものとのみ人のいふらむ

上はすきものといはんのみ梅の子といはんとて咲ての後といひすきものといはんとて子なればやと云なり梅の子の如なる身なればやさは人のいふらんとなり梅子の酸き物なるに好事の者をよせていへり【紫の日記に源氏の物語をおまへに有を殿の御らんじてれいのすゞろごとゞもいできたるついでに梅の下に云かれるゝ紙にかゝせ給へる「すき者と名にしたてれば見る人のをらで過るはあらじとぞ思ふ」たまはせければ「人はまだをられぬものを誰か又すきものぞとは口たらしけん」】

法皇。にし川におはしましたりける日。猿山のかひにさけぶといふことを。題にてよませ給ふける　みつね

宇多上皇なり西川はかつら河なり

雜の部に鶴洲にたてりと云事を題にて貫之によませたまへる九首の題の中なるべし

わびしらにふしらなきそあしびきの山のかひあるけふにやはあらぬ

【山の峽をかひあるにかけたり】こは御幸有てかひ有今日なれば物がなしくましらも啼そと云なりましらは猿の一名なりから歌にも猿鳴三聲淚沾レ裳又三聲斷レ腸などいひて聲はいと物かなしきものといへりさて此歌を何とて俳諧に入たるにや心詞ともにたはれたる所なく實にめでたき歌なり是ほどの歌は此集中にも多く侍らざるものを

此歌みつねの集に山のかひに狙なくと詞有又次に「心あらばみたびといふ度鳴聲をいとゞ物思ふ我に聞すな。

題しらず　よみ人しらず

世をいとひこのもとごとに立よりてうつぶしぞめのあさのきぬなり

是は五倍子染の衣を人におくる時よみてそへらる成べし【六てうにはこけの衣ぞあり】世をいとひ木の下ごとに立よりてとはやどりさだめぬ法師のさまなりうつぶしは五倍子はうつろなる物故に云名なりそれをやどりさだめぬ身の木のもと毎にふしぬるにそへたりさて其ふし染の麻衣なりといひておくるにそへしなり

ある人大和物がたりに僧正遍昭の事を書るに年月をへてつかうまつりし君に少將おくれ奉りてかはらん世を見じと思ひて法しになりにけりもとの人のもとにけさあらひにやるとて「霜雪のふるやの中にひとりぬのうつぶしぞめの麻のきぬなり」と云々を引て遍昭の歌かとうたがはれたりかの集を見るに末の句麻のけさなりと有て餘は今と同じされどかの集は正しからぬ物のよしなり又大和物語は大かたつくりごとのみなればこれも考たがひがたきなり

古今和歌集卷第十九打聽終

古今和歌集卷第二十打聽

大歌所ノ御歌

西宮抄云大歌所在二圖書寮東一新嘗時侯奉有親王大納言非參議六位別當琴師歌師十生此大歌所は神樂風俗等のうたひ物をつかさどれる官人其外歌人等を召おかる、所なりそれを習ひ傳ふるもこゝにて教ふる事となり【雅樂寮はもはら糸竹の類をもて舞樂音樂をなす事をつかさどれるなり此大歌所は御神樂にて糸竹も御國の風俗なれば別に所をおかる、なり】江次第に大歌小歌見ゆ大歌は公朝に用ひ給ふを云おほやけならず世に專らうたふを小歌と云おほやけにもちひさせ給へば大歌といひ御歌ともいへど御みづからのよみませしにあらず又うたふには更に撰びてうたひ其曲調をも作れる事有とぞ

おほなほびのうた

おほなほみと、なふ神樂歌にみな人のしではさかゆる大なほみとうたへりさて大なほびとは新嘗會の竟に豐樂殿にて五節の舞ありて百官に宴を賜ふを始にて大祭事の齋の竟には當行に直させ給ふ時宴を賜ふ事をいふ今も諸社の神事の竟に神酒をおろして宴をなす所を直相殿と云も此いはれなり

あたらしき年の始にかくしこそ千とせをかねてたのしきなべめ

此歌續日本紀【今の本の注日本紀には仕へまつらめ萬代迄にとあり續日本紀にはと有しをあやまりしなり】天平十四年正月に大安殿に出御まし〳〵て諸官に宴を賜ひ五せちの舞等奏しをはりて又天の下の位有人にも諸司吏生にも宴を賜へる時六位已下の人々琴を鼓て「新しき年の始にかくしこそ仕へまつらめ萬代までに」とうたへりしをこゝには末を取かへてうたへる也『うたひ物を時にとりてすこしづゝかへてうたふ事例ありさいばらにも此歌を上たるは下の句つかへまつらめよろづ代までにとあり】然ば正月の始にありし宴にうたへれば新年の始と云を其後いづれの御時にか即位の年の十一月に大嘗會行はるゝに採てうたひかへしを年々の新嘗會にうたふ事と成ぬ仍てこゝは新年の夜を即位の始の年にとりなして見るべし萬葉に御代の始をばあたら代とよみし例ありさて御世の始にかくたのしきを猶千歳の末までも如斯樂しき事のみにて終めとなり今の本にたのしきをつめと有はをへめのへをつに寫誤り

しなり【たしきをつめとは一說に臣達の大庭に薪をつみて奉る事をもていひよせたる物ぞといへどそは大なほみの時にあらねばかなはずこゝは古歌の下の句もてくりかへてうたへるもの也】萬葉に「む月たち春の來たらばかくしこそ梅を折つゝ樂しきをへめ」又「春の內に樂しき終者梅の花手折て來つゝ遊ぶにかあらん」右の中を上の歌の下句もてとりかへてうたへるもの也

後京極攝政殿の自筆の本と云を寫したると云にもたのしきをつめと有是もあやまりを傳へられしなり

ふるさやまとまひのうた

大和舞は上に云大嘗會の巳の日に豐樂殿にてさまゞゝの舞有中の一つなりされど此時のみならず神社の祭にも此舞あり

此事貞觀儀式三代實錄江次第等に委しく見ゆ

さてふるきと云はこゝの歌は此比はうたはで他歌をうたひしか又うたへどもあるが中に右歌なりとてしかいふ歟

ふもとゆふかづらき山に降雪のまなく時なくおもほゆるかな

降雪の間なく時なくといふ序なりさて是者戀の歌なるをとりて君をも神をも千代萬世とかしこみつゝ思ふよしにしてうたへるなり玄もとは玄げきもとにて若木の茂くおひたるを今其玄もとを伐て薪にせんとて藤葛をもてゆふなり【此しもとは正月の卯杖の事なりといへるはひが言なり玄もとゝ云事萬葉におはくよみて若木の生茂れる事なり】此意もてかづらき山に玄もとゆふと冠らせたり葛城山大和なりいと高き山なり

あふみぶり

ふりは風俗なり古事記に宮人振天田振夷振など云る多し日本紀にも夷曲有さるをたゞ國風のみ云と思ふはわろし【萬葉にあるあづまうたをやがてあづまぶりと云べきものなり】こゝに諸の國ぶりをのみ擧しなれば近江ぶりといひ又其所或は其歌の詞を擧て水ぐきぶりと云續日本紀には難波曲倭部曲淺茅原曲など云が有されども歌とはいはでうたひ物に此ふりと云事をわけていふ事ひさしければかくうたひ物の歌を之と見んも後世にてはあしからず

あふみより朝たちくればうれのゝにたつぞ鳴なる明ぬこの夜は

此歌はいさゝかの巧もなく打あるさまをよみたりかくこともなくておもしろきが古歌の妙なりいにしへ學ぶ人はひたすらに此體をねがふなり先近江より朝とく立くれば守礪の野と云にて夜も明わたれるが鶴どもの多く群たちゐて鳴けしきえもいはれず面白きとなり明ぬ此夜とは明ぬる此夜なり【後世あかつき明ぼの朝とわかちていへどいにしへはあかつきといふより明と云までを一つにいへば此朝だちと云もあか時に立くるなりそれを又明ぬる此夜といへり】

みづぐきぶり

是は歌の詞にて名付たり水莖の岡は筑前なり萬葉又風土記等に見えたり

水ぐきのをかのやかたに妹とあれとねてのあさけの霜のふりしも

萬葉に太宰ノ帥大伴ノ旅人卿任みて、京に上り給ふ時水莖と云所まで人々送りこし中に遊女兒嶋と云が別れをしみてよめる歌大伴卿のこたへ歌見ゆ其如く太宰につかふまつりし人京へかへりて太宰に在し日女に逢し夜の朝明に霜の降たりし庭のけしきを思ひ出てなつかしきまゝに其朝明の霜のふりはもと云成べし玄ものは日本武ノ尊の吾嬬はやのやにひとしくそへし言にて玄と云一言が戀しのびてなげく心なり屋かたとはきと玄たる殿舍にはあらでよろしきを眞似て造れるを云成べしこゝも古歌なれば太宰府の殿舍にはあらで水莖の岡によろしき家の有てそこにて妹に逢しを玄か云と見えたり妹とあれは我なり我をあれと云は古歌なりあさけは朝明の略なり

まばつ山ぶり

まばつ山打こえみればかさぬひの島こぎかくるたなゝしを舟

萬葉に高市黑人が旅の歌八首の中の一首なり今の本に打出て見れば笠ゆひのと有は誤れり玄ばつ山をこえて入江をみれば笠縫島に小船の漕かくるゝけしき面白しとてよめりさて四極山は難波にて今の天王寺の邊に在し山なり今は山も均して田畠とせしかど難波の古繪圖を見るに山林いと多きあたりなり萬葉に「ちぬわより雨ぞ降くる玄ばつの蜑網手網はせりぬれてたへんかも」とよめる茅沼は和泉也それにむかへて津國なる事明らけし笠縫嶋跡なく成にたれど津國に笠縫と云より所萬葉考にいへり【萬葉の八首の歌は近江三河尾張山城等の國々の歌の中に入たり後世玄ばつ山かさゆひ嶋豐後にありと云はわろし此旅のついでに豐後にはいたられまじき事なり】棚なし舟の事既にいへり入江のけしきいとよきに小船の漕わたるは與有物なれば下にも浦こぐ船の綱手かなしもとよみいせ物語にも「鹽が

まにいつかきにけん朝なぎに釣する舟はこゝにならなん」などよめる類なり

日本紀雄略天皇十四年正月身狹村主青等共二呉國使將二呉所レ獻三手末才伎漢織呉織及衣縫兄媛弟媛等一泊二於住吉津一是月爲二呉客一道通二磯歯津路一名二呉坂一云云これにも玄ば津は津の國にて住の江にちかき所なるはちぬわより雨ぞふりくる玄ばつの蜃といふ歌にむかへて玄らるゝよし餘材抄萬葉考等にいはれたりこゝに天王寺のあたりなりと推究られたるはいかゞあるべき是にはおもふ所あれどこゝには言長ければいはず笠縫嶋は其跡なしと萬葉考にいはれたり寃さる名よび傳へたる所なし但大嘗式に津國の笠縫氏より笠を奉る事見えたればさる地名もありしならんといはれし延喜の大嘗式且主計式等にも津國の貢物にはさる物見えずいかゞしてかく玄るされけん

神あそびのうた

是は神樂を云あそびとは樂を奏するを云なり是神功皇后の紀に御琴あそばせといひ後の物語にも糸竹のうたひ物を何々の遊びといへりかぐらと云事古書に見えず玄ばらく後の詞なるべし是は大内にて神を祭り給ふ時うたふ歌なり

とりものゝうた

此神遊びの時手にとりて舞はやす其とり物の歌なり採物九種有さか木ぬさ杖篠弓劍鉾杓葛等なり

神垣のみむろの山のさか木葉は神の御まへにしげりあひにけり

意明らかなりかくざまによみやすく玄らべよろしきがいにしへの歌の高妙なるなり神垣とは神のおはしますところの穢れなどを忌隔づる垣なり御室と云も神のましませる殿なればかくつゞくべしされどかくつゞけし例は聞えず三室山は萬葉にみむろの三わ山見ればとよみ又飛鳥の神なび山をも神なびのみ室の山とよむ此二所にまがひ有若此歌も神なびのみむろの山と有しをさては飛鳥の社にのみうたふべき故に他の神社にてうたふ時かへて神垣といへるにも有べし【みむろ山の事萬葉考にいへりさか木の事は冠辭考にいへり】和名抄に龍眼木をさか木とよみたれどいにしへは玄からず神事には常葉の木を用ふる例なれば榮木を略してさゝの木と云なるべし

霜やたびおけど枯せぬさかき葉の立さかゆべき神のきねかも　（六帖には

霜のあまた度おけど枯ぬさか木葉ぞと其神社の物をほめてたとへなし神の宜禰が榮ゆべき事をいへりきねは神に仕ふる女を云【巫女をみ子と云は後の語なり】又男の神に仕ふるをねぎといふさて其神をおきてきねが榮ゆべきを云は此歌もとはきねをことぶきてよめりしをやがて神社の物なればさか木の歌に採てうたひし成べし或人は其社のきねが榮ゆるは卽其社の榮えなればかくよめるかと云は物に付めぐりてことわりをよさまにいひなす物なり神を崇め奉らんにかたはらなるきねをいはひてかなはんや否や思ふべしやたびは彌度にていや重にと云に同じ右二首はさか木をとりてうたふなり

まさむくのあなしの山のやま人と人も見るがね山かづらせよ

今の本には見るかにと有顯昭の本六帖等に見るがねと有をよしとす【六帖に初の句我せこがと有は似つかはしからぬ事なり】さて歌は穴師山の神祭に其山人と人も見てしがなに山かづらせよといふなり此あなし山の山人といへるをいかなる故とも今までいへる人なく心得ねば捨でいはざるのみ穴師には兵主神社卷向には若御魂神社有と式にみゆ【まきむく今の本にまきもくと有後にはまきもこなども云もあり古事記に麻伎牟久萬葉に卷向姓氏錄に卷椋とあるをもてまきむくなるを玄るべし】いにしへ此神達を祭る歌なりしを其後いづこにも神樂のかづらと採る歌に用ひしなるべし又垂仁天皇の紀の一書に倭大神を祭給ふに定二神地於穴磯邑一云々と見えたれば上つ代にはこゝにて神祭の有しなり其後別にさる事書し物は傳はらねどかくこゝにて神事の有し故に此歌も有しならんとおぼゆ穴師山卷椋山同所なり山かづらは上代の神事には眞折をかづらとし日蔭を襷とすと古事記日本紀等に見ゆこゝも正木なる事次の歌を合せて玄るべし共に山深き木にかゝる物にて人氣遠く清らなる物なれば神事に採もちふるなり其髢とするは正木葛をもて額をゆひ端を背へたるゝなり【まさ木の事冠辭考にいへりかづらをかくるさま中比の世よりは絹をほそくたゝみてゆひたるめり後世は其末をあやにくみて下るなりいにしへのさまは式其外の書にも見えたり】此歌を今の本に見るかにと有より後世見るべくとうたふ人も見るにてあらんかと心得ても聞ゆれど萬葉にかやうの所は見るがにとも見るがね

とも云てかは濁る假名を多く用ひたれば見るがねと濁りて心は見てしがなと願ふなり萬葉にもがにと濁りしもあれど多くはがねと見えたり其うへ顯昭の本六帖にも見るがねとあれば是をとりもちふべし

今の本に見るかにと書しもがにとにごりてよまんには義たがはざるべし

み山には霞ふるらしと山なるまさきのかづらいろづきにけり

【右の二首はかづらの歌なり】里近き山の正木づらの色付は冬の始なり是を見て八重山の奥はいともさえ〳〵て霞などもふらんと思ひやれるなりとやまは先は外山にて外なるひくき山をいふこれも其原は古事記に迦具土神の殺され給て五つの山となるに右の足は戸山都見神と成といふ其戸山の戸は山口にて門のごとくいへるなりこれを思にと山は戸の義にてふかき山の入口なる山の事なり外と云もこゝろはかよへど言の本はたがへり正木のかづらは眞榮の葛と云事にて冬も枯ねど十月の比古葉のうつくしくいろづく物なるを云【幸と榮とをひとつにいふ事いにしへの常なり】さて此歌はたゞけしきのみをよみたるをかづらの採もの、歌に用ひたるなり

陸奥の安達の眞弓わがひかば末さへよりこしのびく〳〵に

陸奥の安達と云所より弓をば製り出しつらん故にかくいひてさて我引ば今ならずとも末にはしのびく〳〵によれかしといへるなり弓を引ば本末のこなたへたわみよる物なるを我方へ人のよるにたとへなせり此歌は戀の歌なれど弓をとるにうたひしなり【戀の二にあづさ弓ひけは本末我かたへよるこそまされといへるに同じ】安達郡は安積郡を割て一郡とせられしなり延喜六年の事なりそれよりいにしへも安だちてふ所は有しなり

萬葉のみちのく歌にみちのくのあだゝら眞弓とよめるは卽あだちの眞弓なり又あだゝらのねにふす玄ゝのといふも安達の嶺にと云なりあだちをあだゝらと云はみちのく人のよこなまりのまゝをよみし田舍歌なり

わがかどのいた井のしみづ里とほみ人しくまねばみ草おひにけり

是は我門とは山邊などに住人の門のあたりなる板井は人里遠くて汲人稀なれは水草に埋れたりとなり井の歌なれば採て杓の歌に用ひたり【和名抄杓音酌斟水器也和名比左古】水はいにしへは杓もて汲りしなり六帖には我宿にと有いづれにても聞ゆ板井は板を立て井とするなり清水はいづこにてもきよき水を云すみ水をつゞめてし水と云なりみくさは眞草にて眞に心なし歌には水草の如く見ゆるもあればこゝも水草とせんも難なしされど水上の浮草ばかりはかたくなしたゞ其あたりにおふる草なり【萬葉に「いにしへのふるき堤はとしふかき池の渚に水くさおひにけり」】人しのしは助辭のみ

ひるめのうた

天照大御神を神代紀に大日孁貴とも稱す事見えたり又求子の歌に「何わざを我は玄つゝか天てるやひるめの神を玄ばしとゞめん」などよめりされど此大御神の事を申さば歌こそあらめ左の歌を採てうたふ事覺つかなしこゝにひるめの歌とのみはあまりに無禮かしこしひるめのみことの歌など書べき事なり仍て此集を始に注せし範永卿は米簸女のうたへるなりといはれしを顯昭は大嘗會には米ひる女と云もの見えずとてとらざりしなり然ども大なめ會には拔穗をはじめて舂づき女なども有て其時うたふ歌もあれば米簸るにもうたふ歌有しならん又延喜式の鎭魂祭に舂レ稻簸以二鹿皮一炊以二韓竈一などもいふ事のあれば大嘗祭式に見えずとも米簸るは有べく且曰づくに歌あれば米簸るにも歌有けんこゝの歌米ひるより所もなけれどかやうの事は田舍などにてうたひなれたるをうたふ事あればよしなき歌も有なりされど大ひるめのみことの御事ならば影をだに見んを日影をだにの事にとりなすべし此事猶さだめがたし好むに從ひても有ぬべし

さひのくまひのくま川に駒とめてしばし水かへかげをだに見ん

是は萬葉に「左檜隈々川爾駐馬々二水令飲吾外將見」此歌をすこしかへたるなり萬葉の歌は思人の此河をわたる時馬に水かへ其あひだもよそながら見んとよめる戀の歌なるをとりてうたへるなり【玄ばし水かへかけをだに見んとはあやまりつたへしか又かへてうたひしにも有べし】今の本にさゝのくまと有は誤なり是は大和の高市郡檜隈郷の流にてそれをかさねて云にさを發語におきて云はいにしへの風流なりみよしの、吉野などの例なりさゝのくまとては何事ともなし【さひのくまのひはいのごとく濁りてよむべし】うたひ物にはあやまれる事も稀々に有を此集にはいかでえらびあやまられん仍てさひのくまにあらためつ

かへしもの、うた

やまと琴の呂を律にかへすなり先始に眞がね吹吉備の